

さる がく い せき
猿 楽 遺 跡

— 渡良瀬川扇状地における古墳群の調査 —

平成 22 年度緊急雇用創出基金事業に係わる
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2011

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 1号墳墳丘全景



1

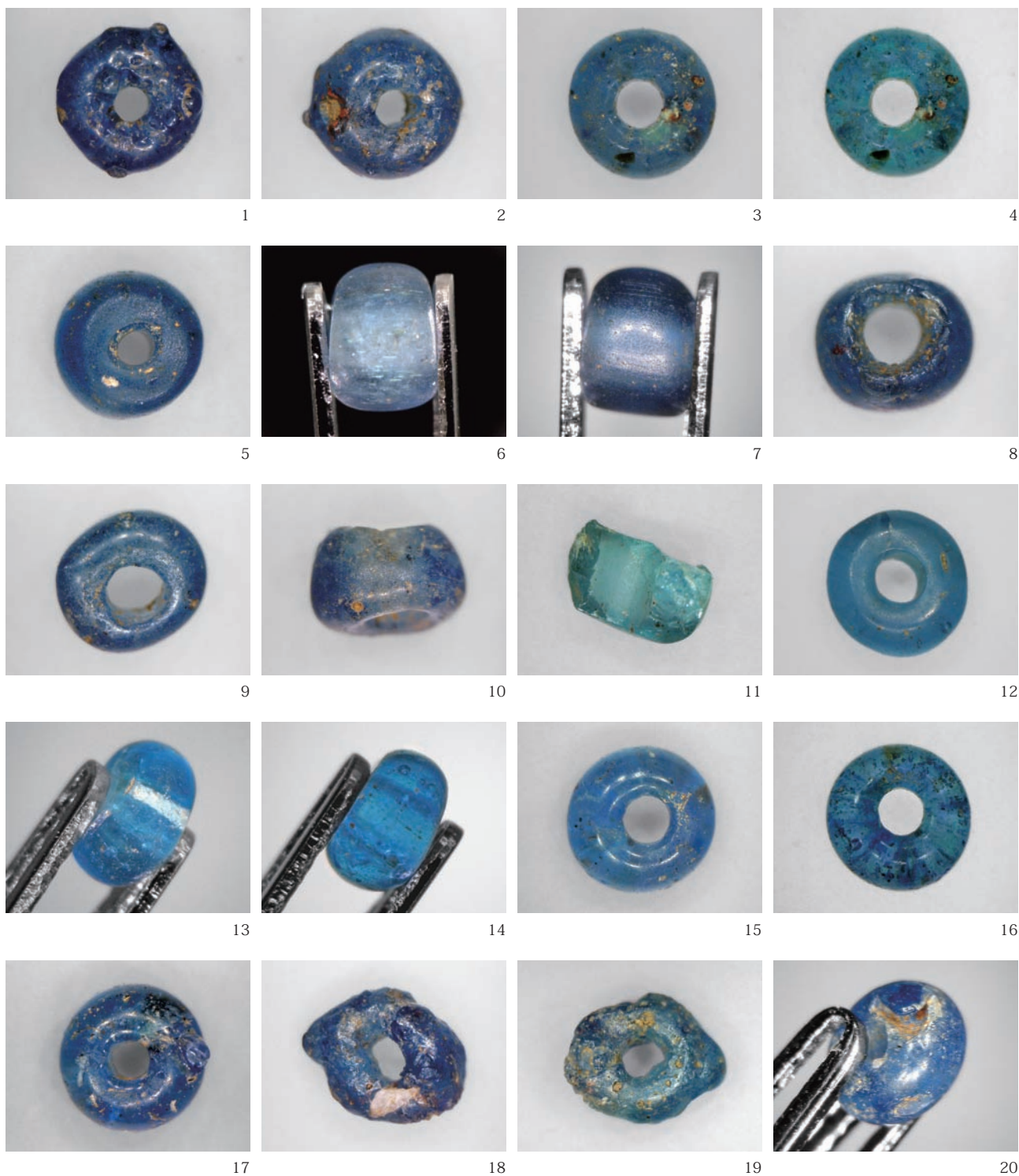


9



40

2 1号墳出土埴輪



- | | | | | | |
|----|----|--------------------------------------|----|-----|-----------------------------------------|
| 1 | 4 | 表面。ガラス粒による凹凸が目立つ。 | 11 | 106 | 孔壁は平坦であるが、表面が磨りガラス状を呈する。 |
| 2 | 4 | 裏面。表面に比して凹凸が少ない。左側に赤褐色の不純物が見える。 | 12 | 149 | 表面。 |
| 3 | 6 | 落射光による撮影。右下に黄緑色、右や左下に紺色の色違い部分が認められる。 | 13 | 149 | 側面透過光撮影。白く見えるのが貫通した気泡管。 |
| 4 | 6 | 透過光による撮影。不純物や色違い部分が多く認められる。 | 14 | 149 | 側面透過光撮影。気泡列と不純物列が見える。 |
| 5 | 63 | 紺色であるが、表面は凹凸がなく平滑。 | 15 | 151 | 表面。左上に細かい放射状気泡群列が認められる。 |
| 6 | 63 | 中心孔と同方向に気泡が伸びている。 | 16 | 150 | 表面透過光撮影。紺色の濃い部分が放射状に伸びる。 |
| 7 | 63 | 表面には中心孔と同方向に細かい筋が見える。 | 17 | 159 | 表面。左に細かい気泡群、右にガラスの突起が認められる。 |
| 8 | 77 | 表面。孔径が大きい側の表面は凹凸が多い。 | 18 | 161 | 表面。最も歪なガラス玉。長さ1.51mm、幅0.68mmの白色物が認められる。 |
| 9 | 77 | 裏面。孔径が小さい側の表面は比較的平滑。 | 19 | 161 | 裏面。 |
| 10 | 77 | 側面。上が孔径の大きい側で表面形状の違いが明瞭。 | 20 | 215 | 斜め。窪みの上を覆うようにガラスが突き出る。 |

序

本書は、群馬県太田市只上町に所在し、一般国道 50 号（桐生バイパス）改築工事に伴い発掘調査が行われた猿楽遺跡の調査報告書です。本遺跡の調査は、当時の建設省からの委託を受け、群馬県教育委員会文化財保護課が昭和 49 年 6 月から 10 月にかけて実施したものです。

猿楽遺跡のある太田地域は太田天神山古墳をはじめ多くの古墳・古墳群が築造されていることで良く知られています。渡良瀬川に近い猿楽遺跡周辺にも小古墳が点在することが早くから知られていました。

今回の調査により、古墳時代後期から終末期の古墳 8 基、古代の竪穴住居・掘立柱建物、江戸時代の墓坑などの存在が明らかになりました。また、古墳や平安時代の集落と重複するように縄文時代の土器や石器が発見され、この地に古くから先人たちの生活が展開していたことがわかりました。

これらの調査成果は、本遺跡に近接して立地し、近年、北関東自動車道建設により発掘調査が実施された鹿島浦遺跡、向矢部遺跡、矢部遺跡などの成果とともに太田市東部地域の歴史像解明に寄与することになろうと考えております。そして、この報告書が群馬県の歴史研究をはじめ、地域の資料として学校教育、郷土学習にも役立てていただけるものと確信いたしております。

最後になりましたが発掘調査から報告書作成にいたるまで、群馬県教育委員会文化財保護課、太田市教育委員会および地元関係者の皆様からは種々のご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心より感謝の意を表し、序といたします。

平成 23 年 3 月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 須 田 栄 一

例 言

- 1 本書は、一般国道50号（桐生バイパス）改築工事に伴い発掘調査された猿楽遺跡の調査報告書である。
- 2 猿楽遺跡は、群馬県太田市只上町猿楽地内に所在する。
- 3 発掘調査は建設省（高崎工事事務所桐生出張所）の委託を受け、群馬県教育委員会が実施した。調査時の調査期間・体制は次のとおりである。
調査期間 昭和49年（1974年）6月3日～昭和49年（1974年）10月24日
調査担当 横澤克明、石塚久則、真下高幸、木暮仁一、下城正
- 4 本書作成のための整理作業は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が、群馬県教育委員会より平成22年度緊急雇用創出基金事業として委託を受け、実施した。整理・報告書の作成期間・体制は次のとおりである。
履行期間 平成22年（2010年）4月1日～平成23年（2011年）3月31日
整理期間 平成22年（2010年）4月1日～平成23年（2011年）3月31日
整理担当 徳江秀夫（上席専門員）、遺物写真撮影 佐藤元彦（補佐）、金属器保存処理 関邦一（補佐）
- 5 整理事業体制は次のとおりである。
編集担当 徳江秀夫
執 筆 橋本淳（主任調査研究員）－縄文土器観察表、岩崎泰一（主席専門員）－第2章第6節1(2)、2(3)、3(2)文章石器・石製品観察表、大西雅広（主席専門員）－縄文土器・埴輪以外の土器、ガラス玉、古銭観察表・口絵2構成・文・写真、笹澤泰史（主任調査研究員）－古銭以外の金属器観察表、徳江秀夫（左記以外）
委 託 出土埴輪の胎土分析 株式会社パレオ・ラボ（藤根久・米田恭子）
出土人歯の分析 生物考古学研究所（榑崎修一郎）
石材同定 飯島静男（群馬県地質研究会会員）
- 6 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関、諸氏にご助言をいただいた。記して感謝いたします。
群馬県教育委員会、太田市教育委員会、右島和夫（群馬県文化財保護審議会委員）、宮田毅（太田市教育委員会）、須永光一（太田市教育委員会）、南雲芳昭（高崎市立宮沢小学校）、深澤敦仁（群馬県教育委員会）
- 7 発掘調査の諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

凡 例

- 1 挿図に示す方位記号は磁北を示している。座標北との関係は、座標北から西偏7度20分、真北方向角は0度14分08秒である。
- 2 遺構および遺物実測図中の縮尺は、それぞれの図中に表示している。
- 3 各図作成にあたり、原図とした地図などは以下のとおりである。
 - 第1図は国土地理院発行の200,000分の1の「宇都宮」地勢図を原図と使用している。
 - 第2図は太田市史編さん委員会1996『太田市史通史編自然』より一部修正の上転載した。
 - 第3図は群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『楽前遺跡(1)』の図3を転載して使用した。
 - 第4図は国土地理院発行の25000分の1地形図「足利保南部」(1964年発行)を原図として使用している。
 - 第5図・第7図は太田市「太田市平面図」4(1979年発行)を原図として使用している。
 - 第6図は国土地理院発行の25000分の1地形図「足利北部」「足利南部」「桐生」「上野境」を原図とし編集している。
 - 第14図は毛里田村耕地図を原図として使用している。PL. 1は国土地理院発行の空中写真を使用している。
- 4 第10図および第69図に示した遺構配置図中の古墳8基の位置については調査時に作成された位置と調査区の範囲、葦川用水路との関係が判然としない点があったため、整合性のあるように調整した。
- 5 遺構図の土層断面に付した水準についてはP、P₂の数値が不明であったため記号をそのまま記した。
- 6 拓本を用いた埴輪の実測図面作成にあたっては、円筒埴輪については中央に断面を置き、その左側に外面の拓本を、右側に内面の拓本を置いている。断面は右側が外面である。形象埴輪の破片の作図についても内外面、断面の位置関係は円筒埴輪と同様であるが、断面は左側が外面である。須恵器の実測図においては断面を中央に、左側に内面の拓本が、右側に外面の拓本を置いている。
- 7 本文中の出土遺物の項中の記載については、例えば、(観P119)とあるのは遺物観察表119ページにその遺物に関する記載があることを表わす。

目次

口 絵

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

文中写真目次

写真図版目次

報告書抄録

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 発掘調査に至る経緯 …… 1

第2節 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地 …… 2

2 周辺の遺跡 …… 4

第3節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方法と経過 …… 13

2 整理作業の方法と経過 …… 16

第2章 発掘調査の記録

第1節 調査の概要

1 検出された遺構と遺物の概要 …… 17

2 基本土層 …… 17

第2節 古墳・飛鳥時代の遺構とその出土遺物

1 古墳 …… 21

2 竪穴住居 …… 62

第3節 奈良・平安時代の遺構とその出土遺物

1 竪穴住居 …… 63

2 掘立柱建物 …… 66

第4節 中・近世の遺構とその出土遺物

1 近世墓 …… 69

第5節 時期不明の遺構とその出土遺物

1 溝 …… 72

2 土坑 …… 75

3 ピット …… 76

第6節 遺構外出土の遺物

1 縄文時代の遺物 …… 80

2 古墳時代から平安時代の遺物 …… 82

3 中・近世および時期不明の遺物 …… 82

第3章 分析

第1節 猿楽遺跡出土埴輪の胎土材料 …… 86

第2節 猿楽遺跡出土人骨 …… 94

第4章 調査成果と整理のまとめ

第1節 猿楽遺跡の調査成果 …… 95

参考文献 …… 99

遺物観察表 …… 101

写真図版

挿図目次

第1図	猿楽遺跡の位置	1	第40図	4号墳横穴式石室(2)	51
第2図	猿楽遺跡周辺の地形(1)	2	第41図	4号墳横穴式石室(3)	52
第3図	猿楽遺跡周辺の地形(2)	3	第42図	4号墳横穴式石室(4)	53
第4図	猿楽遺跡調査区の位置と国道50号(1)	5	第43図	4号墳出土副葬品(1)	54
第5図	猿楽遺跡調査区の位置と国道50号(2)	5	第44図	4号墳出土副葬品(2)	55
第6図	猿楽遺跡周辺の遺跡(1)	7	第45図	4号墳出土土器	56
第7図	猿楽遺跡周辺の遺跡(2)	13	第46図	5号墳平・断面図と出土土器	57
第8図	グリッドの配置と呼称	14	第47図	6号墳平・断面図と出土土器	58
第9図	基本土層	17	第48図	6号墳断面図	59
第10図	検出された遺構概念図	18	第49図	7号墳平・断面図	60
第11図	I区からIII区の試掘坑の位置	18	第50図	8号墳平・断面図	61
第12図	試掘坑土層断面(1)	19	第51図	Dトレンチ1号住居と出土遺物	62
第13図	試掘坑土層断面(2)	20	第52図	1号住居と出土遺物	63
第14図	猿楽遺跡周辺の地割りと古墳の位置	22	第53図	Bトレンチ1号住居と出土遺物(1)	64
第15図	1号墳墳丘残存状況平面図	23	第54図	Bトレンチ1号住居出土遺物(2)	65
第16図	1号墳平面図	24	第55図	Bトレンチ2号住居	65
第17図	1号墳断面図	25	第56図	Bトレンチ2号住居出土遺物	66
第18図	1号墳横穴式石室(1)	26	第57図	1号掘立柱建物	67
第19図	1号墳横穴式石室(2)	27	第58図	2号掘立柱建物	68
第20図	1号室横穴式石室(3)	28	第59図	1号近世墓と出土遺物	69
第21図	1号墳円筒埴輪の部位名称	30	第60図	2号近世墓と出土遺物(1)	69
第22図	1号墳出土円筒埴輪(1)	31	第61図	2号近世墓と出土遺物(2)	70
第23図	1号墳出土円筒埴輪(2)	32	第62図	3号近世墓と出土遺物	71
第24図	1号墳出土円筒埴輪(3)	33	第63図	I区1号溝	72
第25図	1号墳出土円筒埴輪(4)	34	第64図	II区1~5号溝	73
第26図	1号墳出土形象埴輪(1)	37	第65図	II区6号溝	74
第27図	1号墳出土形象埴輪(2)	38	第66図	III区1・2号溝	75
第28図	1号墳出土形象埴輪(3)	39	第67図	III区1号土坑	75
第29図	1号墳出土形象埴輪(4)	40	第68図	III区2・3号土坑と出土遺物	76
第30図	1号墳出土形象埴輪(5)	41	第69図	猿楽遺跡で検出された遺構の位置(折り込み)	77・78
第31図	1号墳出土形象埴輪(6)	42	第70図	Dトレンチピット・1号掘立柱建物周辺のピット	79
第32図	1号墳出土土器・副葬品	43	第71図	遺構外出土の遺物(1)	80
第33図	2号墳平・断面図と出土土器	44	第72図	遺構外出土の遺物(2)	81
第34図	3号墳平・断面図	46	第73図	遺構外出土の遺物(3)	83
第35図	3号墳横穴式石室(1)	47	第74図	遺構外出土の遺物(4)	84
第36図	3号墳横穴式石室(2)	48	第75図	遺構外出土の遺物(5)	85
第37図	3号墳出土土器	48	第76図	猿楽遺跡周辺の横穴式石室	96
第38図	4号墳平・断面図	49	第77図	円墳出土の全身像人物埴輪	98
第39図	4号墳横穴式石室(1)	50			

表目次

第1表	猿楽遺跡周辺の遺跡一覧	10	第5表	粘土および砂粒組成の特徴	90
第2表	1号掘立柱建物計測値	66	第6表	岩石片の起源と組み合わせ	91
第3表	2号掘立柱建物計測値	68	第7表	猿楽遺跡出土人骨永久歯歯冠計測値及び比較表	94
第4表	材料を検討した埴輪とその詳細	86			

文中写真目次

写真1	巖穴山古墳遠景	9	写真4	埴輪胎土の顕微鏡写真(2)	93
写真2	整理作業状況(出土遺物の接合作業)	16	写真5	猿楽遺跡1号近世墓出土歯(咬面観)	94
写真3	埴輪胎土の顕微鏡写真(1)	92			

写真図版目次

- PL. 1-1 猿楽遺跡の位置と周辺の地形（1966年当時）
- PL. 2-1 猿楽遺跡遠景（上空南側より）
- 2 1号墳から北方を望む
- 3 猿楽遺跡から金山丘陵を望む
- 4 猿楽遺跡から毛里田小学校を望む
- 5 遺跡地の現況（南から）
- PL. 3-1 1号墳全景（南西から）
- 2 1号墳調査前墳丘残存状況（東から）
- 3 1号墳墳丘全景（南西から）
- 4 1号墳埴輪出土状況
- 5 1号墳埴輪出土状況
- PL. 4-1 1号墳羨道部（南西から）
- 2 1号墳羨道部左側壁（南から）
- 3 1号墳羨道部右側壁（北西から）
- 4 1号墳玄室部右側壁（北西から）
- 5 1号墳玄室部左側壁（南東から）
- 6 1号墳墳丘断ち割り状況（南西から）
- 7 1号墳羨道部左裏側土層断面（南西から）
- 8 1号墳羨道部右裏側土層断面（南西から）
- PL. 5-1 1号墳玄門部分石積検出状況（南西から）
- 2 1号墳羨道部右側壁裏込検出状況（南東から）
- 3 1号墳玄室部右側壁裏込検出状況（南東から）
- 4 1号墳羨道部左側壁裏込検出状況（北西から）
- 5 1号墳石室根石検出状況（南西から）
- 6 1号墳石室掘り方検出状況（南西から）
- 7 2号墳全景（北東から）
- 8 5号墳全景（南西から）
- PL. 6-1 IV区南半部遠景（北西から）
- 2 3号墳全景（南から）
- 3 3号墳石室全景（南から）
- 4 3号墳石室左側壁（南東から）
- 5 3号墳玄室床面検出状況（西から）
- 6 3号墳石室根石検出状況（南から）
- 7 3号墳掘り方検出状況（南から）
- PL. 7-1 4号墳全景（南から）
- 2 4号墳南側周堀土層断面（西から）
- 3 4号墳石室全景（南から）
- 4 4号墳石室右側壁（西から）
- 5 4号墳石室左側壁（東から）
- PL. 8-1 4号墳羨道部閉塞状況（南から）
- 2 4号墳玄室部床面検出状況（北から）
- 3 4号墳玄室内遺物出土状況（北東から）
- 4 4号墳玄室部検出状況（北から）
- 5 4号墳玄門部右側壁（西から）
- 6 4号墳玄門部左側壁（東から）
- 7 4号墳石室根石検出状況（東から）
- 8 4号墳掘り方検出状況（南から）
- PL. 9-1 6号墳全景（南東から）
- 2 6号墳西側周堀検出状況（東から）
- 3 7号墳全景（北東から）
- 4 8号墳全景（北東から）
- 5 8号墳全景（南東から）
- 6 8号墳石積検出状況（北東から）
- 7 8号墳床面断ち割り状況（南東から）
- 8 8号墳掘り方検出状況（南東から）
- PL. 10-1 1号住居全景（西から）
- 2 1号住居竈全景（西から）
- 3 Bトレンチ1号住居（西から）
- 4 Bトレンチ1号住居竈全景（南から）
- 5 Bトレンチ2号住居全景（南から）
- 6 Dトレンチ1号住居全景（南東から）
- 7 Dトレンチ1号住居全景（西から）
- PL. 11-1 1号掘立柱建物全景（南から）
- 2 1号掘立柱建物柱穴土層断面（南から）
- 3 2号掘立柱建物全景（南から）
- 4 2号掘立柱建物柱穴土層断面（南から）
- 5 Dトレンチピット検出状況（南から）
- 6 Dトレンチピット検出状況（南から）
- 7 Dトレンチピット土層断面（南から）
- PL. 12-1 II区1～3号溝検出状況（南東から）
- 2 II区1～3号溝検出状況（南東から）
- 3 II区4号溝検出状況（南東から）
- 4 II区5号・6号溝検出状況（南西から）
- 5 1号近世墓全景（南から）
- 6 3号近世墓全景（南から）
- 7 2号近世墓遺物全景（南から）
- 8 2号近世墓遺物出土状況（北から）
- PL. 13-1 A-3-21グリッド調査状況（北東から）
- 2 A-11-21グリッド調査状況（北東から）
- 3 C-1-21グリッド調査状況（北東から）
- 4 C-4-21グリッド調査状況（北東から）
- 5 C-8-21グリッド調査状況（北東から）
- 6 C-12-21グリッド調査状況（北東から）
- 7 E-8-25グリッド調査状況（北東から）
- 8 F-1-21グリッド調査状況（北東から）
- PL. 14-1 調査区のI区からII区を望む（北西から）
- 2 Aトレンチ調査状況（南東から）
- 3 IV区トレンチ調査状況（北から）
- 4 IV区礫出土状況（南西から）
- 5 調査風景
- 6 調査風景
- 7 現地説明会開催状況
- 8 現地説明会開催状況
- PL. 15-1 号墳出土円筒埴輪（1）
- PL. 16-1 号墳出土円筒埴輪（2）
- PL. 17-1 号墳出土円筒埴輪（3）
- PL. 18-1 号墳出土円筒埴輪（4）
- PL. 19-1 号墳出土朝顔形埴輪、1号墳出土形象埴輪（1）
- PL. 20-1 号墳出土形象埴輪（2）
- PL. 21-1 号墳出土形象埴輪（3）
- PL. 22-1 号墳出土形象埴輪（4）と出土遺物
- PL. 23-2号・3号墳出土遺物、4号墳出土遺物
- PL. 24-4号墳出土遺物
- PL. 25-4号～6号墳とDトレンチ1号住居出土遺物
- PL. 26-1号・Bトレンチ1号・Bトレンチ2号住居と1号・2号近世墓出土遺物
- PL. 27-2号・3号近世墓とIII区3号土坑出土遺物
- PL. 28-遺構外出土の遺物（1）
- PL. 29-遺構外出土の遺物（2）
- PL. 30-遺構外出土の遺物（3）

報告書抄録

書名ふりがな	さるがくいせき
書名	猿楽遺跡
副書名	平成22年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	518
編著者名	徳江秀夫/岩崎泰一/大西雅広/橋本淳/笹澤泰史
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20110318
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	さるがくいせき
遺跡名	猿楽遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしただかりまち
遺跡所在地	群馬県太田市只上町地内
市町村コード	10205
遺跡番号	T0292
北緯（日本測地系）	361956
東経（日本測地系）	1392336
北緯（世界測地系）	362007
東経（世界測地系）	1392324
調査期間	19740603-19741024
調査面積	7900
調査原因	道路建設工事
種別	墓/集落
主な時代	古墳/飛鳥/平安/江戸
遺跡概要	墓-古墳-古墳8-埴輪+須恵器+ガラス小玉/墓-江戸-墓3-陶磁器+古銭/集落-飛鳥-住居1-土師器/集落-奈良平安-住居3-土師器+須恵器/古代-掘立柱建物2/その他-縄文-土器+石器
特記事項	1号墳出土の埴輪には5条6段構成の円筒埴輪や双脚表現の人物埴輪が認められる。4号墳出土のガラス小玉217個の中にはガラス砕を材料にして溶融（型作り技法）により製作された個体が含まれていた。
要約	本遺跡は渡良瀬川右岸の微高地上に立地している。古墳時代後期から終末期にいたる群集墳の一部を調査し、円墳7基と竪穴式小石塚1基を検出した。1号墳は直径22mの小円墳であるにもかかわらず、多条突帯の円筒埴輪や双脚表現の人物埴輪が樹立されていた。平安時代の集落は台地縁辺に展開していたと考えられる。掘立柱建物2棟は平安時代の集落に先行するもので、そのうちの1棟は総柱建物である。これらは周辺集落の動向と含め検討されるべきものである。

第1章 発掘調査と遺跡の概要

太田市只上では毛里田小学校の南側、字猿楽の集落の北側を北西から南東方向に向かってを路線が通過することとなった。県道39号足利伊勢崎線と交差する部分では立体交差のための高架橋の建設が予定された。

群馬県教育委員会では路線通過予定地内の埋蔵文化財の状況を把握するための分布調査を実施した。この結果、太田市只上字猿楽地内においては路線内に古墳の残存が確認された。この古墳は、『上毛古墳総覧』および1971(昭和46)年3月発行の『群馬県遺跡台帳Ⅰ(東毛編)』には掲載から漏れていたものである。

古墳の存在、また、その周辺予定地内に土器片の散布が確認されたことを受け、その取り扱いについて、文化財保護課と建設省との協議、調整の結果、記録保存の措置を講ずるための発掘調査を実施することとなった。調査は、群馬県教育委員会文化財保護課により、1974(昭和49)年6月3日から10月24日の間実施された。

第2節 遺跡の立地と環境

1 遺跡の立地

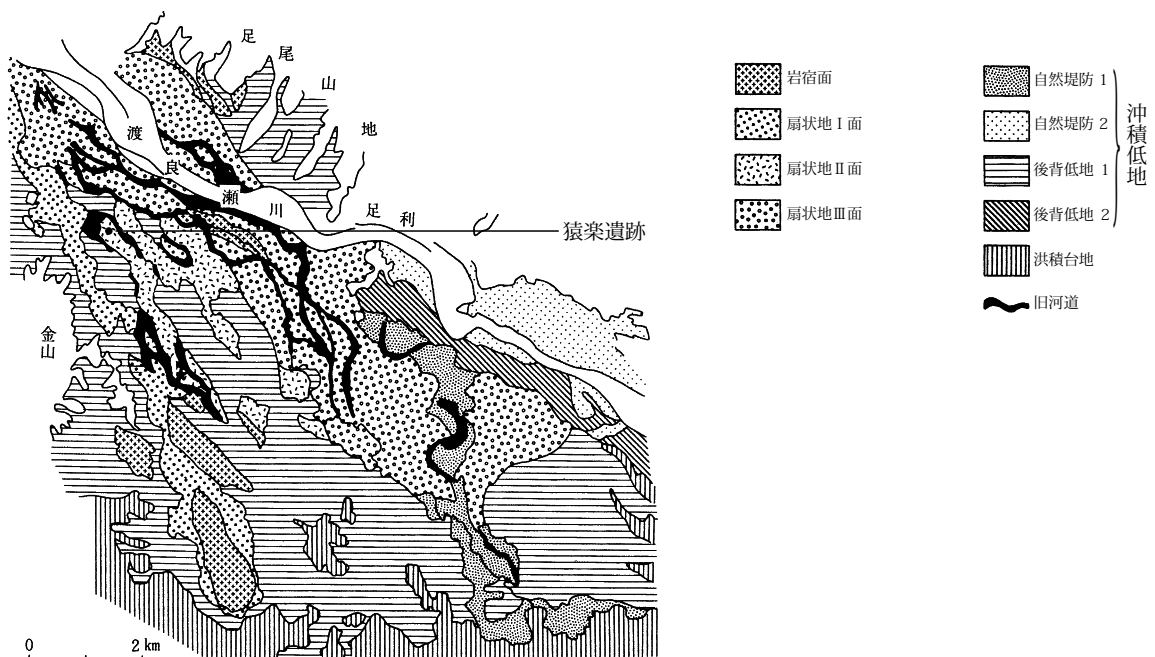
猿楽遺跡は、太田市只上町字猿楽地内に所在する。最寄りの公共交通機関としては東武伊勢崎線太田駅から北北東に約3kmの位置にある。2008(平成20)年に開通した

北関東自動車道太田インターチェンジからは北に0.5kmと至近の距離にある。

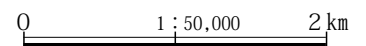
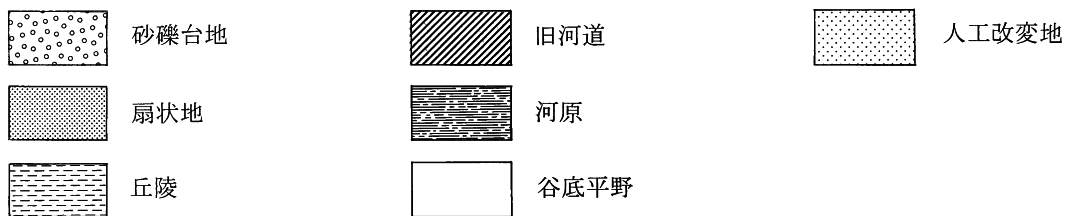
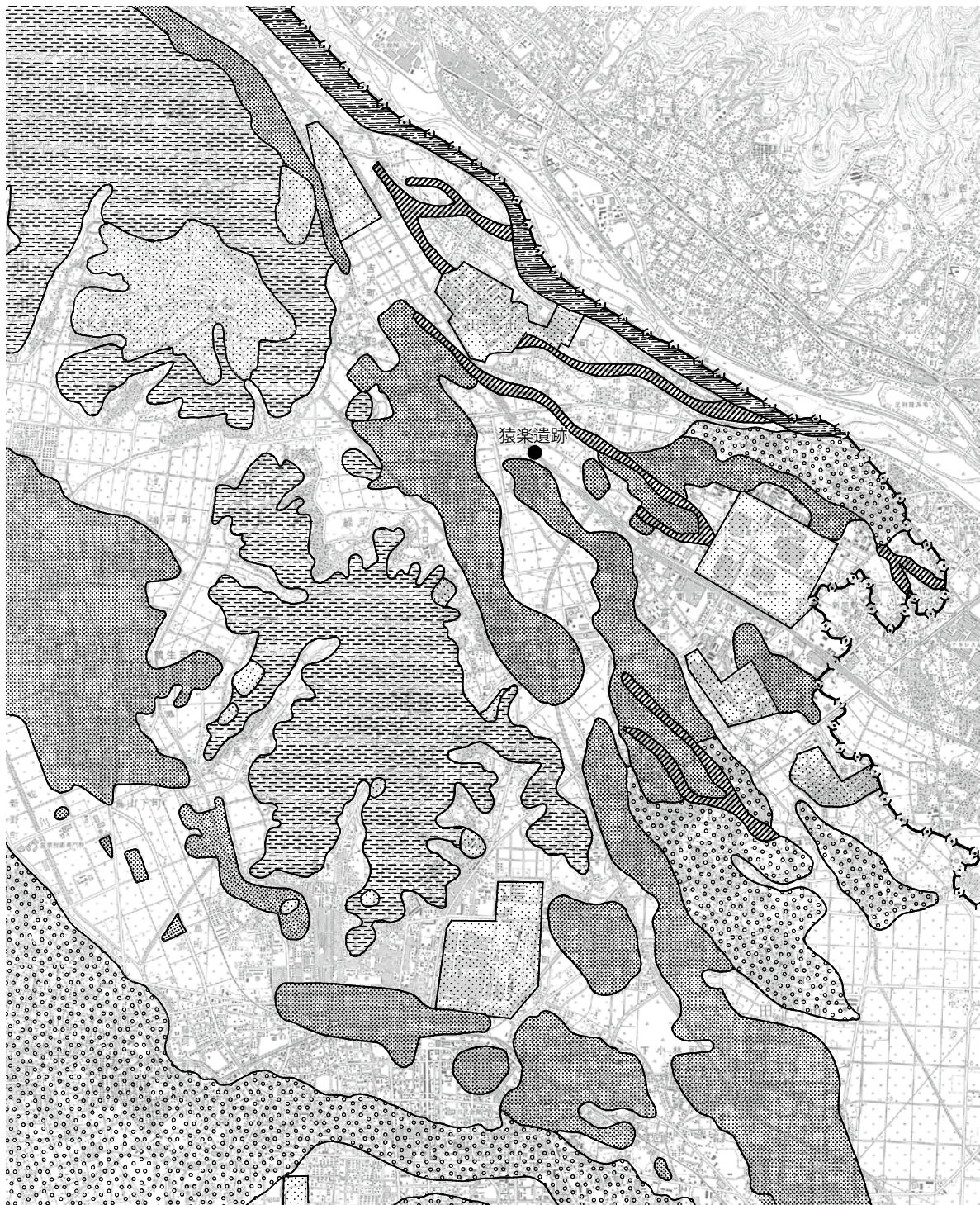
本遺跡の所在する太田市は群馬県の南東部、関東平野の北西部に位置し、南に利根川、北東に渡良瀬川という二つの大河川にはさまれている。世界測地系における座標値は東経139度23分24秒、北緯36度20分7秒(猿楽遺跡調査地のほぼ中央)を測る。行政区分で見ると北は桐生市・みどり市、北東は県境をはさんで栃木県足利市、南東は邑楽郡邑楽町と大泉町、南西は利根川を県境として埼玉県行田市、西は伊勢崎市とそれぞれ接している。

現在の太田市は2005(平成17)年に太田市・新田町・尾島町・薮塚本町との合併で新しく誕生したものである。その中で、太田市只上町は、1889(明治22)年に只上村から渡良瀬川右岸に位置した周辺8箇村の合併で毛里田村となった後、1963(昭和38)年に旧太田市に合併、編入したもので、本遺跡の調査時における地名は太田市只上である。

太田市の地形を見ると、市街地の北側には標高236mの金山丘陵があり、その北側に八王子丘陵が続いている。これらの丘陵の西側には大間々扇状地が広がっている。東側には渡良瀬川が氾濫を繰り返しながら形成した低台地と沖積地からなる扇状地地形が認められる。この渡良瀬川扇状地は桐生市赤岩橋(標高120m)付近を扇頂部に、太田市下小林町から足利市御厨地区(標高30m)を



第2図 猿楽遺跡周辺の地形(1)



第3図 猿楽遺跡周辺の地形(2)

扇端部とする南北18km、東西7.5kmを測る扇状地である。扇状地は第2図に見られるように形成期の異なるⅠ面からⅢ面の扇状地面に区分される。金山・八王子丘陵側に最古期、As-BP降下以前に遡るとされるⅠ面が、その東側に洪積世末の再堆積ロームが確認されるⅡ面が、さらにその東側の現河道側にⅢ面が広がっている。Ⅲ面の形成は完新世の時期とされる（文献34）。この区分に従えば猿楽遺跡は渡良瀬川扇状地のⅡ面上に立地することとなる。

一方、第3図の分類に従えば扇状地3から谷底平野に移行する地点にあることになる（文献35）。調査時に行った土層の観察から得られた基本土層は第9図に掲載したところである。

渡良瀬川扇状地の区分については、近年の北関東自動車道関係の旧石器時代包含層の調査成果や各遺跡における土層観察の結果、Ⅲ面の区分をはじめ、より複雑な地形発達の変遷があったことが想定され、これまでの地形区分に再検討の余地が生じているとされる（文献36）。

次に遺跡地周辺の地形について見ると、本遺跡は南北に長さ約800mに延びる低台地上に立地している。この低台地は標高49mから51mで、わずかに西から東に向かって傾斜するもののほぼ平坦な面を形成しており、中央から南西部分に猿楽の集落が展開している。調査地は低台地の中央からやや北側寄りの部分にあたる。この低台地の東側には沖積地をはさみ、渡良瀬川の旧河道を踏襲して流路としたとされる矢場川が北西から南東方向に流れている。現在の流路は只上の砦や畦地浦遺跡ののる低台地の南西縁に沿っているがその一部は台地の縁辺を開析している。一方、猿楽遺跡の立地する低台地の西側には矢田堀集落の広がる低台地との間を沖積地が南北方向に延びている。この沖積地も渡良瀬川の旧河道と考えられているもので、現在は休泊堀用水が流下しており、毛里田中学校の北東、柳沢堰で葦川用水路に分水している。葦川用水路は遺跡調査地内を蛇行し、1号墳や5号墳の一部を削平して南東方向に抜けている。

周辺の地目は、本遺跡の調査を実施した時点に近い1964（昭和39）年に作成された2万5千分の1地形図（第4図）や1979（昭和54）年作成の太田市平面図（第5図）を見ると一帯に水田が広がっているが、所々に畑地が見られる。一見、平坦に見える表土の下に扇状地形形成時の

複雑な地形や後世において用水系の整備などにより改変された地形が残されていることが想起されるところである。調査当時の調査地内の地目はⅠ区からⅢ区が水田、Ⅳ区が桑園であった。標高は約49.1mから50.8mである。

国道50号の開通後は路線に沿って開発が進み、農村地帯であった調査時の風景は変貌を遂げつつあるが、本遺跡の周辺は調査時の状況が比較的良く残されている。路線に沿って帯状に畑地や菜園が見られる他は、以前同様、広範囲にわたり水田耕作が行われている。

2 周辺の遺跡

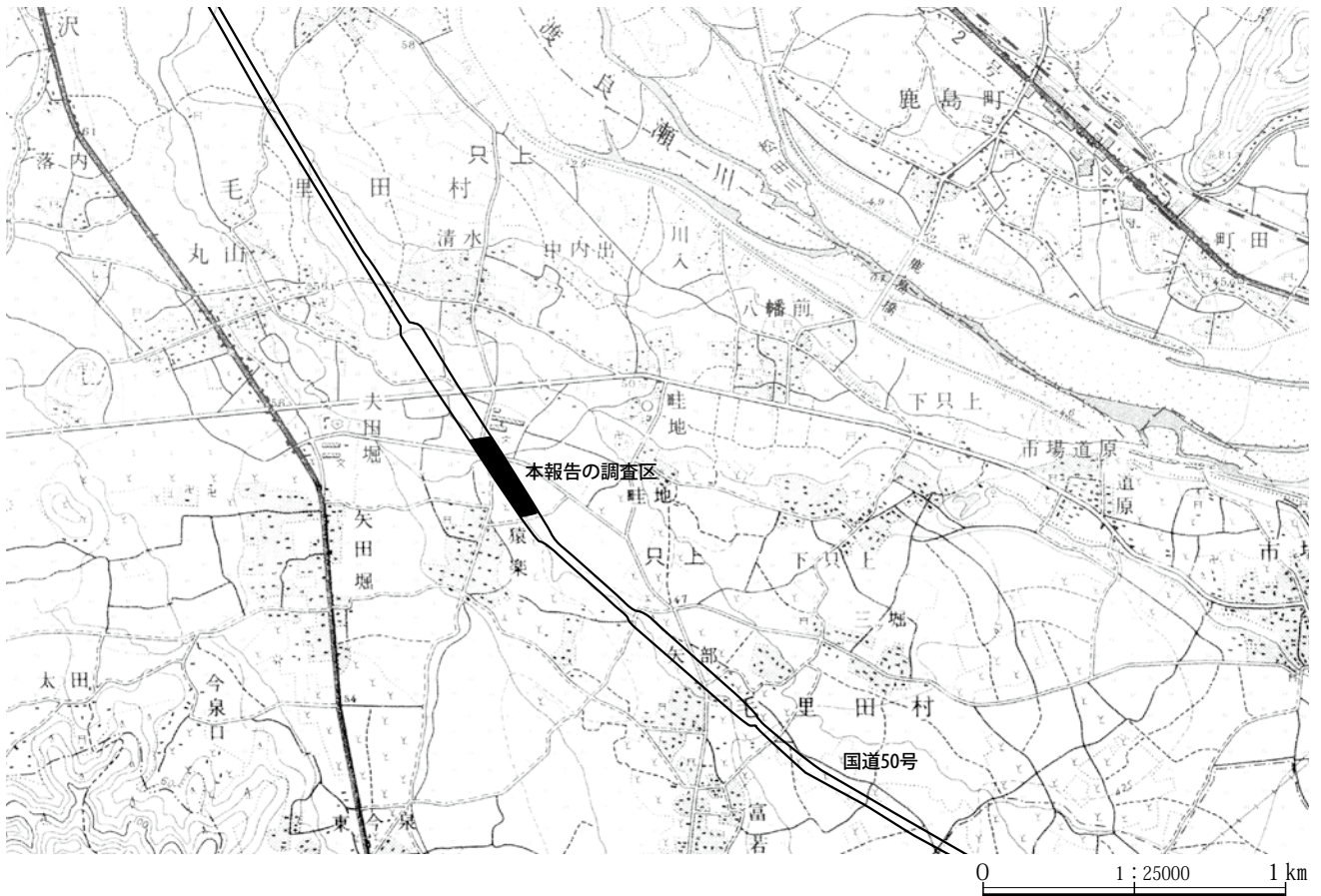
作成した遺跡分布図は紙面の関係で、太田市市街地の東北方向、太田市の毛里田地区からその南側の葦川地区、金山丘陵の北東麓から渡良瀬川扇状地上にかけて形成された遺跡の位置を図示したものである。

猿楽遺跡の周辺には旧石器時代以降中・近世にいたるまで、各時代の遺跡が多数存在していることが知られている。それらの遺跡の大半は発掘調査によりその存在が明らかにされたものである。近年では北関東自動車道の通過に伴い、その通過予定地や関連道路、諸施設整備のための調査が多数実施されているが、それ以前にもはにわの会による焼山遺跡の総合調査や駒沢大学により学術発掘が継続して行われた金山丘陵窯跡群の調査、群馬県教育委員会から太田市教育委員会に引き継がれた渡良瀬川流域遺跡群の調査、各種開発行為に対応して実施された太田市教育委員会の調査、太田市史編さん事業などにより、これまでも多くの研究成果が蓄積されている。

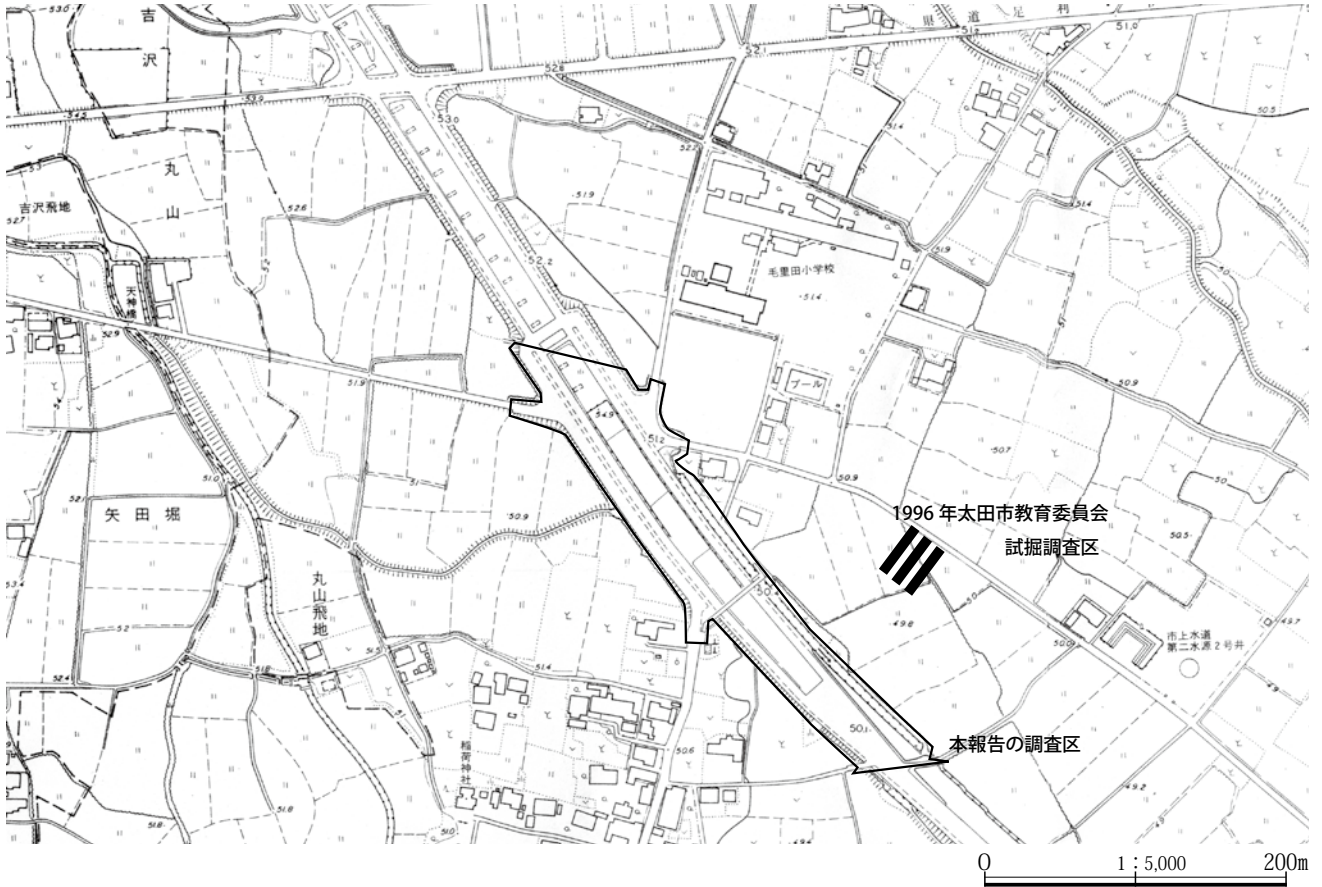
ここでは猿楽遺跡で遺構を検出した古墳時代、奈良・平安時代の遺跡を中心に猿楽遺跡を取り巻く周辺遺跡の動向について概観しておきたい。

古墳時代以前の遺跡動向

旧石器時代 猿楽遺跡周辺の旧石器時代遺跡の数は少なかったが徐々に発見例が増加している。峯山遺跡では暗色帯層準とAs-BPグループの中・上部降下層準の二つの文化層中から石器が発見されている。扇状地Ⅰ面の八ヶ入遺跡（46）では一次堆積層であるAs-YF降下層下から湧別技法による細石刃石器群が発見されている。扇状地Ⅱ面の東長岡戸井口遺跡（87）では石刃および石刃製ナイフ形石器を伴う大規模な石刃石器群が出土している。この他に伊豆ノ山遺跡（86）、熊野遺跡、塩ノ山



第4図 猿楽遺跡調査区の位置と国道50号（1）



第5図 猿楽遺跡調査区の位置と国道50号（2）

遺跡(72)、細田遺跡(85)、内並木遺跡(82)、金井口遺跡(70)、焼山北遺跡(83)、焼山南遺跡(84)、村上遺跡、小丸山西遺跡(36)、雷電山遺跡などで槍先形尖頭器やナイフなどの石器が出土している。

縄文時代 本遺跡からは縄文時代の遺構は検出されなかったものの中期・後期の土器、これと同時期と考えられる時期の石器が少量ずつ出土している。周辺一帯を見ても縄文時代の遺跡数は多くはないが渡良瀬川の氾濫層に厚く覆われている状況を考慮する必要があるとされる。全体的に見ると中期から後期になると遺跡数が若干増加する傾向が認められる。

近接する遺跡としては矢部遺跡(101)、向矢部遺跡(99)では早期の土坑が検出されている。また、矢部遺跡では住居の検出はないものの、中期の土坑約800基が検出されている。楽前遺跡(41)では中期の竪穴住居2軒と埋設土器8基が、その西側に位置する大道東遺跡(50)でも中期から後期にいたる竪穴住居5軒や多数の土坑が検出しており、土版や石版、独鈷石なども出土している。渡良瀬川の現流路に近い道原遺跡(104)においても中期から後期の竪穴住居が見られた。これらの遺跡は、いずれも扇状地内を流下する自然流路を臨む低台地・微高地縁辺に位置している。

さらに範囲を広げて見ると、草創期の遺跡としては爪形文土器を出土する土坑4基を検出した下宿遺跡(98)が著名である。ほかに小丸山西遺跡から草創期の土器が少量出土している。小丸山遺跡(37)や焼山北遺跡、焼山南遺跡からは撚糸文や貝殻条痕文土器などの早期の土器が出土している。細田遺跡からは前期の住居と土坑50基が検出されている。

弥生時代 弥生時代の遺跡分布も稀薄である。扇状地Ⅱ面では菰川左岸の磯之宮遺跡(90)で弥生時代中期後半の住居が確認されている。この他には小丸山遺跡で遺物の散布が認められる。矢部遺跡から中期の須和田式土器が、焼山遺跡から中期から後期の土器が出土しているが遺構の検出は見られなかった。

古墳・飛鳥時代の遺跡動向

集落 本遺跡の周辺、金山丘陵の東側から渡良瀬川扇状地上における古墳時代前期の遺跡数は、金山丘陵の西側、大間々扇状地側と比較して少ない。当該時期の竪穴住居を検出した遺跡としては丸山北遺跡や反丸遺跡

(26)、東今泉鹿島遺跡(49)が知られる。二の宮遺跡(44)では当該期の土器を出土した溝が検出されている。扇状地末端寄りには稲荷宮遺跡(88)、磯之宮遺跡、矢場向遺跡がある。

中期の集落も前期以上にその数が少ない。流作場遺跡(31)、前期から継続する東今泉鹿島遺跡で中期前半の住居が検出されている。八ヶ入遺跡でも少数の竪穴住居が検出されている。この他に東長岡戸井口遺跡、稲荷宮遺跡、矢場向遺跡などがこの時期の遺跡である。金山丘陵の西側では成塚住宅団地遺跡において首長層の居館と考えられる方形区画遺構が検出されているが、本遺跡周辺では同様の遺構は確認されていない。

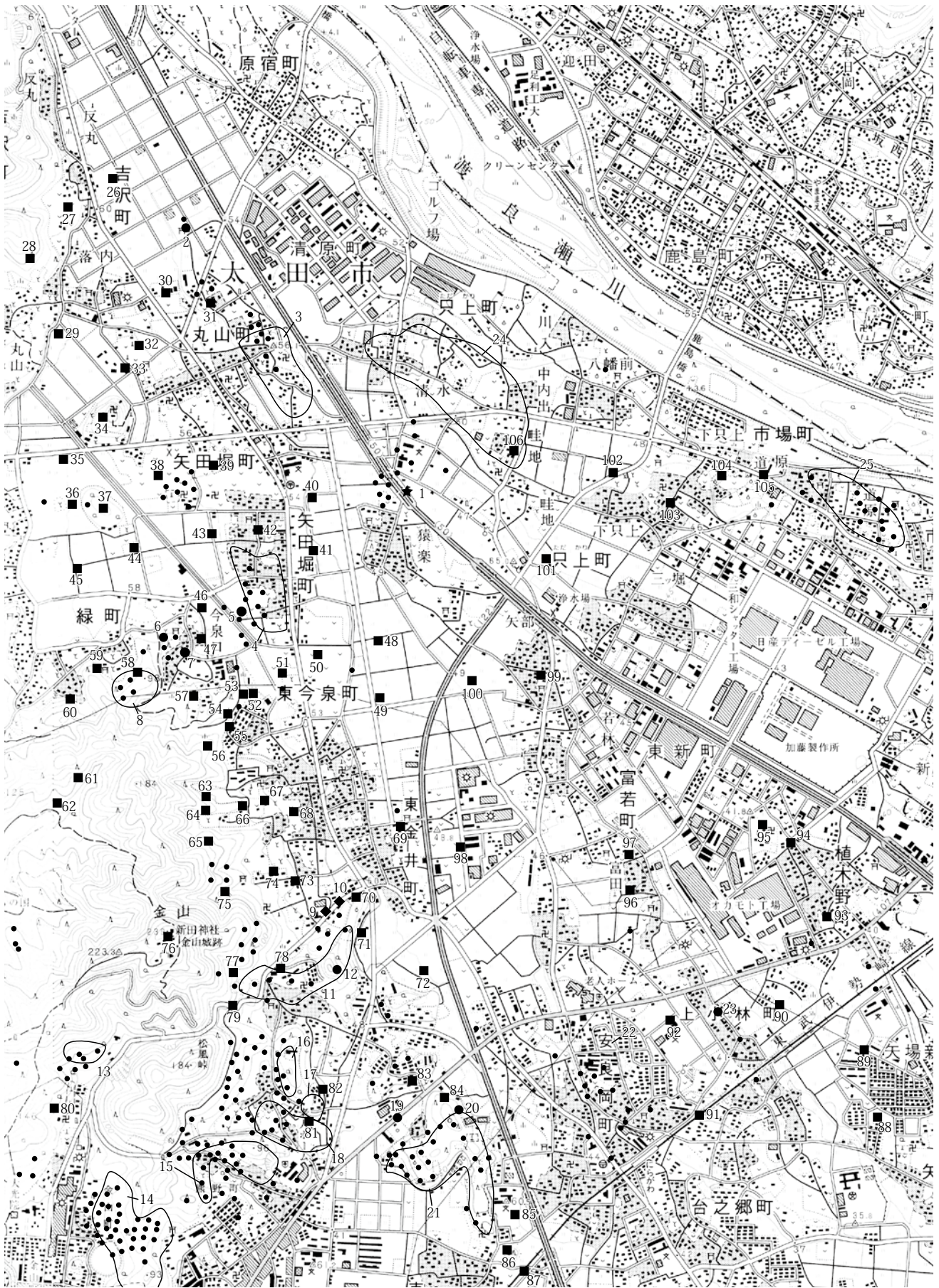
後期になると八王子丘陵南東部分や金山丘陵南東部の低台地上に丸山北遺跡(33)、反丸遺跡、二の宮遺跡、八ヶ入遺跡、大道西遺跡(51)などの集落が形成されるようになる。大道東遺跡、楽前遺跡では100軒以上の竪穴住居が検出されている。反丸遺跡からは土師器、手づくね土器、土製模造品、土製玉などが出土した祭祀遺構が発見されており、集落内祭祀が行われていたことが考えられる。

生産遺構 生産遺構としては水田遺構のほかに多数の須恵器窯や埴輪窯が検出されていることが本遺跡周辺における大きな特徴の一つである。

東今泉鹿島遺跡で古墳時代後期から飛鳥時代と推定される水田が検出された。道原遺跡では4世紀代、5世紀代の水田面が各1面ずつ検出されている。

本遺跡西方の金山丘陵北東麓裾部から東麓裾部にかけて八王子丘陵南東麓裾部には古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて操業された須恵器窯跡が多数存在している。発掘調査や分布調査により40基以上の窯跡が確認され、金山丘陵窯跡群と総称されている。操業の開始は、亀山京塚古墳(11)への副葬品や亀山窯跡からの出土品から6世紀前半まで遡ると推定されている。6世紀後半以降に大規模生産が行われるようになり、7世紀前半にかけて生産規模が拡充されたと考えられる。これらの須恵器は群馬県内一円、一部は埼玉県北部にまで供給されている。

金山丘陵東麓裾部から北麓裾部にかけては、菅ノ沢Ⅰ遺跡(58)は窯跡7基と未焼成窯跡6基が、八幡窯跡群(52他)で窯跡4基、辻小屋窯跡群(65)で窯跡4基が、



第6図 猿楽遺跡周辺の遺跡（1）

亀山窯跡（71）で2基の窯跡が確認されている。

前述の大道東遺跡、楽前遺跡では7世紀の竪穴住居から焼け歪んだ須恵器が多く出土しており、これらの遺跡が須恵器工人集落であった可能性が指摘されている（文献18）。楽前遺跡では粘土採掘坑が検出されている。

また、太田地域では6世紀後半以降に甕窯焼成による埴輪生産が本格化している。八王子丘陵南西麓の北金井町には駒形神社埴輪窯跡が存在する。窯跡の隣接地からは埴輪集積場が検出され、家・鞆・盾などの形象埴輪、5条から9条突帯の多段構成で、低位置突帯の資料を含む円筒埴輪が出土している。これらの埴輪の特徴から操業は6世紀末から7世紀初頭にいたるまで継続していたと考えられる。八王子丘陵南西側の低台地上、成塚町成塚住宅団地遺跡内からは3基の埴輪窯跡が検出されている。

金山丘陵の東麓には東金井町金井口（東金井入宿）埴輪窯（10）、母衣埴輪窯（9）が存在する。金井口埴輪窯は、金山丘陵の一支丘亀山の西北側の裾部に営まれたもので、3基の埴輪窯が検出されている。埴輪円筒棺が製作されていることから操業は6世紀前半に遡るとされる。この丘陵東南部裾部には須恵器窯が営まれており、須恵器生産地の一角で埴輪生産が行われていたことが指摘されている。これら太田地域の埴輪窯で生産された埴輪は東毛地域一帯に供給されている。本遺跡の1号墳から出土した埴輪も当該地域の埴輪窯で焼成されたものと考えられる。

楽前遺跡と大道東遺跡では滑石製模造品の工房址が検出されている。珪質粘板岩を材料に白玉と紡錘車が製作されていた。

古墳 太田地域では古墳時代前期以来多数の古墳が築造されている。古墳時代前期の古墳としては、4世紀前半から中葉に金山丘陵西北部丘陵上に墳丘長55mの前方後方墳寺山古墳が、これにやや遅れて、足利市域寄りの渡良瀬川扇状地末端に広がる沖積地を背景にして、墳長117mの前方後方墳藤本観音山古墳が成立する。次の段階になると墳形が前方後円墳となり、金山丘陵南西部丘陵上に墳丘長84mの太田八幡山古墳が、渡良瀬川扇状地末端には墳長約80mの矢場薬師塚古墳が築造される。八王子丘陵南西部丘陵上には一辺21mの方墳成塚向山1号墳が成立しており、首長層の中が重層的になっていたこ

とが知られている。4世紀後半になると市域の南部、利根川左岸の低台地上に墳丘長124mの前方後円墳朝子塚古墳が築造される。本遺跡周辺には現在のところ4世紀代の主要古墳の存在は知られていない。方形周溝墓は扇状地末端に位置する磯之宮遺跡や焼山丘陵上に造られた細田遺跡、渡良瀬川寄りの道原遺跡で検出されている。

古墳時代中期、4世紀末から5世紀初頭になると大間々扇状地末端の沖積地を臨む由良台地の縁辺に宝泉茶臼山古墳が築造される。墳丘長は168mとなり墳丘規模の伸張化が一段と進んでいる。次の5世紀前半から中頃になると金山丘陵の南東側低台地上に、墳丘長210mの規模で、主体部に長持形石棺を有する前方後円墳太田天神山古墳や墳丘長96mの帆立貝式古墳女体山古墳が築造される。

次の5世紀後半になると金山丘陵の西側、大間々扇状地上に墳丘長95mの鶴山古墳、墳丘長約58mの亀山古墳、後円部径約40mの鳥崇神社古墳と前方後円墳が継続して築造されている。これに対し本遺跡周辺には有力な前方後円墳の存在は知られていない。

古墳時代後期になると渡良瀬川扇状地末端の沖積地内の微高地上には4基の帆立貝式古墳を中心とした塚廻り古墳群の形成が認められる。金山丘陵上では6世紀前半から中頃になると南東麓の亀山古墳群内に直径20m前後の円墳亀山京塚古墳が築造され、両袖型の横穴式石室が採用されている。金山丘陵に近い焼山丘陵上には6世紀中葉に墳丘長48mの前方後円墳焼山古墳が築造される。この焼山丘陵北側の塩ノ山上には竪穴式石室を主体部にもつ円墳亀山北古墳が位置している。

6世紀後半になると太田地域の中では利根川左岸台地上に東矢島古墳群が形成され、割地山古墳や観音山古墳など5基の100m近い規模の前方後円墳が継続して築造されている。大間々扇状地上には墳丘長74mの二ツ山1号墳、45mの2号墳の2基の前方後円墳が築造されている。これに対し、本遺跡周辺では金山丘陵北東麓斜面上に扇状地面を見下ろすように墳丘長50mの前方後円墳今泉口八幡山古墳（7）が築造される。横穴式石室内には家形石棺が安置されており、6世紀末から7世紀初頭の時期が考えられる。また、八幡山古墳の北方では前方後円墳の庚申塚古墳と数基の円墳からなる丸山古墳群（3）が形成されている。庚申塚古墳は滝沢馬琴の『兔園小説』



写真1 巖穴山古墳遠景

に紹介されている家形石棺が出土したとされる古墳である。

以上のような前方後円墳を中心とした大型古墳のほか、6世紀後半から7世紀になると金山丘陵の北東麓から東麓、そして東側に位置する焼山丘陵、あるいは渡良瀬川扇状地の低台地上に群集墳が形成されている。いずれも小円墳から構成され、横穴式石室を有するものが主体である。

丘陵麓の古墳群を北側から順に見てみると八王子丘陵の東南麓の吉沢町には吉沢古墳群(28)が分布する。今泉口八幡山古墳に接した金山丘陵上に形成された菅ノ沢古墳群(8)の調査では終末期の小型横穴式石室が検出されている。同じ金山丘陵上、東金井町には菅ノ沢古墳の南側丘陵上に狸ヶ入古墳群、大日沢古墳群が、金山丘陵の東麓から南東麓では東金井町から金山町にかけて、亀山古墳群(12)、内並木古墳群(16)、馬塚古墳群(17)、寺ヶ入古墳群(18)、西山古墳群(14)、東山古墳群(15)と群集墳が形成されている。

矢場川、韮川流域の渡良瀬川扇状地上では吉沢町に丸山古墳群が位置する。6世紀後半から7世紀代に形成されたもので、前述の庚申塚古墳のほかに諏訪神社古墳(2)や反丸1号・2号墳が調査されている。矢田堀町から東今泉町にかけては巖穴山古墳(5)を中心に矢田堀古墳群(4)が形成されている。猿楽遺跡より下流側では市場稲荷山古墳の周辺に数基からなる古墳群が形成されている。渡良瀬川に近い道原遺跡でも小円墳1基が調査されている。

以上のように多くの群集墳が形成される中、矢田堀町の扇状地I面上に築造された巖穴山古墳は一辺36.5mの

方墳で、複室構造の横穴式石室を有していた。前方後円墳の築造終焉後の7世紀の前半から中葉にかけての築造と考えられている。巖穴山古墳の成立には6世紀後半から本格的に操業が行われた須恵器や埴輪の生産に携わる専門工人を統率する立場にあった有力者の存在が想定されている。

奈良・平安時代の遺跡動向

集落 本遺跡周辺は、律令制の施行に際し、山田郡の南側部分にあたり、太田市内に比定される園田、真張の2郷の内の園田郷の一部になっていたと見ることが有力視されている。本遺跡から西方に1.5kmには「古氷」の地名があり、早くから山田郡郡家推定地として注目されている。現在のところ寺院や官衙的施設の存在を想定させるような建物址などは検出されていないものの、須恵器や製鉄関連の生産遺跡が集中して分布する状況や後述するように東山道駅路が通過していることなどから当該地域周辺が山田郡における中枢域であったことも充分考えられるところである。

本遺跡からは沖積地を臨む低台地縁辺から平安時代の竪穴住居が検出された。本遺跡周辺における奈良・平安時代の集落としては二の宮遺跡、八ヶ入遺跡、大道東遺跡、楽前遺跡、鹿島浦遺跡、東今泉鹿島遺跡、向矢部遺跡などで多数の竪穴住居が検出されており、集落が継続的に営まれ、大集落が形成されていたことが知られる。

また、本遺跡では2棟の掘立柱建物を検出したが、周辺遺跡においても八ヶ入遺跡、楽前遺跡、鹿島浦遺跡(48)、東今泉鹿島遺跡、向矢部遺跡などで掘立柱建物の検出事例が多数知られており、中には大型の掘り方を有するものも少なくない。向矢部遺跡では7間×4間の四面庇の掘立柱建物の検出が報告されている。

集落内からの出土遺物としては八ヶ入遺跡や楽前遺跡、鹿島浦遺跡で奈良三彩が、八ヶ入遺跡で軒丸瓦が、楽前遺跡で獣脚円面硯が、矢部遺跡や東今泉鹿島遺跡で漆紙文書などが出土していることが注意される。小丸山遺跡からは瓦塔が出土している。

生産遺構 古墳時代後期から開始された須恵器生産は7世紀末から8世紀初頭の段階では丘陵西側の高太郎I遺跡や山去窯跡群に窯場を移動して操業が続けられている。9世紀後半には丸山腰巻遺跡(35)のように丘陵上ではなく、台地上から須恵器窯1基が検出されている。

第1章 発掘調査と遺跡の概要

第1表 猿楽遺跡周辺の遺跡一覧

文献の番号は参考文献の番号と同一

No.	遺跡名	所在地	概要	文献
1	猿楽遺跡	太田市只上町猿楽	本報告の遺跡。調査区の北側から奈良・平安時代の竪穴住居、掘立柱建物を検出。南側からは古墳時代後期から終末期の古墳群を検出した。	
2	諏訪神社古墳	太田市吉沢町278-1	以前は前方後円墳と考えられていたが調査の結果、直径25mの円墳に復元される。主体部は横穴式石室で、古墳時代後期の築造と考えられる。『上毛古墳総覧』では周辺に3基の古墳が分布していたとされる。	1
3	丸山古墳群	太田市吉沢町10他	庚申塚古墳は墳丘長50mの前方後円墳。家形石棺が出土したと記録される。6世紀末から7世紀前半の築造と推定されている。周辺に8基の円墳が分布する。	1
4	矢田堀古墳群	太田市矢田堀町772他	巖穴山古墳の周辺に少数の古墳が分布したとされる。また、『総覧』では小丸山丘陵周辺にも古墳の分布があったことが記載されている。	1
5	巖穴山古墳	太田市東今泉町752	一辺36.5mの方墳。主体部は複室構造の横穴式石室。7世紀前半の築造である。	1・2
6	菅ノ沢御廟古墳	太田市東今泉町2164-11	金山丘陵の一支丘頂部に位置する。直径30mの円墳。主体部は横穴式石室。7世紀代の築造と考えられる。	1
7	今泉口八幡山古墳	太田市東今泉町2164-11	墳丘長約60mの前方後円墳。横穴式石室内に安山岩製の家形石棺を安置する。6世紀末から7世紀初頭の築造と考えられている。	1
8	菅ノ沢古墳群	太田市東今泉町2179-1	菅ノ沢遺跡の調査で検出された7世紀代の古墳群である。長さ2mにも満たない小型横穴式石室を有するものが発見されている。	1
9	母衣埴輪窯跡	太田市東金井町	埴輪窯を検出した。	1
10	金井口埴輪窯跡	太田市東金井町402	埴輪窯3基以上を検出する。円筒埴輪、埴輪円筒棺が出土している。	1
11	亀山京塚古墳	太田市東金井町2265	亀山丘陵上に位置する直径27mの円墳。主体部は横穴式石室で、陶棺が出土している。6世紀中頃の築造。	1・2
12	亀山古墳群	太田市東金井町2265他	亀山京塚古墳から聖天沢古墳に向かう丘陵尾根上や亀山南側裾部に円墳が分布する。	1
13	西山古墳群	太田市金山町40-25	大光院北側丘陵の南東斜面に分布する。数基の小円墳からなる。	1
14	東山古墳群	太田市金山町600-1	八王子山から南に延びる東山丘陵上の南西斜面に分布する。直径10m程の円墳が主体。	1
15	富士山古墳群	太田市熊野町1839他	富士山丘陵の南側斜面に分布していた。6世紀後半から7世紀代の形成とされる。熊野古墳群とも呼ばれている。	1
16	内並木古墳群	太田市東金井町526他	6世紀から7世紀前半に形成された古墳群である。	1
17	馬塚古墳群	太田市東金井町1902-72他	馬塚古墳は直径15mの円墳。6世紀後半の築造と考えられる。	1
18	寺ヶ入古墳群	太田市東金井町674-1他	寺ヶ入の東側の支丘陵と寺ヶ入谷地入口付近に円墳が30基程分布する。主体部に横穴式石室を有し、埴輪を伴うものも多い。6世紀後半から7世紀前半の築造とされる。	1
19	焼山北古墳	太田市東金井町2311-1他	焼山の北側丘陵上に位置する円墳。主体部は竪穴式石室。6世紀初頭の築造。	1・2
20	焼山古墳	太田市東長岡町1312	焼山の南側丘陵上に位置する墳丘長48mの前方後円墳。6世紀中頃の築造とされる。	1・2
21	焼山古墳群	太田市東長岡町1307他	焼山の南北丘陵上に分布する。6世紀から7世紀代の古墳が築造されている。	1
22	安良岡古墳群	太田市台之郷町426-2他	安良岡北東部から台之郷北部にかけて分布。6世紀後半から7世紀後半の築造。	1
23	上小林稲荷山古墳	太田市上小林町106	直径32mの円墳。帆立貝式古墳の可能性も考えられる。主体部は不明。採集された埴輪から6世紀前半の築造が考えられる。	1
24	七日古墳群	太田市吉沢町34-2	丸山古墳群と同一か。調査では古墳は検出されず、幅9mの古代の溝を検出する。	3
25	市場古墳群	太田市市場町762-1他	稲荷山古墳の周辺に形成された古墳群。6世紀中頃から7世紀代の築造とされる。	1
26	反丸遺跡	太田市吉沢町1769他	古墳時代中期・後期の住居を検出、後期の大集落と想定される。遺跡東端から大量の祭祀遺物が出土している。合わせて横穴式石室を主体部にする反丸1号・2号墳を調査している。	1・4・5
27	落内遺跡	太田市吉沢町1741他	古墳時代後期および平安時代の集落である。	1
28	吉沢窯跡群	太田市吉沢町1821-3他	8世紀から10世紀にかけて操業されたとされる須恵器窯跡を検出した。	1
29	丸山北窯跡	太田市吉沢町1769	8世紀後半から9世紀にかけて操業された須恵器窯跡2基を検出した。土坑から瓦塔が出土している。	1
30	吉祥寺遺跡	太田市吉沢町1620他	時期不明の土坑・ピットを検出した。	5
31	流作場遺跡	太田市吉沢町896他	古墳時代中期・後期の集落。諏訪古墳、埴輪円筒棺も合わせて検出される。	1・5
32	宮の上遺跡	太田市丸山町255他	縄文時代から平安時代の集落、古墳の検出が想定されたが主たる遺構はなかった。	6
33	丸山北遺跡	太田市丸山町	古墳時代中期の住居を1軒検出する。	7
34	丸山の岩跡	太田市丸山町丙301	16世紀に存続したと考えられる。腰郭、烽火台が認められる。	8
35	丸山腰巻遺跡	太田市丸山町648他	須恵器窯1基、平安時代溝を検出する。	9
36	小丸山西遺跡	太田市緑町463	旧石器時代の遺物包蔵地。槍先形尖頭器、ナイフ、楔形石器を出土している。	1
37	小丸山遺跡	太田市矢田堀町408他	弥生時代後期から平安時代の遺物出土する。祭祀遺物、9世紀代と考えられる瓦塔も出土している。	1
38	寺前遺跡	太田市矢田堀町	古墳時代の住居、井戸、溝を検出した。	10
39	寺中遺跡	太田市矢田堀町362他	石組炉、羽口、鍛冶滓を検出。菅ノ沢製鉄遺構と同時期の大鍛冶と推定されている。	1
40	東田遺跡	太田市矢田堀町259-1他	平安時代の住居・掘立柱建物を検出する。	11
41	楽前遺跡	太田市只上町790他	太田市調査分からは古墳時代後期から平安時代の大集落を検出。北関東道調査部分でもほぼ同時期の住居を検出。掘立柱建物、粘土採掘坑も多数検出される。	11～14
42	矢田堀館跡	太田市矢田堀町81他	中世城郭跡。泉基繁に係わる。16世紀に存続。堀、土居、戸口が認められる。	8
43	矢田堀前田遺跡	太田市矢田堀町1094他	時期不明の土坑・ピット・溝を検出した。	9
44	二の宮遺跡	太田市矢田堀町493他	北関東道調査部分では平安時代の住居、掘立柱建物を検出。太田市調査分からは古墳時代中期住居、石製製造品出土土坑、平安時代住居、井戸を検出した。	7・15・16
45	古氷条里制水田跡	太田市緑町1401-1他	条里制遺構が存在することが指摘され、注目されていた地域。浅間B軽石下から水田・溝を検出する。	16
46	八ヶ入遺跡	太田市東今泉町・緑町	旧石器時代の遺物包蔵地。奈良・平安時代を主体とする集落。掘立柱建物、東山道駅路の側溝も検出。平安時代の大溝を検出する。	17
47	菅ノ沢Ⅱ遺跡	太田市東今泉町831	須恵器窯跡の灰層を検出した。	18
48	鹿島浦遺跡	太田市東今泉町506他	奈良・平安時代の集落。掘立柱建物、東山道駅路の側溝、大規模水路を検出した。	19

第2節 遺跡の立地と環境

No.	遺跡名	所在地	概要	文献
49	東今泉鹿島遺跡	太田市東今泉町444他	古墳時代前期・中期の集落。奈良・平安時代の集落。掘立柱建物、8世紀後半から9世紀の洪水下水田、浅間B軽石下水田が検出される。平安時代の大規模用水路も検出される。	20
50	大道東遺跡	太田市東今泉町625他	縄文時代中期から後期の集落、古墳時代後期から平安時代の集落、東山道駅路の側溝などを検出した。	21
51	大道西遺跡	太田市東今泉町704他	古墳時代後期から平安時代の集落。東山道駅路の側溝を検出する。中世、屋敷地。	22
52	八幡Ⅰ遺跡	太田市東今泉町2219-26	須恵器窯跡4基を検出した。	18
53	八幡Ⅳ遺跡	太田市東今泉町2219-37	須恵器窯跡・灰原を検出した。	18
54	八幡Ⅱ遺跡	太田市東今泉町308	須恵器窯跡2基・灰原を検出した。	18
55	八幡Ⅴ遺跡	太田市東今泉町305	須恵器窯跡・灰原を検出した。円墳1基を検出した。	18
56	八幡Ⅲ遺跡	太田市東今泉町2221	須恵器窯跡1基・灰原を検出した。	18
57	川西遺跡	太田市東今泉町2189	須恵器窯跡を検出した。	18
58	菅ノ沢Ⅰ遺跡	太田市東今泉町2205	須恵器窯跡7基、未換業窯6基、炭窯1基、平安時代製鉄炉3基を検出する。	18
59	八ヶ入窯跡	太田市東今泉町2138他	須恵器窯跡を検出した。鉄滓を出土。	18
60	諏訪ヶ入遺跡	太田市緑町2110他	須恵器窯跡の灰原を検出した。	18
61	大長谷遺跡	太田市長手町2243-3他	須恵器窯跡を検出した。	18
62	堤入遺跡	太田市長手町2243-7	須恵器窯跡を検出した。	18
63	狸ヶ入Ⅱ遺跡	太田市東金井町2233	須恵器窯跡の灰原を検出した。	18
64	辻小屋遺跡	太田市東金井町2257他	須恵器窯跡を検出した。	1
65	辻小屋窯跡群	太田市東金井町	須恵器窯跡4基を検出した。	18
66	狸ヶ入Ⅰ遺跡	太田市東金井町2233	須恵器窯跡1基を検出した。	18
67	狸ヶ入館跡	太田市東金井町4他	堀、土居、戸口が認められる。	8
68	今泉城跡	太田市東今泉町115-1他	中世城郭跡。16世紀、横瀬長繁、同成高に係わる。堀、土居が認められる。	8
69	宿裏遺跡	太田市東金井町1081他	平安時代の集落。	23
70	金井口遺跡	太田市東金井町2266-1他	金井口埴輪窯跡に近接。製鉄遺構を検出する。槍先形尖頭器を出土する。	1
71	龜山窯跡	太田市東金井町59他	須恵器窯跡・灰原を検出する。	18
72	塩ノ山遺跡	太田市東金井町325他	円墳1基を検出した。	1
73	入宿Ⅲ遺跡	太田市東金井町104他	須恵器窯跡の灰原を検出した。	18
74	入宿Ⅱ遺跡	太田市東金井町74-2	須恵器窯跡の灰原を検出した。	18
75	入宿Ⅰ遺跡	太田市東金井町1914	須恵器窯跡の灰原を検出した。	18
76	金山城跡	太田市金山山頂全域他	15世紀から16世紀にかけて存続。岩松氏、由良氏、清水正次と係わる。	8
77	聖天沢遺跡	太田市東金井町1906-3	直径15mの円墳1基と中世の墓群を検出した。古墳の主体部は横穴式石室。7世紀後半の築造と考えられる。骨蔵器、板碑、五輪塔を出土する。	2・24
78	東金井城跡	太田市東金井町2263-1他	中世城郭跡。金山城の砦である。堀、土居、戸口、腰郭が認められる。	8
79	丸屋敷の砦	太田市金山町	中世城郭跡。金山城の砦である。	1
80	由良氏五輪塔	太田市金山町40-164	中世石造物。	25
81	寺ヶ入遺跡	太田市東金井町613他	寺ヶ入古墳群と同一か。	1
82	内並木遺跡	太田市東金井町555	須恵器窯跡の灰原を検出。旧石器時代の槍先形尖頭器を出土した。	1・18
83	焼山北遺跡	太田市東長岡町	焼山の北側丘陵上に立地する。旧石器時代から古墳時代にかけての遺物が採集された。	1
84	焼山南遺跡	太田市東長岡町	焼山の南側丘陵上に立地する。南東部分では旧石器時代の遺物が採集された。	1
85	細田遺跡	太田市安良岡町51-1他	旧石器時代の槍先形尖頭器が出土する。縄文時代前期の住居・土坑、古墳時代前期の方形周溝墓7基、平安時代の住居などが検出された。	1
86	伊豆ノ山遺跡	太田市東長岡町1404-1他	旧石器時代の遺物包蔵地。槍先形尖頭器が出土している。	1
87	東長岡戸井口遺跡	太田市東長岡町戸井口・安良岡町前田	旧石器時代の遺物包蔵地。縄文時代集落、古墳時代中期・後期住居、奈良・平安時代住居・大規模用水路、中・近世遺構を検出した。	26
88	稲荷宮遺跡	太田市矢場町3241他	古墳時代前期・中期、平安時代の集落を検出した。	27
89	矢場向遺跡	太田市矢場町144他	古墳時代前期・中期、平安時代の集落を検出した。	27
90	磯之宮遺跡	太田市上小林町1279他	弥生時代住居1軒、古墳時代前期の住居・方形周溝墓、平安時代の住居を検出した。	6
91	塚本遺跡	太田市台之郷町1163-2他	古墳時代前期から後期の集落を検出した。	28
92	西浦遺跡	太田市上小林町1151-2他	平安時代の住居、古墳時代前期の土坑・井戸・溝などを検出した。	6
93	植木野城跡	太田市植木野町776他	中世城郭跡。16世紀、横瀬成高に係わる。堀、土居、戸口が認められる。	8
94	相方遺跡	太田市植木野町980他	平安時代の遺物包蔵地である。	1
95	宗金寺環濠遺構	太田市植木野町985-1	16世紀に存続したと考えられる。2重の堀が認められる。	8
96	堂目木遺跡	太田市上小林町331他	10世紀代の小鍛冶遺構を伴う平安時代集落を検出した。	1
97	富田館跡	太田市富若町525他	16世紀に存続したと考えられる。堀、土居、戸口が認められる。	8
98	下宿遺跡	太田市東金井町1196-1他	縄文時代草創期爪形文土器を伴う土坑、古墳時代前期、平安時代の住居を検出した。	1
99	向矢部遺跡	太田市只上町570-2他	古墳時代後期から平安時代の集落。掘立柱建物を検出する。	29～31
100	矢部城跡	太田市只上町559他	中世城郭跡。16世紀、矢部地衆に係わる。堀、土居、碑が認められる。太田市により矢部遺跡として本城の土塁と考えられる遺構の調査が行われている。	8
101	矢部遺跡	太田市只上町1250他	太田市調査分からは古墳時代後期から平安時代の住居、中・近世の墓坑を検出。北関東分では縄文時代土坑、弥生時代中期土器、奈良・平安時代住居・畠・大規模用水路を検出。	12・32・33
102	只上深町遺跡	太田市只上町1804-1他	平安時代の住居・掘立柱建物・3時期の畠、中世水田1面を検出した。	32・33
103	新島遺跡	太田市只上町1247-2他	古墳時代の2時期の畠、奈良・平安時代の住居、平安時代洪水下水田1面を検出した。	32・33
104	道原遺跡	太田市市場町1074-1他	縄文時代住居・土坑、古墳時代前期の方形周溝墓・水田、終末期古墳1基、平安時代住居・畠2面、道路跡を検出した。	32・33
105	国済寺城跡(道原城跡)	太田市市場町1137-1他	中世城郭跡。16世紀、横瀬繁詮に係わる。堀、土居が認められる。	8
106	只上の砦跡	太田市只上町1860-1他	中世城郭跡。16世紀に存続したと考えられる。堀が認められる。	8

また、7世紀後半から8世紀前半にかけて萩原窯跡では瓦生産が行われている。寺井廃寺や入谷遺跡に供給されている。その北側には上野国分寺瓦の生産に携ったと推定される落内窯跡が位置している。東長岡戸井口遺跡では土師器の焼成窯が報告されている。

須恵器の窯跡と重なるように製鉄関連の遺構も検出されている。金山丘陵北東麓の菅ノ沢I遺跡においては平安時代の製鉄炉3基、炭窯1基が検出されている。金山丘陵北麓に位置する峯山遺跡では7世紀末から8世紀前半の製鉄炉や鍛冶遺構、竪穴住居、土坑などからなる製鉄遺構が確認されて、鉄生産から鉄器製作にいたる一連の作業が行われたことが明らかとなっている。寺中遺跡(39)でも平安時代の鍛冶遺構が検出されている。

八ヶ入遺跡、大道西遺跡、大道東遺跡、鹿島浦遺跡のからは幅約12から13mで、両側に側溝が付帯する道路状遺構が検出された。4遺跡の間、約1kmの距離を直線で結ぶもので、本遺跡の南方約0.6kmのところを通過している。大道西遺跡や大道東遺跡では竪穴住居との重複関係から6世紀より後出で、8世紀中葉以前には廃絶されていたことが明らかになった。この遺構は上野国と下野国を連絡する東山道駅路と推定され、旧新田町内で検出された牛堀・矢ノ原ルートに繋がる可能性が高いと考えられている。矢部遺跡や道原遺跡では東山道駅路とは別の道路状遺構が検出されている。

田島にかかわる遺構の検出は少ない。古氷条里制水田遺跡(45)の周辺は、早くから条里制方形地割の存在が指摘されていたが、調査により、1108(天仁元)年に降下した浅間B軽石下から水田面が検出された。水田区画は条里制地割に合致しており、奈良時代後半から平安時代前半に開田されたものと考えられている。矢部遺跡でも浅間B軽石下の水田が検出されている。只上深町遺跡(102)では818(弘仁9)年の地震に伴う洪水層下から島が検出されている。

当該時代の集落は古墳時代後期よりも分布範囲を拡大している。これはそれまでは丘陵麓裾や旧河道などからの自然湧水を利用した農耕が主であったものが、新たに用水系を整備することにより、耕地の拡大、微高地への進出が可能になったためと考えられる。取水口については不明であるが、鹿島浦遺跡では奈良時代末に開削されたと考えられる大規模用水路が検出されている。このほ

かに八ヶ入遺跡、東今泉鹿島遺跡、新島遺跡(103)、東長岡戸井口遺跡の調査においても大規模な用水路が掘削されていることが明らかになってきた。

奈良・平安時代以降の遺跡動向

平安時代の末になると大間々扇状地の末端に広がる「空閑の郷々」を中心に新田荘が成立する。同じ頃、太田市域東部には園田御厨、大倉保、寮米保が分布していたとされる。その中で園田御厨は伊勢神宮の所領で1156(久寿3)年に成立、200町余の広さを有するとされており、只上周辺もこの中に含まれていたと考えられる。在地領主の園田氏は鎌倉時代には御家人となるが、室町時代になると衰退し、その領域は岩松氏、横瀬氏の支配下に入ったと考えられている。

太田市内には広範囲にわたり城館址や屋敷が存在する。その多くは室町時代後期に築造されたものとされる。その代表となる城郭に金山城(76)がある。金山城は金山丘陵頂部にある山城で、岩松氏、横瀬(由良)氏の居城として、1469(応永3)年に築城され、1584(天正12)年に廃城となった。本遺跡の周辺にも丸山砦(34)、矢田堀城(42)、狸ヶ入館(67)、今泉城(68)、東金井城(78)、丸屋敷の砦(79)、矢部城(100)、国済寺城(105)など金山城の支城、あるいは金山城に関連の深い城館址が多数点在する。本遺跡の東方約500mの矢場川左岸には只上の砦が位置する。この砦は125m四方の城郭で、矢場川に面した部分は一段低く腰郭状を呈していたとされる。

この他に調査において大道西遺跡や東長岡戸井口遺跡などで屋敷地を巡る堀や柱穴が検出されている。鹿島浦遺跡では五輪塔をはじめとする石造物が検出されている。

現在の毛里田地区、葦川地区周辺には広沢・新田堀・休泊堀・三栗谷用水、矢場川、葦川が流れている。これらの農業用水や河川は待矢場両堰土地改良区の水系に属している。待堰(新田堀)の開削は1570(元亀元)年といわれており、由良(横瀬)成繁によるものとされる。矢場堰の開削も同時期と推定されている。休泊堀用水も1570(元亀元)年に大谷休泊により開削されたものとされる。江戸時代になると館林藩による灌漑施設の整備が進められ、館林領用水配分組合が作られている。

第3節 発掘調査の方法と経過

1 調査の方法と経過

(1) 遺跡の命名と調査歴

第1節にも述べたように本遺跡はそれまで周知の遺跡でなかったことから遺跡所在地の小字名「猿楽」を遺跡名としたものである。

なお、猿楽遺跡の範囲について群馬県教育委員会作成の『群馬県文化財情報システムweb版』を参照すると、第5図に示したとおり、北側は毛里田小学校敷地から南側は猿楽の集落の南端、休泊堀用水路の流路までの南北約800m、東西約400mの低台地上がマークされている。標高は49mから51m前後とほぼ平坦で、中央やや北側を葦川用水路が横断している。周囲の水田面との比高差はわずかである。南東部分は矢部遺跡や向矢部遺跡と接している。西側は幅の狭い沖積地をはさみ、低台地上に東田遺跡、楽前遺跡が形成されている。北東には矢場川の流路とこれに沿った沖積地の先に畦地浦遺跡が展開する低台地が広がっている。

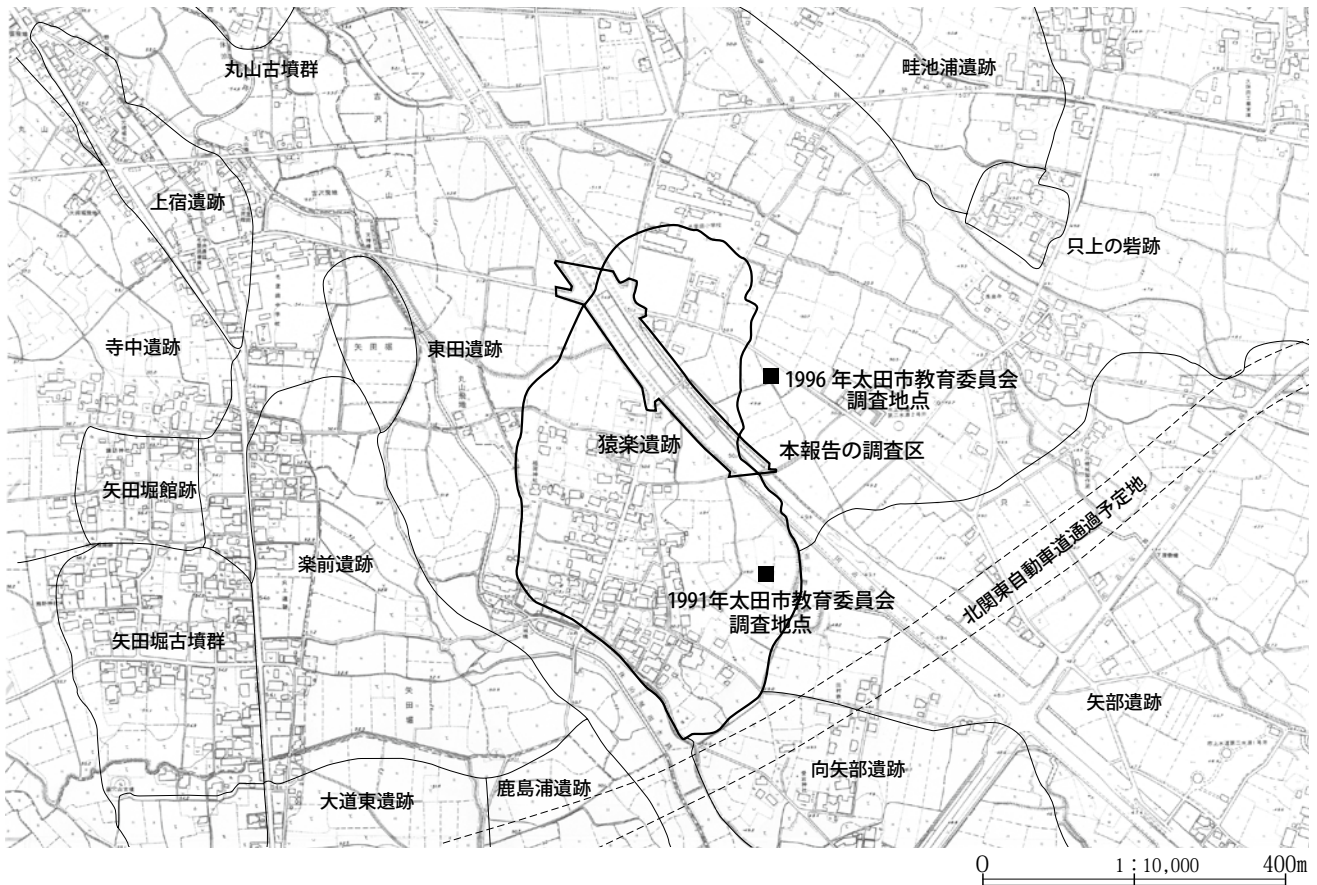
この猿楽遺跡においては本報告の発掘調査以降、太田市教育委員会によって2回の発掘調査が実施されている。いずれも上記遺跡の認定範囲内の調査であることから、猿楽遺跡として報告が行われている。

第1回目は本報告の調査範囲の南端から南南東方向約150mに位置する字猿楽833-1、840番地における調査である。6世紀後葉から7世紀中葉に比定される竪穴住居1軒が検出されている（文献37に報告されている）。

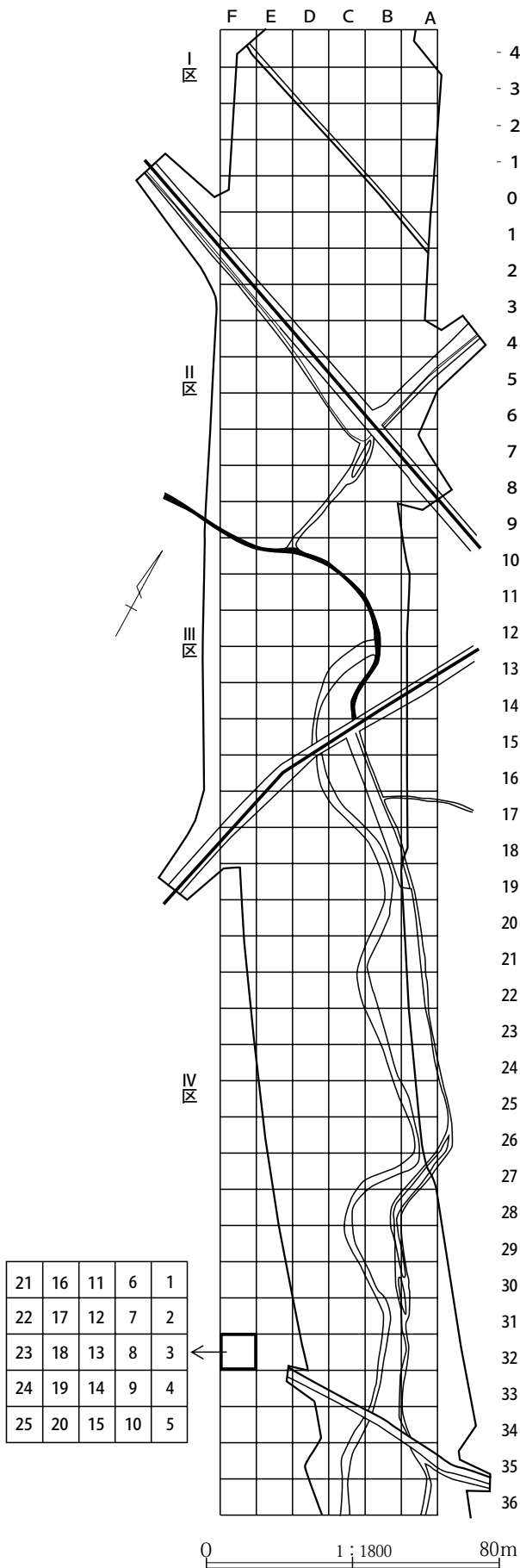
第2回目は本報告の調査範囲のIV区から北方向に約100mの地点で、字矢部406・412-1番地における太田市立毛里田児童館の建設に先立つ調査である。『上毛古墳総覧』毛里田村第17号墳の検出が予想されたが古墳の周堀などは検出されず、早い時期に消失したものと考えられた。その他の遺構も検出されていない（文献38に報告されている）。

(2) 調査区の設定

本報告の発掘調査に際しては、調査予定地が北西から南東方向に約370mの長さとなったため、既設の道路や用水路の流路を境にIからIV区の調査区を任意に設定した。



第7図 猿楽遺跡周辺の遺跡（2）



第8図 グリッドの配置と呼称

I区は調査予定地北限から太田市立毛里田小学校の南側の道路が市立毛里田中学校に抜ける東西道路までとした。II区は東西道路から南側の葦川用水路までとした。III区は用水路から毛里田小学校前の道路が猿楽の集落に向かう南北道路までとした。そしてIV区はこの道路から調査予定地南限までである。

また、遺構確認のための試掘調査の実施や出土遺物の取り上げにあたり、その位置を明確にするために調査区全域を網羅するようにグリッドを設定した。

調査区となる路線は緩やかなカーブを描いていた。グリッドの基線は道路施工図上の工事用センター杭No.328（調査区北端寄り）とNo.340（調査区南端寄り）の2点を結んだラインを縦軸として、これに直交するラインを横軸として、調査区全体を一辺10mの方眼で覆った。センター杭2点間の距離は240m、縦軸の方向はN-29°40'-Wである。

グリッドは北東隅（縦軸を南北方向と考えた場合）を起点に、縦軸の南方向に「1・2・3・・・」とアラビア数字を、横軸の西方向に「A・B・C・・・」とアルファベットを付した。さらに10m四方の1グリッド内を2m四方の25区に再分割し、北東隅を1、南西隅を25とした小グリッドを設定した。グリッドの呼称は北東隅の交点を基点とするもので、「A-1-1」と呼称するものはA-1グリッドの小グリッド1を表している。

上記の設定により調査は進行したが、グリッドの呼称にあたり基点の識別が一定でなかったり、グリッドの基線の方向が南北方向から斜め方向であったことから図面や写真撮影の方向の認識に混乱が生じていた。

水準点については道路建設工事に求められた水準点を利用、これを調査区内に移動して基準点を設定した。

(3) 調査の経過

調査は下記調査日誌抄に記した内容の工程で進められた。調査の体制は担当者3名である。途中、一時的に担当者の増員や補助員の応援があった。

調査は6月3日に開始された。調査区の南半に古墳の存在が確認されたことから、調査区北半部分を中心に、土層の堆積状況の確認を兼ねた遺構確認のための試掘調査を実施した。遺構確認作業は、まず、路線予定地のほぼ中央にあたるCグリッド西端に南北の長さ10m、東西の幅1.5mの試掘坑を設定し、調査予定地のほぼ全線に

おける遺構の有無と古墳の残存状況を確認することから始められた。

その後、I区からIII区については設定したグリッドの北西隅を基本位置に、1グリッドに1箇所、2×2mの試掘坑を設定して、これを人力で掘り下げ、遺構の有無を確認する方法が取られた。掘り下げられた試掘坑は、各々、土層の堆積状況の観察、写真撮影、断面図の作成作業が行われた。

溝の存在が確認された地点では試掘坑内で掘り込みの状況を把握、必要に応じて調査区の拡張を行った。III区の1号住居、1号・2号掘立柱建物については表土の掘削、除去の範囲を拡張し、遺構全体を検出した。

IV区古墳の調査についても基本的には上記の方法が取られ、グリッドの設定方向に試掘坑が設定され、各古墳の墳丘・石室の残存状況、周堀の状況が確認された後、人力あるいは重機により表土の除去が行われた。

また、IV区の調査区南端寄りからは調査段階で集石あるいは石組と呼称した礫の集中箇所が9箇所ほど確認され、古墳の主体部との識別に時間を要した。その中で8号墳の竪穴式小石槨が検出されている。調査時には2号石組と呼称していたものである。

7月中旬以降はIV区古墳群の調査が本格化し、墳丘の一部が残存していた1号墳の周堀部分の確認調査に始まり、1号から7号墳までの周堀の検出、1号墳・3号墳・4号墳の横穴式石室の調査が10月まで継続している。地下水位の上昇と降雨により、古墳の周堀が度々冠水する状態となり作業の進行が妨げられた。

10月になり、8月末の段階で遺跡の基盤層について改めて確認するため、I区に設定しておいたAからDの南北方向のトレンチについて、土層の堆積状況を把握するための作業を行った。その結果、これまで地表面下1.5mから1.8mの間に堆積していた旧河道堆積物と考えていた黒色土層の下に安定したローム層が堆積し、この層を掘り込む古墳時代から平安時代の住居が存在することが判明した。既に調査終了期日が迫っており、調査期間などを含む調整が図られたが、この深さまで工事による掘削が及ばないなどの理由から、トレンチ調査で確認した範囲について記録を行うにとどめ調査を終了した。

調査は、以上の工程を経て、10月24日にすべての作業を終了した。調査面積は7900㎡である。

なお、8月31日には現地説明会を実施している。

遺構の記録は実測図の作成と写真撮影により行った。遺構の図化については試掘坑・トレンチの平面図・土層断面図は20分の1の縮尺で作図を行っている。その他の遺構についても住居、古墳などの平面図・断面図について20分の1の縮尺の図面を作成した。

遺構写真は6×9版と35mmのモノクロフィルム、35mmのリバーサルフィルムにより撮影を行っている。

(4) 調査日誌抄

1974 (昭和49) 年

- 6月1日 調査事務所設営。器材搬入。
- 6月3日 調査を開始する。調査区内にグリッドを設定する。
- 6月4日 Cラインに沿ってトレンチ(幅1.5m、長さ10m)を設定、遺構と土層堆積状況の確認作業を実施する。
- 6月7日 I区からIII区の範囲内に2m四方の試掘坑を設定。遺構確認調査を開始する。
- 7月8日 IV区の調査範囲内にグリッドを設定、遺構確認調査を開始する。南端よりで集石を検出する。
- 7月12日 IV区1号墳の周堀を確認する。
- 7月18日 III区1号掘立柱建物確認。周辺のピットを含め、調査を継続する。
- 7月24日 IV区4号墳石室前の調査。
- 7月25日 IV区3号墳の調査を開始する。
- 8月7日 IV区2号墳の調査を開始する。
- 8月8日 IV区1号から5号石組の調査。2号石組はその後竪穴式小石槨(8号墳)となる。
- 8月9日 III区2号掘立柱建物を確認。
- 8月12日 IV区1号墳の調査を開始する。
- 8月14日 III区1号住居の調査を開始、合わせて2号掘立柱建物、その周辺のピットの調査を実施する。
- 8月20日 IV区4号墳石室内から直刀・鉄鏃・ガラス小玉を検出する。
- 8月27日 I区のA-1・2・3ライン、B-2・3ライン、重機により深掘り、下層の土層堆積状況を確認する。
- 8月28日 IV区3号墳の石室実測作業を開始する。

第1章 発掘調査と遺跡の概要

- 8月29日 IV区1号墳の南側で近世墓を検出。4号墳の石室実測を開始する。
- 8月31日 現地説明会を実施する。来場者、約1000人を数える。
- 9月5日 IV区5号墳周堀調査を開始する。
- 9月6日 IV区6号墳周堀調査を開始する。
- 9月11日 IV区1号墳石室実測作業開始する。
- 10月4日 IV区4号墳石室実測作業を開始する。床面下の土砂を篩にかけて精査、ガラス小玉を多数検出する。
- 10月7日 IV区7号墳調査を開始する。
- 10月16日 I区Dトレンチの調査を開始。以後、A・B・Cトレンチを調査。
- 10月17日 I区Dトレンチで住居を1軒検出、調査。
- 10月18日 I区Bトレンチで1号・2号住居を検出。
- 10月19日 I区Bトレンチ1号住居の調査を行う。器材の搬出準備を開始する。
- 10月23日 器材撤収。調査事務所を撤去。これと併行してBトレンチ1号住居の調査を継続する。
- 10月24日 器材撤収。Bトレンチ1号・2号住居の調査を終了する。
調査のすべてを終了する。

2 整理作業の方法と経過

猿楽遺跡の調査成果・出土遺物の整理作業は、2010(平成22)年4月1日から2011(平成23)年3月31日までの間に平成22年度緊急雇用創出基金事業として、藤岡市上落合所在の七興山古墳の整理作業とともに実施された。

整理作業は最初に出土遺物の接合・復元作業を中心にを行い、その後、出土遺物の実測・トレース作業を実施した。実測に際しては、その一部について器械実測により素図を作成し、これを精図した。器形の復元が困難な資料については、断面のみ実測を行い、これに拓本を貼付した。作成した実測図はトレース作業を行い、デジタルデータ化を行い、遺構図面と合わせて版下作成作業を行った。

古銭、金属製品については保存処理室で錆落としの作業を実施後、実測、採拓作業を行った。

遺構図面については、編集作業を実施し、作成した下図をデジタルトレース、版下作成を行った。

記録写真類は、遺構写真については調査時に撮影した



写真2 整理作業状況(出土遺物の接合作業)

ネガフィルムをスキヤニングし、写真図版のレイアウト・版下作成作業を実施した。遺物写真は当事業団写真室でデジタル写真撮影を行い、デジタルデータを基にレイアウト・図版作成作業を実施した。

1号墳出土埴輪の胎土についてはその素材となる粘土の産地推定を目的とした自然科学分析を実施し、製作地の検討を行った。その成果については第3章第1節に掲載した。

また、1号近世墓出土の人歯についてはその基礎的な数値の確認とこれらに基づいた被葬者の性別・死亡年齢などについての分析を行った。その結果は第3章第2節に掲載した。

報告書の出稿にあたっては原稿、挿図、写真のいずれもデジタルデータ化を行った。

上記の方法と経過を経て、2011(平成23)年3月に『猿楽遺跡』として発掘調査報告書(本報告)の刊行を行ったところである。

掲載資料については、管理台帳作成後収納作業を行った。掲載を断念した埴輪・土器などは出土遺構・トレンチ・地点ごとに分類、その後収納した。

なお、調査成果の概要は1976(昭和51)年刊行の『日本考古学年報』27、および、1996(平成8)年に刊行された『太田市史通史編原始古代』に掲載された。太田市史の中には円筒埴輪2点の実測図も提示されている。

第2章 発掘調査の記録

第1節 調査の概要

1 検出された遺構と遺物の概要

第2節以下で後述するように今回報告する調査では古墳8基（内1基は竪穴式小石槨）、飛鳥から平安時代の竪穴住居4軒・掘立柱建物2棟、江戸時代の墓3基、時期不明の溝9条・土坑・ピットなどの遺構を検出した。また、遺構を伴わないものの縄文土器、縄文時代の石器、古墳時代から古代の土師器・須恵器・金属製品、中・近世の陶磁器・軟質陶器・在地系土器・古銭などが出土している。

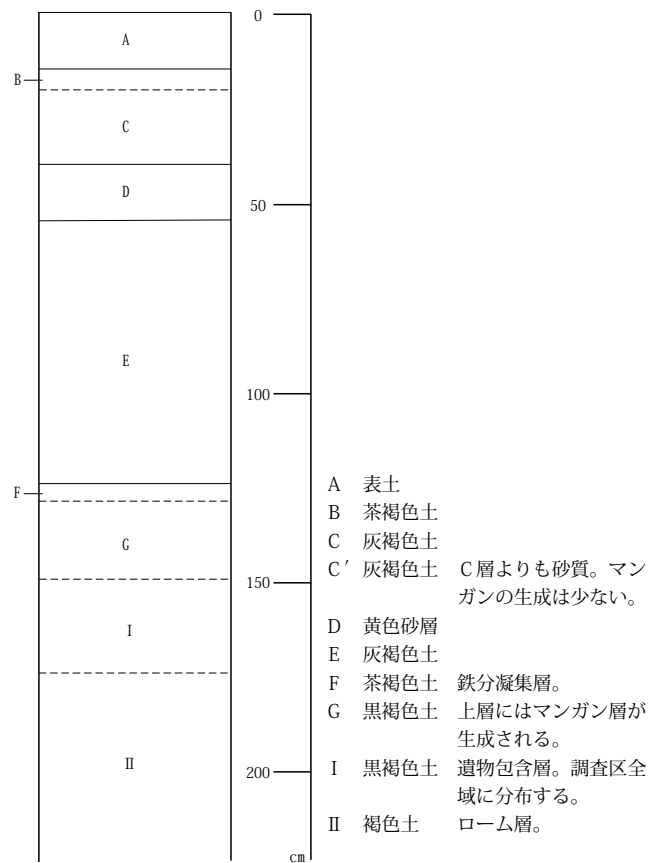
出土遺物は、遺物収納箱（60cm×37cm×15cm）に14箱分である。その大半は1号墳出土の埴輪であった。本報告においてはこれらの中から縄文土器11点、縄文時代の石器9点、古墳時代から古代の土師器23点・須恵器34点・円筒埴輪35点・形象埴輪65点・金属製品32点・ガラス小玉217点、古墳時代の可能性のある有孔不定形剝片1点、中・近世の陶磁器・軟質陶器・在地系土器など24点、古銭36点、石製品5点、時期不明の鉄滓他3点の合計495点を資料化、掲載した。また、非掲載遺物は遺物収納箱に5箱である。

2 基本土層

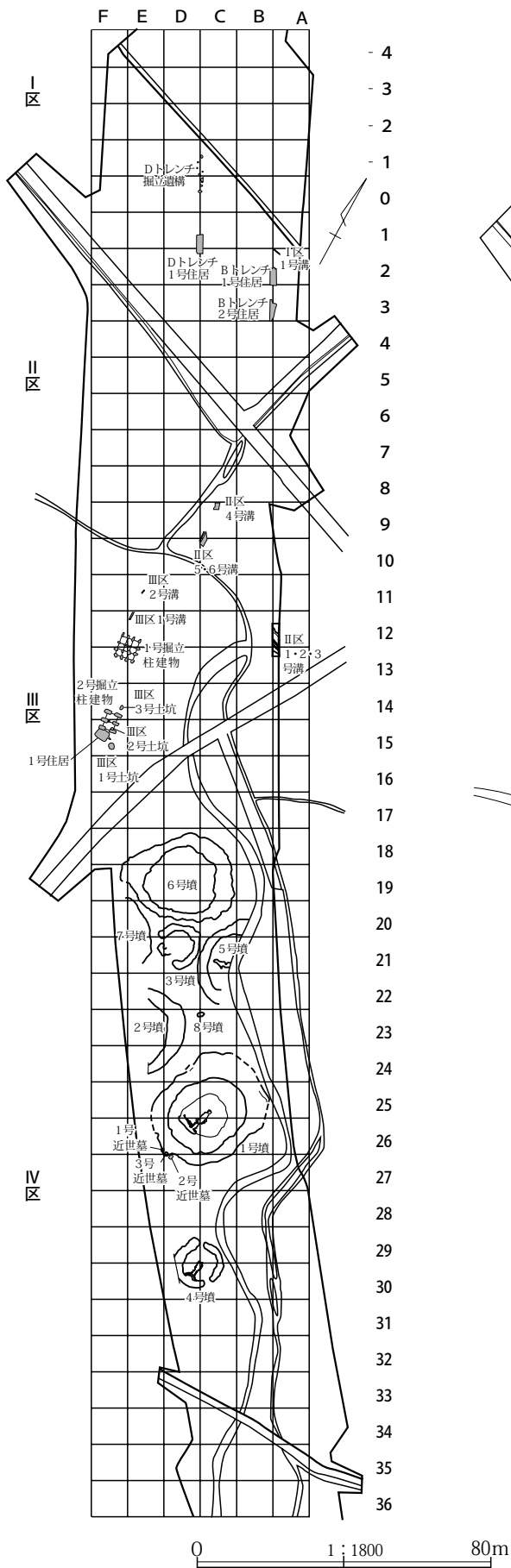
第1章第1節でも述べたように本遺跡の調査対象地は、渡良瀬川扇状地Ⅱ面上に南北方向に延びる低台地の北側寄りに位置していた。調査は、第1章第3節および第11図に表したようにⅠ区からⅣ区までの間の調査区全体に試掘坑を設定し、遺構の有無を確認しながら土層の堆積状況の把握を進めて行った。

基本土層に示したように沖積地に近い北半側のⅠ区からⅡ区は1層目の表土（A層）から9層目の遺構確認面のローム層までの間に1.5mから1.8mの厚さの土砂が堆積していた。上層のB層茶褐色土、C層灰褐色土は調査前の耕作により形成された土層で、水田部分では普遍的に存在していた。その下位にはD層黄色砂層、E層灰褐

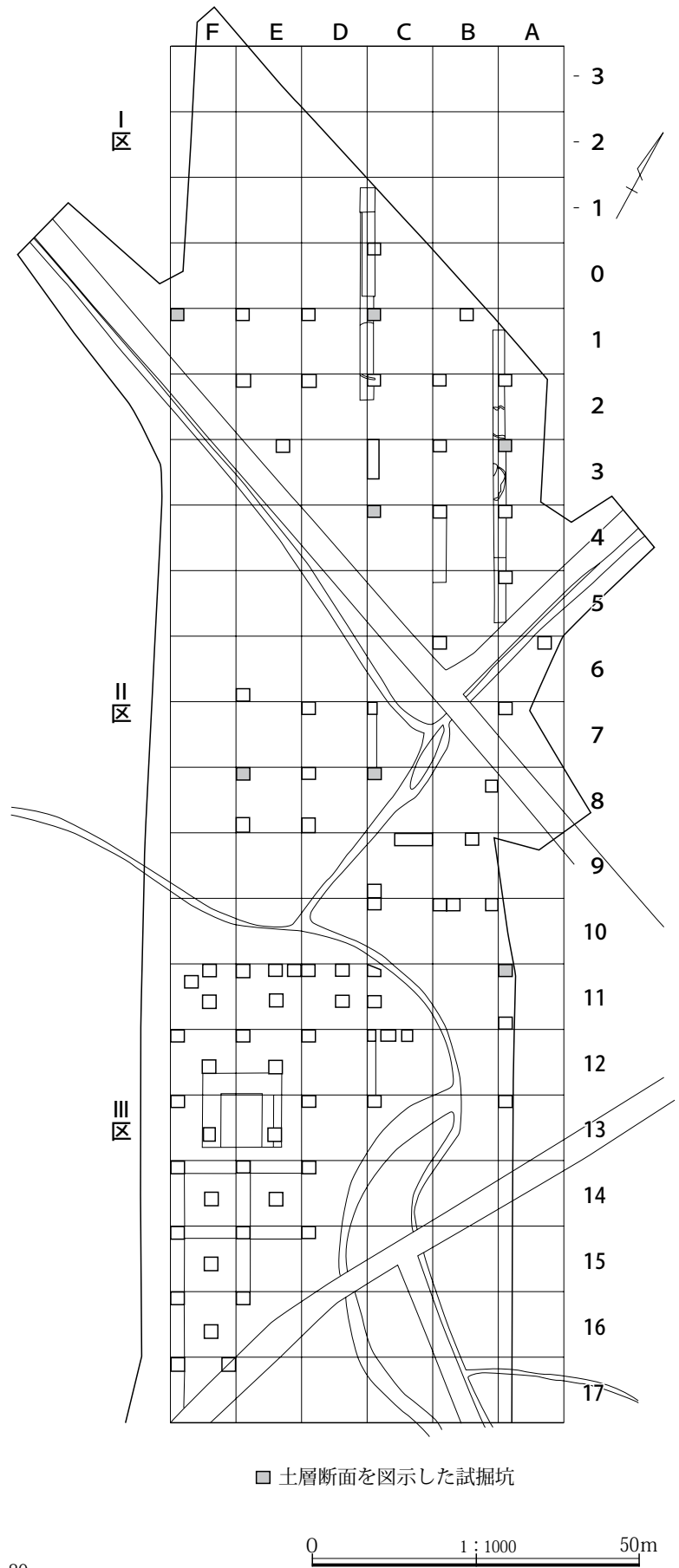
色土が堆積していた。この両層も毛里田小学校から南西方向に広がる低地、調査時の水田部分に生成されているようである。ここまでのいずれの土層にも軽石の混入が確認されている。この下位には鉄分凝集の顕著なF層茶褐色土の薄い堆積土層をはさんでG層・I層の黒褐色土が堆積していた。上半のF層は灰褐色味が強い。密度が小さく、軟質であると記録されている。上層部にはマンガ層が生成されていた。下半のG層は粘性が強く、下層に行くに従い、茶色味を帯びる。軽石の混入も認められる。これらは旧河川堆積物と考えられる。Ⅰ区ではこの堆積物下から奈良時代から平安時代の竪穴住居が検出されている。確認時の最下層Ⅱ層は褐色のローム層である。上層は砂質分が強く、二次的に堆積した印象があることが記録されている。軟らかな状況が徐々に薄れ、砂質ローム層、砂礫層へと移行していくことが観察されている。Ⅰ層黒褐色土の下半層はⅠ区からⅣ区までの各調



第9図 基本土層



第10図 検出された遺構概念図



第11図 I区からIII区の試掘坑の位置

査区において確認されており、縄文時代以降の遺物を包含していた。

Ⅲ区では地表面下約0.4mで奈良時代から平安時代の掘立柱建物とこれよりも時期が新しくなる竪穴住居が検出されている。Ⅳ区では調査区の中央からやや南側に1号墳の墳丘の一部が小丘状に残存していた。その北側部分では地表面下約0.5m前後から7基の古墳が確認された。1号墳以外の墳丘は地表面からの削平を受けていたが、3・5・8号を除く各古墳の周堀の埋没土中には1108（天仁元）年降下の浅間B軽石の堆積があることが観察されている。また、1から3・6・7号墳では榛名山二ツ岳系の軽石の混入が記録されているが、古墳の築造時期を勘案すると二次的な混入であると考えられる。

1号墳の南側では4号墳を検出した。その4号墳の南側では調査時に集石状況をなした礫が確認された。集石、石組と仮称し、横穴式石室あるいは8号墳同様の竪穴式石槨の存在する可能性を想定して精査を進めたが最終的

には風倒木の痕跡と判断している。

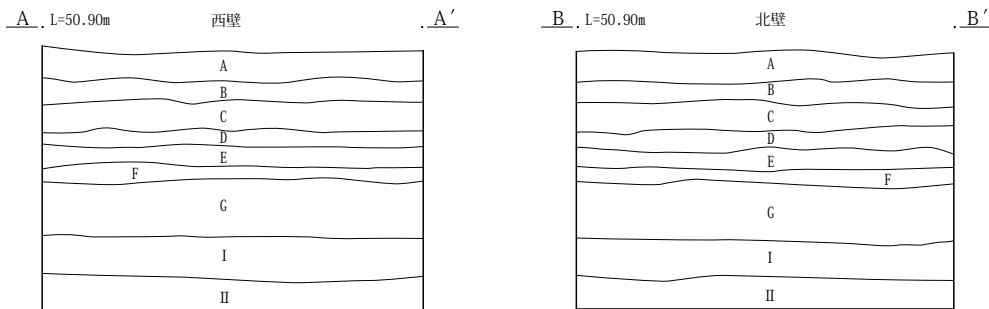
第12・13図はⅠ区からⅢ区に設定した試掘坑の土層断面である。その位置は第11図に示した。いずれも基本土層に示した各土層が確認されているが、地点ごとに堆積層と層厚は異なっている。

Ⅰ区の東側A-3グリッド、中央部分C-1グリッド、C-4グリッド、西側F-1グリッドの記録を提示した。

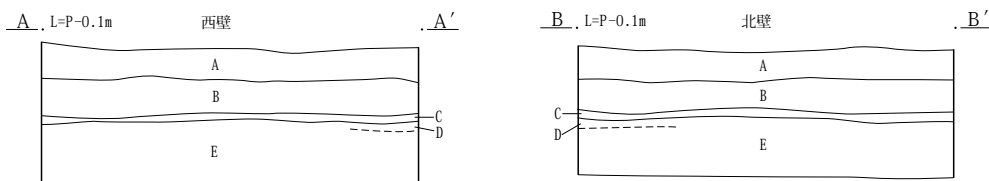
Ⅱ区は東側A-11グリッド、調査区中央寄りのC-8グリッド、西側よりのE-8グリッドの記録を提示した。A-1グリッドではC・Eの2層の堆積が認められなかった。C-8グリッドではⅡ層までの堆積が0.8mで、E層の堆積は薄く、G層はなかった。E-8グリッドも1mの堆積であった。

Ⅲ区では調査区の中央寄りのC-12グリッドの堆積状況を提示した。西壁では0.75mでⅡ層上面となり、各層が水平堆積をしていたが、E層は認められなかった。北壁では溝状の掘り込みが確認され、砂層が堆積していた。

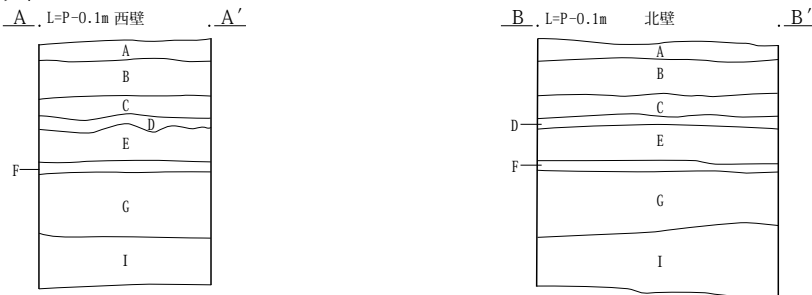
A-13-21グリッド



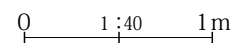
A-11-21グリッド



C-1-21グリッド



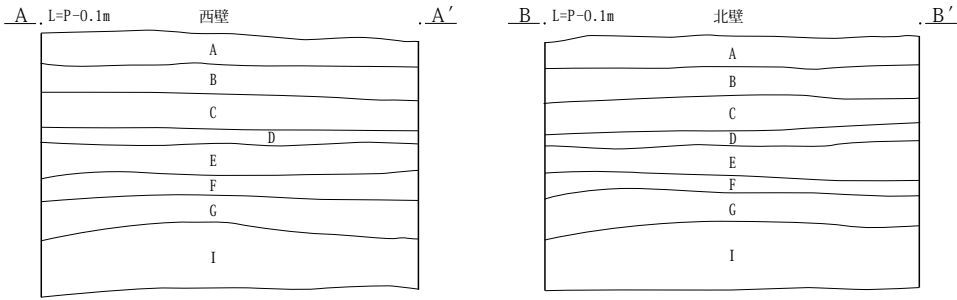
- 基本土層A 表土
- 基本土層B 茶褐色土
- 基本土層C 灰褐色土
- 基本土層C' 灰褐色土
- 基本土層D 黄色砂層
- 基本土層E 灰褐色土
- 基本土層F 茶褐色土
- 基本土層G 黒褐色土
- 基本土層I 黒褐色土
- 基本土層II ローム層



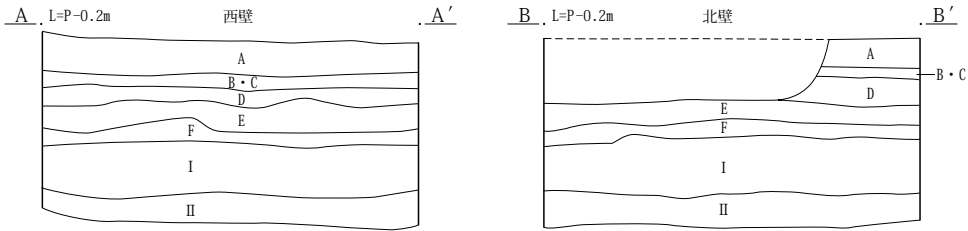
第12図 試掘坑土層断面（1）

第2章 発掘調査の記録

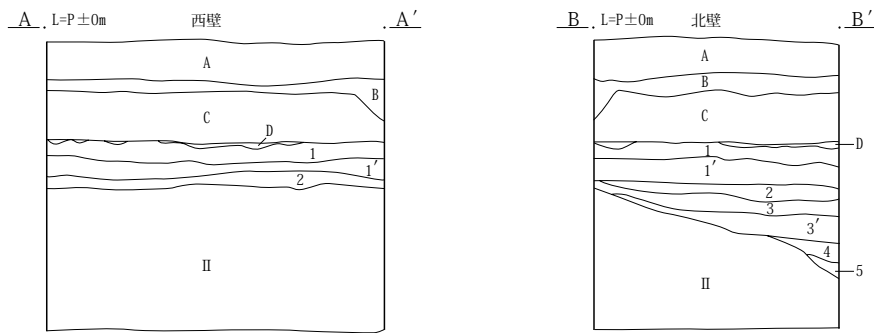
C-4-21グリッド



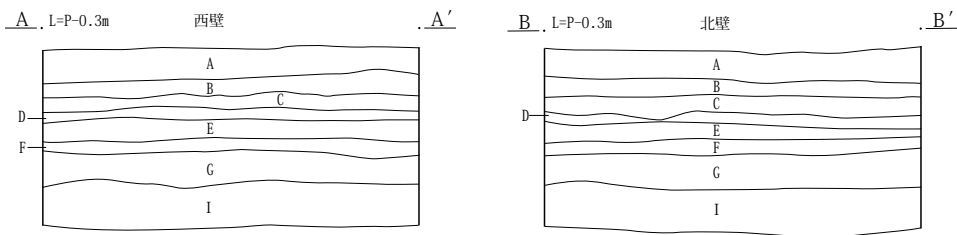
C-8-21グリッド



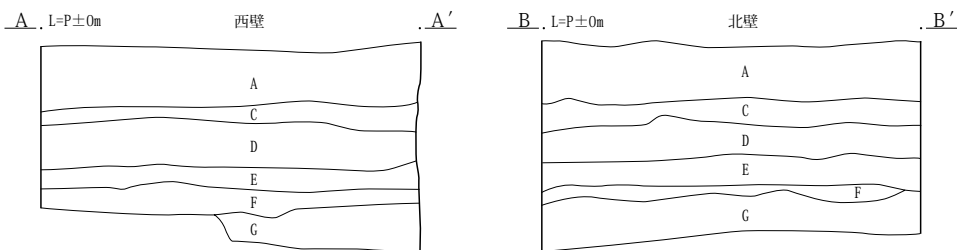
C-12-21グリッド



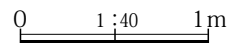
E-8-25グリッド



F-1-21グリッド



- 基本土層A 表土
- 基本土層B 茶褐色土
- 基本土層C 灰褐色土
- 基本土層C' 灰褐色土
- 基本土層D 黄色砂層
- 基本土層E 灰褐色土
- 基本土層F 茶褐色土
- 基本土層G 黒褐色土
- 基本土層I 黒褐色土
- 基本土層II 褐色土 ローム層。
- 1 茶褐色土 砂粒を多く含む。
- 1' 茶褐色土
- 2~5 砂層



第13図 試掘坑土層断面(2)

第2節 古墳・飛鳥時代の遺構とその出土遺物

1 古墳

(1) 概要

本調査ではIV区で円墳7基と周堀を伴わない竪穴式小石槨1基を検出した。2号・5号・7号墳については墳丘・周堀の一部が調査区域外におよんでおり、調査区域外に今回報告する古墳以外の古墳の存在が充分想定され、微高地内の高位部を中心に古墳群が形成されていたものと考えられる。検出された古墳は、隣接する古墳同士が周堀を相接するような状況で築造されており、群集墳として一定の範囲を定めた中で古墳の築造が進行した状況を見てとることができる。

後述するように報告の古墳から北東150mの位置にあるI区では7世紀後半から8世紀前半にいたる間に集落が形成されている。今回の調査では3軒の竪穴住居が検出されただけであるが、Dトレンチ1号住居の使用時期と2号墳をはじめとした埴輪を伴わない古墳の築造時期には余り時間差がないことが考えられ、扇状地内の低台地上における土地利用の変遷を考える上で注目される事例の一つとなるものと考えられる。

周辺の遺跡の項でも記したところであるが、本遺跡が所在する太田市只上町は、太田市合併前は毛里田村の一部であった。1938（昭和13）年に刊行された『上毛古墳総覧』によれば毛里田村では22基の古墳の分布が確認されているが、字只上では毛里田村第1号墳（円墳、直径約16.5m）が毛里田小学校校庭内に位置していたことが記録されている。また、調査区外、6号墳から20・30mの位置に毛里田村17号墳（円墳、直径約6m）と18号墳（円墳、直径約25.5m）の分布が記載されている。第14図は調査区内の土地区画を示したものであるが既に古墳の墳丘の削平は進行していたものと考えられ、1号墳、2号墳、3号墳の存在が推定される程度である。調査区域外についても古墳の存在を想起させる区割りは認められない。さらに周辺に範囲を広げて見ると、1号墳と同時期に近いと考えられる前方後円墳、今泉口八幡山古墳が、本遺跡の西方向1600mにある金山丘陵北西端に築造され

ている。また、7世紀前半から中葉の築造とされる方墳、巖穴山古墳は本遺跡から西方向1400mにあたる。

(2) 1号墳（第15～32図、PL.3～5）

位置 C-25グリッドを中心に位置している。西側に2号墳が位置している。

調査前の状況 本古墳は調査前の段階で南北約8.0m、東西約10.7m、高さ1.5m程の墳丘が残存していた。調査後の周堀の検出状況と比較するとその変形は著しいものであったが、事前の分布調査の際に古墳が存在することを認識させるには十分な状況であった。

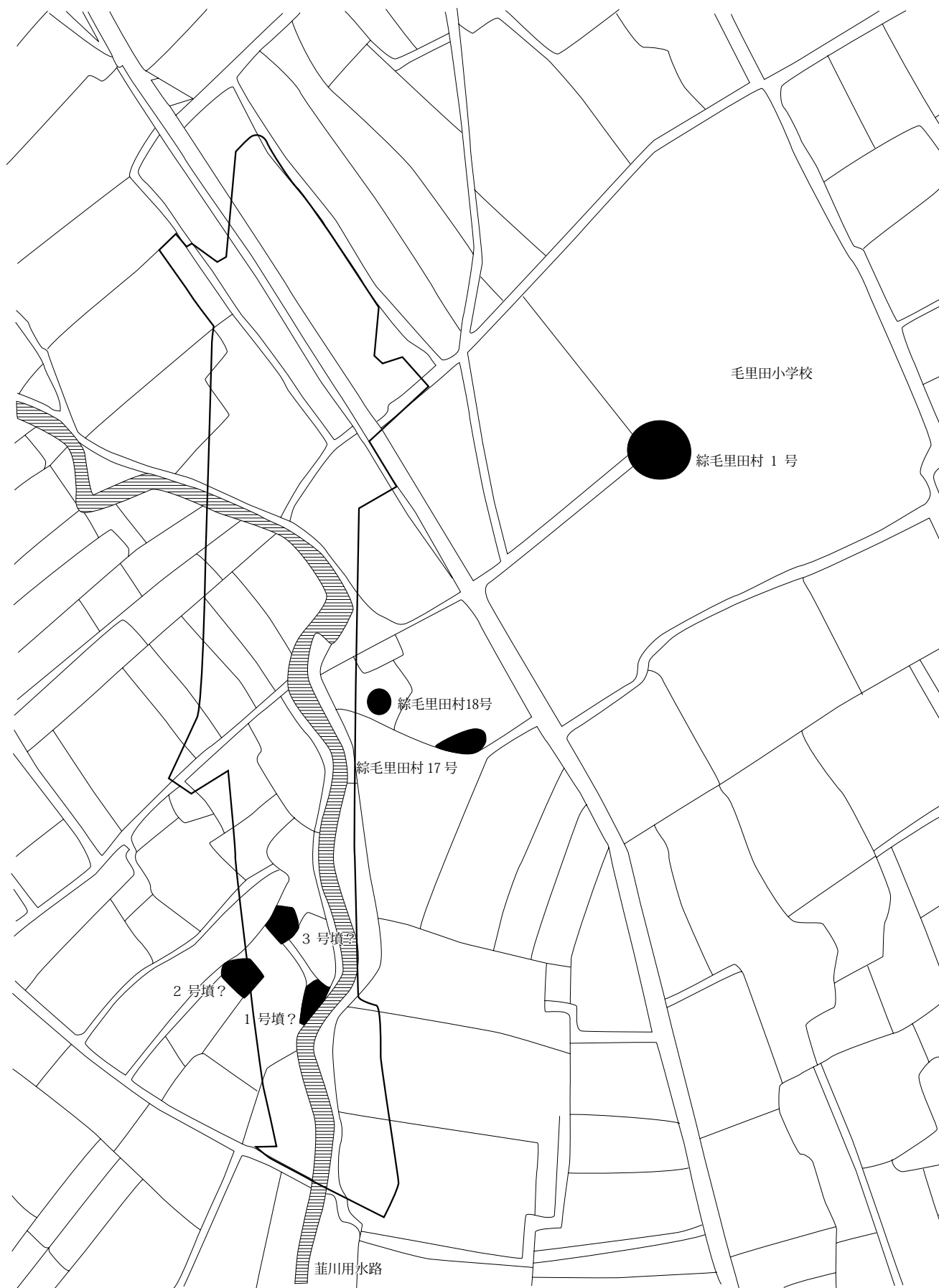
調査を開始し、墳丘上の雑草などを撤去した段階で、墳丘の北側部分が大きく攪乱を受けていることが判明した。盛土が取り去られるとともに石室石材と考えられる礫石が散乱し、奥壁と見られる大型石材が石室後方に引き倒されていた。

墳丘と外部施設 墳丘の形状は円墳であるが正円ではなく、南北に長軸を有する。南西・北側の一部が未検出であるが、周堀を含めた墳丘の規模は南北約33.8m、東西25.8mが想定される。周堀は内外縁ともその立ち上がりには小さな出入りが見られるが、全体的には北側部分が他よりも幅広く掘られていた。規模は、南側で上幅6.35m、下幅3.05m、深さ0.75m、東側部分で上幅2.88m、下幅0.85m、深さ0.76m、北西部分で上幅7.40m、下幅4.95m、深さ0.68m、西側部分で上幅3.25m、下幅1.48m、深さ1.02mを測る。断面形はいずれの地点でも凸レンズ状を呈していた。

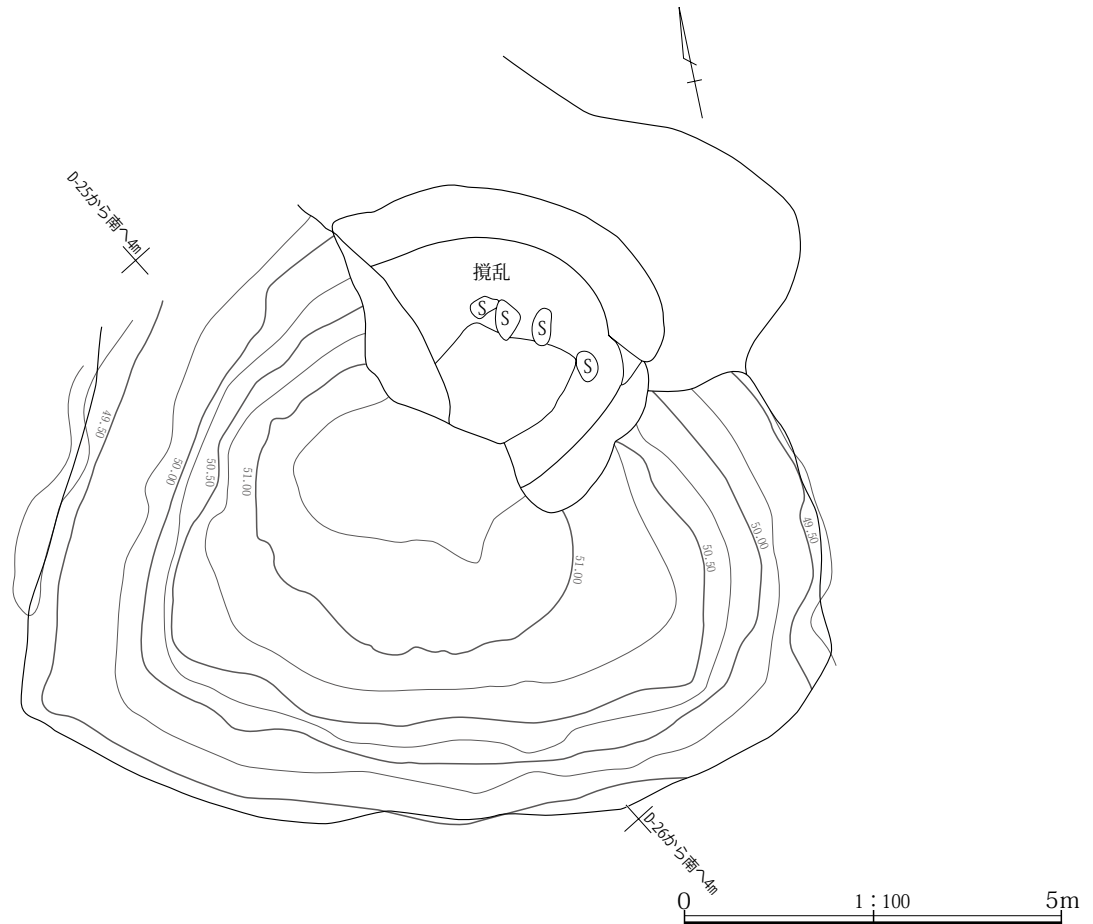
埋没土には中層から下層に茶褐色土、黒褐色土が堆積していたが、上層・中層に浅間B軽石が堆積していた箇所も認められた。

周堀内縁の規模は南北21.75m、東西19.10mである。後述するように石室の開口位置や埴輪が出土していることから、墳丘周囲に基壇面が存在し、墳丘盛土部分と合わせて2段築成の墳丘構造が取られていたものと考えられる。調査時には、基壇整形土の存在や地山を削り出したような状況を把握することはできなかった。石室開口部から周堀内縁までの距離は約5mである。平面図から、幅約3から5mの平坦面が墳丘上を一周していたものと考えられる。

墳丘については東西方向に切開してその盛土の状況を確認した。これを見ると、盛土の積み上げは石室石材・



第14図 猿楽遺跡周辺の地割りと古墳の位置



第15図 1号墳墳丘残存状況平面図

その背後の裏込めの積み上げ作業と連動、一連の工程の中で進行していったことがわかる。玄室部分の土層断面からは黒褐色土とロームが混入の度合いを変えながら堆積しており、分層の状態と裏込め状態から4回ほどの作業単位が認められるようである。また、石室の左右の状況を比較すると左側の盛土の層が約20度の傾斜を有しながら比較的均等に堆積している様子が見て取れる。天井石の積み上げが石室左側から行われた可能性を考えてみたい。なお、旧表土と盛土の関係については残された記録からは今ひとつ判然としないものであった。

墳丘には石室開口部の両脇に葺石が残存していた。葺石は、羨道入り口の壁石・裏込めの礫に続くように左方向に3.3mにわたり、石室とほぼ同じ高さまで残存していた。その傾斜は約55度である。使用された礫は長径20から50cmの大きさで、いずれも横積みの状態で積まれていたが、必ずしも基底に大型のものが当てられてはいなかった。右側は残存が不良であった。この葺石が墳丘全体を被覆していたのか否かについては不明である。

埴輪の出土状況 墳丘および周堀部分の精査、掘り下げ

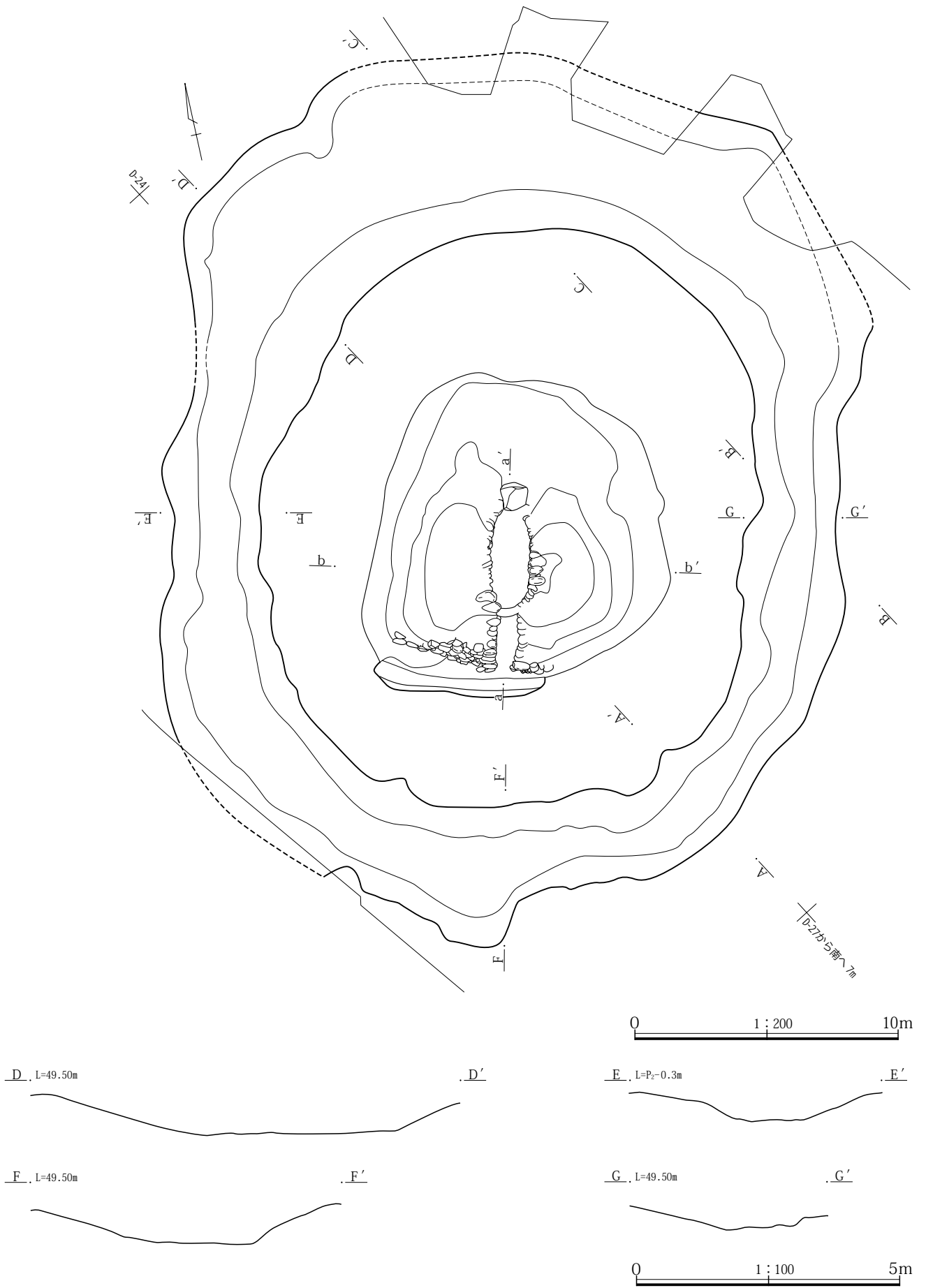
にあたり、多数の埴輪が出土していることから、本墳には埴輪の樹立があったことが知れる。

周堀内からは円筒埴輪の大型破片、細片となった形象埴輪が多数出土したが、原位置を知ることが可能な出土状況のものは皆無であった。

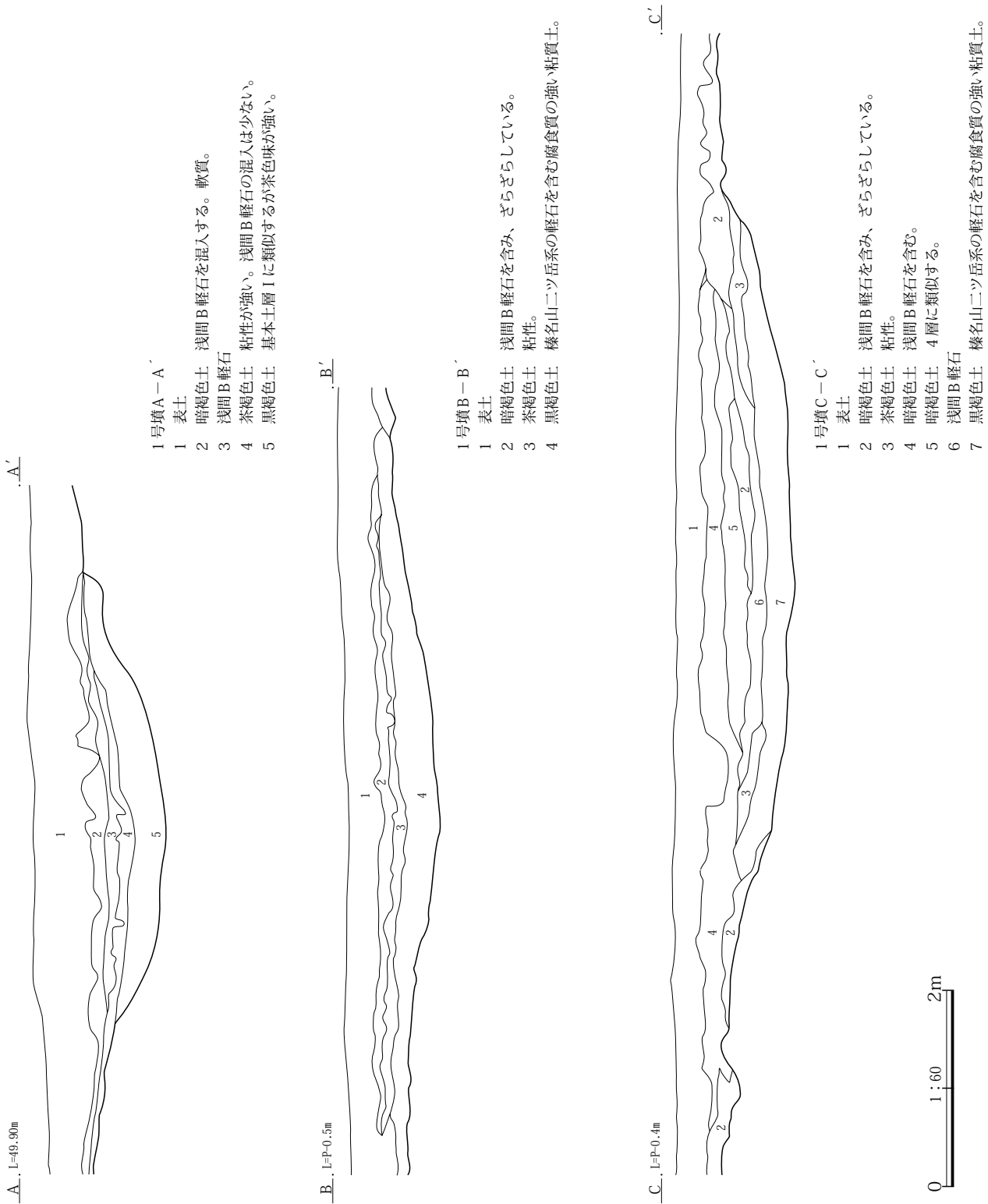
円筒埴輪(1)は口縁部から基底部までの2分の1が残存していたが、石室南西部分の周堀内から大型破片となり出土している。周堀底面からは浮いた状態である。これに墳丘部分、羨道前、周堀北側・北西の各方面から出土した破片が接合している。

形象埴輪の人物埴輪の出土について見ると、胴部を中心に残存状態の良好であった人物(40)が周堀南西部分から出土している。双脚人物の同一個体を構成すると考えられる破片の人物(55)は北・東南から、人物(56)も北・南からの出土である。人物の顔(36)は周堀南西から、人物の顔(37)は北から、人物の顔(38)は南からとその出土地点は広範囲におよんでおり、人物埴輪群の樹立状況を復元することは困難な状況となっている。

主体部の構造 自然石(川原石)を乱石積した両袖型の



第16図 1号墳平面図

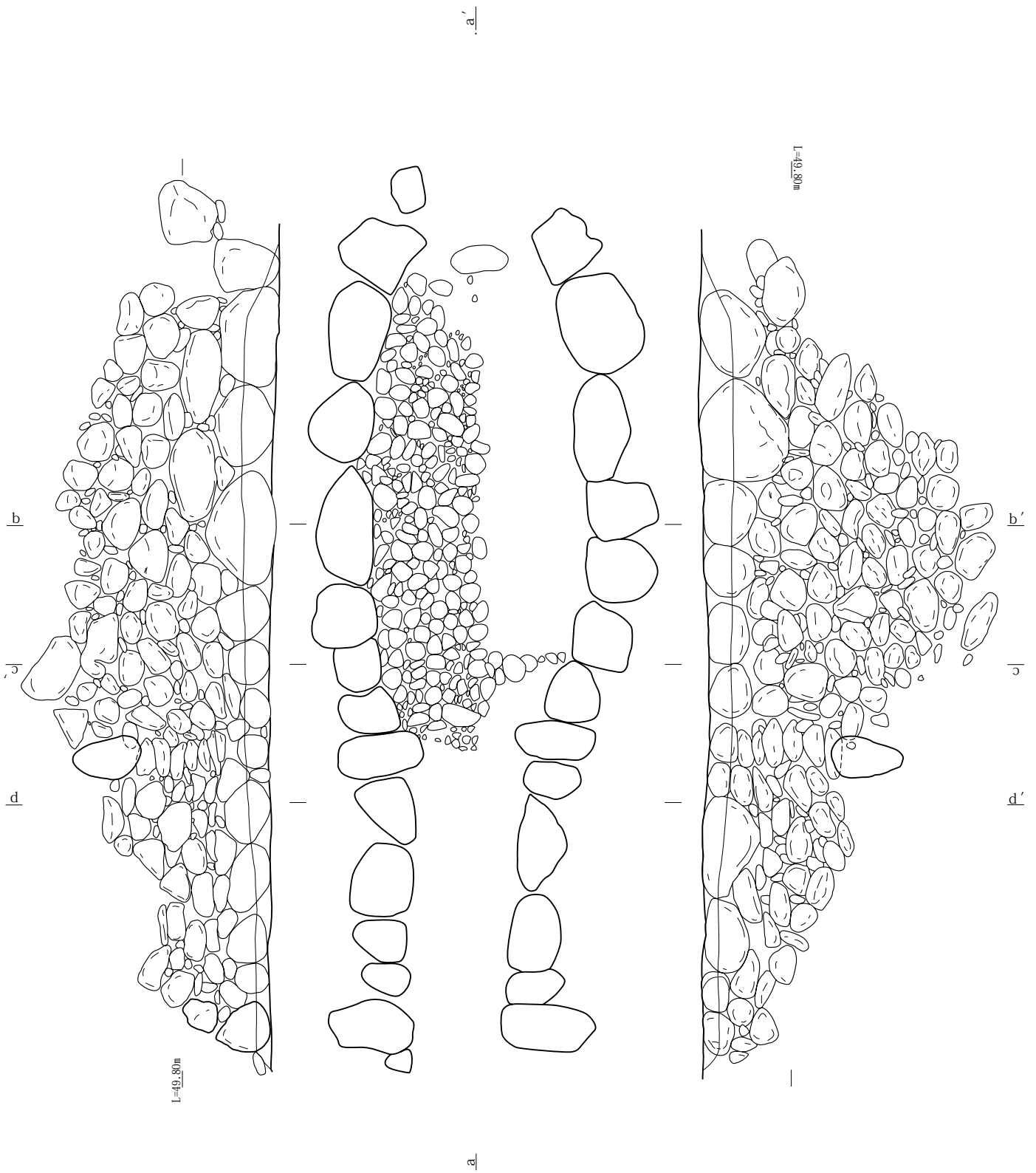


第17図 1号墳断面図

横穴式石室である。墳丘北側部分の攪乱は石室玄室部分にまでおよび奥壁とこれに接する左右の側壁奥側の石材の多くが失われていた。玄室部の天井石はすべては失われていたが、羨道部分是最奥、玄室入り口部の一石が架け渡された状態で検出された。床面からの高さは58cmである。石室の開口方向はS-32度-Wである。奥壁の設

置位置は墳丘のほぼ中心にあたる。

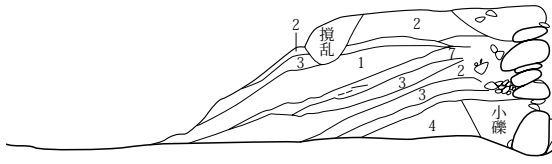
石室の規模は奥壁を失ってはいるものの、残存長5.94mは構築時の全長とその数値が大きく異ならないと考えられる。玄室部は長さ3.64m、胴張り形をなすために横幅は奥壁手前で0.74m、中央で1.54m、手前、羨道部寄りでは1.18mを測る。羨道部は長さ2.30m、幅は入り口で



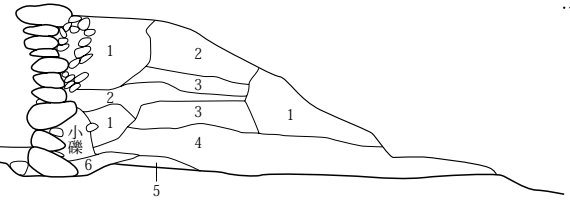
第18図 1号墳横穴式石室(1)

0 1:40 1m

b. L=51.10m



b'



1号墳石室b-b'

- | | |
|-----------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 黒褐色土とロームの混土。 | 4 ローム |
| 2 黒褐色土 黒褐色土を主体とし、ロームを混入する。 | 5 黒褐色土 |
| 3 ローム混土 ロームを主体とし、黒褐色土を混入する。 | 6 黒褐色土とロームの混土 固く締めたように水平方向に縞状を呈する。 |

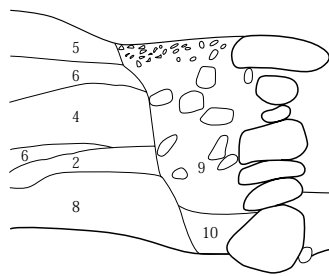
c. L=51.00m



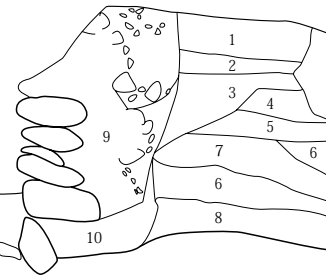
c'



d. L=50.80m



d'



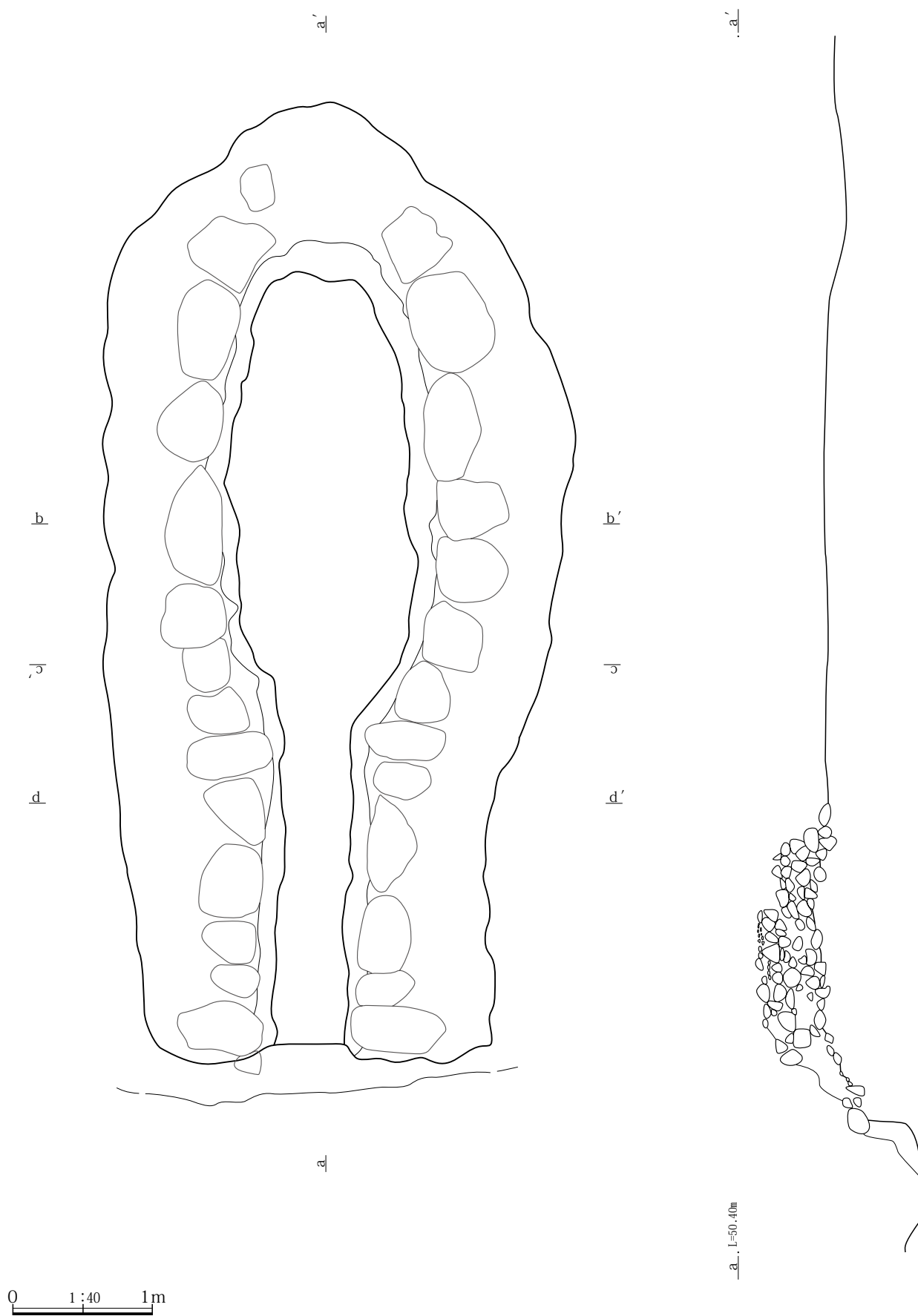
1号墳石室d-d'

- | | |
|-------------------------------------|---------------------------|
| 1 黒褐色土 榛名山二ツ岳系の軽石を含む。 | 6 黒褐色土 黒褐色土を主体としたロームとの混土。 |
| 2 暗褐色土 基本土層1の黒褐色土とロームの混土。黒色味を帯びている。 | 7 黒褐色土とロームの混土 |
| 3 黒褐色土 2層に類似する。 | 8 ローム? |
| 4 黒褐色土とローム質土の混土 | 9 裏込め(土粒、礫) |
| 5 ローム質土 ローム質土を主体とした黒褐色土との混土。 | 10 裏込め(礫) |

L=50.60m



第19図 1号墳横穴式石室(2)



第20図 1号室横穴式石室(3)

0.64m、奥で0.70mである。

石室の各部位の壁面構成について見ると、左側の羨道部入り口には大振りな礫4石の長側辺を入り口側に向けて重ね、羨門を意識した石積みが造作されていた。残存高は96cmである。右側は残存状態が不良であった。

羨道部左側壁は最奥部の袖部にいたるまでに根石5石を小口積みに据えていた。横幅は20cmから50cmであるが高さは30cmと一定の高さを保つよう据えられていた。これより上位段の礫は根石よりも小型で、基本的には小口積みしている。残存は玄室寄りの良好な部分で7段分、120cmの高さである。

右壁も根石5石で袖部にいたるものである。こちら側は小口積みだけでなく大型の横積みされた礫が併存していた。右壁の残存は6段分、高さ110cmであった。

左側袖部は、小口面の幅30cmの根石が石室内側方向に10cm程突出して据えられ、玄室部入り口を意識した置き方をしている。右側もわずかに内側にあった。左右とも偏平な礫を用いており、立柱石状の用石はなく、左側は礫7石を上方に向けて持ち送り気味に積み上げ、最上段に天井石を架け渡していた。基底面から天井石までの高さは90cmである。右側は7石を積み上げていた。

玄室部は羨道部寄りの残存が良好であったが、奥壁寄り破壊が著しく、壁面は2石のみの残存である。

左側壁では根石7石を胴張りした規格線上に丁寧に並べていた。奥壁寄りには横幅80cmの大振りな礫を横積みに、羨道寄りには小振りな礫を小口積みに据えている。奥壁寄り是一段目、二段目の高さを揃えているが、羨道寄りまで全ての目地がとおるまでにはなっていない。壁面は玄室部の中位で5石、約150cmが残存していた。

右側壁も根石7石で奥壁に到達していた。左側同様奥壁寄りに大振りな礫が置かれていた。最大の礫の高さは約60cmあるが、羨道寄りには根石の上に積み上げた二段目の上端までがこの高さであった。右側の壁面も玄室部中位で10あるいは11石、210cmの高さまで残存していた。この高さはあとわずかで天井石を設置する高さであったと考えられる。

中・上段の石積みの状態を見ると、両側壁とも横方向の目地はあまり整然としたものではないが、大振りの礫の間に小礫が差し込まれ、一工程における上端が一定になるように調整が図られていた。左側壁では最上段に大

振りな礫が置かれていた。これは天井石を架け渡すために天端を安定させるために備えるための用石のあり方かと考えさせるものであった。

羨道部に残された天井石と玄室部の残存高から見ると、玄室部の天井部は羨道部よりも一段高く造作されており、その差は1m近いものであったことが知れる。

玄室部の床面には長径20cm以下の小礫が一面に敷き詰められていた。厚さは30から40cmである。その下位には上層よりもやや大型で偏平な礫が舗石として置かれていた。羨道部の床面にも小礫が敷かれていた。

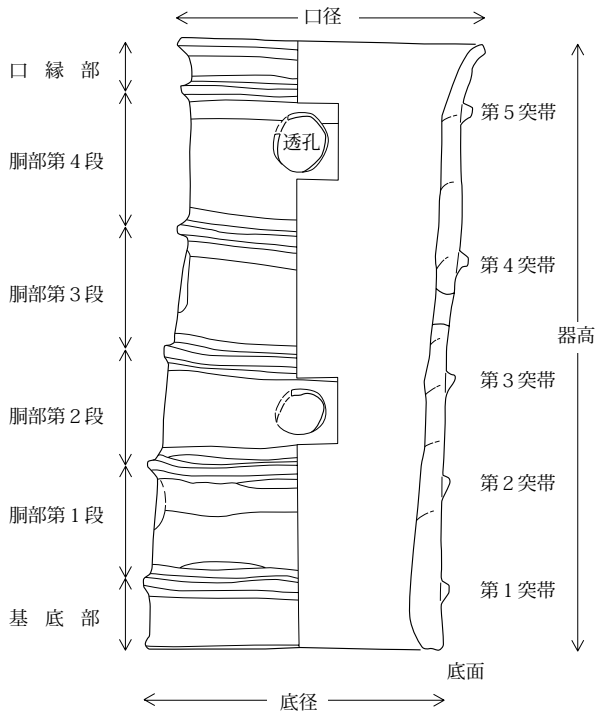
石室の構築状況 本石室は掘り方を有していた。後述する3号・4号墳が平面長方形を呈した土坑状の竪穴を地山深く掘って掘り方としたのに対し、本古墳の掘り方は深さ8から17cmの深さであることが大きく異なっていた。平面形状も奥壁後方が弧状を呈するものである。規模は縦6.81m、横幅2.53～3.36mである。底面は玄室・羨道の床面となる部分は平坦に掘り残し、石室の根石を設置する部分を布堀状に掘り下げたもので、断面形は両外縁から石室内面側に向かって緩やかに傾斜していた。

埴輪 円筒埴輪は普通円筒埴輪と朝顔形埴輪が見られた。普通円筒埴輪は30点、朝顔形埴輪は5点の合計35点について資料化した。形象埴輪は65点の資料化を行い、掲載した。資料の選別に当たっては、全体形状、各部位の形状、器面調整などを考慮し、これに胎土、焼成などの状態を加味して行った。非掲載資料は遺物収納箱に3箱分である。

円筒埴輪 全体形状 全体形状を把握できるのは1の1点だけである。1は5条突帯6段構成である。器高は58.8cmである。口縁部の復元径は29.8cm、基底部の直径は29.8cmである。形状は、胴部が寸胴で、直径に大きな変化がなく、口縁部にいたりわずかに外反して立ち上がるものである。この他に9・10が基底部から胴部4段目まで残存していることから、本古墳に樹立された円筒埴輪の形状は5条6段構成であることが推定される。

各部位の特徴 口縁部の直径を知ることが可能な個体としては1が直径29.8cm、2が直径29.8cm、3が26.8cmに復元することができた。大小の個体差はないように考えられる。

口縁部の高さは1が6.8cm、3が6.0cmである。2は8.2cmとやや長く、1・3が上半が強く外反するのに対し、



第21図 1号墳円筒埴輪の部位名称

3は緩やかに立ち上がっている。端部はすべて単純口縁である。

胴部の形状は、各段とも直径に大きな変化がなく、寸胴を呈しているが1や11のように中位が細くなり歪みが生じているものもある。段間は9や10のように比較的均等に割り付けられているが、1は上半と下半で間隔が異なっていた。7の段間は狭い。

基底部の立ち上がりは短く、9や11のように成形時の自重によって生じた歪みのためかハの字状を呈するものが多い。底部調整は認められなかった。底面は比較的ていねいなナデが施されているが、1のように棒状圧痕が認められるものもあった。器厚は2.5cmから3.0cmと厚い。27の5.6cmから11の6.5cmの間で第1突帯が貼付されていた。低位置突帯の範疇に近い状況である。

突帯 突帯の貼付は1や9に代表されるように全体的にていねいな傾向が見られたものの、本体に対し水平を欠き、波状を呈する資料もやや見られた。突帯の発達具合は総じて高いものが多かった。上幅と下幅の差が少ないことも突帯が高く見える状況を形造っている。また、突帯貼付後のヨコナデの幅が広い事例も見られた。

突帯の断面形状は台形を呈するもの(台)、中央が凹みM字状を呈するもの(M)の2者が見られる。両者と

もは上側の稜が下側よりも突出して高いもの(1)、上下の稜の高さが均衡するもの(2)、下側の稜が上側より高いもの(3)に细分され、分類には台1、台2、台3、M1、M2、M3の6细分が可能である。数的には台1、M1と上側の稜が下側よりも突出して高い事例が多数見られた。また、一個体の中でも断面形状の異なる突帯が貼付された資料も認められた。

透孔 透孔の形状は円形を基本とするものの正円を呈するものは少数で、縦横に変形をきたしたものが大半であった。切開は刀子状の工具で行われている。10のように切開した面の外縁に再度面取りをするようにケズリを重ねている事例もある。透孔の配置については1や9を見ると胴部の各段に90度ずつずれて、比較的規格性を保って、配置されていることがわかる。9は割付が粗雑で四分割の位置に穿孔されていない。

器面調整 外面の調整は口縁部先端のヨコナデや突帯貼付後のヨコナデを除いてすべてタテハケである。二次的調整のハケメが施された事例は見られなかった。

器面の調整は成形の進行に合わせて一定の高さを目途に、基底部から口縁部に向かって繰り返し行われたものと考えられる。ハケメ調整に使用された工具は複数の種類が見られた。2cm幅の中に見られるハケメの本数は1や4などの9・10本、3や9などの13・14本などがあった。

内面の調整は作業単位ごとで方向が変わるものの、基部内面を除いた胴部以上の面にナナメあるいはナナメヨコ方向のハケメが施されている。作業単位部分ではハケメの上にナデを重ねて、器面の調整を繰り返しているものも見受けられた。

ヘラ記号 14・23・24で内面にヘラ描き沈線による斜線が見られた。14は×印である。

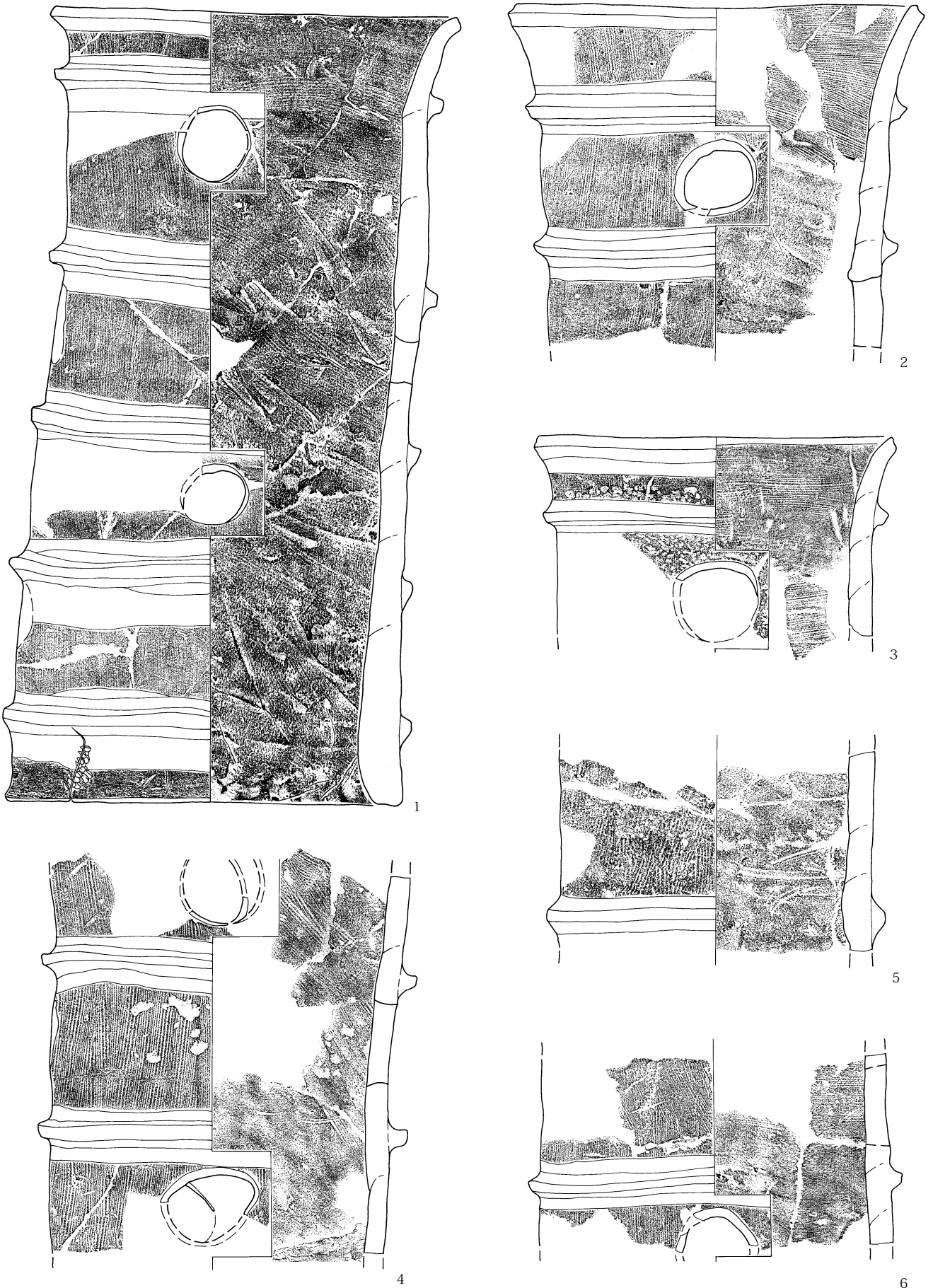
赤色塗彩 確認できなかった。

胎土 砂粒の混入については特に砂礫の混入が顕著な例はなく、砂粒の粒径も細砂、粗砂大が多かった。混入物では凝灰岩起源と考えられる白色軽石、赤色の粘土粒、チャート、黒色鉱物粒などが観察された。

観察表では混入された砂粒の量によりA(多量)、B(普通)、C(少量)に3分類して観察表に記述した。

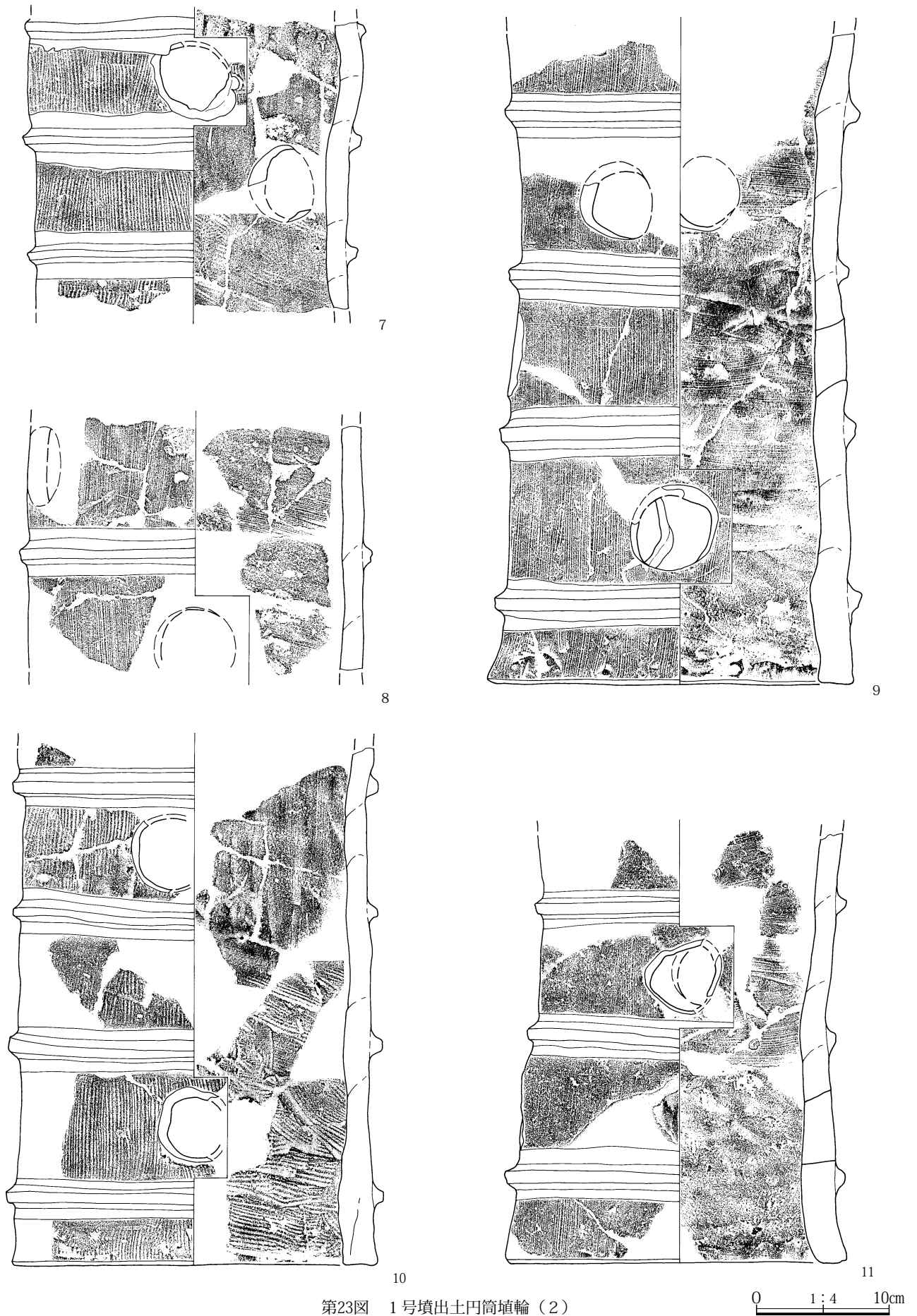
色調 色調は明赤褐色や褐色が主体的であった。

焼成 焼成は、窖窯焼成で、全体的に良好であったが中には9のように還元状態を呈するものも認められた。焼

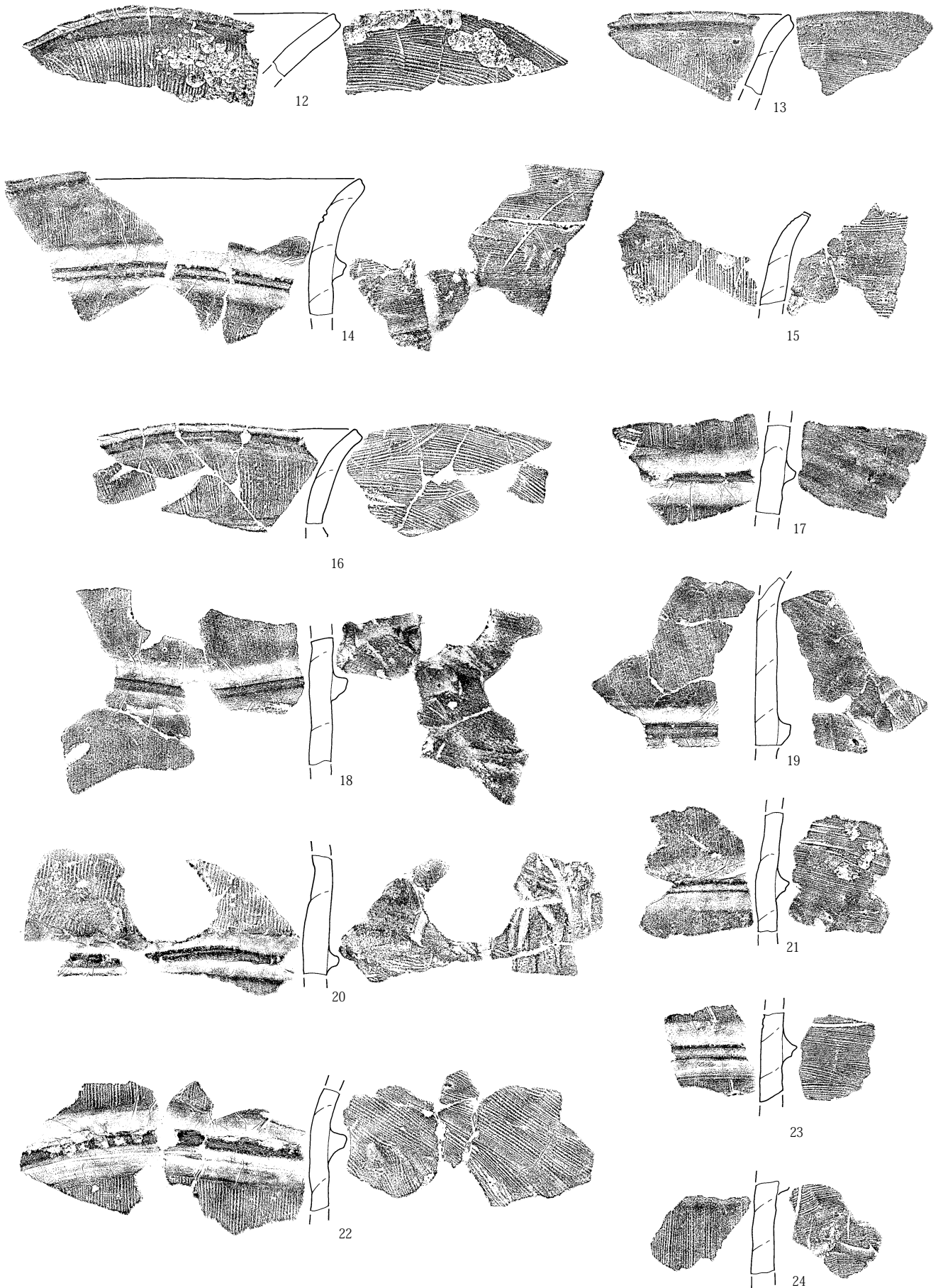


第22図 1号墳出土円筒埴輪(1)

0 1:4 6
10cm

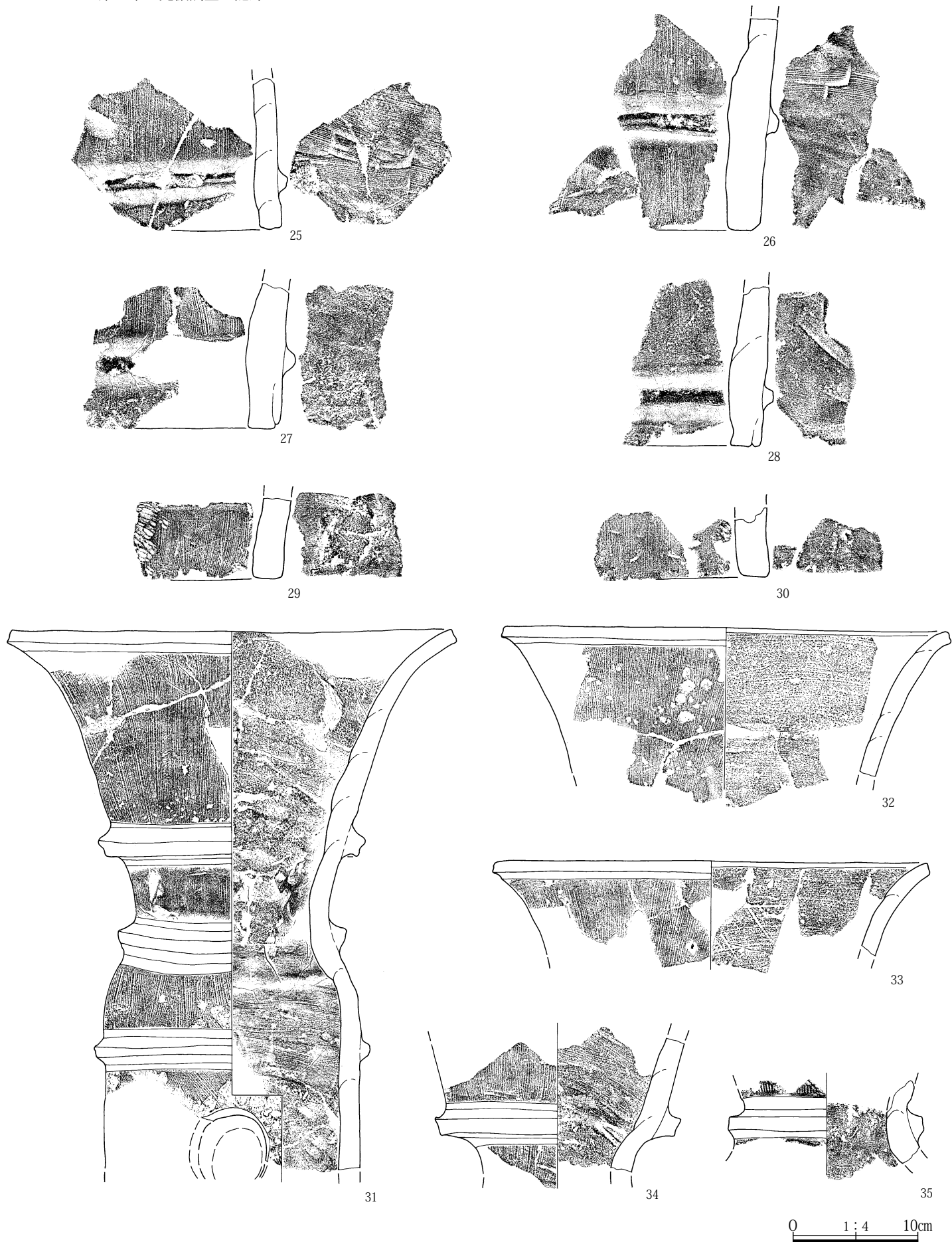


第23図 1号墳出土円筒埴輪(2)



第24図 1号墳出土土円筒埴輪(3)

0 1:4 10cm



第25図 1号墳出土円筒埴輪(4)

成の度合いをA・B・Cの3段階、硬質の度合いを1・2・3の3段階に分け、これを組み合わせた分類内容を観察表に記述した。

成形 器肉は全体に厚い。成形は突帯の各段間に相当するほどの高さで一作業単位が有ったようで、1は4ないし5回の接合痕が認められた。内面に粘土紐の接合痕や器面の起伏が比較的顕著に残されている。

基部粘土板の高さは9で約10cmである。他も同様である。9は底径26.2cmで、粘土板2枚を重ねて基部としている。

1や9の基底部分では焼成前にひび割れが生じた部分をヘラ状工具で補修した痕跡を有する資料が見られた。

朝顔形埴輪 全体形状 全体形状を知り得る資料は出土していない。31が口縁部、肩部から胴部上位にかけての残存である。32・33も口縁部上半の破片である。34・35は口縁部下半から頸部の残存である。31の資料から口縁部は斜め上方に向かって外反して立ち上がる形状であることがわかる。外反の度合いは弱い。先端は単純口縁である。肩部の張りは弱く、胴部は20.3cmと普通円筒より細身である。胴部には円形の透孔が配置されている。

突帯 突帯の断面形状は断面台形あるいはM字形であるが、普通円筒のそれと大差は見られない。

器面調整 31の器面調整は、口縁部外面においてはタテ方向のハケメが施された後、突帯が貼付され、その周辺にヨコナデが施されている。内面にはナナメヨコ方向のハケメが施されていると考えられるが器面の摩耗が著しく観察ができなかった。

円筒埴輪の個々の観察内容については巻末の観察表に記してある。

形象埴輪 概要 形象埴輪は完形に復元されたものは皆無で大半が破片の状態であった。その中でも、40の胴部を中心に残存状態の良好であった人物や50・51・55・56の双脚人物を構成すると考えられる破片ように比較的まとまりのあるものも見られた。本項で報告する資料数は合計で65点である。

確認された器種は人物埴輪、器財埴輪の靴形埴輪である。その他に器種を特定することができない資料が多数認められた。器財埴輪、馬形埴輪、家形埴輪と考えられる破片資料が出土しているが器種を断定するにいたらなかった。

また、本報告の資料の他に小破片であったため未掲載とした資料もある。以下、本文中では器種ごとに順次、実測図を掲載し、観察の概要について記載していく。個々の資料に付した番号は円筒埴輪からの通番である。個々の観察内容については巻末の遺物観察表に記した。

人物埴輪 36から56は人物埴輪および人物埴輪に帰属すると考えられる部位の破片である。55・56が襴表現であることから男子を表現した個体と考えられるがその他に男子の存在を確定できる部位については不明である。髻や胸の乳房の表現と考えられる破片が認められることから複数の女子が存在したことが確認できるが、正確な個体数は不明である。

36から39は人物埴輪の顔面の一部である。4点の資料はそれぞれ別個体をなすものである。いずれも小型の造りである。38の状況から顔面の大きさは長さ10cm、幅8cmほどと推定される。36は右目とその周辺の破片である。目はヘラ状工具により刺突して開けている。眉あるいは眼窩上突起は粘土を貼り足し、明瞭に表現している。

37も顔面下半部の破片である。上端の割れ口に両目の下縁が残っている。本体に粘土板を貼り、顎を含めた顔面全体を成形している。鼻は剥落している。口は目同様、ヘラ状工具により刺突して開けている。

38も顔面下半から頸部分の破片である。成形は37と同様で顔面部分の粘土板を貼り足した様子が良くわかる資料である。鼻は後補である。耳の表現は判別できなかった。内面は粘土紐の接合痕をナデ消しているが消し切れていない。39も左目周辺の破片である。36と同様の表現がなされている。

40は半身表現の人物である。南西部分の周堀内から出土したものである。残存部分は頸部から胴部、そして基台部上半の残存である。残存高は38.2cmである。残存部分も全体的に欠損が著しい。特に右側面は大半が後補である。

本資料の特徴の一つは形状や意匠が著しくバランスを欠いていることである。胴部から頭部に移行する部分で、胴部から徐々に粘土紐の直径を狭めて行くだけで、通例の人物埴輪のような張り出した肩部や頸部のくびれが成形されないまま頭部まで円筒形の粘土紐の積み上げが継続されている点である。これは製作時の一つの省略形であろうか。胸から腹部までの横断面は円形である。胴部

と基台部との区分は1条の突帯により表現されている。突帯直上における胴部径は15.5cmに復元できた。

右腕は斜め下方に伸び、手のひらは胸の下位に押し当てられている。側面に小孔が開けられているが肩口はここに差し込まれていたのではなく胴部に貼り付けられて終わっていた。左腕は欠損しているので具体的な所作は不明である。胸に剥離痕が認められることから左腕も体の前に伸びていたことがわかる。側面には右側同様小孔が穿たれている。左腕は肩から本体に差し込まれ、脇の下側には体部と腕の接合を保つために補足的に粘土を貼り足し、ナデを重ねている様子が観察された。

外面にはタテ方向のハケメが見られるだけで具体的な着衣の表現は見られない。頸部近くに付けられた粘土紐は上衣の結びの紐が表現されたものと考えられる。

41は中実の破片である。頭頂部の弁帽とされる被り物あるいは髪型を表現したのと考えられる。下端には頭部本体に接合するためのほぞ状の突起が見られる。

43・44は女子の髻の一部である。バチ形の板状品である。外面にはハケメ、内面にはナデが施されていた。

45は女子の胸部分の破片と考えられる。外面の突起は乳房の表現と考えられる。46・47は粒状の粘土で、本体から脱落したものである。断定はできないが女子の乳房の可能性が考えられる。

42は人物の胸の部分と考えられるが断定するにはいたらないものである。上下の関係を見ると上衣の重ねとその上に付いた結びの紐を表現したものと考えられないだろうか。

48・49・52・53は人物の腕の一部である。いずれも中実である。48は二の腕部分である。49は二の腕から下腕部分である。52は左手首から手のひらと考えられる。親指は付け根で欠損、他の指は線刻で区分されていたことがわかる。

50・51・55・56は双脚全身表現の人物を構成する部位である。54が靴の部分であればこれも同一個体の可能性が考えられる。50・51は下半身の膝上、太腿部分の破片と考えられる。外面にはハケメが施されただけであるが禪を表現していると考えられる。前後左右の識別ができなかった。55は小径の円柱状を呈する左脚膝下部分である。側面に粘土板が接合され、裾部が表現されている。また、膝にも突帯状の粘土紐による足結びと結んだ紐が

表現されている。56は55と対をなす右脚膝下部分である。

54は板状の破片で先端が尖っている。端部に沿って刺突文が施されている。接点はないが55・56に続く靴の表現されたものと考えたい。

器財埴輪 57は靱形埴輪である。58から68は靱形埴輪あるいは盾形埴輪の部位と考えられる。

57は背板から飛び出した鎌3本が線刻で表現されている。58は矢筒部の最上位の破片である。

59・60・62・63は板状の破片で、長辺側の一端に本体から剥落した痕跡がある。60・61は接点が明瞭ではないが接点があるように思われることから、60の本体は円筒状を呈しているものと考えられる。59・60・62・63はハケメを施した器面に縦方向のへら描き沈線が2条垂下する点が共通する。盾面の外区であろうか。これに対し64は三角形の粘土板である。靱の下板に類似する形状である。65から67は円筒状の部分である。板状の粘土板の剥離痕が見られる。

器種不明の資料 69以降は器種を断定することが困難であった資料である。天地左右、傾きが判然としないものも多数含まれている。

69・70は弧を描く本体にへら描きによる矢羽根状文を伴う帯が貼付されている。71は筒状の突起に粘土帯がめぐむるものである。馬形埴輪の尻尾の可能性を考えたい。72・73も弧を描く破片で、外面に粘土帯が貼付されている。

74から78はいずれも裏面に本体から剥落した痕跡が見られる資料である。74は幅2.5cmの粘土帯に直径2.5cmの円形の粘土板を重ねたものである。馬形埴輪の繫を想起させるところである。75から77は幅約2.5cmの薄い帯の破片である。78は帯の上に粘土粒が貼付されたものである。馬の辻金具の表現と類似するところである。

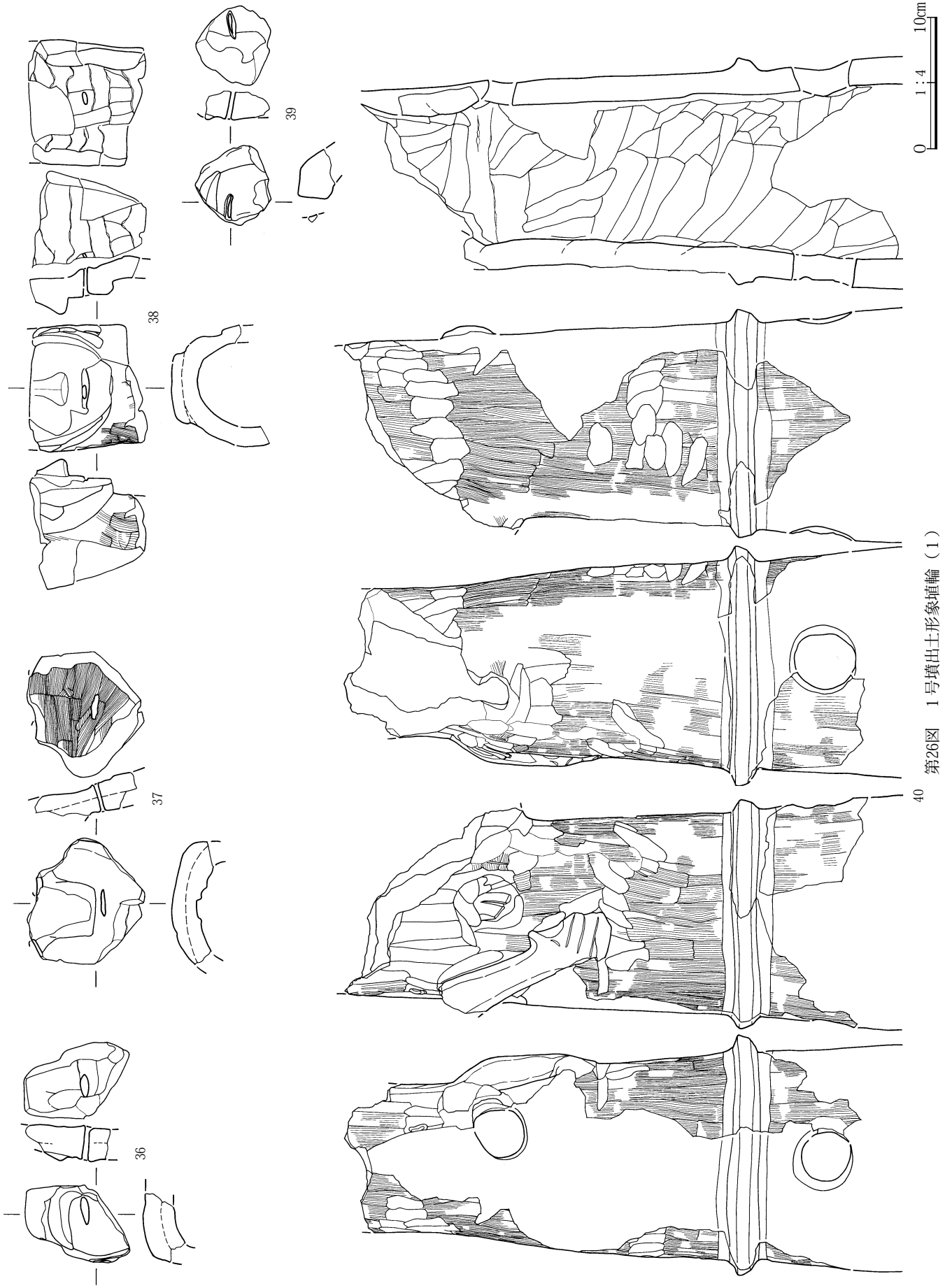
79は直径12.8cmに復元された円筒部分である。

80は家形埴輪の上屋根、破風近くの破片の可能性が考えられる。81は本体に断面三角形の粘土紐が付くことから家形埴輪の壁あるいは基部の可能性を考えたい。

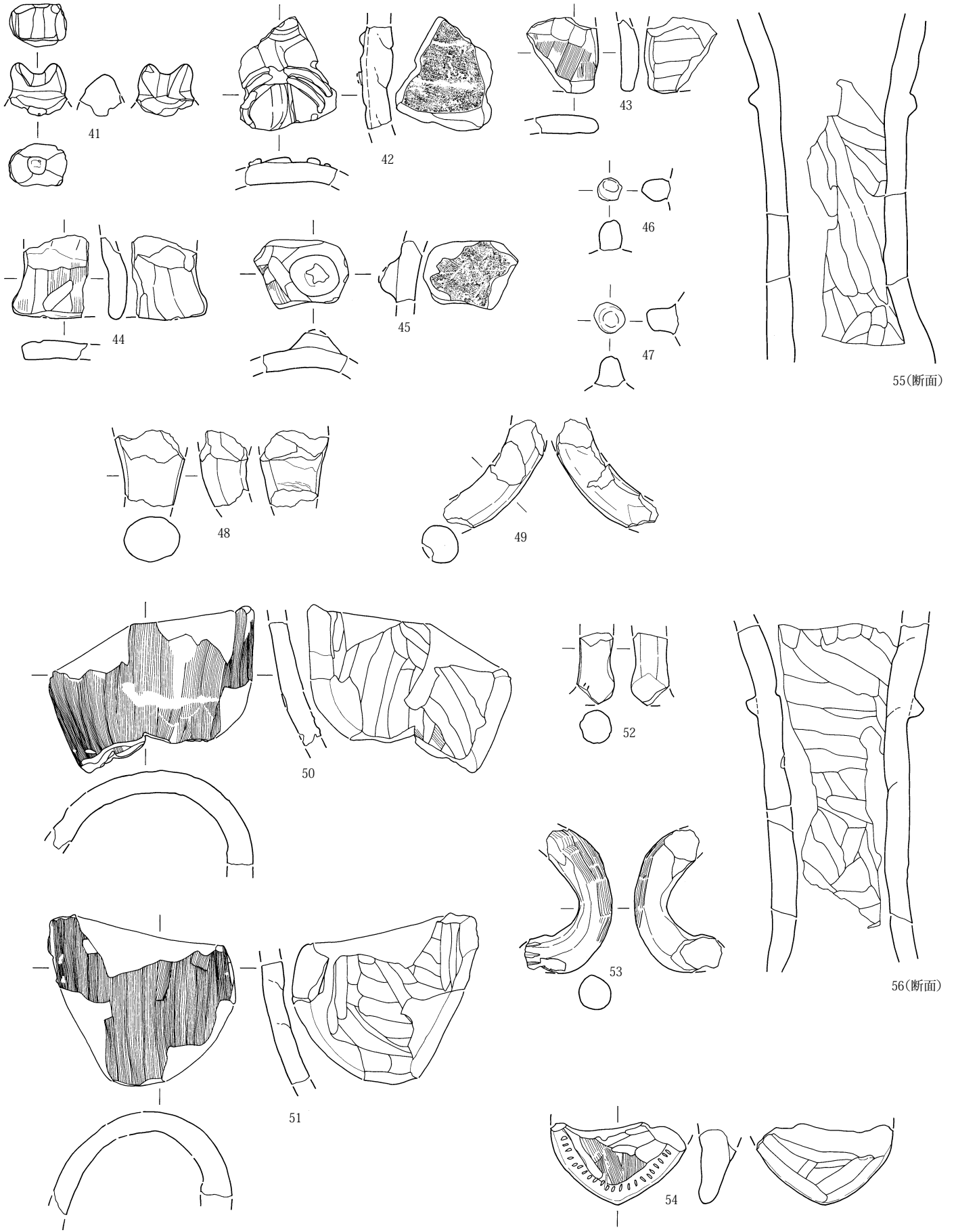
82は棒状の粘土で図下端はへらで切られている。

83は半球状の破片である。人物の頭頂部近くの破片の可能性はあるが外面に剥離痕がある。

84は下方に向かってハの字状に外反する破片である。人物の上衣の端部の可能性を考えたい。

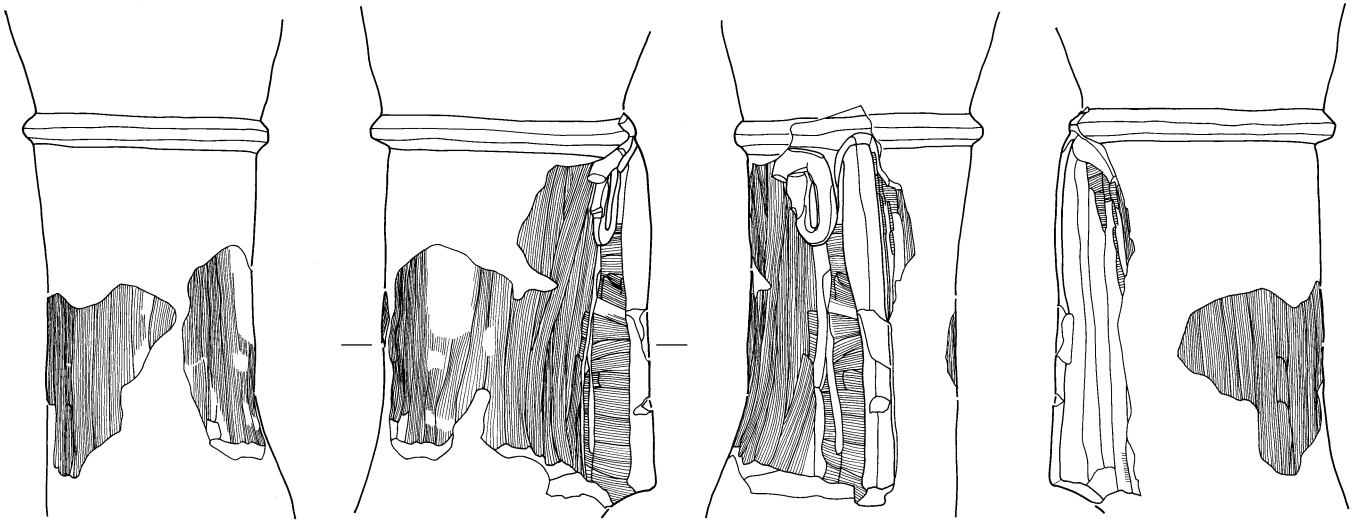


第26図 1号墳出土形象埴輪(1)

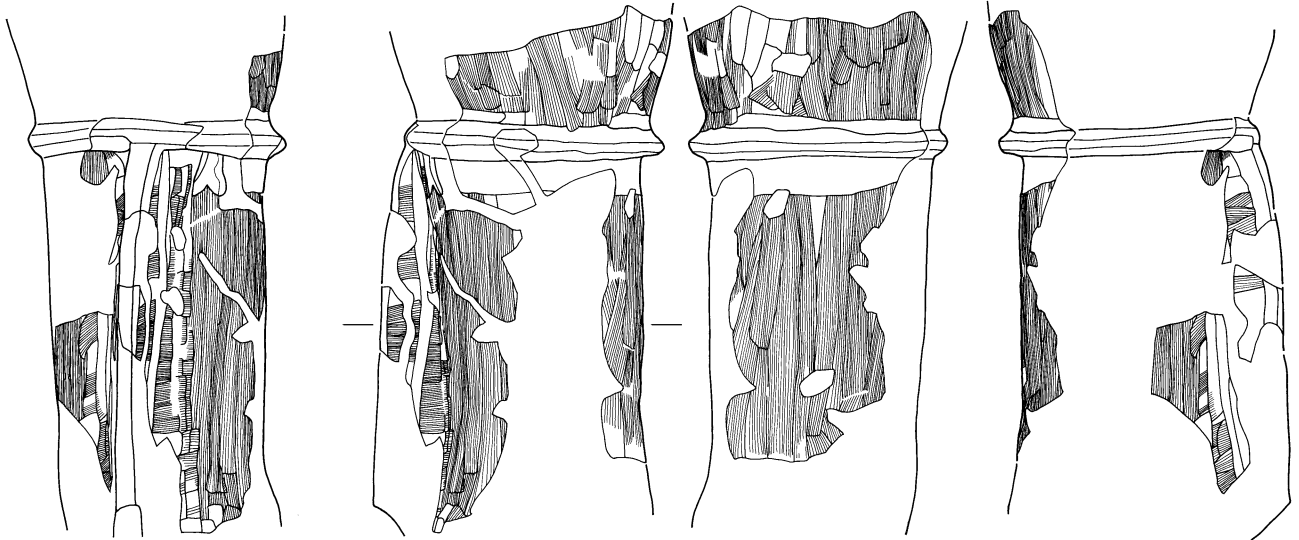
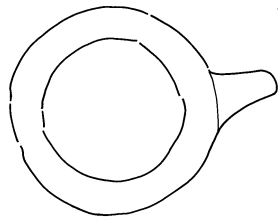


第27図 1号墳出土形象埴輪(2)

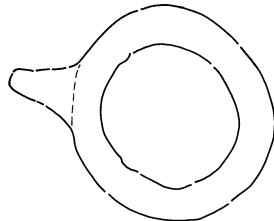
0 1:4 10cm



55

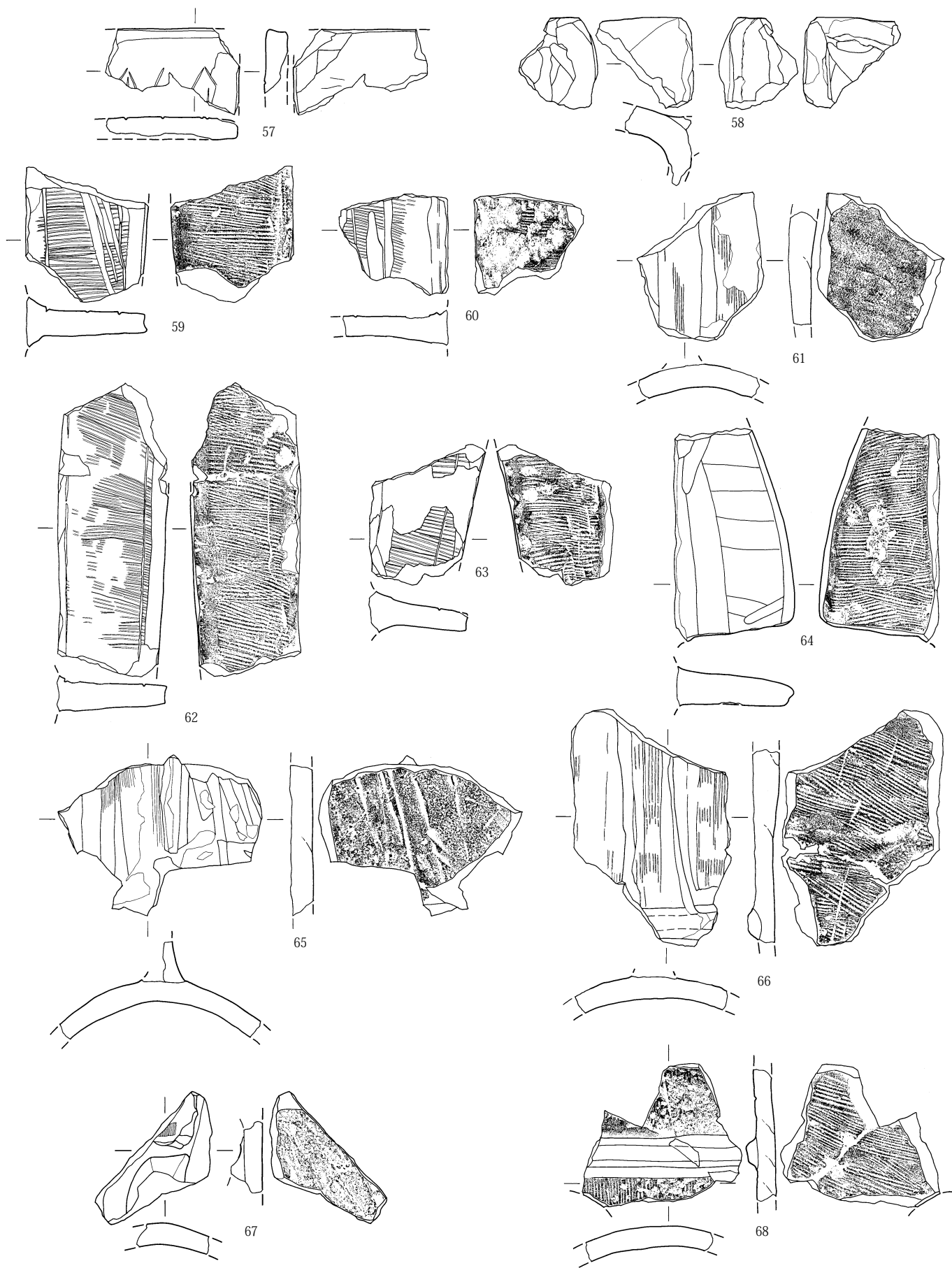


56



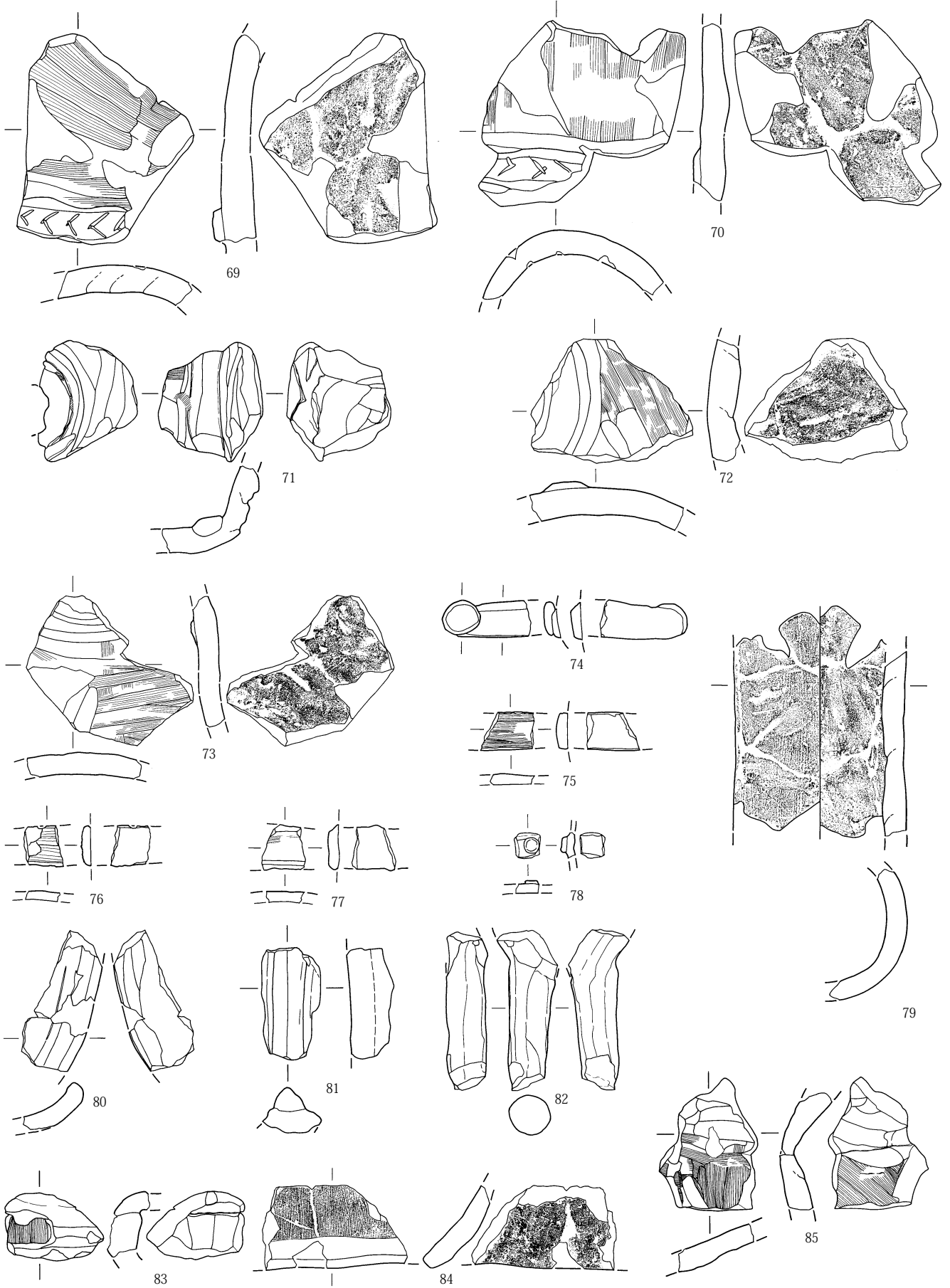
0 1:4 10cm

第28図 1号墳出土形象埴輪(3)

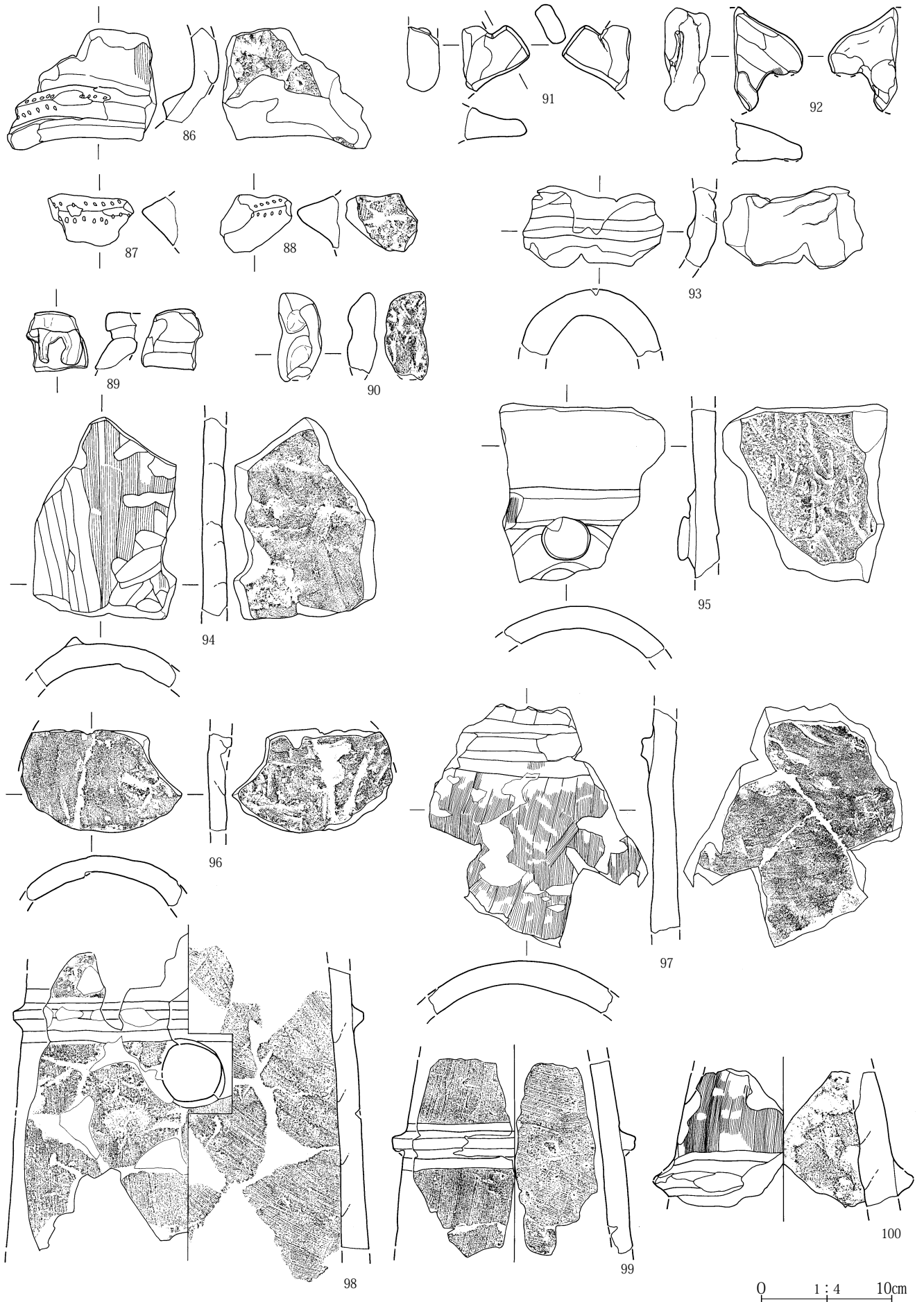


0 1:4 10cm

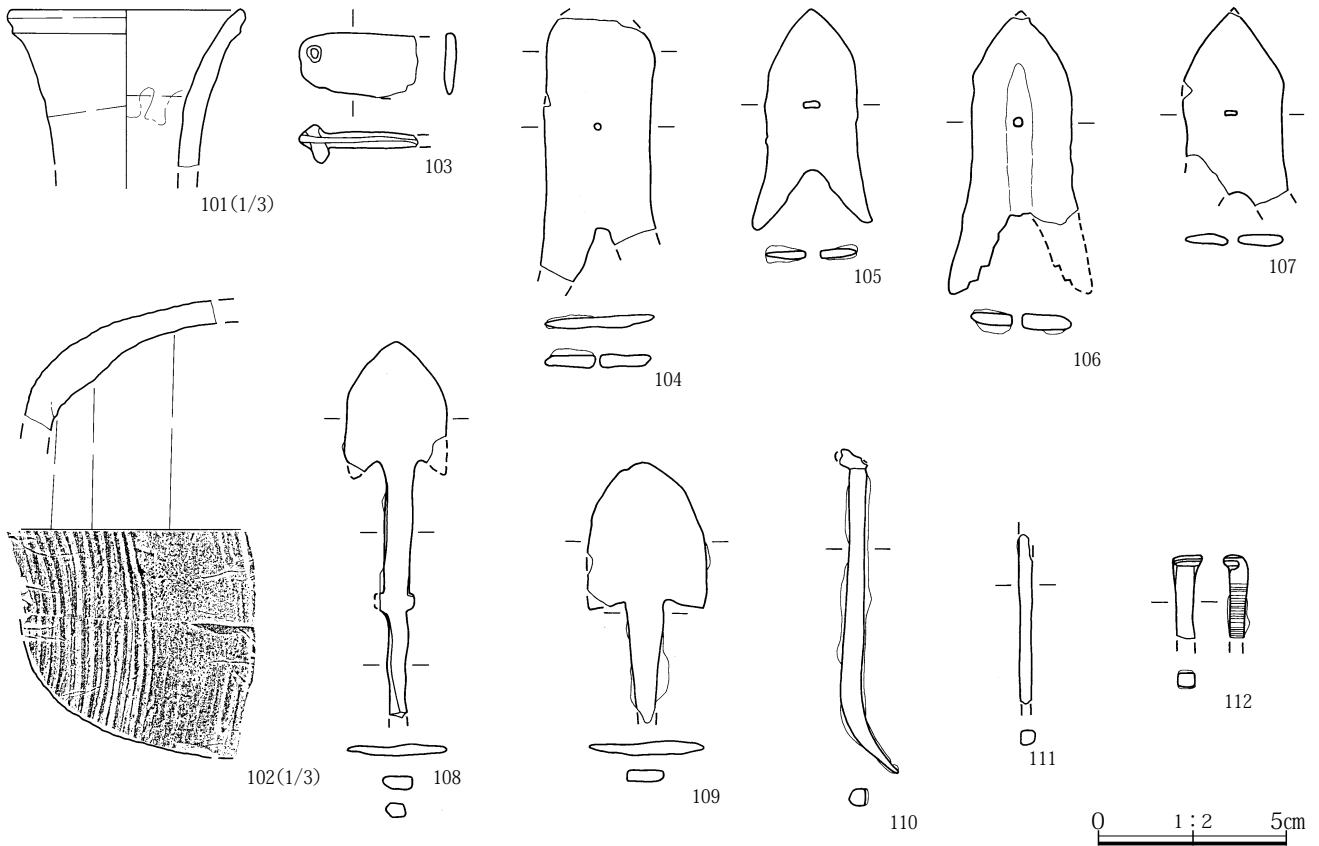
第29図 1号墳出土形象埴輪(4)



第30図 1号墳出土形象埴輪 (5)



第31図 1号墳出土土形象埴輪(6)



第32図 1号墳出土土器・副葬品

85は外面に剥離痕が認められる。

86は屈曲する本体に断面三角形の突帯が貼付され、稜を境に2列の刺突文が列点状に並んでいる。87・88はともに本体から剥落した痕跡が認められる破片であり、上下は不明である。2列の刺突文が施されているところが86と共通している。

89は粘土紐の貼付が認められる。90は本体に付属していた部分である。下げ美豆良に類似するが形状がやや異なるようである。91と92も表面の図の左端に本体から剥落した痕跡が認められる資料である。外形に屈曲する部分を有する板状の部位である。

93は小径の本体の外面に突帯が廻るものである。人物の頸部に類似する。

94は円筒状を呈する破片で、外面に粘土板を貼り足すことによる斜め縦方向の段差が認められるものである。上衣の重ねの表現とも考えたが断定できない。

95も円筒状の本体に水平方向の粘土帯、円形粘土板を重ねた逆放物線状の粘土帯が貼付されたものである。靴形埴輪の矢筒部分の表現が想起される。

96は弧状の外辺を残した板状破片である。

97・98は円筒状を呈し、突帯が貼付された資料で形象

埴輪の基台部と考えられる。

99・100は上方に向かって直径を細くする個体である。100は円孔を伴うものである。(観P 103-108、写PL.15～22)

出土遺物 墳丘・周堀の調査に際し須恵器の破片が出土した。その中から瓶(101・102)を資料化した。

玄室内からは刀子の茎(103)、無茎鉄鏃4点(104～109)、有茎鉄鏃2点(108・109)、鉄釘3点(110～112)が出土している。(観P 108、写PL.22)

所見 主体部の横穴式石室は自然石を乱石積みした両袖型の形状で、玄室の平面形が胴張り形をなす点が3号・4号墳と共通していた。本古墳は墳丘上に埴輪が樹立されていた。このことから6世後半から遅くとも7世紀初頭に築造されたものと考えられる。今回報告する古墳の中では8号墳との関係は検討の余地を残すがその他の古墳よりは早い時期に築造されたものと考えられる。

本古墳は直径22mに満たない円墳であるが、墳丘に樹立された埴輪には多条多段の円筒埴輪と双脚表現の人物埴輪を伴う人物群が認められる。この点において通例の小規模古墳と埴輪樹立の質的に異なるものであり、注目に値する内容である。

(3) 2号墳 (第33図、PL.5)

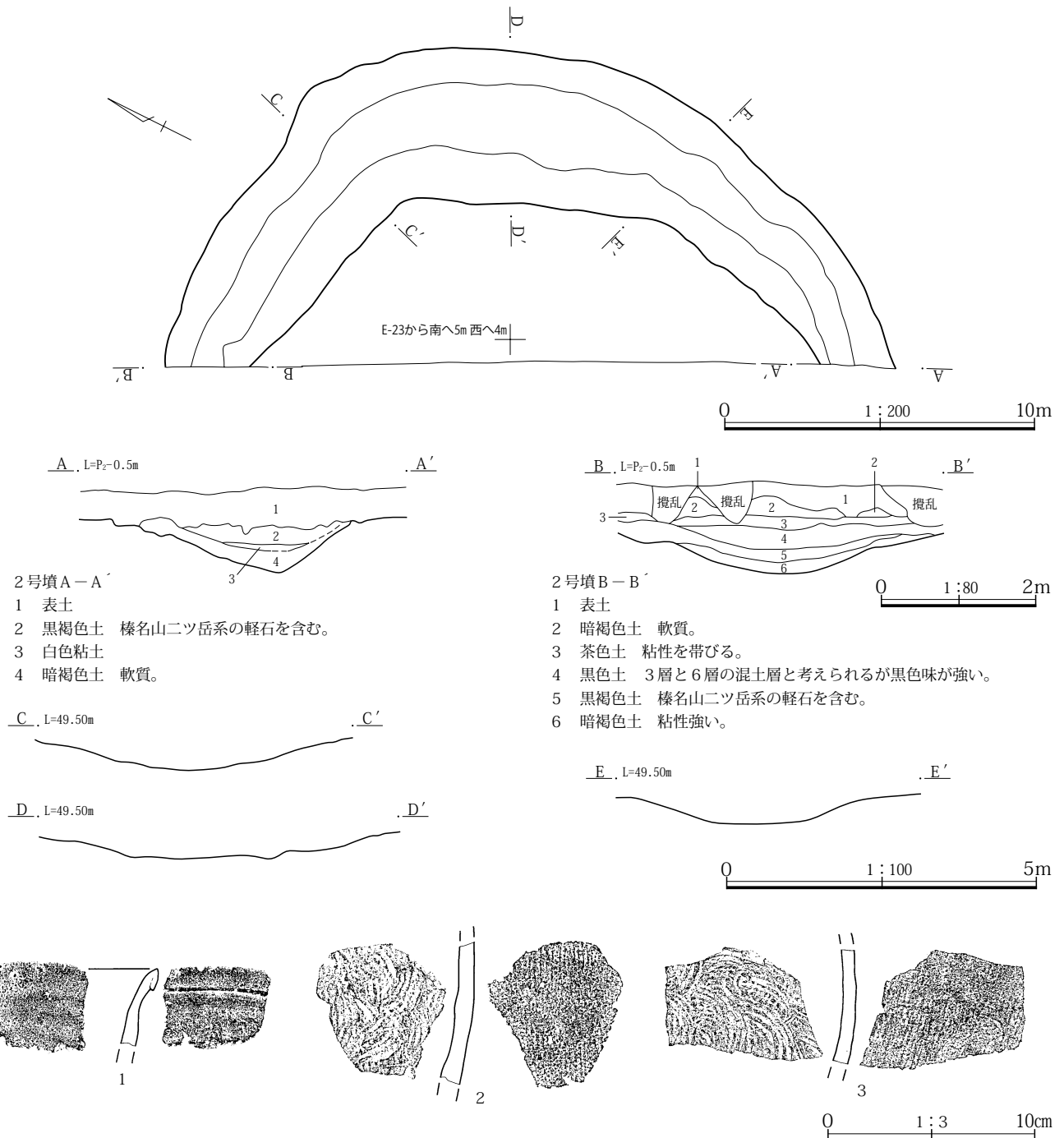
位置 D-23グリッドを中心に位置する。北西側に7号墳が、南東側に1号墳が築造されている。

墳丘と外部施設 墳丘の形状は円墳を呈すると考えられるが、南東側の半分以上が調査区域外におよんでおり、周堀の3分の1ほどを検出したにとどまった。墳丘部分は、桑園となっており、既に平夷され、平坦に近い状態にあった。その規模は約18mと考えられる。検出した周堀の規模は、北端で上幅3.24m、下幅1.00m、深さ0.62m (土層断面の観察から)、東側で上幅5.12m、下幅

1.84m、深さ0.68m、南端で上幅2.40m、下幅0.61m、深さ0.72m (土層断面の観察から) である。断面形は凸レンズ状である。埋没土中には上層に浅間B軽石が降下、ほぼ水平に堆積している。

出土遺物 周堀内から須恵器甕の破片 (1~3) が出土している。(観P108・109、写PL.23)

所見 埋葬主体部は検出されなかった。調査区域外に存在したものと考えられる。築造時期について詳細な検出を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。



第33図 2号墳平・断面図と出土土器

(4) 3号墳(第34～37図、PL.6)

位置 D-20グリッドを中心に位置している。南側を2号墳、東側を5号墳、北側を6号墳、西側を7号墳と四周に古墳が近接して築造されている。

墳丘と外部施設 墳丘の形状は円墳である。規模は周堀も含め南北12.28m、東西12.20mである。墳丘は南北7.64m、東西8.24mである。墳丘は調査前に既に削平を受けており、盛土は残存しなかった。横穴式石室の開口部前には前庭状の掘り込みがあり、その左右で周堀は一度途切れ立ち上がっている。その後は分離することなく、墳丘の側面、後方を区画している。

横穴式石室の開口部前にある前庭状の掘り込みは不整形をした土坑状の掘り込みで、石室の羨道入り口の石積みから周堀外縁方向に約1.25mまでは石室の掘り方とほぼ同規模の下幅0.95mで溝状に延び、それから先は西側の周堀方向に向かって帯状に緩やかに立ち上がっていた。規模は長さ2.03m、最大幅約3.50m、深さ0.46mを測る。

周堀の規模は東側部分で上幅1.81m、下幅0.71m、深さ0.33m、北側部分で上幅2.23m、下幅1.04m、深さ0.17m、西側部分で上幅1.69m、下幅0.82m、深さ0.30mを測る。断面形は一律ではないがいずれの地点でも凸レンズ状を呈していた。埋没土には中層から下層に黒褐色土が堆積していたが、上層には浅間B軽石を含む暗褐色土が堆積しており、部分的に浅間B軽石が堆積していた箇所も認められた。

主体部の構造 安山岩を主体とした自然石(川原石)を乱石積した横穴式石室である。両袖型と考えられるが、右側の袖部は欠失している。全体に削平が進行しており、残存は基底部分から中段部分までであった。天井石も残されていなかった。開口方向はS-35度-Wである。墳丘との関係は、石室の奥壁が墳丘の中心に位置している。

石室の規模は全長3.62mである。玄室の長さは2.17m、幅は、側壁の胴張りが著しく、奥壁部分で0.54m、羨道寄りで0.92mが推定される。最大幅は奥壁から1.13mの位置にあり、1.18mを測った。羨道の長さは1.45mである。幅は入り口部分で0.64mである。玄室近くにいたっても大きな変化は見られなかったものと考えられる。

石室各部分の石材の積み方について見ていくと、羨道

の入り口部分の基底には左壁で長さ60cmの俵型をした礫をその長側面を入り口側、小口面を石室壁面に向け、横置きし、根石としている。この上にもう1石同様の礫が積まれていた。残存高は40cmである。

羨道右側は、入り口部分とその奥側の3石、合計80cmほどの壁面が残存していただけでこれより奥側の石材は根石にいたるまですべて抜き取られていた。右側も左側同様に横長の礫を据えて入り口部分を羨門として強調した石積みが行われていた。

左壁の羨道から玄室にいたる部分には小口面が20cmほどの礫が袖部として、内側にわずかに突出して置かれ、羨道と玄室の境を形成していた。

玄室の奥壁は、平積みで据えられた幅70cm、高さ50cmの根石1石が残存していただけである。下端には小礫を挟み込んで天端の調整を図った様子が見てとれる。

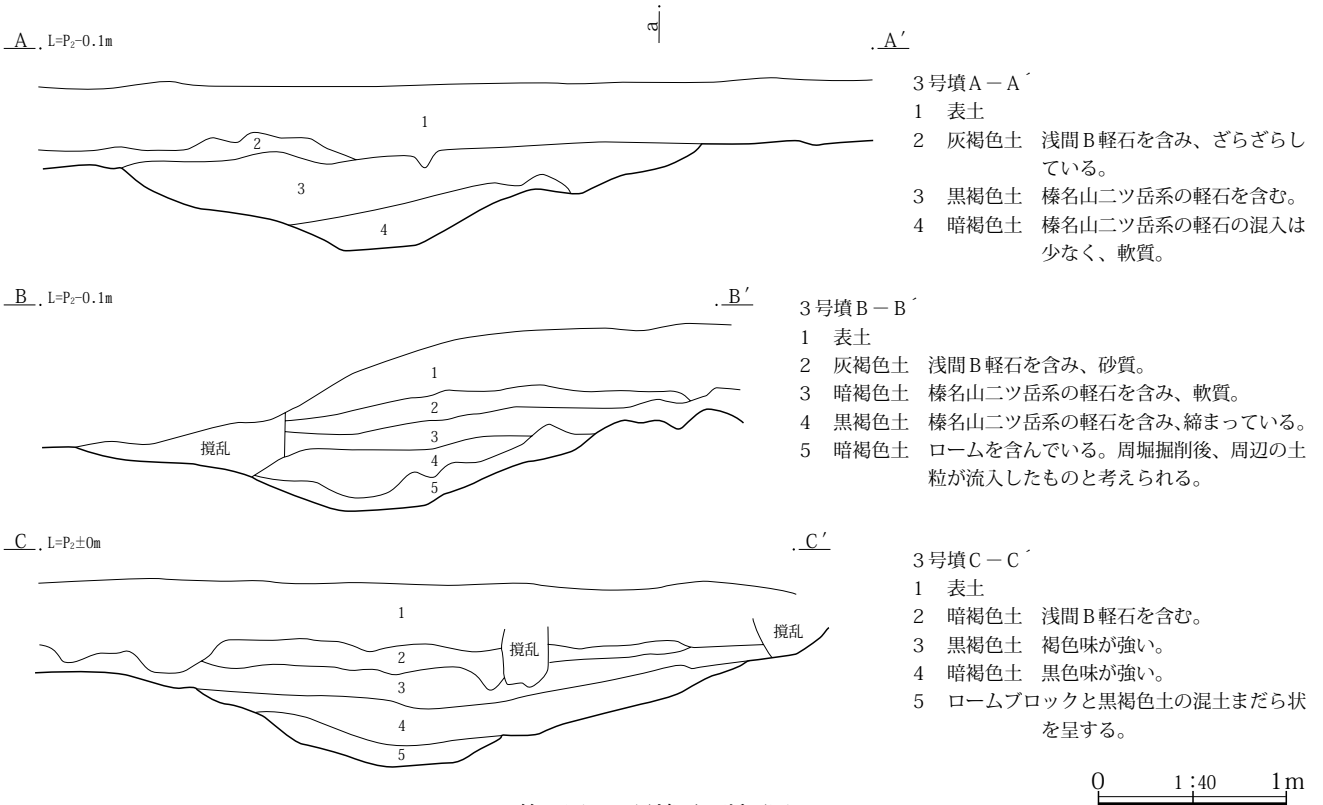
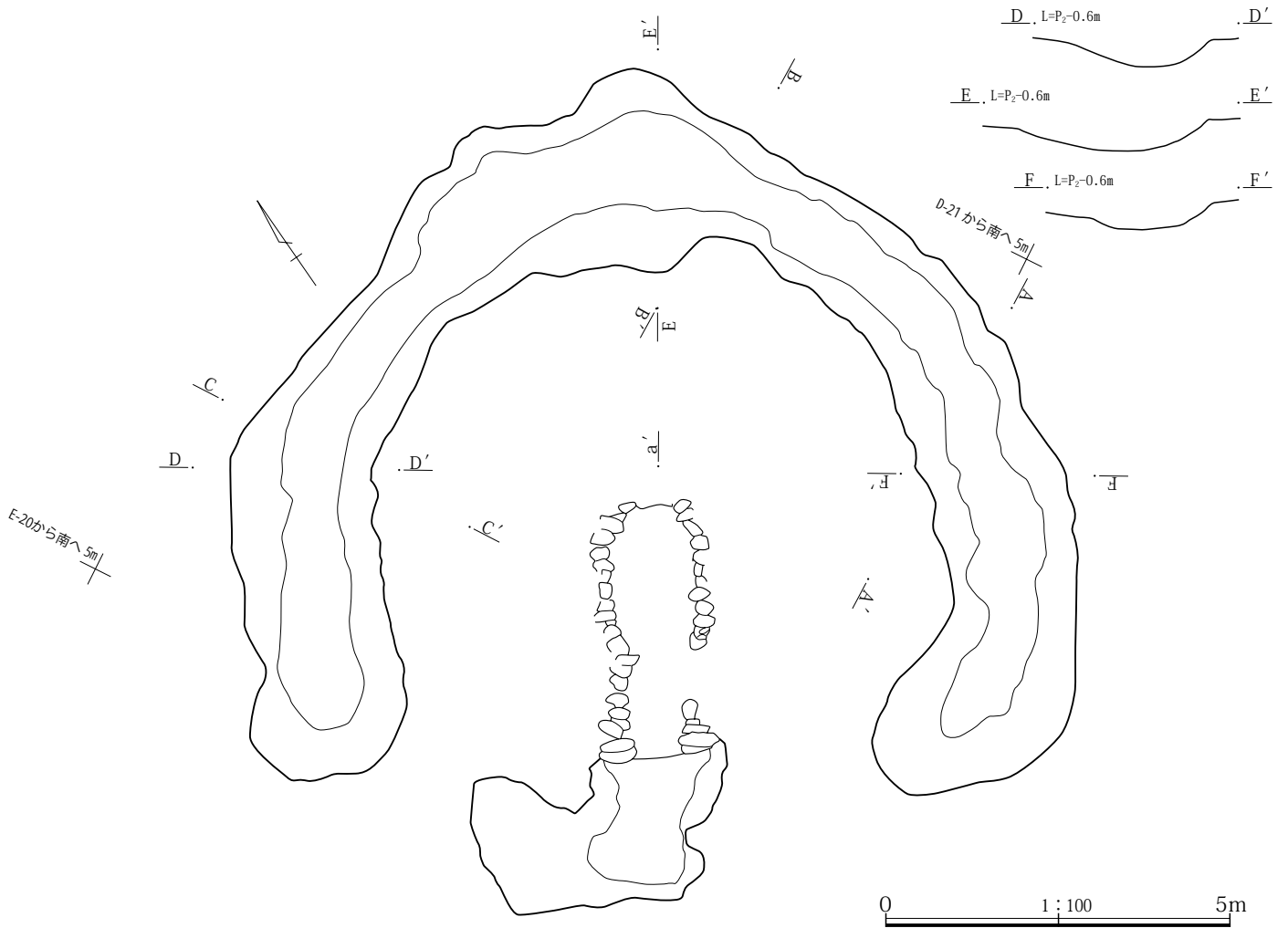
左側側壁の根石は胴張りを呈する規格線(半径約2.5から2.6m)上に小口面を内側に向けて丁寧に設置されていた。袖部から奥壁にいたるまでに10石が数えられる。その幅は30cm前後と小振りである。壁体は奥壁寄りの残存が良好で4段分が残存していた。根石の上面に次の段の礫を落とし込むように小口積みし、隙間には小礫をはさみ込み、調整が図られていた。個々の礫の置き方については、第一に石室内面に垂直に近い面を作り出すことが考えられ、その次に下端を安定させることに腐心しているように見える。横方向の目地は特に通っていない。

右側壁は9石の根石で基底が構成されていたと考えられる。こちらの壁面も奥壁寄りの残存が良好で、3段分が残存していた。石材の積み方は左壁と同様である。

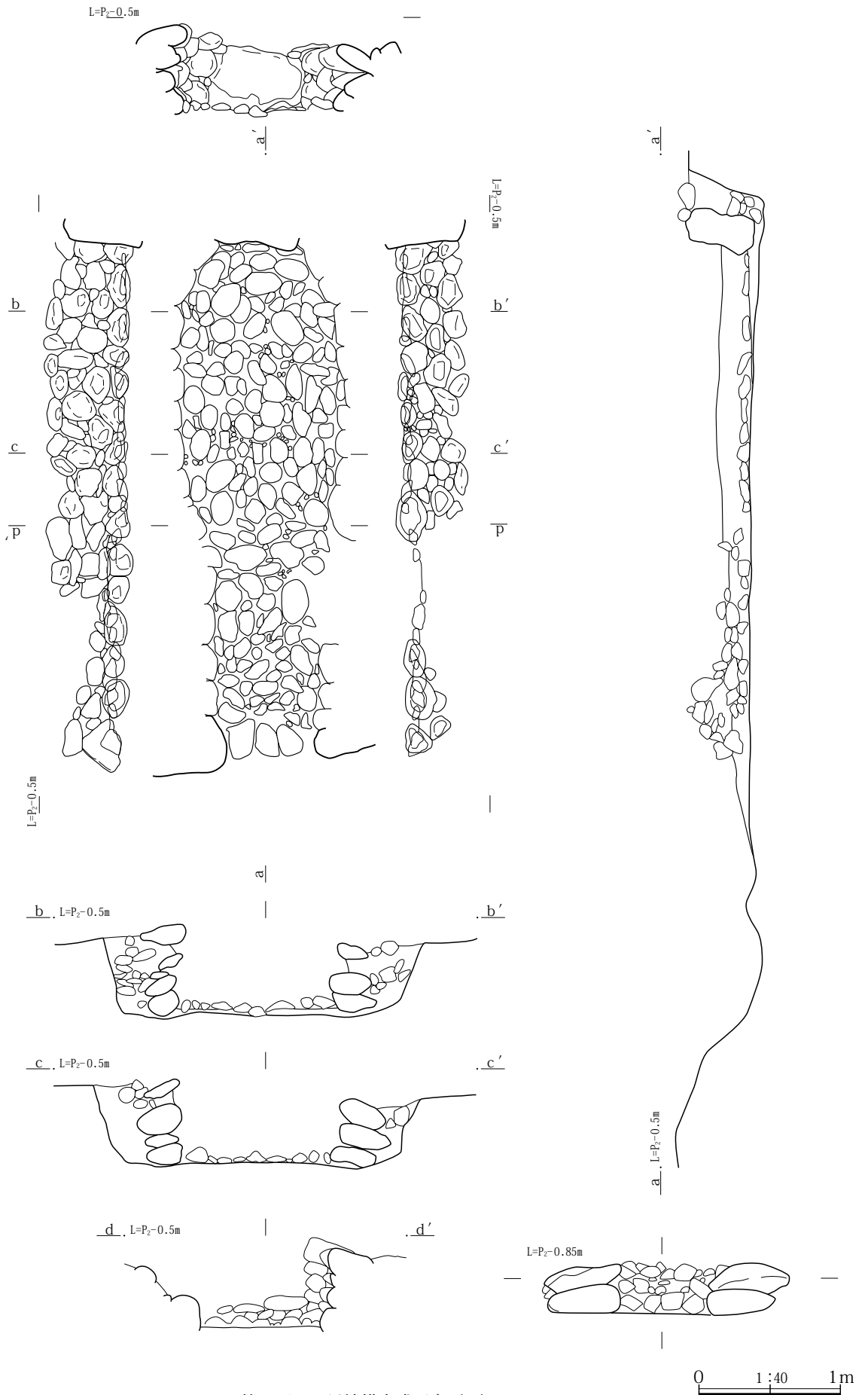
壁面の構築手順については詳細は不明であるが、石材の重なり方を見ると、まず、奥壁を据え、次に玄室の根石を奥壁側から羨道方向に順次置き、袖部、羨道の基底部分と積み上げていったように想定される。

床面の状況を見ると羨道部分では掘り方底面の上に20cm前後の礫が一面に置かれていた。入り口部分ではこの上に約20cmほどの厚さで礫の堆積が残されていた。閉塞の一部であったことも考えられる。

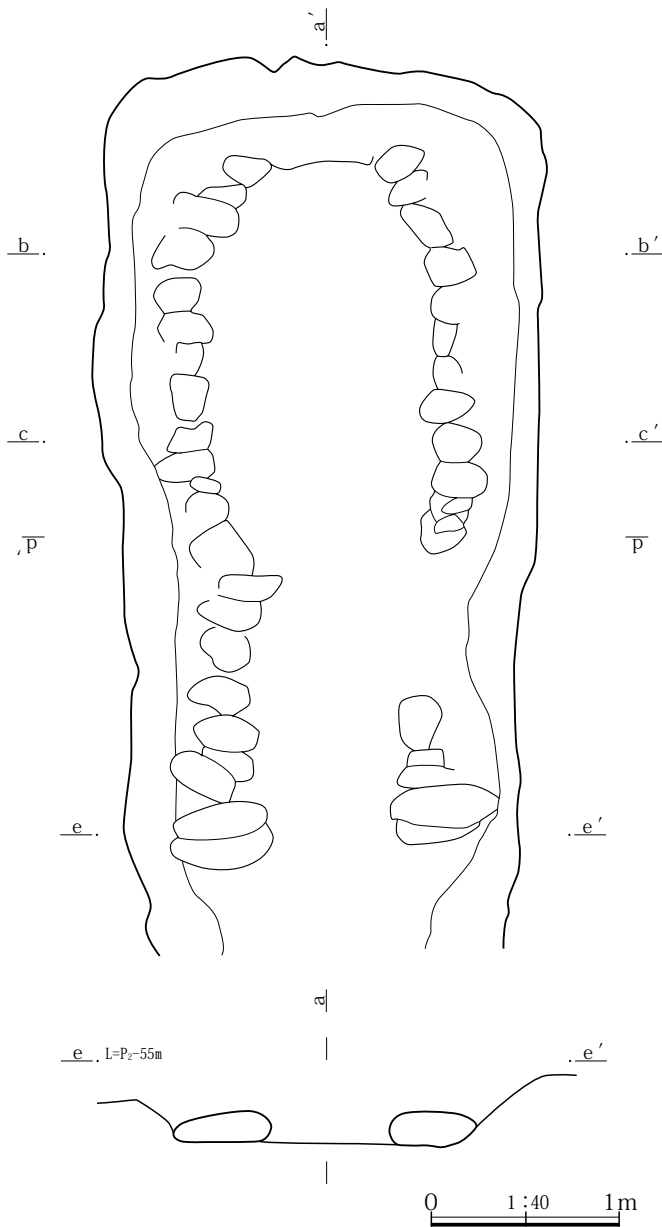
玄室部分では長径20から30cm前後の扁平で小判形をした礫が一面に敷かれていた。これが他の古墳において鋪石と呼称されるもので、この上にさらに細かな小礫が置かれ、床面が整えられていたのか否かは残された記録か



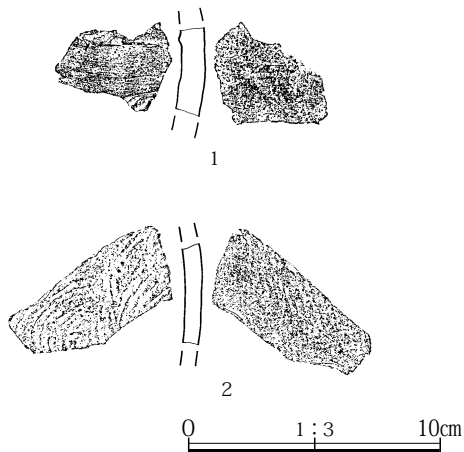
第34図 3号墳平・断面図



第35図 3号墳横穴式石室(1)



第36図 3号墳横穴式石室(2)



第37図 3号墳出土土器

らは不明である。

石室の構築状況 本石室は、石室の開口部に開放する平面長方形の竪穴を掘り、その底面に根石を設置する構造が取られている。奥壁後方の両隅はやや隅丸を呈しており、壁面の立ち上がりは上方に向かってわずかに傾斜する形状である。規模は上端で縦5.40m、横幅2.30m前後である。残高は25から40cmである。旧表土を掘り込みローム層中に達していた。

底面は平坦に整形されていたが、石室の根石が置かれていた部分に沿うように小さな窪みが残されていた。用石の上端面や石室内に向ける面を整えるための微調整が図られていたことが想像される。

奥壁後方および左右の側壁の背面と掘り方の立ち上がりとの間隙は20cm程度である。羨道入り口部分で見れば横長に置かれた礫はその背面が掘り方の側面の立ち上りにほとんど接するように設置されている。隙間には小礫を含む土砂が充填されているが細かな作業単位の存在については把握するにいたらなかった。

出土遺物 石室内からの副葬品の出土は皆無であった。周堀部分の調査に際し、須恵器甕(1・2)の小破片が出土している。(観P109、写PL.23)

所見 築造時期について詳細な検討を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。

(5) 4号墳(第38～45図、PL.7・8)

位置 D-29グリッドを中心に位置している。他の古墳とはやや距離を保ち築造されている。北側に築造された1号墳の周堀南側部分との距離は約20mである。

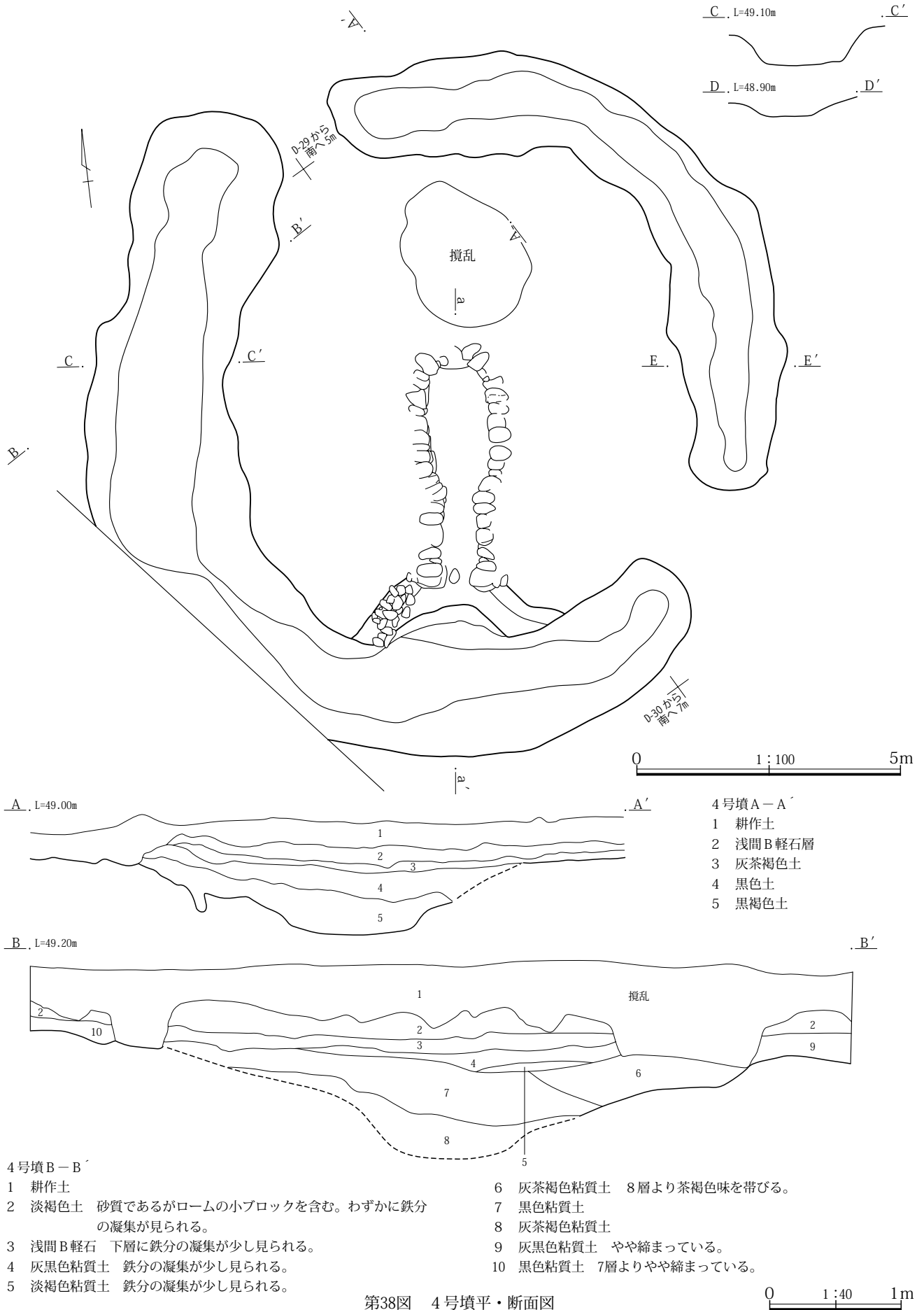
墳丘と外部施設 墳丘の形状は円墳である。南西部分がわずかではあるが調査区域外におよんでおり、未調査である。また、周堀の内側、横穴式石室奥壁後方は直径2.5mほどにわたり、広い範囲で攪乱を受けていた。

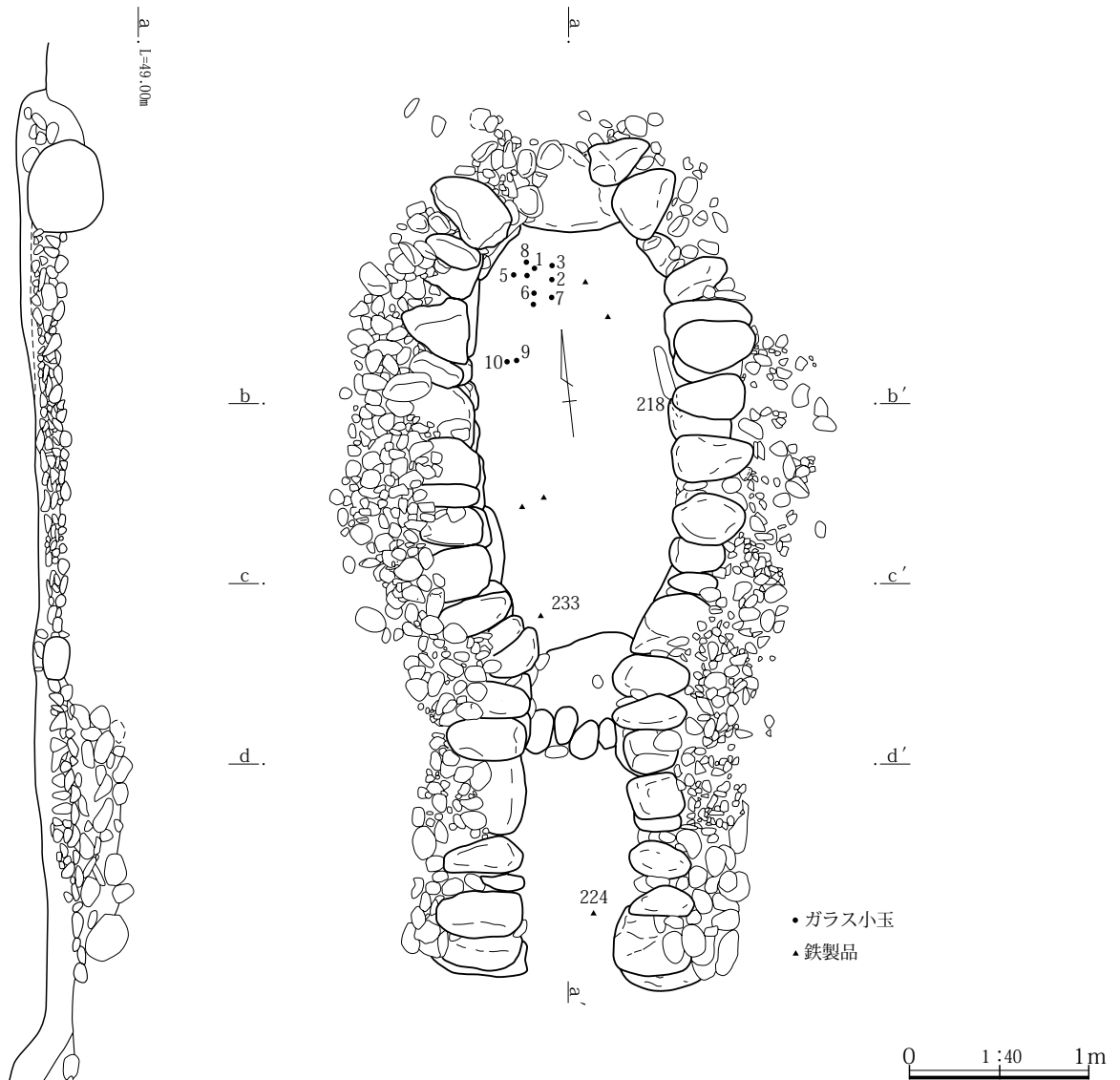
本墳の規模は、周堀も含め、南北13.08m、東西13.12mである。墳丘は南北9.10m、東西8.78mである。

周堀は築造時には全周することが意図されていたように考えられるが、石室の開口方向を時計の6時の方向と仮定すると、4時の方向と11時の方向の2箇所掘り込みが浅くなって立ち上がり、調査時には開放していた。

周堀の規模は東側部分で上幅2.06m、下幅0.88m、深さ0.38m、北側部分で上幅1.80m、下幅0.56m、深さ0.76

第2節 古墳・飛鳥時代の遺構とその出土遺物



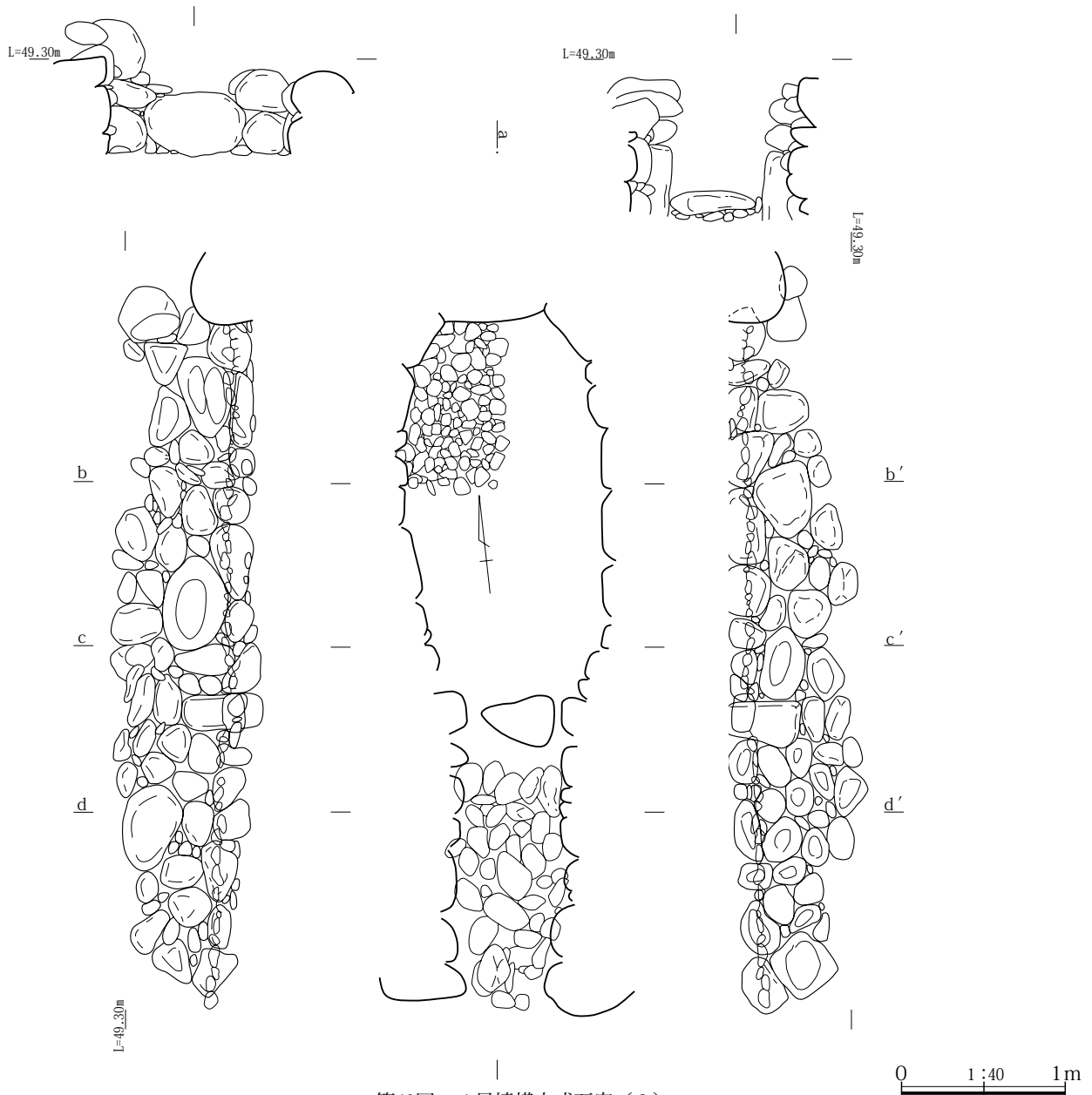


第39図 4号墳横穴式石室（1）

m、西側部分で上幅2.86m、下幅1.58m、深さ0.80mを測る。断面形は一律ではないがいずれの地点でも凸レンズ状を呈していた。埋没土には中層から下層にかけて黒褐色土・灰褐色土が堆積していた。上層には浅間B軽石が水平に堆積していた。

墳丘は調査前に既に削平を受けており、盛土は残存しなかった。石室の南西方向、周堀内縁の立ち上がり部分から石室石材と同規模の礫がまとまって検出されたが、本墳における葺石あるいは墳丘裾部を示す列石などの施設の有無については確認できなかった。

石室の開口部前には前庭状の掘り込みが設けられていた。平面形はハの字状を呈していた。開口部から周堀外縁方向に約30cmで一段低くなり、周堀の底面に続いていた。この一段下がった部分からは長径20cm前後の礫がま



第40図 4号墳横穴式石室(2)

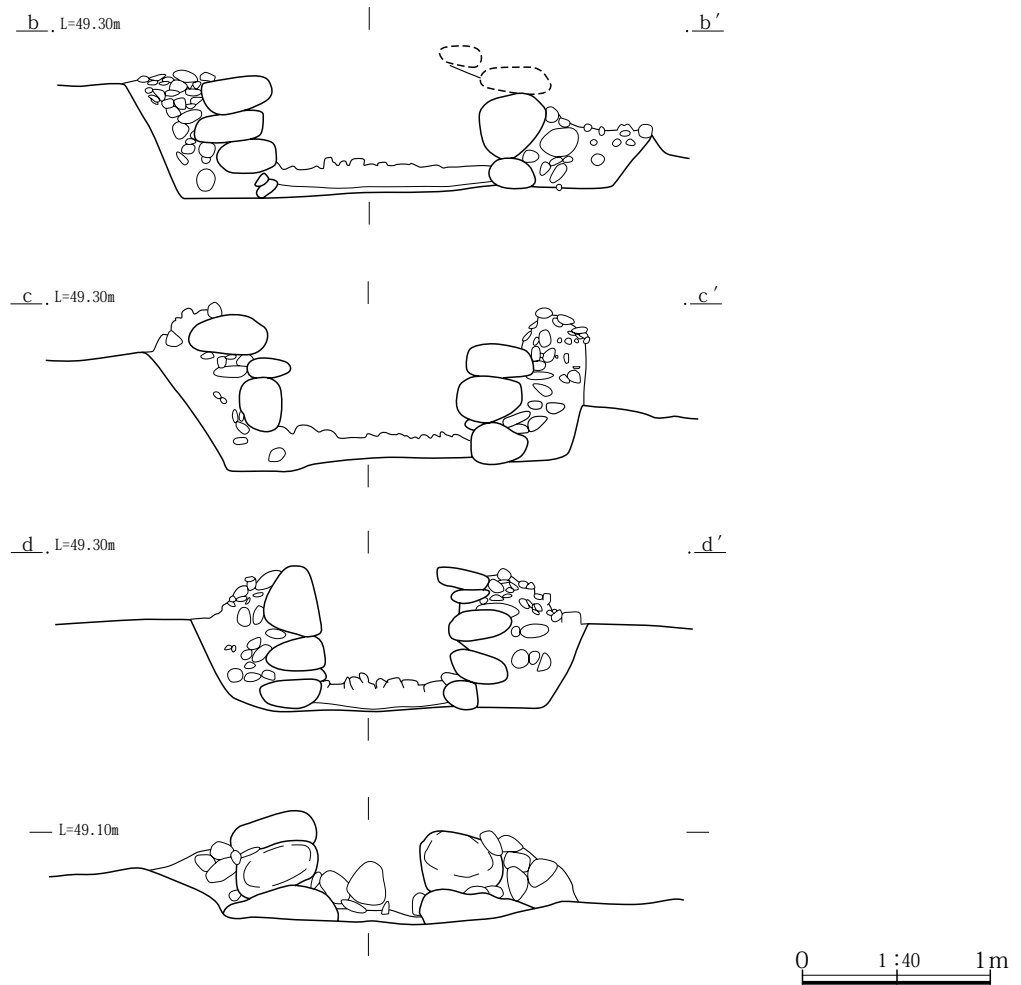
とまって出土、一見、開口部前に敷き詰められたかのような状態であったが、底面からは20・30cm浮いた状態であった。後述する斜辺法面の礫や石室の石材が崩落したもの、古墳築造後の過程で開口部前が再整備された可能性などが考えられるが断定するにはいたらなかった。

また、この前庭状遺構の開口部左側では石室開口部の左側から周堀に接する部分までの斜辺法面に石積みが施されていた。使用されていた礫は長径20から30cmの大きさのもので、横積みされており、4段が残存していた。仕上げはやや粗雑であった。右側からは検出されていない。なお、この部分からは石室の解体、掘り方部分の精査に伴い石積みの下位からピットあるいは土坑状の掘り込み2本を検出した。羨道寄り直径54cm、深さ40cm、

周堀寄り長径145cm、短径93cm、深さ11cmであった。本古墳との関係については不明である。

主体部の構造 安山岩を主体とした自然石(川原石)を乱石積した両袖型の横穴式石室である。全体に削平が進行しており、壁面の残存は基底部分から中段部分までであった。天井石は残されていない。開口方向はS-8度-Wである。

石室の規模は全長4.13mである。玄室は長さ2.28mである。側壁は胴張りが著しい。幅は奥壁部分で0.60m、羨道寄りで0.90mである。最大幅は奥壁から1.08mの位置にあり、1.20mを測った。羨道の長さは1.85mである。右壁の入口部は左壁より約10cm、手前、周堀側に出ている。幅は袖部で0.60m、入口部分で0.48mである。



第41図 4号墳横穴式石室(3)

羨道入り口部分は、入り口の構造を意識して、長さ60cmのやや大型の礫を入り口方向に広い面を向けて積み上げていた。左側が3石、右側2石残存していた。羨道部分の根石は左側が6石、右側が5石から構成され、石室内面に広い面を向けて据えられており、横積みされた石材も見られた。

玄室入り口の袖部は左右ともに羨道の壁面がそのまま続くものであるが、根石は長辺50cmの礫を立石状に据えていた。高さは手前の石積みの2石分強を有していた。両袖間の床面に置かれた梱石とともに玄門構造を意識した設置状態であった。羨道部分の石材の規模は玄室部分よりも全体にやや小振りで、あまり整然とした印象を受けないものではない。左側で3石、高さ76cm、右側で5石、高さ84cmが残存していた。

羨道部分の床面は玄室と同様、小礫を敷き詰めていた。この上に床石よりも大型の礫が入り口から1.4mほど奥まで積み上げられていた。閉塞が残存していたことがう

かがえる。ただし、石積み内から鉄片が出土したとの記録があり、追葬時の石積みの可能性も考えられる。玄室と羨道との間に段差の生じない状態で、玄室入り口に梱石が置かれていた。

玄室の奥壁は高さ40cm、奥行き50cmの大礫一石から構成されていた。その設置位置は墳丘の中心よりやや後方にあたる。玄室の根石は左側が7石、右側が9石から構成されていた。上端の高さが一定になるような配慮は特別に認められない状態である。設置は小口積みと横積み半々である。

左側の側壁は4段分、高さ74cmが残存していた。石積みの状態を見ると、この高さまでを3工程で積み上げていると考えられる。根石より2段目の石材のほうが大型の礫が用いられている部分もある。右側の側壁は奥壁寄りの残存状態が不良であったが3・4段分、高さ80cmまでが残存していた。

玄室の床面には直径5から10cmの小礫が10cm前後の厚

さが敷き詰められていた。

石室の構築状況 本石室は3号墳と同様に旧地表を掘り込んで設けた掘り方を有していた。この掘り方は石室開口部側が周堀に向かって開放する土坑状の竪穴で、その底面に石室の根石を設置するものである。規模は上端で縦5.03m、横幅1.95から2.62mと羨道入り口寄りがやや狭くなっていた。残存状態は奥壁後方は状態が悪く、残高16cm、左右の側壁側は60から65cmである。底面は平坦に仕上げられており、奥壁をはじめ石室の根石が設置された部分の下にも大きな凹凸は認められなかった。

出土遺物 石室内からは玄室右側面中央の壁際から奥壁方向に切先を向けて小刀(218)が出土している。未掲載であるが鉄製鞘口金具の細片が出土しており、単独で出土した鉄製鎌(219)とともにこの刀身に伴う可能性が考えられる。

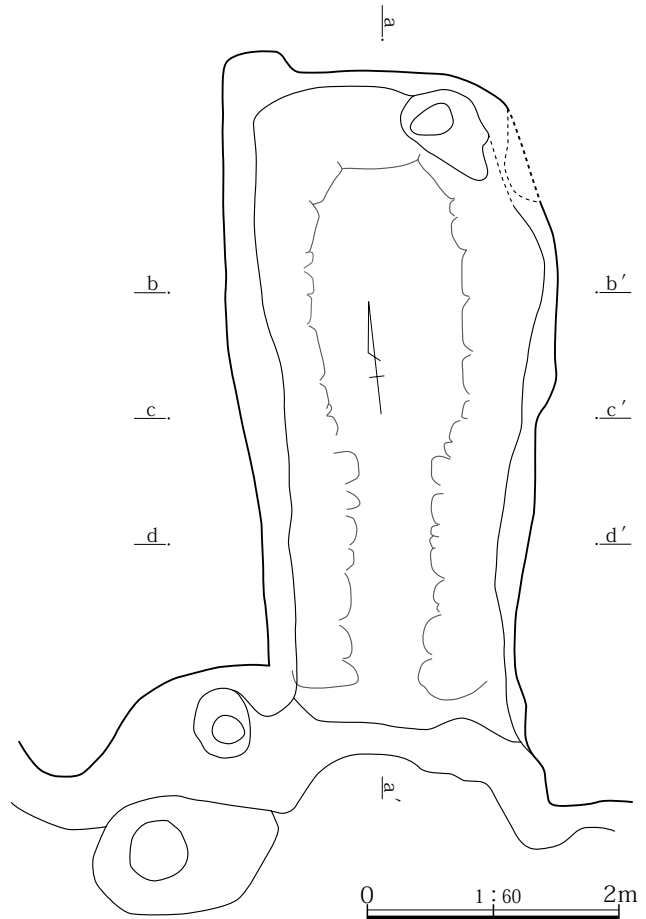
鉄鎌は2点出土した。1点は片刃の長頸鎌の頭部(223)である。もう1点(224)は棒状品であることから茎部分の破片と考えられる。

鉄製の環状品(220)は耳環の可能性が考えられるが器面がすべて剥落していることから断定できない。刀装具(221)は金銅製貴金具の残片である。大きさから見ると刀子の一部であろうか。もう1点の環状の金具(222)も刀装具の残片の可能性が考えられる。

玄室の左奥隅から奥壁手前にかけてガラス小玉が出土している。出土地点を記録して取り上げたものは10点余にすぎないが、床面精査に伴い合計217点を検出した。ガラス小玉については観察表の記述にあるように大きさは長径2.51から4.69mm、短径2.34から2.15mm、厚さ1.50から3.31mmであった。重さは28の1点が0.30gであった他は0.01から0.08gである。色調別では、紺色23個、淡紺色半透明176個、淡青色半透明が18個である。製作技法としては溶融技法によって製作されたと考えられる個体が193個、管切技法によると考えられる個体が18個、不明その他が6個である。

溶融技法による個体は、その観察から半溶融状態のガラス粒による凹凸や歪みが認められるものが多く、気泡や不純物を含むなどの特徴が認められるものである。

鉄釘は玄室内から4点、羨道内から1点出土したことが記録されているが、床面精査の過程で多数が出土している。結果としては完形品5本、頭部の残存する個体29



第42図 4号墳横穴式石室(4)

本、下端部の残存する個体27本、中位の破片7本の合計68点が確認された。このことから最低でも34本の鉄釘が存在したとすることができる。上記個体の中から14本を選定して資料化した(225～237)。完形品の225は長さ5.82cm、幅4.88cm、厚さ3.78cmで断面方形である。頭部先端は側面的一方から折り曲げられている。表面には木質の付着が確認される。頭部から下端に向かう途中で木目の方向が変わっている。木質の方向から木棺に使用された板材の厚さが想定される場所である。

須恵器大甕(238・239)は周堀内の東側から南側にかけての広範囲から出土した破片が接合したものである。原位置を判明することはできないが墳丘上あるいは基壇面に据え置かれたものと考えられる。(観P109～118、写PL.23～25)

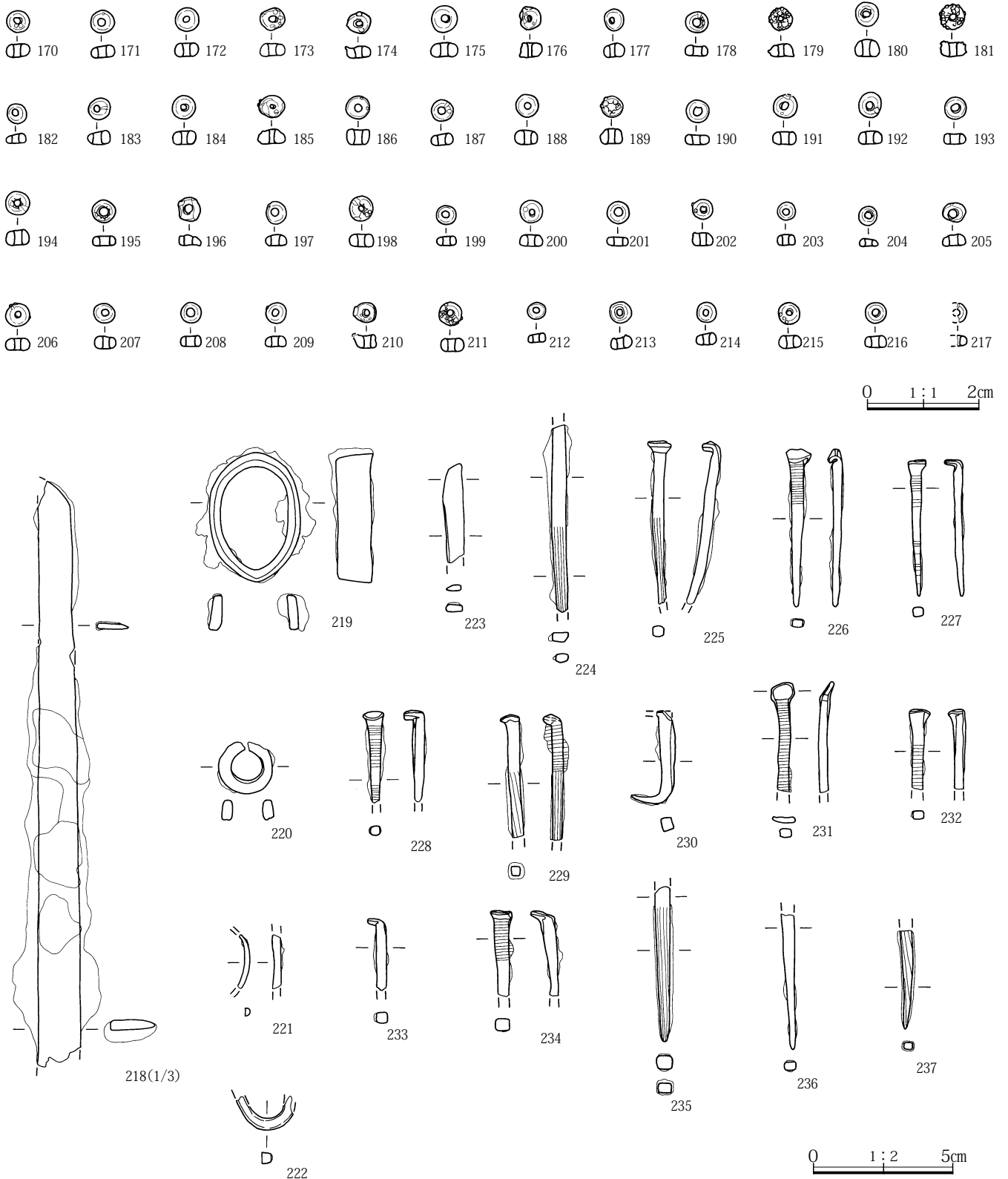
所見 玄室内から鉄釘が多数検出されており、鉄釘を使用した木棺による埋葬が行われたことをうかがい知ることができた。築造時期について詳細な検討を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。

第2章 発掘調査の記録



0 1:1 2cm

第43図 4号墳出土土副葬品(1)



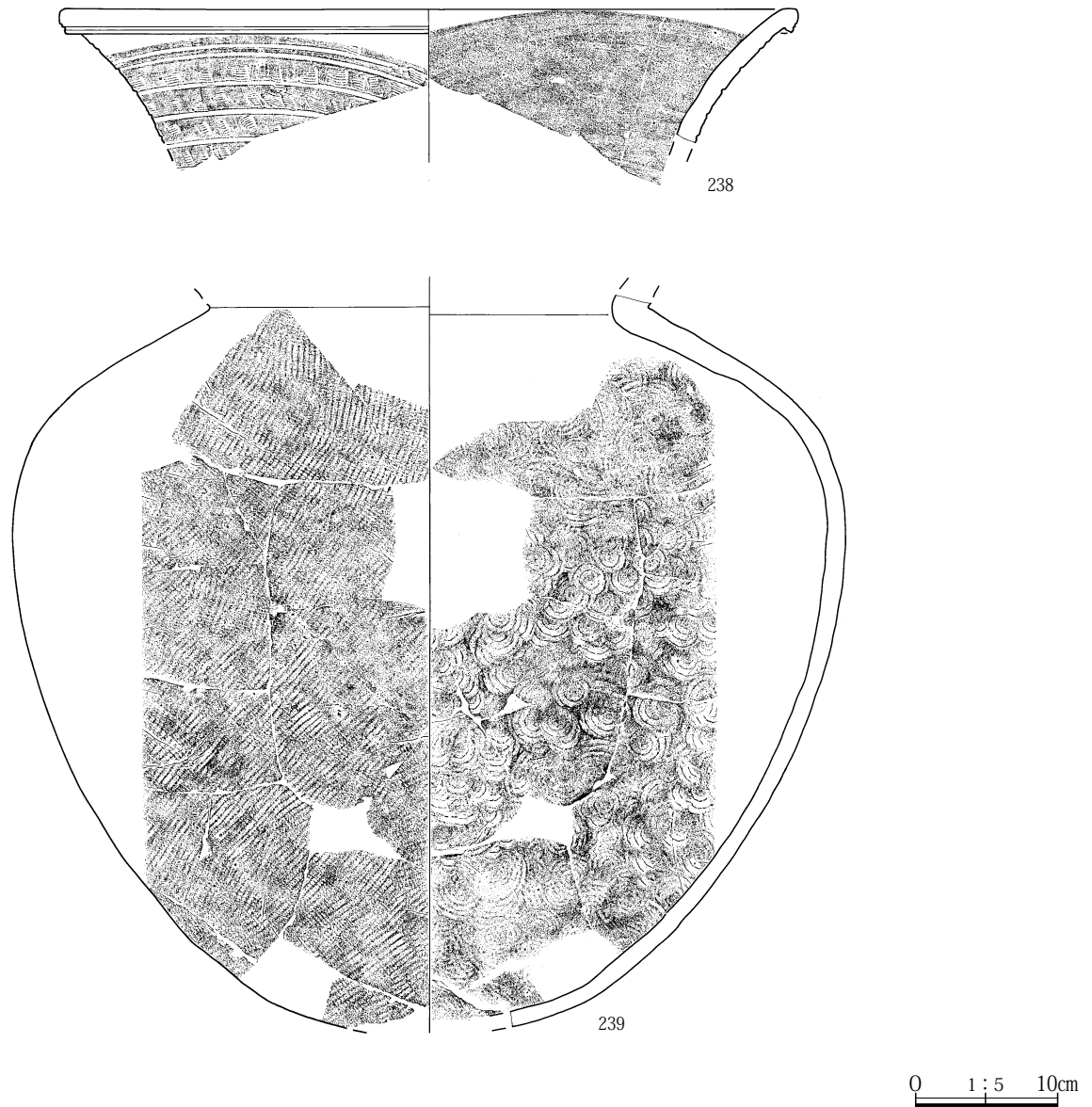
第44図 4号墳出土副葬品(2)

(6) 5号墳(第46図、PL.5)

位置 C-21グリッドを中心に位置する。西側に3号墳、北西側に6号墳が接して築造されている。

墳丘と外部施設 墳形は円墳を呈すると思われるが、南西側の周堀部分を中心にその3分の1を検出した。北

東側部分は葦川用水により削平を受けており、その全体形状を把握するにいたらなかった。葦川の東側については試掘坑を設定したが、周堀等の検出は見られなかった。墳丘は既に平夷され、平坦に近い状態にあった。その規模は約14mと考えられる。検出した周堀の規模につ



第45図 4号墳出土土器

いては、上幅は残存状態により差が大きかったが、下幅は0.85から1.50m程の状況が多く見られた。各地点別では北側で上幅4.58m、下幅2.42m、深さ0.40m、西側で上幅2.78m、下幅1.34m、深さ0.45m、南側で上幅3.16m、下幅2.01m、深さ0.35mである。断面形は内縁、墳丘側がやや急な傾斜であるのに対し、外縁側は緩やかな立ち上がりであった。埋没土中には暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 周堀内から須恵器甕の破片（1・2）が出土している。（観P118、PL.25）

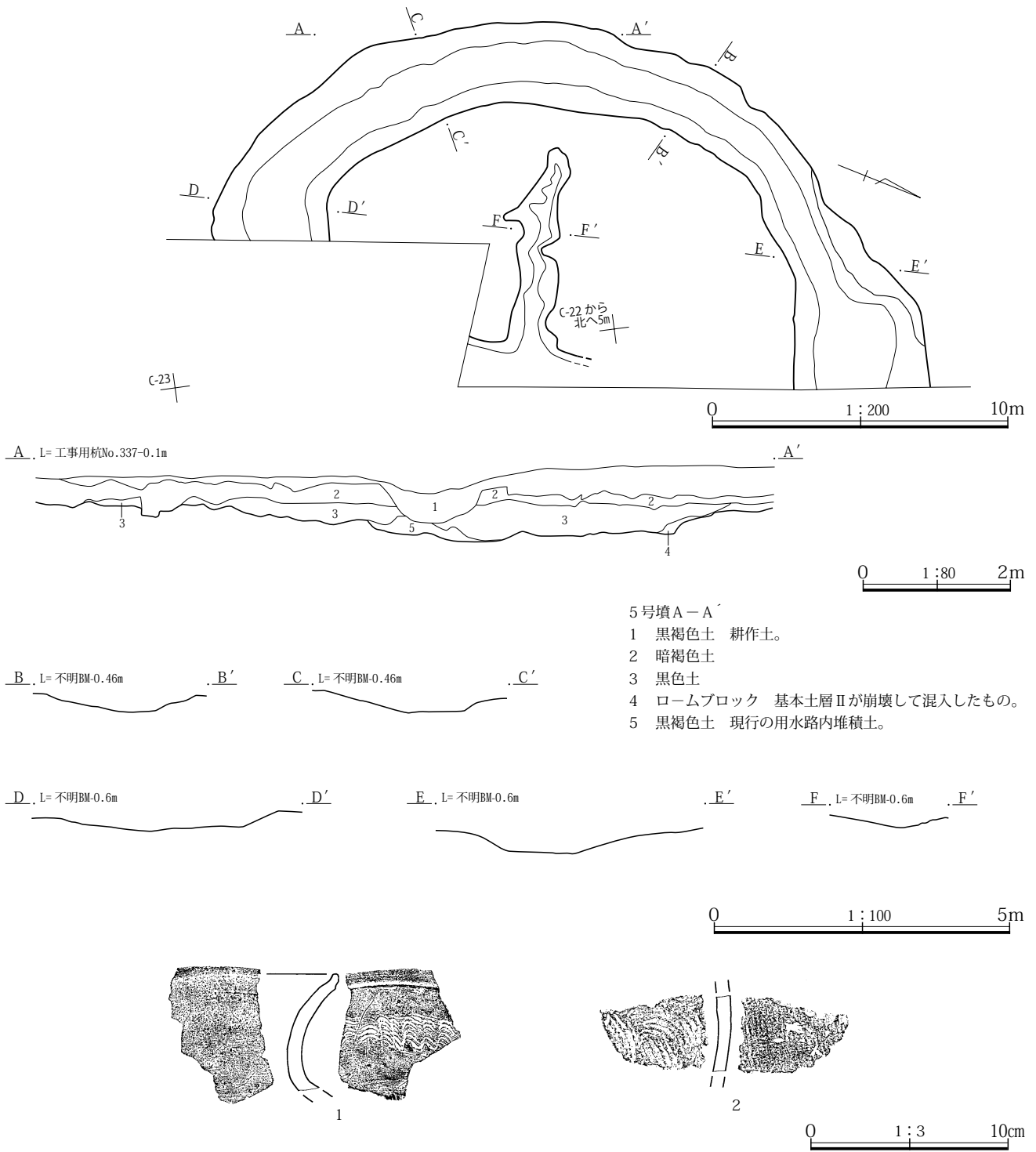
所見 埋葬主体部は検出されなかった。調査区域外に存在したものと考えられる。墳丘中央部分において西から東方向に延びる幅1.2m前後、深さ0.1から0.2m前後の

溝状の掘り込みを検出したが古墳との関係は判然としなかった。本墳の築造時期について詳細な検討を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。

（7）6号墳（第47・48図、PL.9）

位置 D-18グリッドを中心に位置する。南側に3号墳・7号墳が接して築造されている。

墳丘と外部施設 墳丘は既に削平を受けていたため周堀部分の検出のみにとどまった。墳形は円形を呈していたと考えられるが西側部分の周堀外縁は西側に張り出すように変形していた。墳丘規模は周堀を含めた外縁で東西31.60m、南北24.00m、墳丘部分で東西20.40m、南北18.60mを測った。墳丘中心部分には黒色土が残存する



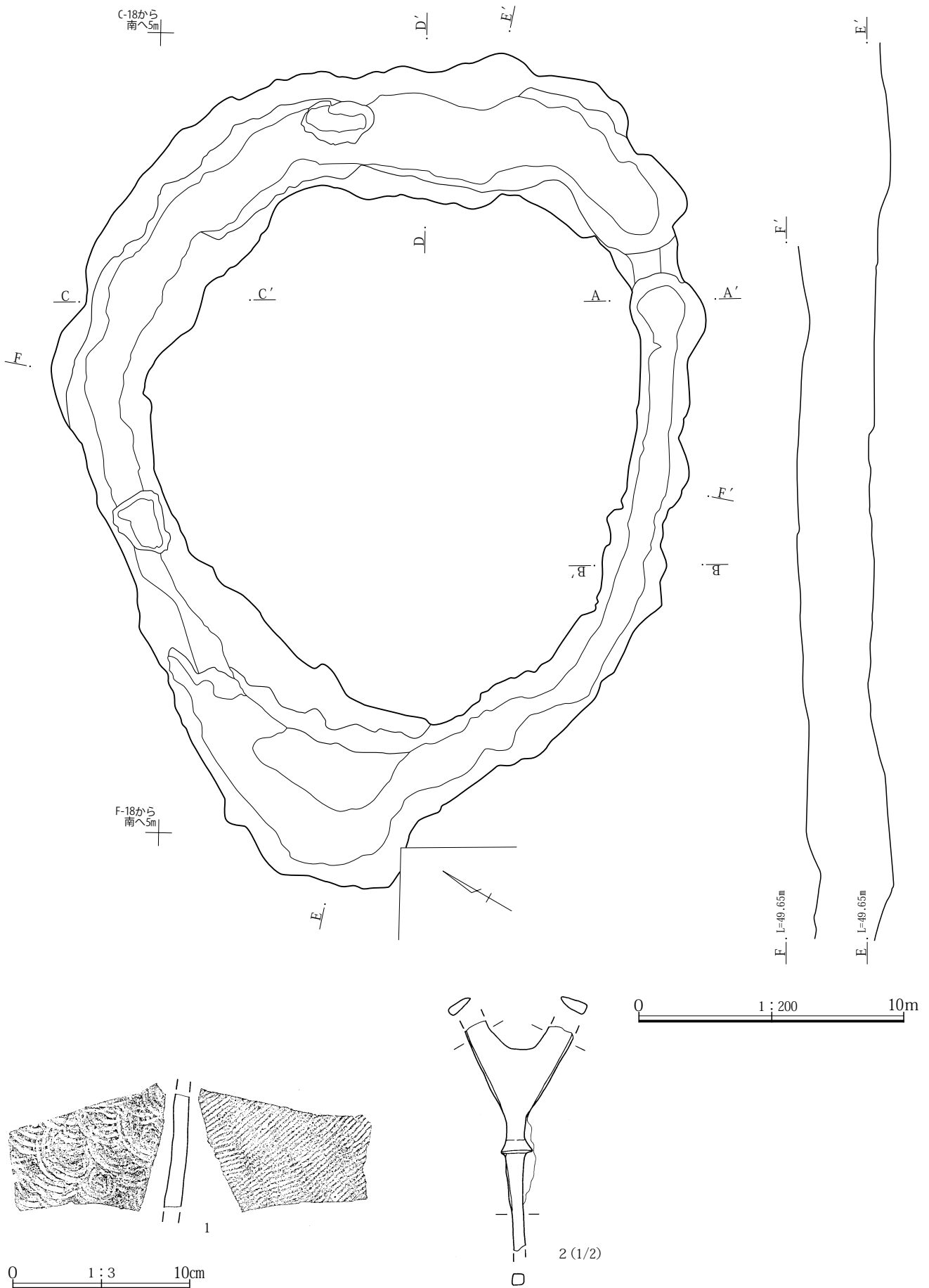
第46図 5号墳平・断面と出土土器

部分があり、主体部の痕跡の可能性が考えられたことから精査されたが特段の情報を得ることはできなかった。

周堀は、完周していたが、前述のように西側部分が外方にコの字状に突出していた。この部分の内外両縁間の上幅は6.80mを測る。下幅2.00mの底面から内縁に向かって緩やかに立ち上がっていた。

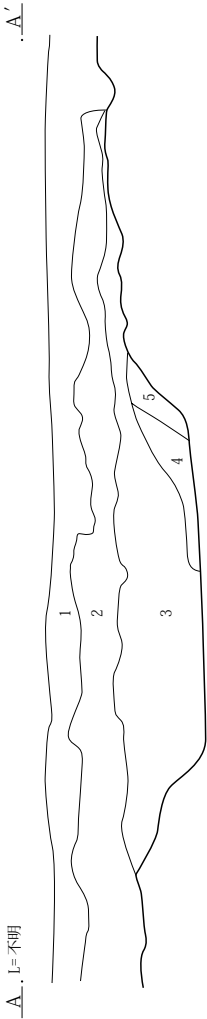
その他の部分も周堀の規模、断面形は一律ではなく、

3号墳と接する南側部分では掘り込みの幅が他所と比較して狭くなっており、上幅2.20から2.40m、下幅2.00mであった。南東部分、C-20-22グリッドでは底面の掘り込みが浅くなり、渡り状を呈していた。また、東側寄りのC-19-6グリッドと北側寄りのD-18-23グリッドでは土坑状に一段低くなる部分も認められた。各所の周堀の規模は、南側部分で上幅1.78m、下幅1.00m、東



第47図 6号墳平・断面図と出土土器

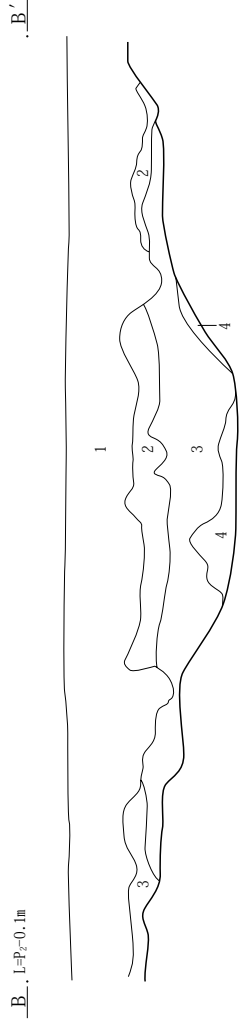
A. I=不明



6号墳A-A'

- 1 黒褐色土 耕作土。
- 2 暗褐色土
- 3 黒色土
- 4 黒色土 3層と5層との混土。
- 5 ロームブロック 基本土層IIが崩壊して混入したものの。

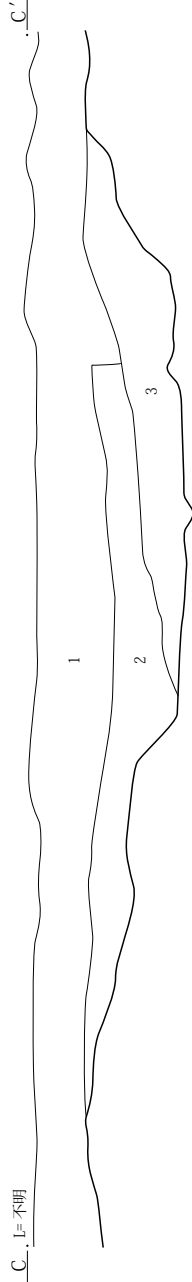
B. I=P₂-0.1m



6号墳B-B'

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 黒褐色土 榛名山二ツ岳系の軽石を含む。
- 3 灰褐色土 浅間B軽石を含みざらざらしている。
- 4 黄褐色土

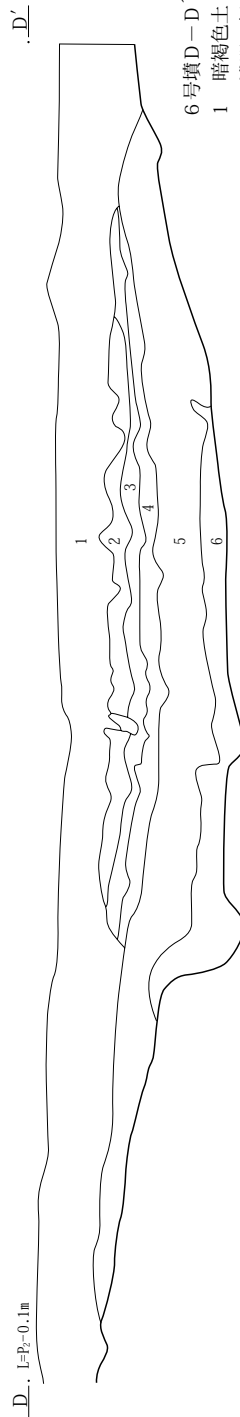
C. I=不明



6号墳C-C'

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 黒色土 3層と比較してやや明るみを持つ。粘性もやや強い。
- 3 黒色土

D. I=P₂-0.1m

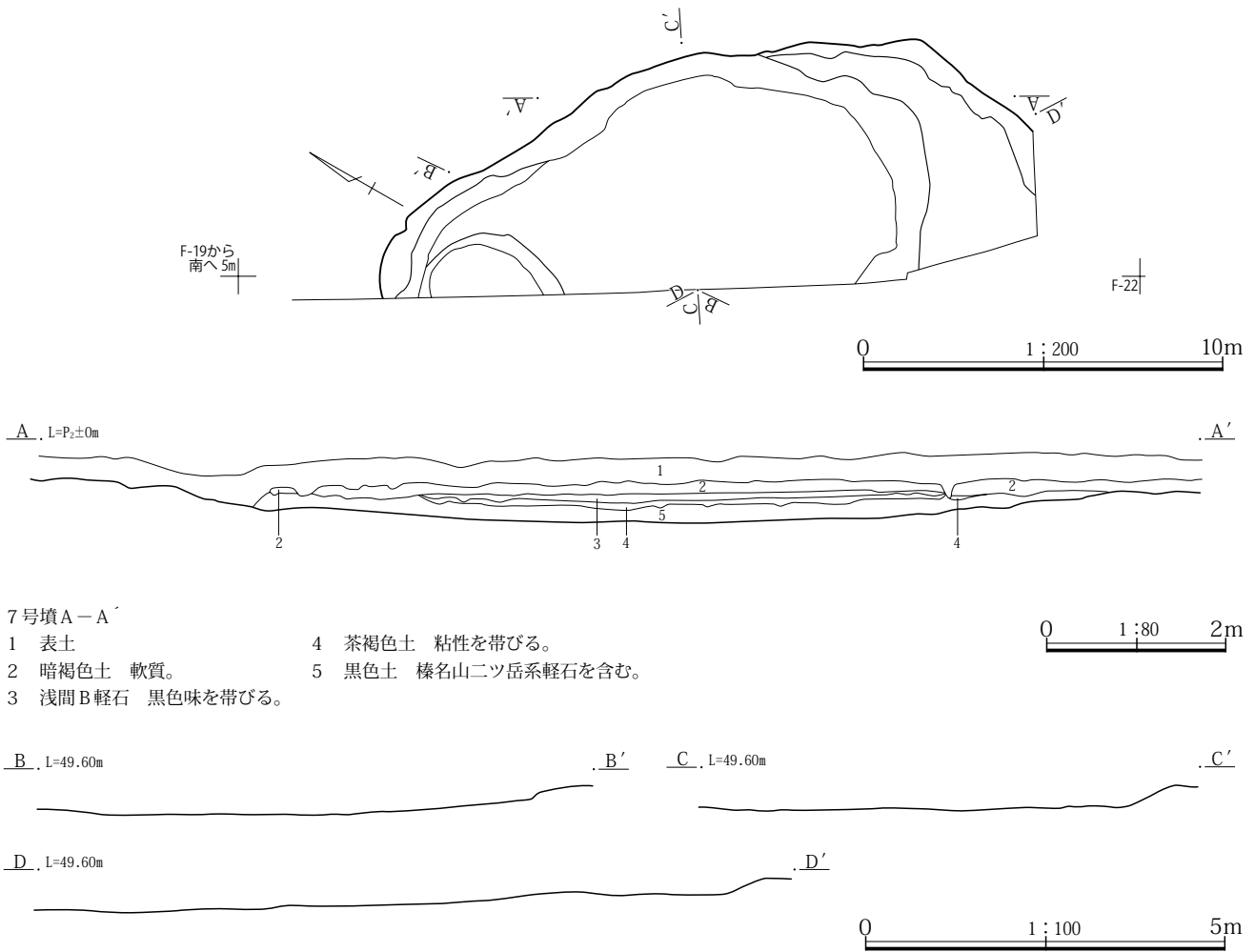


6号墳D-D'

- 1 暗褐色土 耕作土。
- 2 浅間B軽石 一次堆積。色調は黒色。
- 3 黒褐色土 浅間B軽石と暗褐色土層の混土。
- 4 茶褐色土 粘性が強い。
- 5 黒褐色土 基本土層Iに類似するがやや褐色味が強い。
- 6 暗褐色土 周掘掘削直後に堆積したもののか。



第48図 6号墳断面図



第49図 7号墳平・断面図

側部分で上幅4.75m、下幅2.68m、北側部分で上幅3.61m、下幅1.21mである。周堀内の大半は黒色土が堆積しており、その上層には浅間B軽石が水平に堆積していた。

出土遺物 周堀内から須恵器甕の破片（1）が出土している。また、覆土中と注記のある鉄鏝（2）が出土している。（観P118、写PL.25）

所見 本墳の築造時期について詳細な検討を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。ただし、埋葬主体部が横穴式石室であったと仮定した場合、なぜ、3号墳あるいは4号墳のように掘り方の痕跡が残されていなかったのかが検討を要するところである。

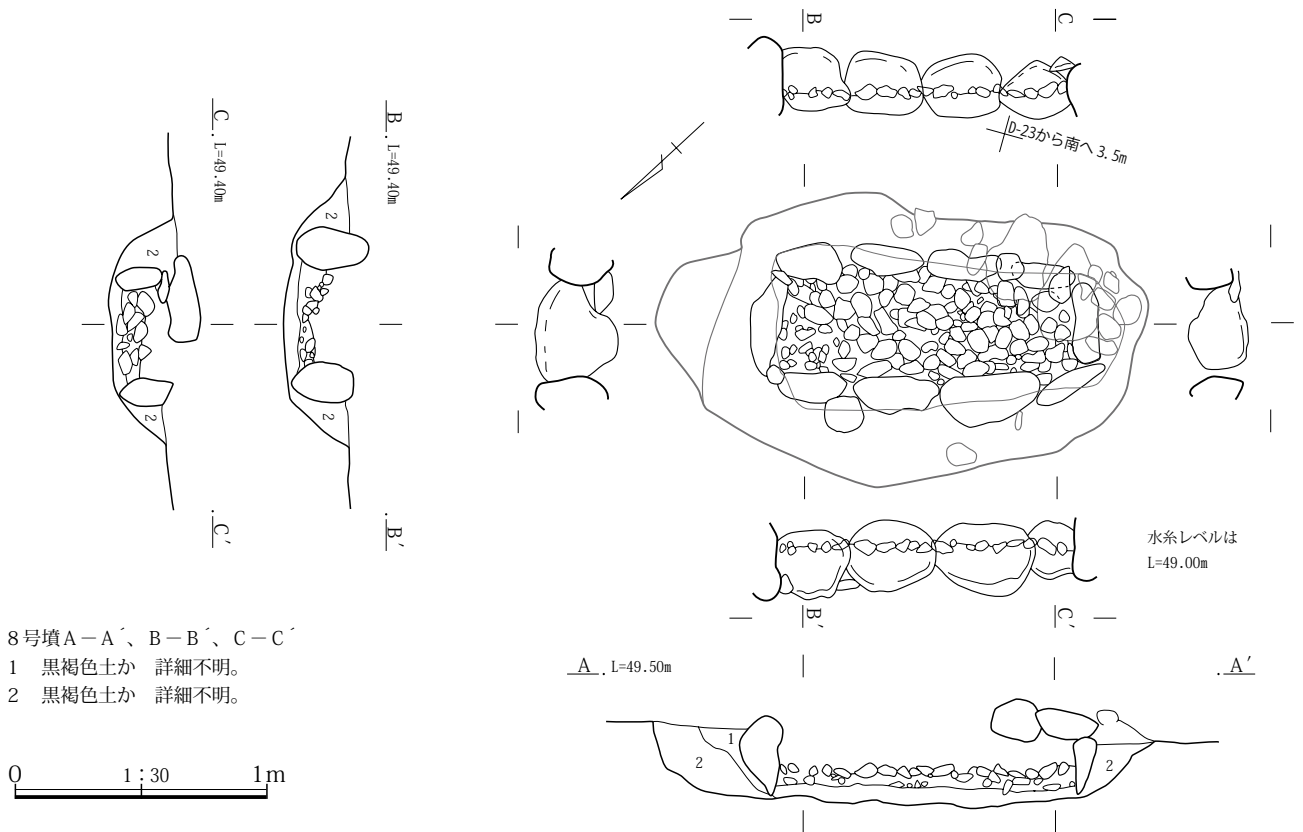
（8）7号墳（第49図、PL.9）

位置 E-20グリッドを中心に位置する。東側に3号墳、北東側に2号墳が近接して築造されている。

墳丘と外部施設 墳形は円墳を呈すると考えられるが、墳丘部分は調査区域外におよんでおり、周堀の一部を検

出したにとどまった。墳丘は既に平夷され、平坦に近い状態にあった。規模については不明である。調査時には周堀を含め直径18.4mを想定している。検出した周堀は東側の一部である。その規模は、東側部分で上幅6.50m前後を測る。深さは西側の土層断面では約0.5mの埋没土の堆積が観察された。底面は西側に徐々に低くなっており、25cm以上のレベル差が認められた。埋没土中には暗褐色土が堆積していたが、その上位には浅間B軽石がほぼ水平に堆積していた。

所見 埋葬主体部は検出されなかった。調査区域外に存在したものと考えられる。出土遺物がまったくなく、築造時期について詳細な検討を行うことは困難であるが、埴輪の出土が認められないことから、7世紀代の築造が想定される。



8号墳A-A'、B-B'、C-C'
 1 黒褐色土か 詳細不明。
 2 黒褐色土か 詳細不明。

第50図 8号墳平・断面図

(9) 8号墳 (第50図、PL.9)

位置 D-23グリッド

墳丘と外部施設 Dラインの東側に南北軸方向に沿って設定した試掘坑の調査に際し、1号墳の横穴式石室から北方向に26mの地点で石槨を構成する礫が検出された。石槨は直接耕作土直下に堆積した暗褐色土で覆われており、墳丘の盛土は確認できなかった。また、周囲には周堀の掘り込みも検出されなかった。

主体部の構造 4壁に川原石を用いた竪穴式小石槨である。主軸の方向はN-40度-Eである。石槨の内法は長軸1.18m、短軸0.32~0.35m、高さ0.2mを測る。

壁面は何段構成であったかは不明であるが、検出部分においては、長側壁、短側壁とも川原石の広い面を石槨の内側に向けて連ねている。川原石の大きさは横幅30cmから40cm、高さ30cm前後である。北側の長側壁は4石の礫が長軸を横方向にして置かれている。南側の長側壁も4石の礫が北側と同様に置かれている。南側は西側寄り壁石の間隙に小礫を落とし込むように重ねていた。短側壁は各々1石で構成されている。側壁の構築はまず短側壁の根石を置いた後に長側壁の礫を順次置いていると考えられる。長側壁と短側壁の接点は口型と考えられる。

底面には厚さ5から7cmの黒色土の上に直径5から10cmの小円礫が敷き詰められていた。

本石槨は、平面長円形を呈する土坑を掘り方としてその中に据えられていた。掘り方の断面形状は、幅の狭い底面に、斜め上方に向かって立ち上がる壁面を伴うものである。規模は、上面の長軸が2.00m、短軸が0.98m、底面の長軸が1.50m、短軸が径0.60mである。残高は0.28mである。石槨の裏込には礫は用いられず、土粒が充填されていた。

備考 本古墳は調査時に2号石組と呼称されていたものである。

所見 南西部分では壁面を構成していた礫の上に礫2石が重なった状態で検出された。この礫は蓋石である可能性が考えられるものの両側壁を架け渡す状態でなかったことが検討を要する点である。原位置から南側にずれた状態で検出されたものであろうか。

本墳は同時に検出された他の古墳が周堀を有し、盛土を有する構造であるのに対し、1基のみ構築状況を異にしている。出土遺物が認められないことから築造時期を判断することが困難である。7世紀代の築造であろうか。

2 竪穴住居

(1) Dトレンチ1号住居 (第51図、PL.10)

位置 D-1・2グリッド (I区)

形状 長方形を呈すると考えられるが、北西隅と東壁の一部を検出しただけで、全体形状を把握することはできなかった。東西長5.25mを測る。残存壁高は東壁で30cmである。

方位 N-33° -W

埋没土 黒褐色土が堆積していた。混入物、粘性の相違

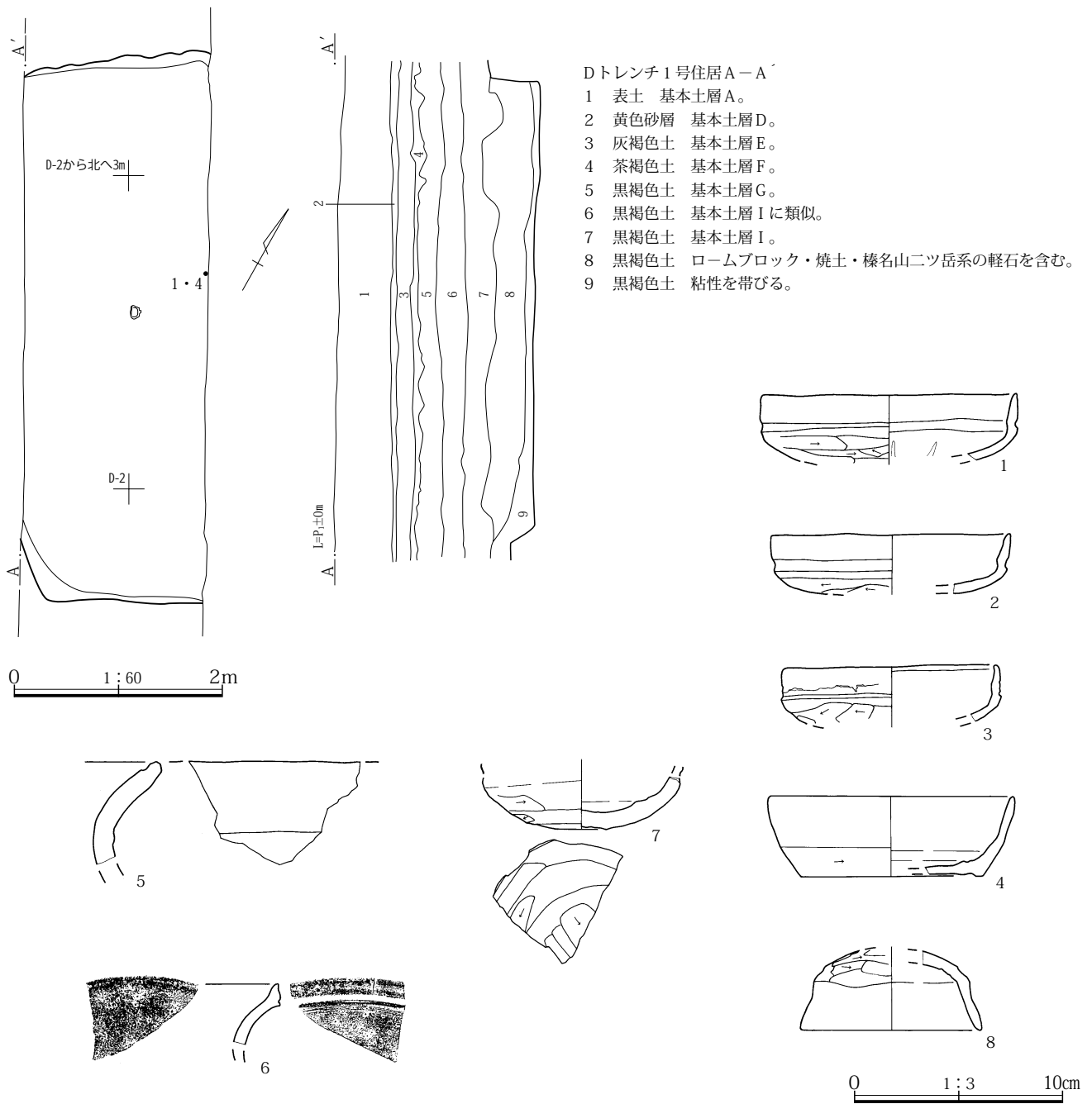
ら2層に分層された。

床面 ほぼ平坦面をなしていた。中央から東壁にかけてやや硬い面が見られた。

出土遺物 須恵器坏 (4) 床面から17cm、土師器坏 (1) は25cmといずれも埋没土中からの出土である。(観P 118、写PL.25)

備考 竈・貯蔵穴・周溝・柱穴 検出されなかった。

所見 出土遺物から7世紀前半の所産と考えられる。須恵器坏 (4) は8世紀代の所産と考えられ、混入品の可能性が高い。



第51図 Dトレンチ1号住居と出土遺物

第3節 奈良・平安時代の遺構とその出土遺物

1 竪穴住居

(1) 概要

竪穴住居はⅠ区で2軒、Ⅲ区で1軒の合計3軒を確認することができた。住居は北側あるいは西側に沖積地を臨む微高地縁地に位置していたものと考えられる。Ⅰ区の2軒は調査工程との関係から、試掘坑の調査で検出した部分のみの記録である。Ⅲ区の1号住居は遺構全体を確認することができた。

(2) 1号住居 (第52図、PL.10)

位置 F-15グリッド (Ⅲ区)

重複 1号掘立柱建物の柱穴に後出する。

形状 東西方向に長軸を有する長方形を呈する。四辺は

直線を指向するが、四隅は丸みを帯びている。規模は、東西3.55m、南北2.94mを測る。壁面はやや外方に向かって立ち上がる。残存壁高は22から28cmである。

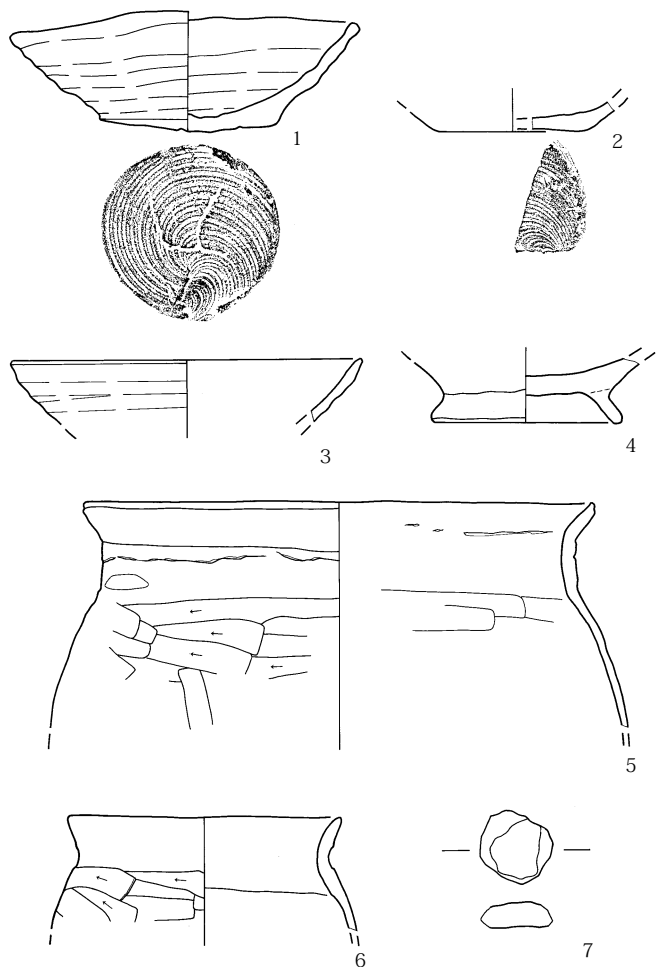
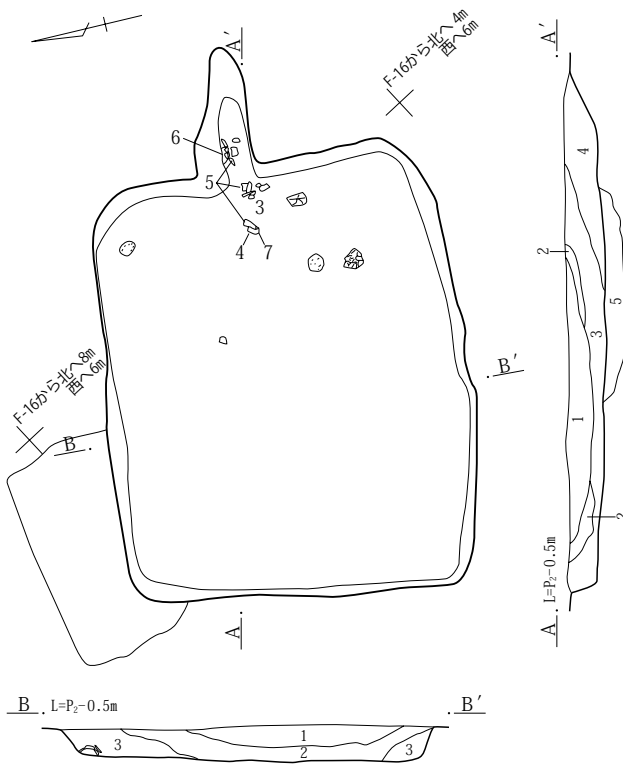
面積 8.58m² **方位** N-84°-W

埋没土 暗褐色土、黒褐色土がレンズ状に堆積しており、4層に分層された。

竈 東壁の中央からやや北側寄りに位置する。燃烧部の幅は狭く、住居の壁面を掘り込んで構築されている。袖は残存していない。残存長は115cm、下端の幅は40cmである。焼土が散在していた。

床面 竈焼き口部から床面中央寄りにかけて、深さ14cmの床下土坑が存在しており、ロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 竈燃烧部内と焼き口部の手前から土器が出土している。竈燃烧部内からは土師器小型甕(6)、埴と考えられる須恵器(3)が出土している。また、土師器



1号住居A-A'、B-B'

- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色ローム質土
- 3 暗褐色土
- 4 暗褐色土 黒褐色土層、焼土を含む。
- 5 黒褐色土 ロームブロックを含み、しまる。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第52図 1号住居と出土遺物

甕(5)は竈内と竈手前から出土した破片が接合したものである。須恵器環(1)は埋没土中からの出土である。土師器片からの二次加工品と考えられる小片(7)も竈の手前からの出土である。須恵器環(2)は床下土坑からの出土である。(観P119、写PL.26)

備考 貯蔵穴・周溝・柱穴は検出されなかった。

所見 出土遺物から9世紀中頃の所産と考えられる。

こもあみ石状の円礫が出土している。

(3) Bトレンチ1号住居(第53・54図、PL.10)

位置 B-2グリッド(I区)

形状 長方形を呈すると考えられるが、北壁、南壁の一部を検出しただけであることから全体形状を把握することはできなかった。東西長4.62mを測る。壁面の立ち上がりは外傾著しいものである。西壁の残存高は49cmである。西壁際には周溝が設けられていたようであるが詳細は不明である。

方位 N-23° 30' -W

埋没土 黒褐色土が堆積している。混入物により分層された。

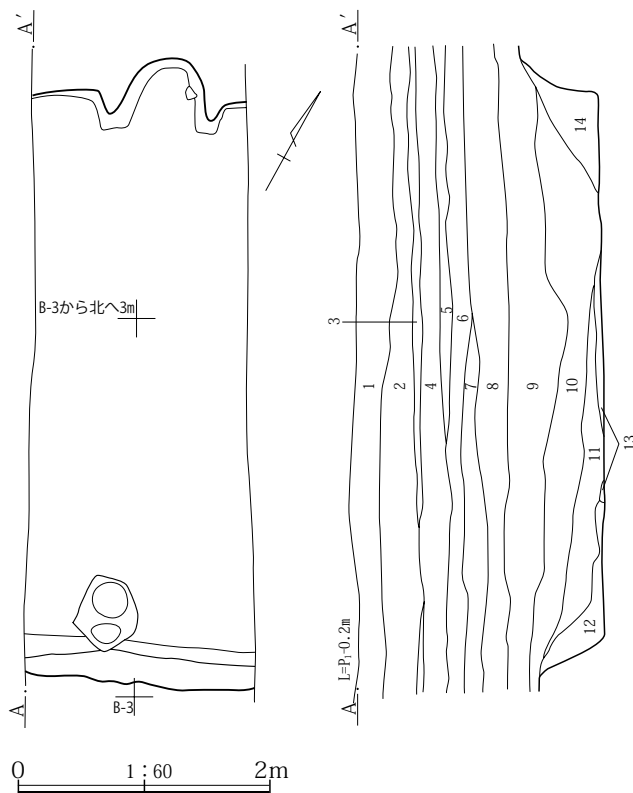
竈 東壁に位置する。焼部は焚き口部を住居内に置き、住居の壁面を掘り込んで構築されている。袖部は左右の基部が残存していた。残存長は60cmである。焚き口部の幅は60cmと広い。

床面 ほぼ平坦面をなしていた。

出土遺物 竈内および竈手前から土器が出土したことが記録されているが現存する資料との照合ができなかった。埋没土中からは土師器環(7)・甕(9)などが出土している。(観P119、写PL.26)

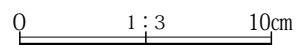
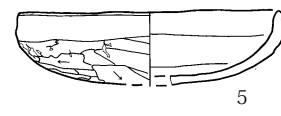
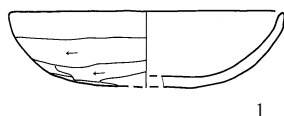
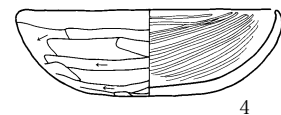
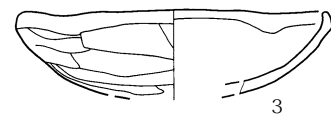
備考 貯蔵穴・周溝・柱穴 検出されなかった。西壁際で検出したピットは住居の床面から28cm掘り下げられていた。本住居との関係は判然としなかった。

所見 出土遺物から8世紀前半の所産と考えられる。

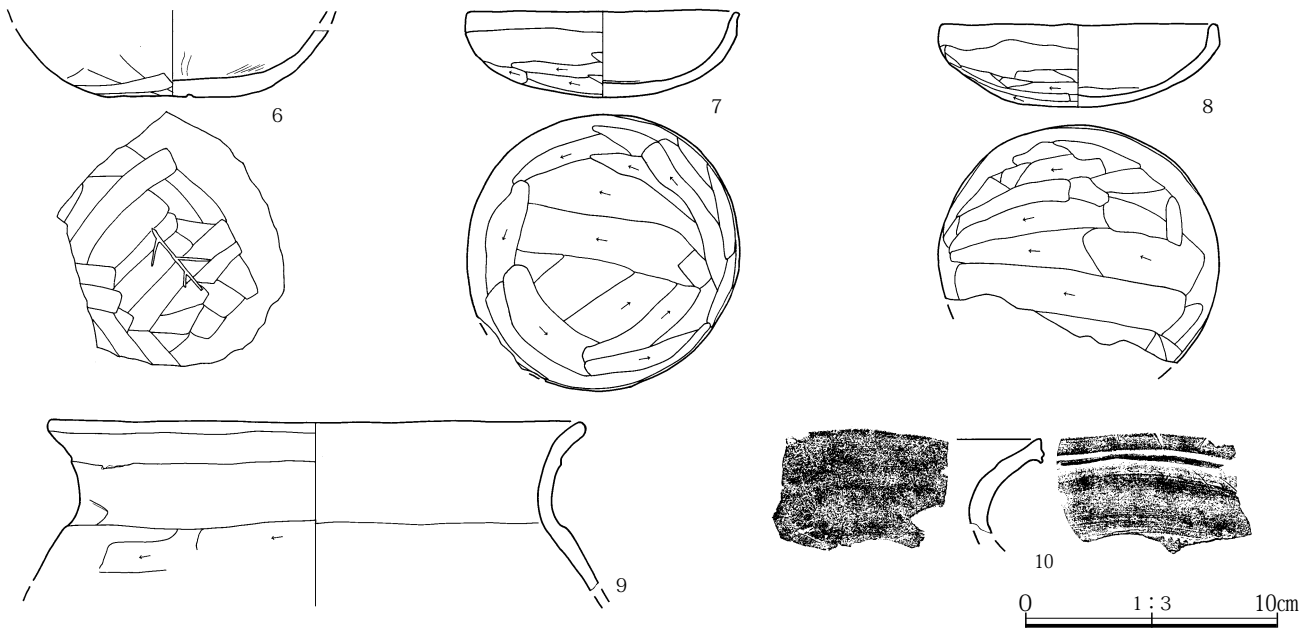


Bトレンチ1号住居

- 1 表土 基本土層AとBの混土。
- 2 灰褐色土 基本土層C。
- 3 黄色砂層 基本土層D。
- 4 灰褐色土 基本土層E。
- 5 茶褐色土 基本土層F。
- 6 黒褐色土 基本土層G。
- 7 黒褐色土
- 8 黒褐色土
- 9 黒褐色土 基本土層Iに類似。焼土・炭化物を混入。
- 10 黒褐色土 基本土層Iに類似。黄色ブロックを混入。
- 11 黒褐色土 基本土層Iに類似。黄色ブロックを混入。
- 12 黒褐色土 基本土層Iに類似。黄色ブロックを混入。
- 13 黒褐色土 基本土層Iに類似。
- 14 黒褐色土 9層に類似。焼土の混入量を増す。



第53図 Bトレンチ1号住居と出土遺物(1)



第54図 Bトレンチ1号住居出土遺物(2)

(4) Bトレンチ2号住居(第55・56図、PL.10)

位置 B-3グリッド(I区)

形状 長方形を呈すると考えられるが、南壁および南東・南西の両隅を検出するにとどまったことから全体形状を把握するにいたらなかった。東西長、4.98cmを測る。壁面の立ち上がりは直立に近い状況である。残存高は41cmを測る。壁際には幅25から30cmの周溝が巡っていた。

方位 N-16°-W

埋没土 黒褐色土が堆積していた。混入物の相違により分層された。

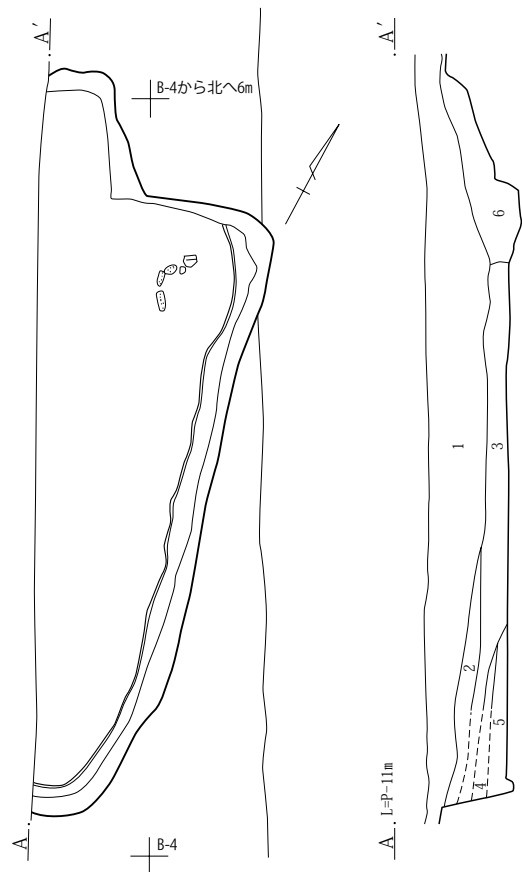
竈 南東隅寄りの東壁に位置する。燃烧部は住居の壁面を掘り込んで構築されている。残存長は100cmを測る。

床面 ほぼ平坦な面をなしていた。

出土遺物 南東隅寄りの床面上から長径10から20cmの自然礫3点が出土している。これに接し土師器甕の破片が出土したが資料化に足るものではなかった。埋没土中から盤と考えられる須恵器(2)、土師器环(1)・甕(3)などが出土している。(観P119、写PL.26)

備考 貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。

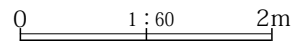
所見 出土遺物から8世紀前半の所産と考えられる



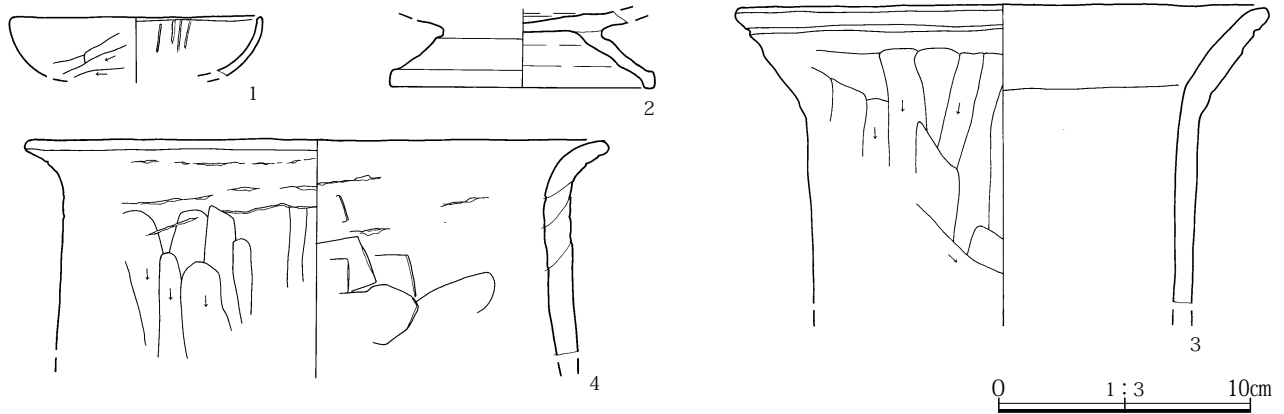
Bトレンチ2号住居A-A'

- 1 黒褐色土 基本土層Iに類似するがこれよりも黒味強く、焼土の混入量も増す。
- 2 黒褐色土 1層よりもロームブロック混入量を増す。
- 3 黒褐色土

- 4 黒褐色土 1層に類似する。
- 5 黒褐色土 2層に類似する。
- 6 黒褐色土 竈燃烧部埋没土。焼土を多量に含む。



第55図 Bトレンチ2号住居



第56図 Bトレンチ2号住居出土遺物

2 掘立柱建物

(1) 概要

Ⅲ区のEラインに設定した試掘坑において柱穴を検出した。周辺部分に調査範囲を拡張したところ2棟の掘立柱建物の柱穴痕を検出した。2棟は約18mの間隔を置いて立てられていたが、棟の方向はほぼ同一である。

(2) 1号掘立柱建物(第57図、PL.11)

位置 F-13グリッド(Ⅲ区)

形状 3×3間の総柱の建物である。規模は南北5.25m(西辺)、東西5.14m(南辺)を測る。長辺を桁行、短辺を梁行とすれば南北棟とすることができる。柱間は掘り方の心々間を測定するとばらつきが大きいものであった。北辺とその南側の東西列の柱間はいずれも2mを超えるもので、他の柱間と比較して間隔が長いものであったが、北辺の柱穴も良好な掘り方であることから、庇が付設されたものとは考えがたいものである。

周辺から数本の小ピットを検出したが、本遺構に直接関係するものではないと考えられる。

方位 N-8°-W(南北方向)

柱穴 掘り方の平面形は隅丸長方形を基本としているが一樣ではなかった。ピットD・K・M・Nは小型で長円形であった。長径は82cmから126cmである。深さはDが27cmと浅かった他は47cmから92cmであった。ピットA・Bなどを見ると確認面の一方に浅い溝状の掘り込みが付随しており、底面が二段になっていた。

埋没土は土層断面図にあるように暗褐色土・黒褐色土と地山の褐色ローム土の混土・灰褐色土・黒色土の4層に大別して把握されている。

各柱穴の土層断面と平面図には掘り方底面に柱痕の存

第2表 1号掘立柱建物計測値

建物全体規模	3×3間			面積	27.87㎡	
主軸方向	N-8°-W			庇	なし	
桁・梁行の規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次柱穴との間隔(m)
		長さ	幅	深さ		
東辺5.50	A	110	69	54	隅丸長方形+	2.08 → B1.85
	C	102	66	47	隅丸長方形+?	1.52 → D2.02
	E	126	88	73	隅丸長方形+?	1.95 → F1.72
南辺5.14	G	100	84	57	隅丸長方形	1.94
	H	128	80	64	隅丸長方形	1.60 → F1.30
	O	112	68	65	隅丸長方形	1.64 → M1.68
西辺5.25	P	110	88	64	隅丸長方形	1.52
	N	102	96	57	長方形?	1.80 → M1.92
	L	84	46	58	隅丸長方形+	2.00 → K1.73
北辺5.00	J	120	42	61	隅丸長方形+	1.69
	I	92	56	62	隅丸長方形+	1.48 → K2.22
	B	130	56	66	隅丸長方形+	2.02
	D	60	38	27	長円形	1.96
	F	108	100	92	長円形?	1.60
	M	82	54	60	長円形	1.51
	K	126	50	60	長円形+	1.53

在を意識した記録が残されている。これによると、ピットH・J・O・Pなどでは直径約20cmの柱材の存在が想定されている。柱痕と想定された部分には暗褐色土が堆積していた。Hの土層断面からは柱の立て替えがあったことも考えられるが判然としなかった。

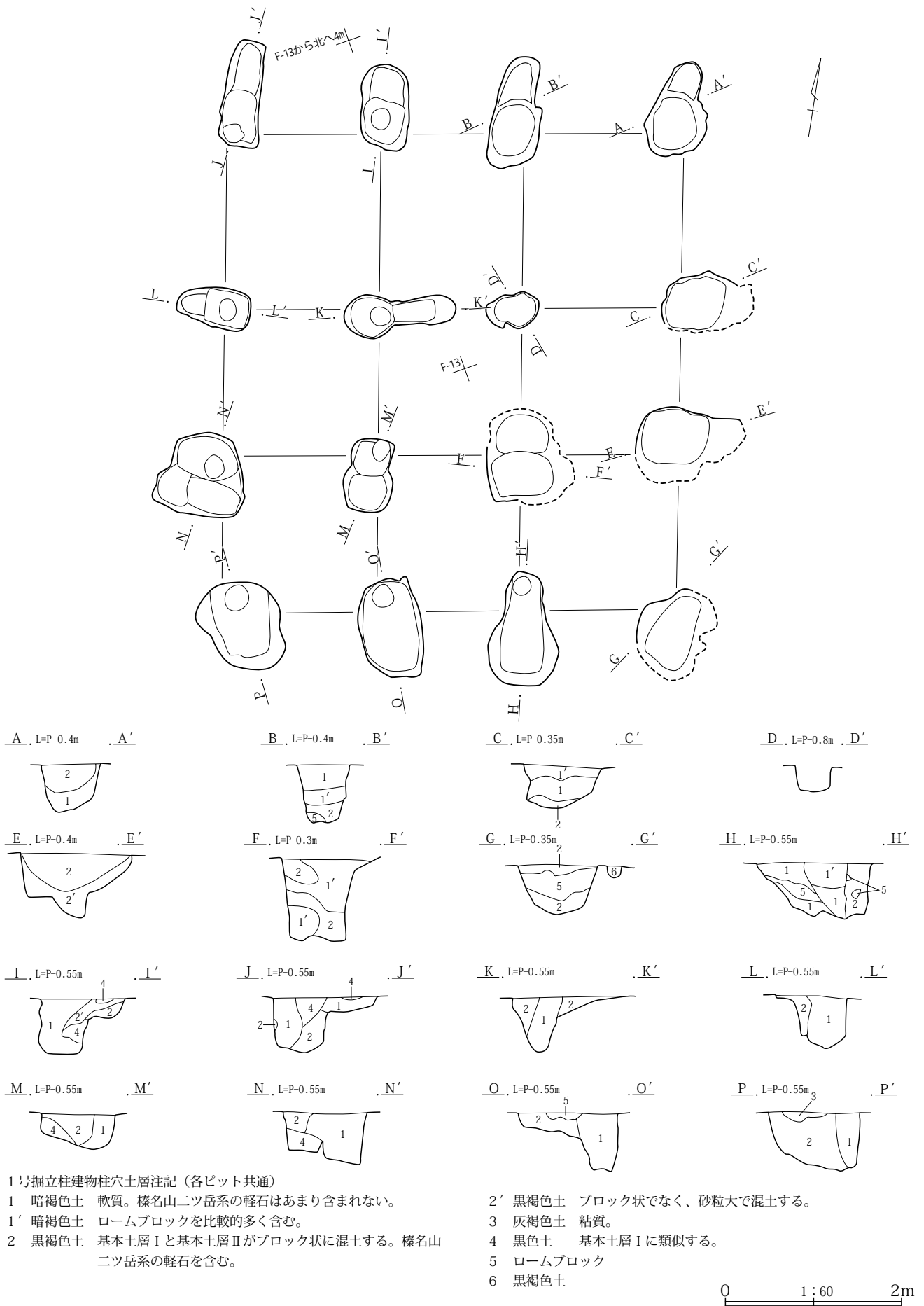
備考 出土遺物は認められなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明である。1号住居と重複関係にあることから9世紀中頃以前の所産と考えられる。掘り方の状況、周辺遺跡で検出されている掘立柱建物の年代から古代の遺構として報告する。

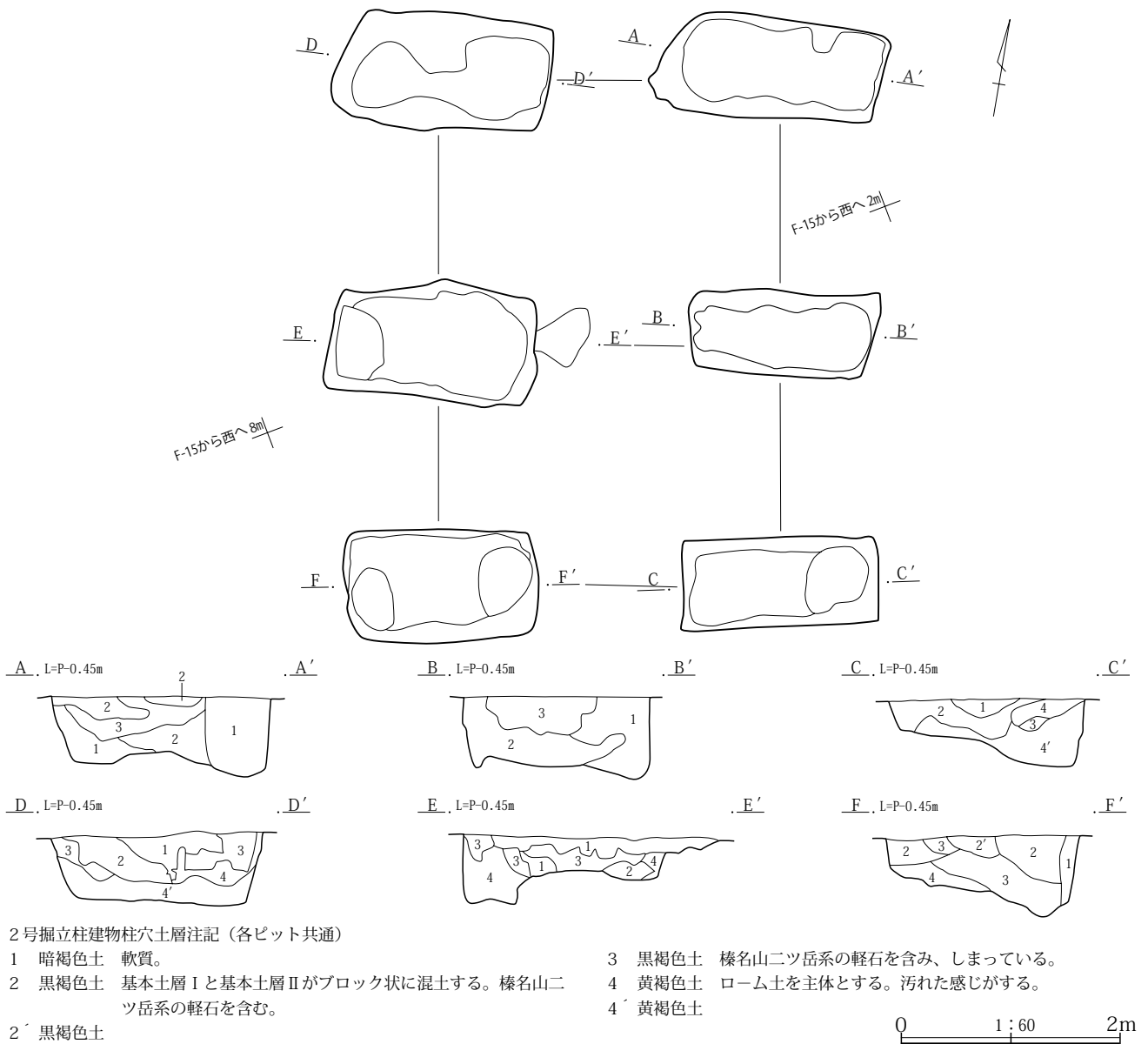
(3) 2号掘立柱建物(第58図、PL.11)

位置 F-15グリッド(Ⅲ区)

重複 1号住居とピットCが重複する。1号住居が後出である。



第57図 1号掘立柱建物



第58図 2号掘立柱建物

形状 2×1間の南北棟である。規模は南北4.22m、東西4.66mを測る。桁行の柱間は4.24mで、梁行よりもやや狭いものであった。

方位 N-10° 30' -W (南北方向)

柱穴 東西方向に長軸を有する長方形を基本とした掘り方を有していた。6本とも比較的明瞭な掘り方であった。規模は、長辺が172cmから202cm、短辺が78cmから108cmである。深さは62cmから74cmである。底面は全体が平坦のものと、一方が低くなり、段をなすものが見られた。

埋没土は上層から暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土の順に堆積していたが、個々に状況は異なっていた。堆積状況からは柱の立て替えや柱痕の存在が確認できるものはなかった。

備考 出土遺物は認められなかった。

所見 詳細な掘削時期は不明であるが1号掘立柱建物に前後する時期を想定したいと考える。

第3表 2号掘立柱建物計測値

建物全体規模	2×1間			面積	14.35㎡		
主軸方向	N-10° 30' -W			底	なし		
桁・梁行の規模 (m)	柱穴No.	規模 (cm)			形状	次柱穴との間隔 (m)	
		長さ	幅	深さ			
東辺4.60	A	202	96	72	長方形	2.40	
	B	172	78	74	長方形	2.20	→ E 4.40
南辺4.22	C	178	82	62	長方形	4.24	
西辺4.80	F	174	104	74	長方形	2.35	
	E	190	108	62	長方形	2.32	
北辺4.20	D	192	102	66	長方形	4.20	

第4節 中・近世の遺構とその出土遺物

1 近世墓

(1) 概要

1号墳の調査に際し、その範囲を確認するために設定されたDラインの試掘坑内で3号近世墓を検出した。その後、3号近世墓の西側約1.4mで1号近世墓を、東側約1.7mで2号近世墓を検出、1号墳南側周堀の外縁部分から合計3基の墓を検出することとなった。調査時には周辺に人家はなく、猿楽地区の集落との距離は70から80mであった。

(1) 1号近世墓 (第59図、PL.12)

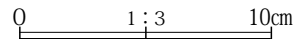
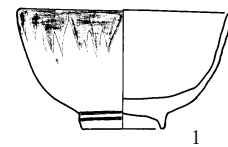
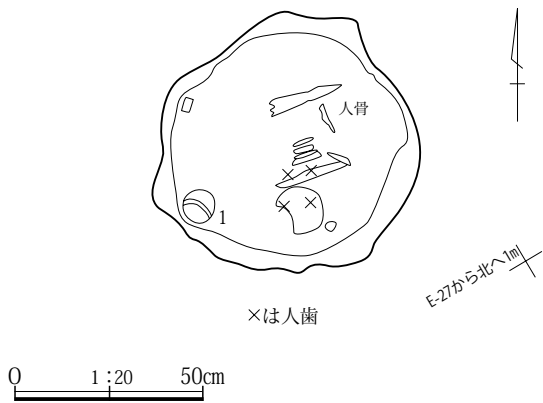
位置 E-26グリッド (IV区)

形状 掘り方の平面形は円形を基本としていたと考えられる。規模は直径0.66mを測る。残存高は約20cmである。掘り方の中央から南側寄りに頭蓋骨をはじめとした人骨の一部と人歯が残存していた。

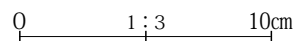
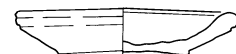
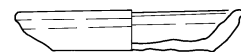
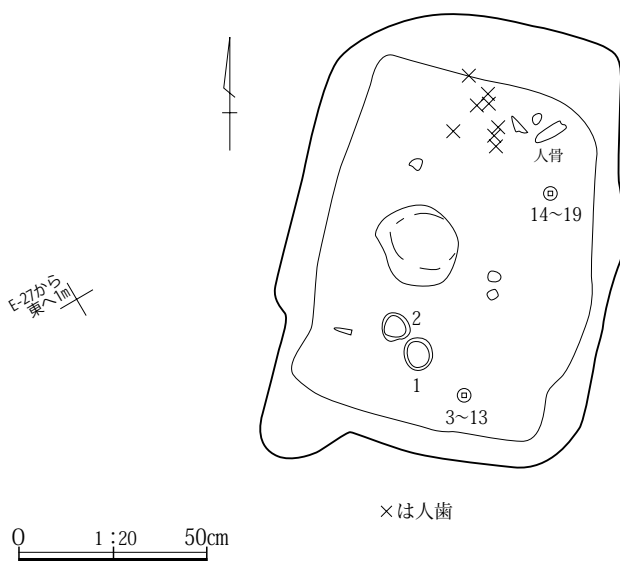
出土遺物 遺体とともに陶磁器、漆器がが副葬されていた。南側寄りから皿が、西壁寄りから皿が、南西壁寄りから磁器碗(1)出土している。(観P119、写PL.26)

備考 本墓から出土した人歯については生物考古学研究所に分析を依頼した。その結果については第3章第2節に掲載してある。

所見 座棺に埋葬されたとされる。江戸時代、18世紀前半以降の所産である。



第59図 1号近世墓と出土遺物



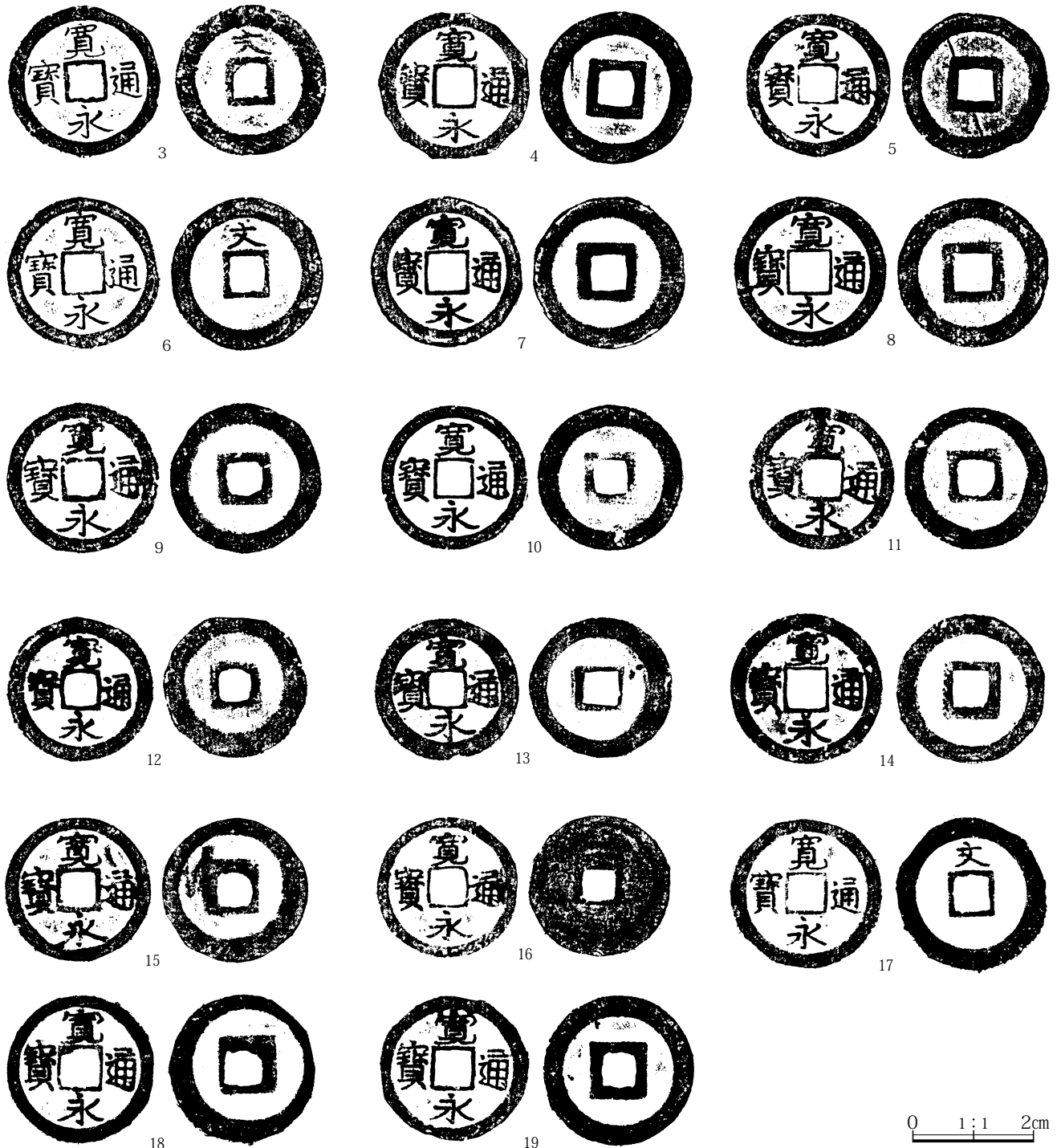
第60図 2号近世墓と出土遺物(1)

(2) 2号近世墓 (第60・61図、PL.12)

位置 D-27グリッド (IV区)

形状 平面形は、南北に長軸を有する。隅丸長方形を呈していた。規模は南北1.15m、東西0.86mである。残存高は約10cmである。底面はほぼ平坦である。中央やや西側寄りから直径22cmの礫が出土している。掘り方の北側寄りを中心に人骨の一部と人歯が出土したが所在不明である。

出土遺物 礫の南側から皿(1・2)が口縁部を上にして出土している。礫の北側からは漆が出土したことが記録されている。寛永通宝は2箇所から検出されたが、いずれも複数枚が錆化して固着した状態で出土している。17枚を採拓して報告した(3~17)。釘の出土も記録されているが所在は不明である。(観P120、写PL.26・27)
所見 座棺に埋葬されたと考えられる。江戸時代、新寛永通宝の鑄造開始(1668年)以降の所産である。



第61図 2号近世墓と出土遺物(2)

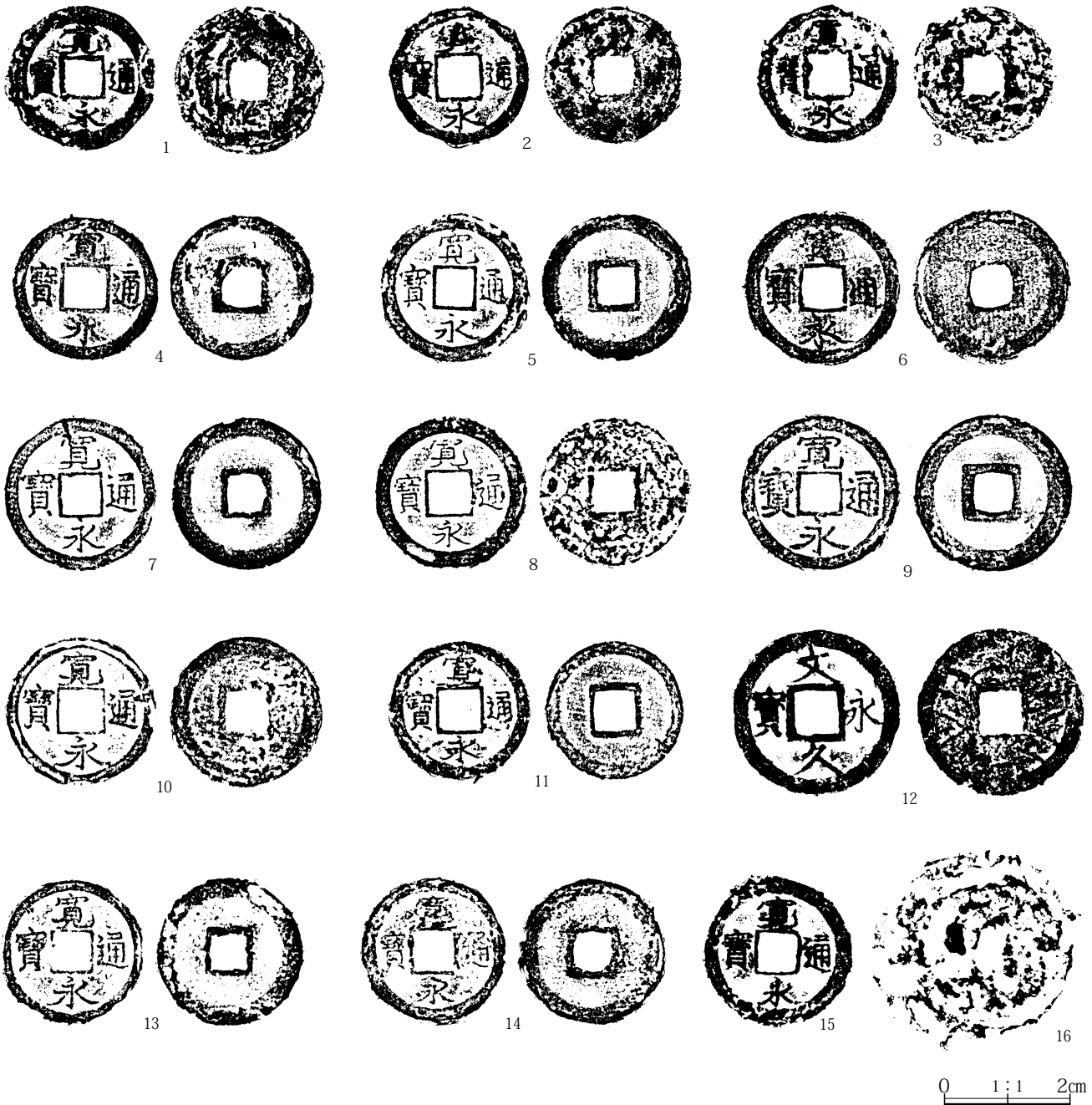
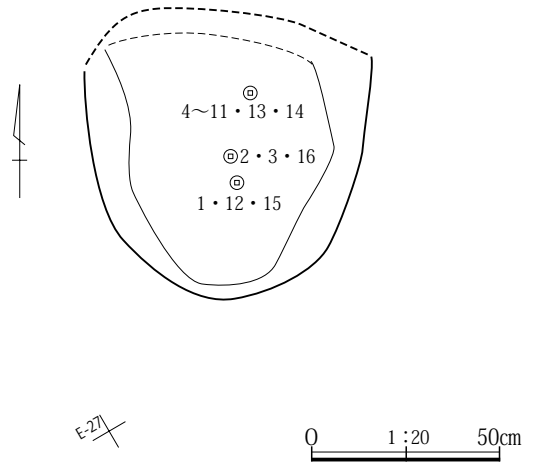
(3) 3号近世墓 (第62図、PL.12)

位置 D-26グリッド (IV区)

形状 北側が削平を受けていたため全体形状を知ることができなかつた。円形を基本としていたか。南北の残存長は0.70m、東西の最大幅は0.86mである。残存高は約20cmである。人骨・人歯の出土は見られなかつた。

出土遺物 3箇所から寛永通宝 (1~11・13・14・15)、文久通宝 (12)、鉄銭 (16・枚数不詳) が出土している。(観P120、写PL.27)

所見 江戸時代、文久永寶鑄造開始 (1862) 年以降の所産である。



第62図 3号近世墓と出土遺物

第5節 時期不明の遺構とその出土遺物

1 溝

(1) 概要 本項ではⅠ区からⅢ区にかけて試掘坑の調査を実施した過程で検出した溝9条について報告する。これらの溝は出土遺物がなく、基本土層との関係は把握できたものの詳細な掘削時期を明らかにすることは困難であった。具体的な機能、用途も不明である。なお、遺構名称は整理作業時に付したものである。

(2) Ⅰ区1号溝(第63図)

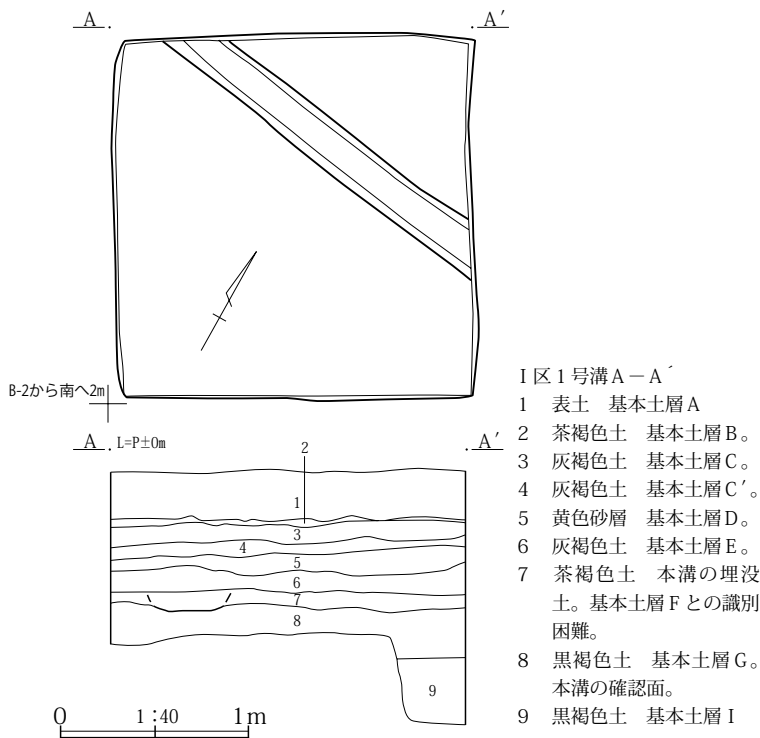
位置 A-2グリッド

形状 A-2グリッドの南西隅で検出され、東西方向に直線的に延びていた。検出長は2.08m、幅は0.24mである。残存状況は劣悪で、わずか6cmの掘り込みが検出されただけである。

方位 N-81°-W

埋没土 茶褐色土の基本土層Fを確認面とし、黒褐色土の基本土層Gを掘り込んでいたが埋没土は基本土層Fとの識別が困難であった。流水の有無は確認されていない。

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。区画溝



第63図 Ⅰ区1号溝

の可能性も考えられる。

(3) Ⅱ区1号溝(第64図、PL.12)

位置 A-12グリッド

形状 A-12グリッドの南西部分で検出され、東西方向に延びていた。直線的に延長されると考えられるが検出長が4.52mであり、全体の状況は想定できない。最大幅は2.58mである。壁面は斜め上方に向かって立ち上がるもので、残存高は52cmであった。

方位 N-68°-W

埋没土 粘土を混入する砂質土が堆積していた。流水があった可能性が考えられる。

所見 2号溝に後出する。出土遺物もなく、掘削時期については不明である。

(4) Ⅱ区2号溝(第64図、PL.12)

位置 A-12グリッド

形状 A-12グリッドの南西部分で検出された、東西方向、1号溝にほぼ平行するように延びていた。

方位 N-71°-W

埋没土 粒径の細かい砂粒が堆積していた。流水があった可能性が考えられる。

所見 3号溝に後出、1号溝より前出である。出土遺物もなく、掘削時期は不明である。

(5) Ⅱ区3号溝(第64図、PL.12)

位置 A-13グリッド

形状 A-13グリッドの北東部分で検出された。平面的には北側の立ち上がりを一部検出しただけであるが、土層断面で南側の壁面、2号溝との関係が確認できた。

方位 N-78°-W

埋没土 下層に粒径の粗い砂粒が堆積していた。流水があった可能性が考えられる。

所見 2号溝に前出する。出土遺物もなく、掘削時期は不明である。

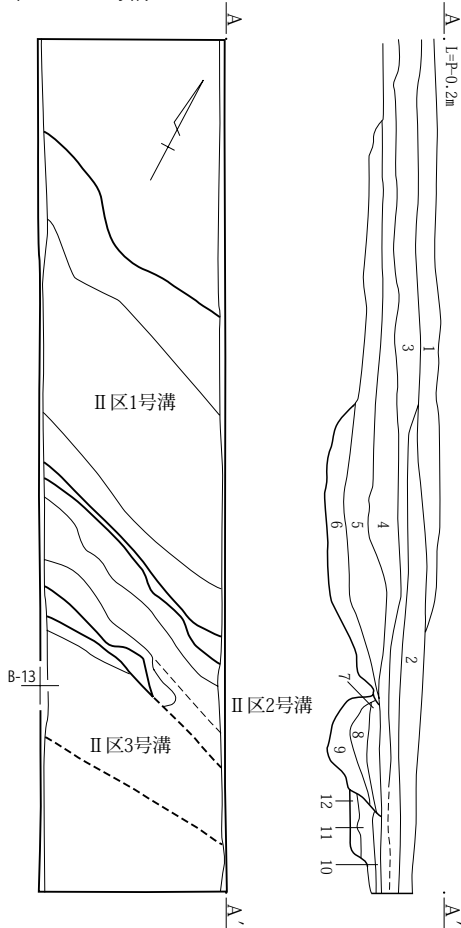
(6) Ⅱ区4号溝(第64図、PL.12)

位置 B-9グリッド 方位 N-22°-W

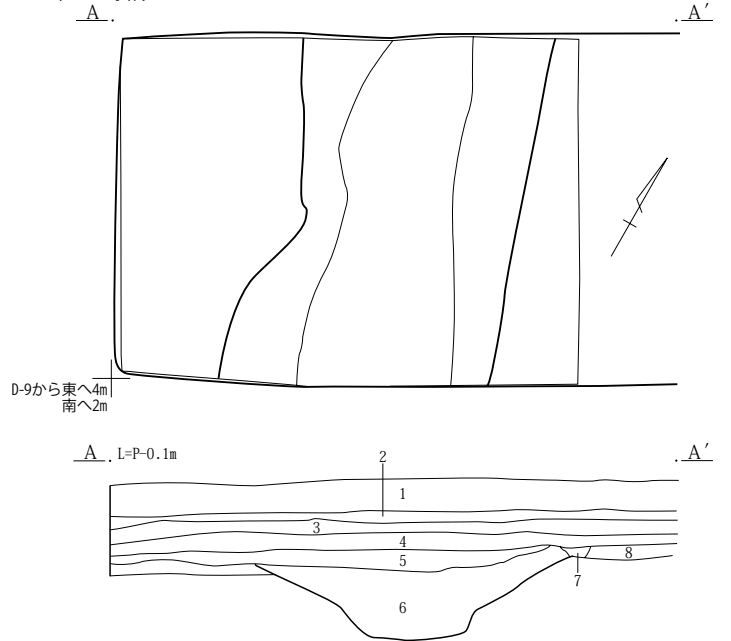
形状 南北方向の溝である。長さ1.84mを確認しただけである。幅は1.52mで、東縁は直線的であるが、西縁は出入りが大きい。断面形は箱葉研に近い形状で、中位以上は外傾著しく立ち上がる。残存高は0.36cmである。

埋没土 基本土層Iを確認面とし、黒色土が堆積していた。流水の有無は確認されていない。

Ⅱ区1～3号溝



Ⅱ区4号溝



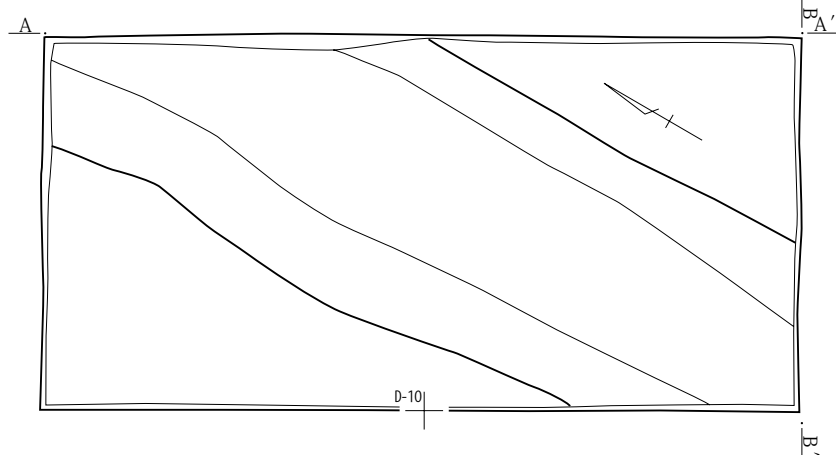
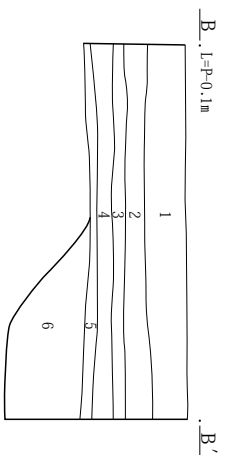
Ⅱ区1～3号溝A-A'

- 1 表土 基本土層A。
- 2 茶褐色土 基本土層B。
- 3 灰褐色土 粘質。
- 4 茶褐色土 2層に類似する。
- 5 砂質土 粘土を混入する。
- 6 砂質土
- 7～9 粒径の細かい砂層
- 10 灰褐色土 基本土層C。
- 11・12 粒径の粗い砂層

Ⅱ区4号溝A-A'

- 1 表土 基本土層A。
- 2 茶褐色土 基本土層B。
- 3 灰褐色土 基本土層C。
- 4 黄色砂層 基本土層D。
- 5 灰褐色土 砂質。
- 6 黒色土 上層は鉄分を含む。砂質分強い。下層は黒色味の強く粘質。
- 7 砂層 鉄分を多量に含む。
- 8 灰褐色土 粘質。

Ⅱ区5号溝



Ⅱ区5号溝A-A' B-B'

- 1 表土 基本土層A。
- 2 茶褐色土 基本土層Bと基本土層Cの混土。
- 3 黄色砂層 基本土層D。
- 4 茶褐色土 基本土層F。
- 5 黒褐色土 基本土層G。
- 6 灰褐色土 砂質分が強い。

第64図 Ⅱ区1～5号溝

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。

(7) II区5号溝 (第64図、PL.12)

位置 C-9・10グリッド

形状 南北方向の溝である。検出長は4.34m、幅は1.50mである。断面形は箱葉研形を呈している。直線的に延びており、II区4号溝と同一遺構と考えられる。

方位 N-2°-W

埋没土 灰褐色土が堆積していた。流水の有無は確認できなかった。

所見 II区6号溝が埋没した後にほぼ同じ方向に掘削されている。出土遺物もなく、掘削時期は不明である。

(8) II区6号溝 (第65図、PL.12)

位置 C-9・10グリッド

形状 南北方向に直線的に延びる溝である。検出長は3.55m、幅は0.49mである。断面形は平坦な底面から斜め上方に向かって立ち上がるものである。残存高は13cmである。

方位 N-1°-E

埋没土 基本土層IIを掘り込んでいた。下層に砂利層が堆積、その上を基本土層Iが覆っていた。流水のあった可能性が考えられる。

所見 基本土層との関係からすると古墳時代の所産となる可能性もあるが、出土遺物もなく、詳細な掘削時期は

不明である。

(9) III区1号溝 (第66図)

位置 E-12グリッド

形状 南北方向に直線的に延びる溝である。検出長は2.34m、幅は0.40mである。断面形は箱形を呈するもので、残存高は32cmである。

方位 N-3°-W

埋没土 基本土層Iを掘り込み、基本土層Fに覆われている。基本土層Iに類似する黒褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。E-12-1グリッド、E-12-8グリッドの試掘坑においても溝を検出したことが略記されており、本溝が北方向に延びていたことが考えられる。

(10) III区2号溝 (第66図)

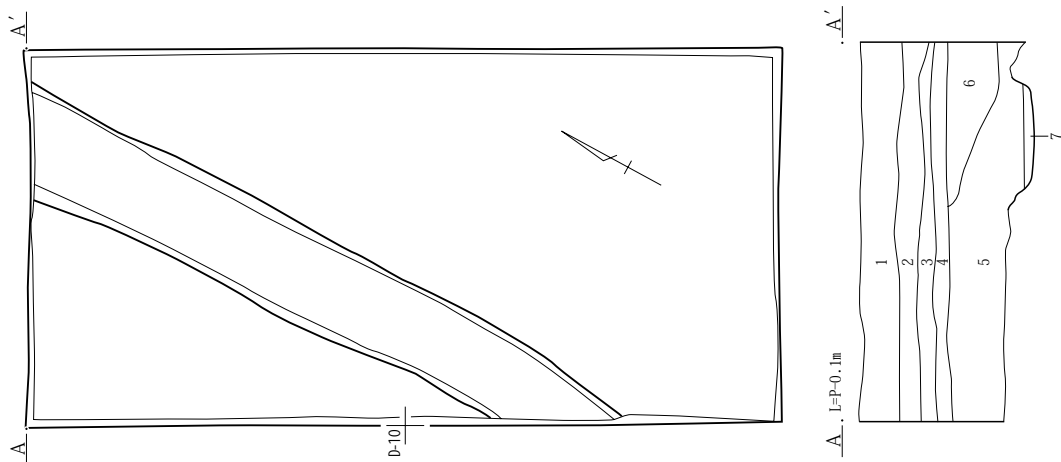
位置 E-11グリッド

形状 南北方向の溝である。検出長は1.10mである。基本土層Iを掘り込んでいるが、確認面の関係から底面間近部分を検出した。土層断面の観察からは幅0.90m、残存高32cmを測ることができた。

方位 N-11°-E

埋没土 詳細は不明であるが最下層に砂利が堆積していた。流水があった可能性が考えられる。

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。



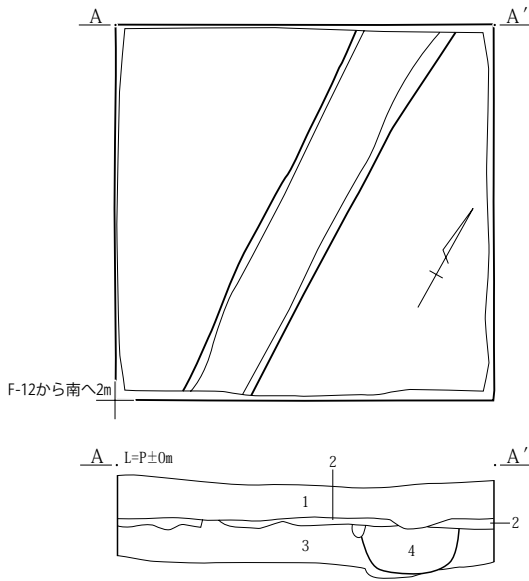
II区6号溝

- | | |
|------------------------|----------------|
| 1 表土 基本土層A。 | 4 黒褐色土 基本土層G。 |
| 2 茶褐色土 基本土層Bと基本土層Cの混土。 | 5 黒褐色土 基本土層I |
| 3 黄色砂層 基本土層D。 | 6 灰褐色土 砂質分が強い。 |
| | 7 砂利層 |

0 1:40 1m

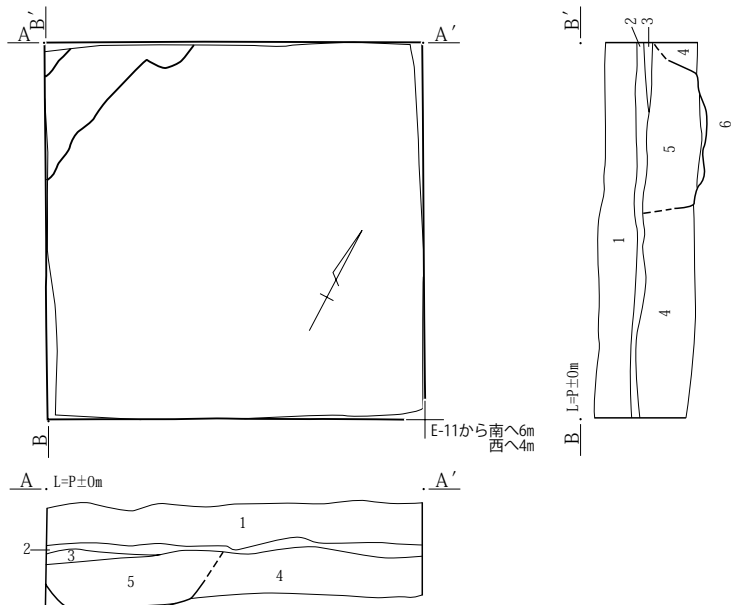
第65図 II区6号溝

Ⅲ区1号溝



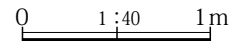
- Ⅲ区1号溝A-A'
- 1 表土 基本土層A。
 - 2 茶褐色土 基本土層F。
 - 3 黒褐色土 基本土層I
 - 4 黒褐色土 基本土層Iと区別することが困難である。
軽石を含む。下位に向けて砂質になる。

Ⅲ区2号溝



- Ⅲ区2号溝A-A' B-B'
- 1 表土 基本土層A。
 - 2 茶褐色土 基本土層B。
 - 3 茶褐色土 基本土層Bに類似する。
 - 4 埋没土 詳細不明。
 - 5 砂利層

第66図 Ⅲ区1・2号溝



2 土坑

(1) 概要

2号掘立柱建物の調査時にこれに近接して検出されたものである。報告の3基に他に2基の掘り込みが調査されているが、平面形が不整形であったため整理作業時に遺構と認定しなかった。

(2) Ⅲ区1号土坑 (第67図)

位置 F-15グリッド

形状 平面形は長円形に近いがあまり整っていない。規模は長径1.80m、短径1.62m、深さ64cmである。

方位 N-58°-W

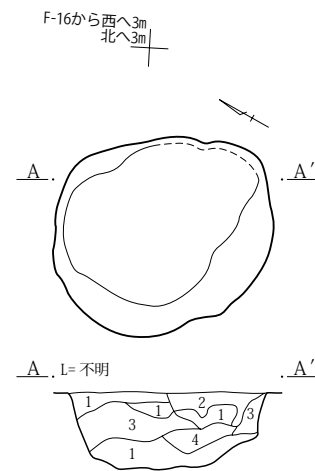
埋没土 2号掘立柱建物と同様に暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土が堆積している。

所見 調査時に2号掘立柱建物のNo.9と呼称されていたものである。掘削時期は不明である。

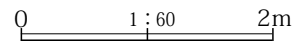
(3) Ⅲ区2号土坑 (第68図)

位置 F-15グリッド

形状 平面形は長円形に近いがあまり整っていない。規模は平面形は長円形に近いがあまり整っていない。規模は長径0.82m、短径0.63m、深さ42cmである。



- Ⅲ区1号土坑
- 1 暗褐色土 軟質。
 - 2 黒褐色土 榛名山二ツ岳系の軽石を含み、しまっている。
 - 3 黄褐色土 ローム土を主体とする。汚れた感じがする。
 - 4 黄褐色土



第67図 Ⅲ区1号土坑

方位 N-72° - E

埋没土 中央に黒褐色土、周縁に暗褐色土が堆積していた。

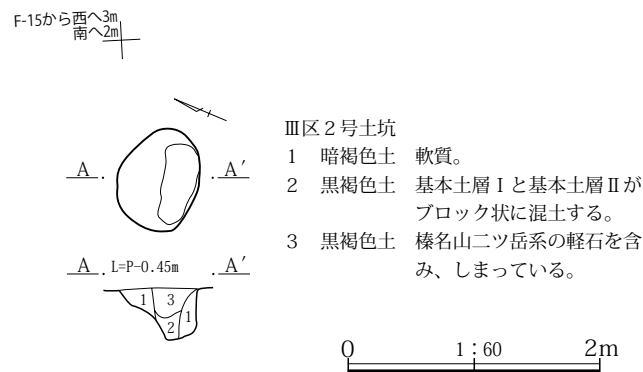
所見 調査時に2号掘立柱建物のNo.12と呼称されていたものである。掘削時期は不明である。

(4) Ⅲ区3号土坑 (第68図)

位置 F-14グリッド

形状 平面形は長円形に近いがあまり整っていない。規

Ⅲ区2号土坑



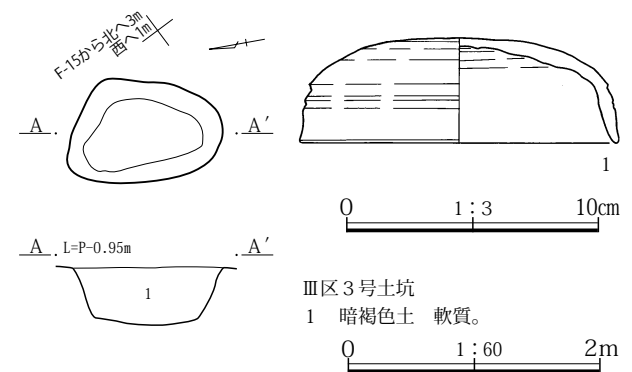
模は平面形は長円形に近いがあまり整っていない。規模は長径1.23m、短径0.85m、深さ42cmである。

方位 N-3° - W

埋没土 暗褐色土が堆積していた。

所見 調査時に2号掘立柱建物のNo.7と呼称されていたものである。埋没土中から6世紀末から7世紀初頭の所産と考えられる須恵器坏蓋(1)が出土しているが、具体的な掘削時期は不明である。(観P120、写PL.27)

Ⅲ区3号土坑



第68図 Ⅲ区2・3号土坑と出土遺物

3 ピット

(1) 概要

I区DトレンチとⅢ区の1号掘立柱建物周辺で検出された。いずれも建物遺構を構成していたとは考えられないものである。各ピットの検出状況は以下のとおりである。

(2) I区Dトレンチのピット (第70図、PL.11)

概要 Dライン上に試掘坑を設定し、遺構確認と土層の堆積状況を確認した際に、D-0グリッドを中心に南に5m、北に7mの間で16本のピットを確認した。掘り込み面については不明である。掘り方の平面形も円形、長円形であることからⅢ区で検出した掘立柱建物とは状況が異なっていた。平面図の記録も上幅のみであったが形状、規模の概要は以下のとおりである。なお、ピットの番号は整理作業時に付したものである。

位置 D-10グリッド

形状・規模 P1、長円形(長径85×短径59×深さ29cm、以下同じ)、土坑状、2本重複か。P2、円形(37×36×36cm)。P3、円形?(55×37以上×28cm)。P4、

円形?(35×27以上×44cm)。P5、円形?(43×41×不明cm)。P6、長円形?(102×49以上×不明cm)、土坑状。P7、円形(31×27×26cm)。P8、長円形(57×42×29cm)。P9、長円形?(36×31×16cm)。P10、長円形(76×46以上×67cm)。P11、長円形か(40×25以上×85cm)。P12、長円形(46以上×29×不明cm)。P13、円形?(49×36以上×60cm)。P14、円形?(47×36以上×60cm)。P15、円形か(68×54以上×43cm)。P16、円形か(47×43以上×48cm)。

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。

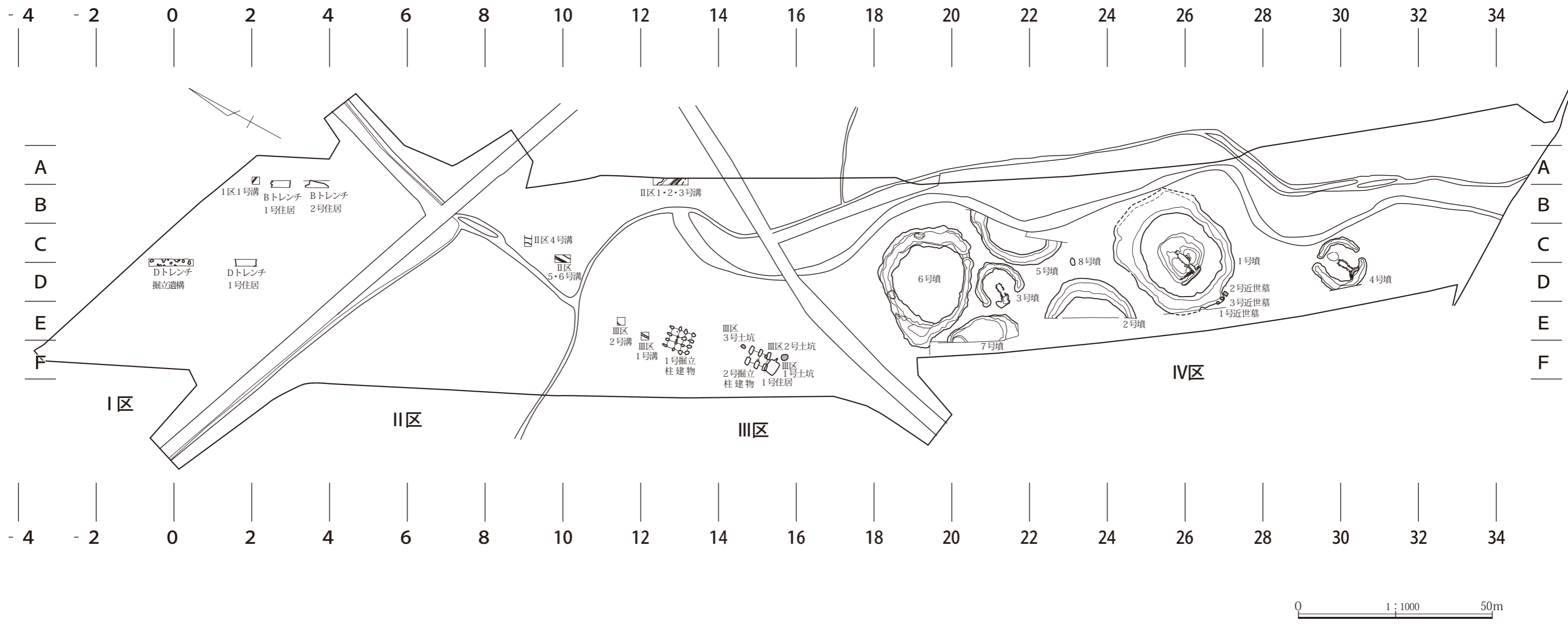
(3) Ⅲ区1号掘立柱建物周辺のピット (第70図)

概要 1号掘立柱建物の北側から少数ではあるが掘立柱建物と直接関係のないと考えられるピットが検出された。調査ではそのうちの4本について記録化をしている。各ピットの概要は以下のとおりである。

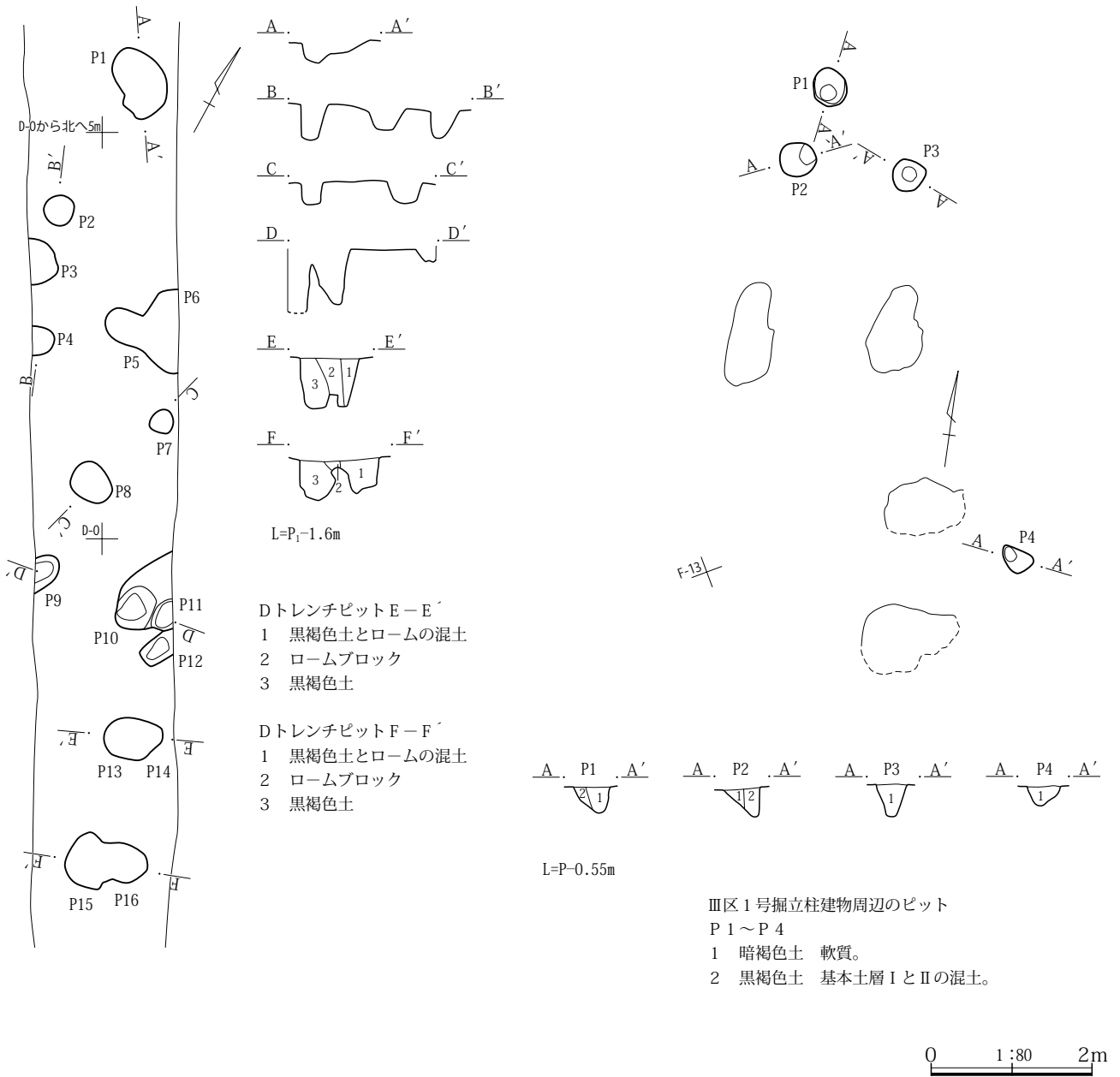
位置 F-12グリッド

形状・規模 P1、円形(長径45×短径40×深さ30cm、以下同じ)、P2、円形(45×40×36cm)、重複か。P3、円形(38×36×40cm)。P4、円形(42×42×26cm)。

所見 出土遺物もなく、掘削時期は不明である。



第69図 猿楽遺跡で検出された遺構の位置



第70図 Dトレンチピット・1号掘立柱建物周辺のピット

第6節 遺構外出土の遺物

1 縄文時代の遺物

(1) 縄文土器 (第71図)

試掘坑の掘削作業、あるいは竪穴住居や古墳の遺構確認・検出作業の過程で縄文土器および同時期の所産と考えられる石器が検出されている。

縄文土器の出土点数は52点である。これらの中から資料化するに値すると考えられる資料11点について採拓・

断面実測を行い報告する。11が口縁部から胴部下位にいたる部位が出土しているが欠損部分が多いものである。

出土位置は6・9・10がI区、1・3・4・8・11がIII区、2・5がIV区である。7は表採である。

時期は1から5は縄文時代中期加曾利E 3式の深鉢である。6は加曾利E 4式の深鉢である。7から9が後期称名寺式、10が後期前葉、11が後期堀之内式である。

個々の資料に対する基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に掲載した。(観P 120・121、写PL.28)

(2) 縄文時代の石器 (第72図)

縄文時代の所産と考えられる石器は13点が出土した。



第71図 遺構外出土の遺物 (1)

本報告ではその中の9点、打製石斧、磨製石斧、石核、加工痕のある剥片を資料化し、掲載した。

出土位置は、17がⅠ区から、13から16はⅡ区、19・20はⅢ区2号掘立柱建物の柱穴掘り方からの出土である。12・18はⅣ区の出土である。

打製石斧は5点が出土した。前期的な短冊形が主体で、中・後期的な分銅形の打製石斧はない。5点中4点が完成状態にあり、遺跡内では刃部再生等を行われたようであるが、石斧そのものの製作を想定することはできない。16は刃部側を欠損するため不明だが、剥離面が新鮮で、稜の摩耗も見られないことから未成品と捉えた。頭部先端に摩耗があり、これが再生前の刃部であり、上下反転して石斧を再生した可能性も否定できない。12は変玄武岩製で本来的には磨製石斧に使用されることが多い。打

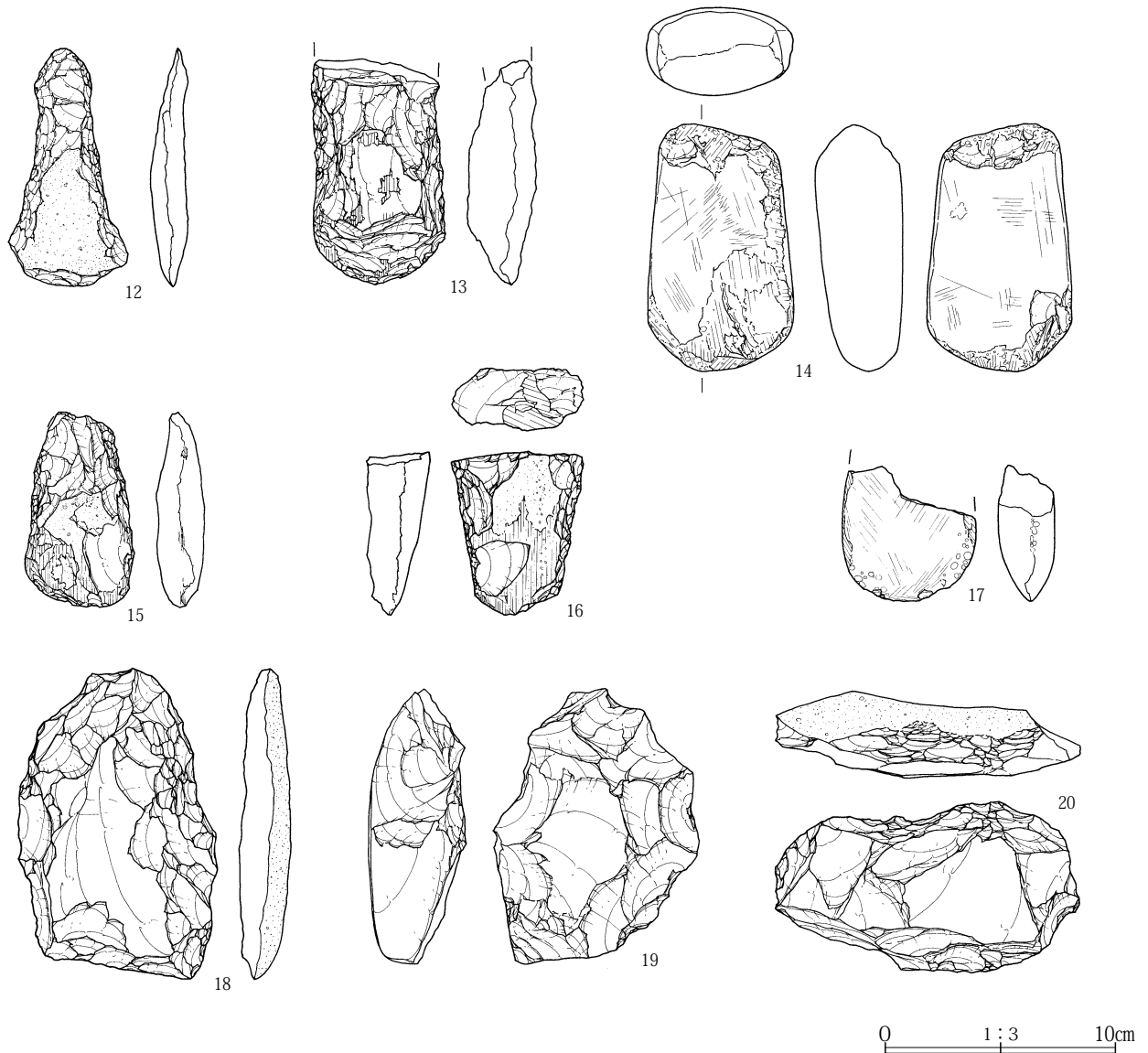
製石斧としての利用は稀である。

磨製石斧は2点が出土した。17が乳房状を呈し前期的、14は定角式のそれで後期的である。14は破損部を利用して敲打具として転用されている。

加工剥片ほかでは石核・加工痕ある剥片が出土した。ホルンフェルス製が大部分。その他の石材として、黒色頁岩がある。ホルンフェルス製の石器に対して、同種剥片類の出土は少ない。

剥片類はホルンフェルス6点・チャート3点・細粒輝石安山岩1点・砂岩1点・珪質頁岩1点・黒色頁岩3点が出土した。利根川流域の黒色頁岩を除けば、すべてが渡良瀬流域石材となり、在地石材を用いた石器製作構造が明らかである。

打製石斧・磨製石斧、在地ホルンフェルス製の石核・



第72図 遺構外出土の遺物(2)

加工痕ある剥片等の存在からみて、相当量の剥片類が出土していいはずだが、剥片類は15点と少なく、また、通常普遍的に出土する磨石等礫石器の出土もなく、全容は不明とせざるを得ない。

ホルンフェルス・チャート（渡良瀬川流域）を多用し、黒色頁岩（利根川流域）を少量含む石材構成のあり方は、大道東・鹿島裏・西長岡宿遺跡と同様である。渡良瀬流域に立地する縄文期遺跡の典型的石材構成である。

個々の資料に対する基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に掲載した。（観P121、写PL.28）

2 古墳時代から平安時代の遺物

(1) 概要

土師器・須恵器が調査区の全域から出土している。IV区では古墳に帰属していたと考えられる須恵器が墳丘・周堀の調査の際に出土している。他にも須恵器はI区からⅢ区において比較的広範囲にわたり散布していた。これらは試掘坑や掘立柱建物部分の調査区の拡張の際に出土したもので、I区では須恵器の甕の細片が7点、II区では甕の細片が4点、Ⅲ区でも甕の細片が5点採集されている。第2節や第3節で報告した集落（住居）との関係が考えられる。

IV区出土の資料も古墳の調査に先立ち試掘坑を調査した際に取り上げられたもので、本来は古墳に置かれていたものが大半であると考えられる。埴輪の樹立のあった1号墳をはじめ、埴輪樹立のない2号墳から7号墳周辺から須恵器の甕・大甕の細片が出土しているが、第2節ではその一部を掲載したにとどまった。

(2) 土器（第73図）

土師器4点、須恵器11点を資料化した。21・23・24は古墳時代の土師器坏である。22は古墳時代の土師器高坏である。25は平安時代須恵器坏である。26・27は須恵器坏である。28は平安時代の須恵器で不詳である。29は須恵器瓶の高台部である。30は須恵器鉢であろうか。31以下は須恵器の瓶あるいは甕である。

出土位置は21・23・26・30・35がI区、22・24・25・27がⅢ区、28・29・31・34・35がIV区からの出土である。（観P121・122、写PL.29）

(3) その他の遺物（第75図）

62は有孔不定形剥片である。珪質粘板岩製で、渡良瀬

対岸の足尾山中に同種石材の露頭がある。片側穿孔により、穿孔直前で素材を折断している。同種資料は大道東遺跡、楽前遺跡から多量に出土している。

個々の資料に対する基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に掲載した。（観P123、写PL.30）

3 中・近世および時期不明の遺物

(1) 土器（第74図）

中・近世の土器としては国産陶器9点、軟質陶器1点、在地系土器5点、在地系土器の不明品1点、中国製青磁1点、中国製白磁2点の20点と円形土板2点、合計21点を資料化した。

出土位置は、38と45がIV区1号墳周辺からの出土である。この他に51・52はI区、42がII区、41がⅢ区、39・40・48から50・53・54・56がIV区である。43・44・55は出土地点が不詳である。

個々の資料に対する基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に掲載した。（観P122・123、写PL.29・30）

(2) 石製品（第75図）

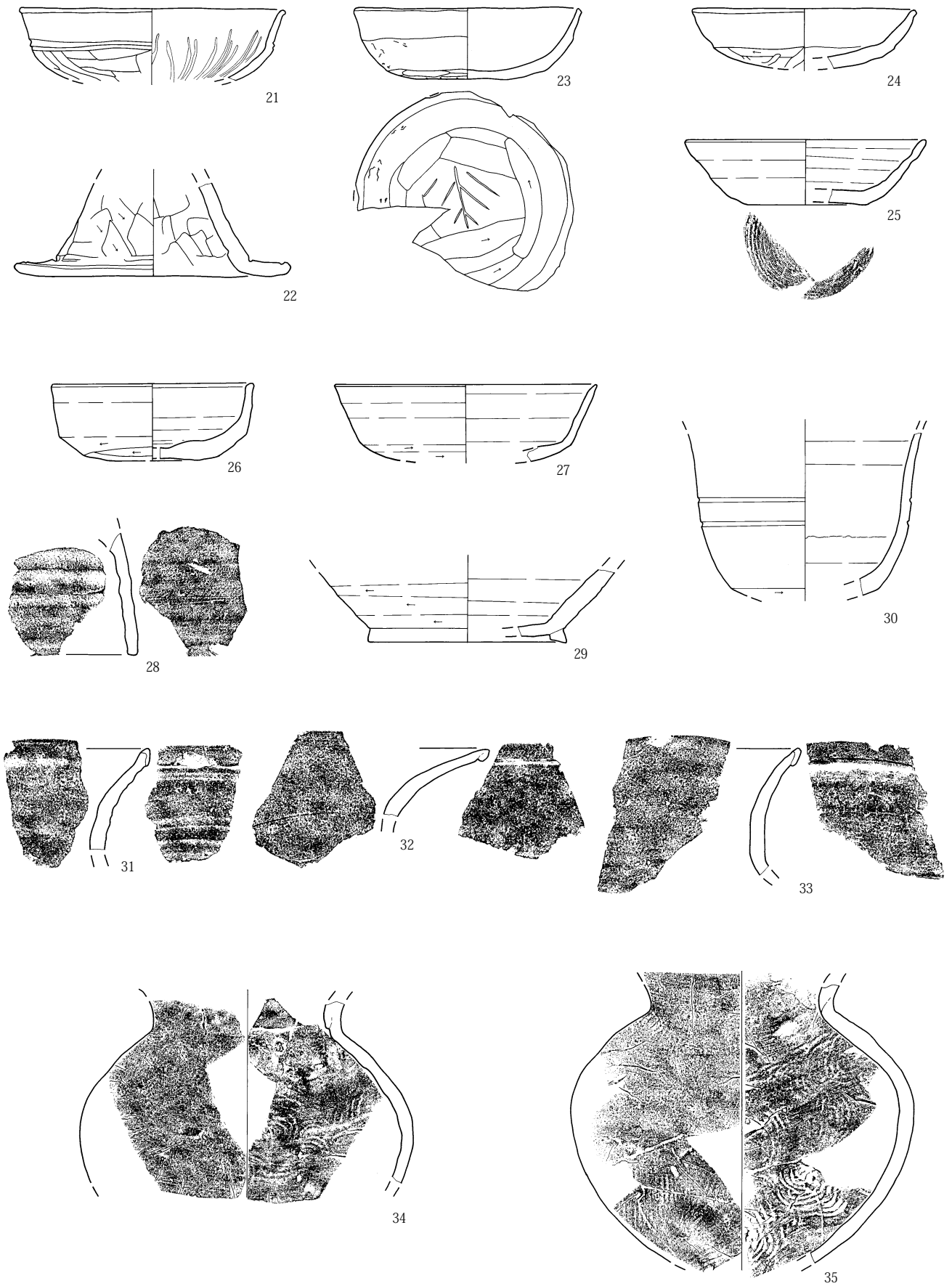
砥石は、4点を資料化した。出土位置は57・60が1号墳から、58は3号墳からの出土である。59・61はIV区の試掘坑調査時の出土である。

石材は流紋岩・変質デイサイト各2点、珪質粘板岩1点という構成、57・61の流紋岩製は中～仕上げ砥、58・59の変質デイサイト製は鉋物を含み中砥程度と考えられる。60・61は側面に切断痕を残し近世に帰属。58の小口にはノミ状の整形痕を残す。

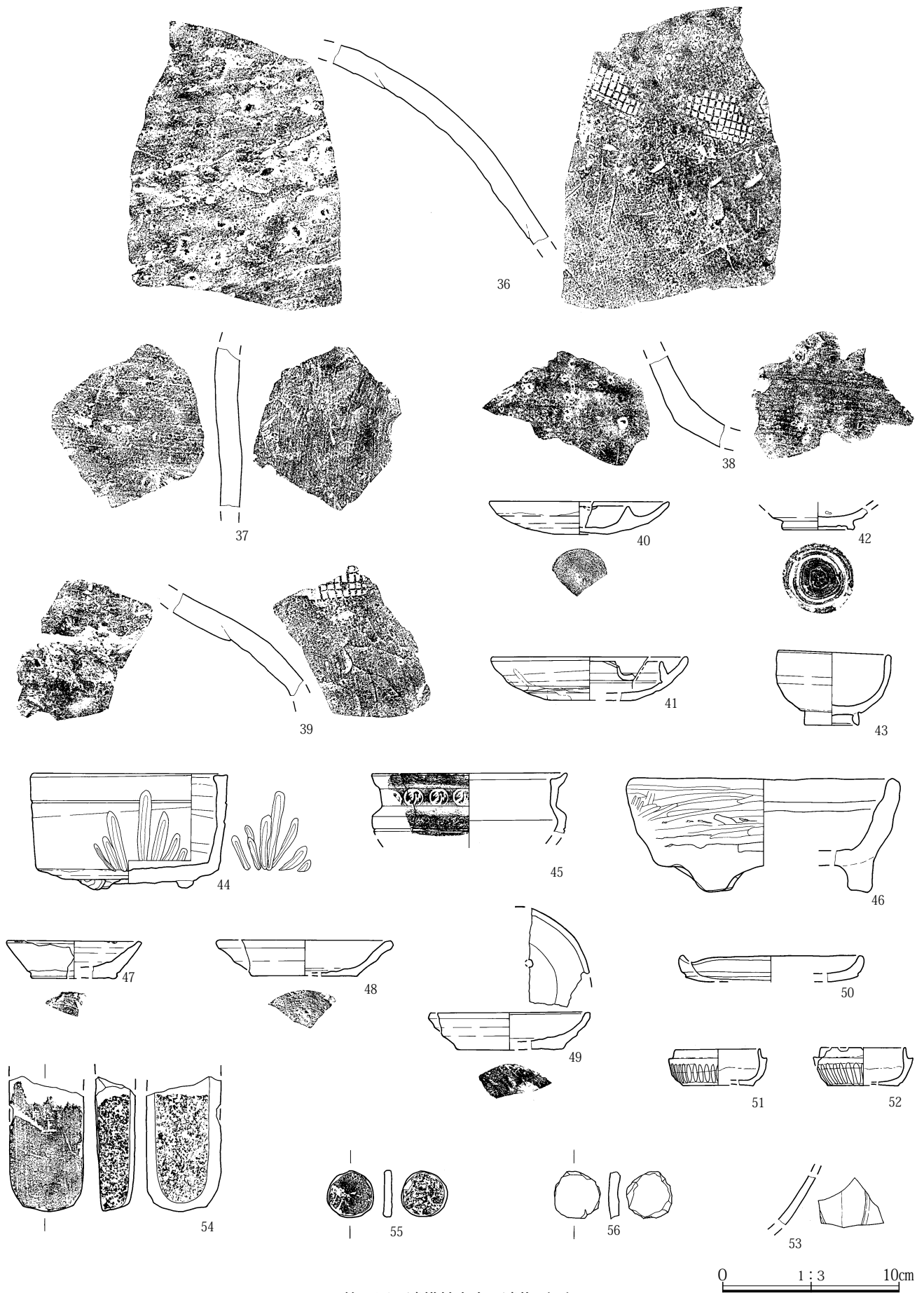
個々の資料に対する基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に掲載した。（観P123、写PL.30）

(3) 金属器他（第75図）

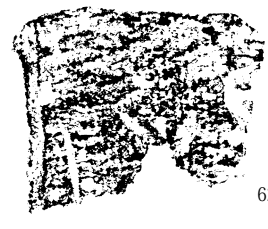
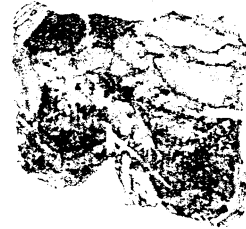
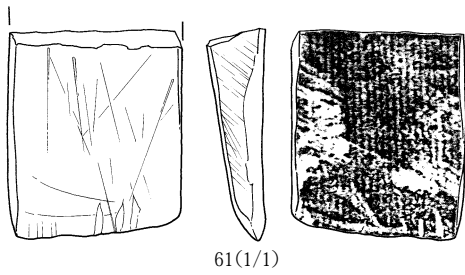
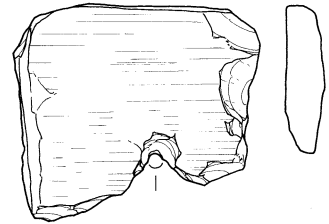
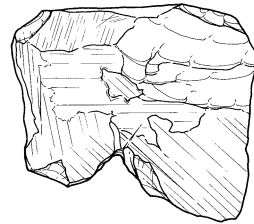
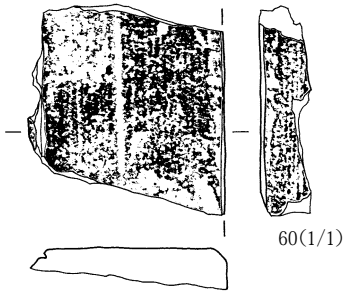
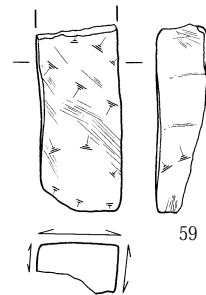
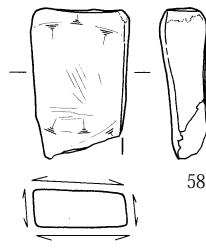
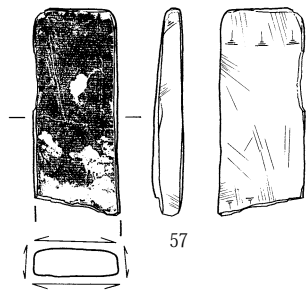
寛永通宝3点（63～65）はIV区からの出土である。精鉄関連の遺物としては66の椀型鍛冶滓1点と67・68の滓化物2点を資料化した。精鉄関連の遺物の時期は不明である。基礎的な観察結果については巻末の遺物観察表に記載した。（観P123、写PL.30）



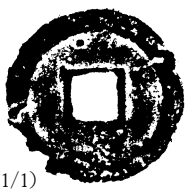
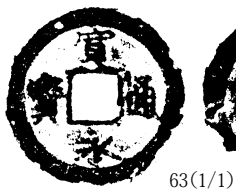
第73図 遺構外出土の遺物 (3)



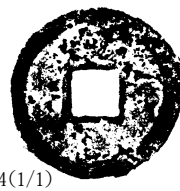
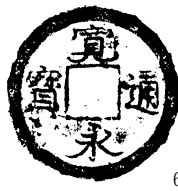
第74図 遺構外出土の遺物(4)



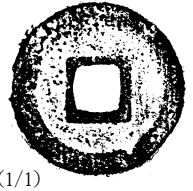
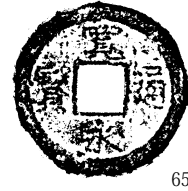
62(1/1)



63(1/1)



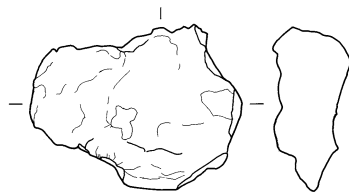
64(1/1)



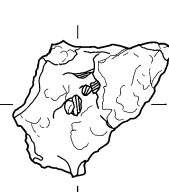
65(1/1)



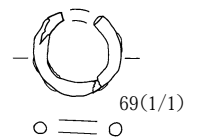
66



67



68



69(1/1)

0 1:3 10cm

第75図 遺構外出土の遺物 (5)

第3章 分析

本遺跡1号墳出土の埴輪は、その胎土中に凝灰岩やチャート、赤色粘土粒などが混入することを目視することができた。このことから、1号古墳出土の埴輪は群馬県東部地域で生産された可能性が考えられた。そこで、本古墳出土埴輪に含まれる混和材の内容の精確を期すこと、胎土の素材となる粘土の産地を推定を目的とした自然科学分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。その結果報告を第1節に掲載する。

また、1号近世墓からは人歯が出土している。この人歯について、その部位、被葬者の性別、死亡年齢などを明らかにすることを目的に生物考古学研究所榎崎修一郎氏にその鑑定ならびに同定を依頼した。第2節にその所見を掲載する。

第1節 猿楽遺跡出土埴輪の胎土材料

1 はじめに

土器や埴輪の胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の特徴から、これら砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定することは容易でない。土器や埴輪胎土は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料は比較的良質とも思える粘土層から採取されたことが、粘土採掘坑の調査から推察される(藤根・今村, 2001)。

一方、混和材としての砂粒物は、このような粘土層からの粘土採取の際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取したことが予想される。東海地域では、弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器が知られており、これらのうち3分の1程度の土器では、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている(藤根, 1998; 車崎ほか, 1996)。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層と考えられる。胎

土中の混和材は、現河川砂とは大きく異なり、その特徴から砂層由来である可能性が高いため、現在の河川砂との比較では問題が大きい。したがって胎土中の混和材については、以前に堆積した段丘堆積物の砂層などとの比較検討が必要と思われる。

猿楽遺跡は、太田市只上町字猿楽地内に所在し、古墳時代後期・終末期の墳墓群、奈良時代または平安時代の竪穴住居からなる大規模な集落である。ここでは、猿楽遺跡から出土した埴輪について、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察による粘土および砂粒組成の特徴について調べた。なお、比較資料として太田市東今泉町に所在する北関東道の大道西遺跡から出土した埴輪、伊勢崎市豊城町に所在する大道西遺跡から出土した埴輪についても検討した。なお、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察は主に米田が担当し、確認を含めて藤根がまとめた。

2 試料と方法

試料は、猿楽遺跡から出土した埴輪5点、太田市の北関東道の大道西遺跡から出土した埴輪3点、伊勢崎市の大道西遺跡から出土した埴輪2点である(第4表)。各埴

第4表 材料を検討した埴輪とその詳細

試料No.	遺跡	種類	器種	部位	出土位置	法量(残高:cm)	備考
1	猿楽遺跡	円筒埴輪		胴部	1号墳	6	内外面ハケメ、突帯・透孔あり
2		円筒埴輪		胴部	1号墳	5.6	内外面ハケメ、突帯あり
3		形象埴輪	器財		1号墳ST	3.2	表裏面ハケメ、ヘラ描き沈線
4		形象埴輪	器財		1号墳(注記なし)	4.5	表面ハケメ、裏面ナデ、帯状の突帯?
5		形象埴輪	馬?		1号墳頂上	7	内外面ハケメ、突帯あり
6	北関東道大道西遺跡	円筒埴輪		胴部	Ⅱ区22溝	7.2	内外面ハケメ
7		円筒埴輪		口縁部	Ⅱ区	5	外面ハケメ、内面ナデ
8		円筒埴輪		胴部	Ⅲ区42溝	5.6	外面ハケメ、内面ナデ、透孔あり
9	大道西遺跡	円筒埴輪		胴部	調査区	6.2	外面ハケメ、内面ナデ、内面炭素吸着
10		円筒埴輪		胴部	7区6溝	5.3	外面ハケメ、内面ナデ、粘土紐の接合痕を残す

輪は、埴輪薄片の偏光顕微鏡観察を行い、粘土および砂粒の特徴について調べた。埴輪は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片を作製した。

(1)試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作成した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2)さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後スライドガラスに接着した。

(3)その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片（プレパラート）は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面について微化石類（珪藻化石、骨針化石）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について観察と記載を行った。なお、ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻から環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。このことから、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[孢子化石]

孢子粒子は、直径約10～30 μm 程度の珪酸質の球状粒子である。孢子は、水成堆積物中に多く見られるが土壌

中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は花崗岩などのケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直消光で観察した際に全体的に暗い粒子である。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質、約0.06mm未満のものを泥岩質とした。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

3 結果

以下に、埴輪薄片の顕微鏡観察結果について述べる。

[埴輪胎土薄片の偏光顕微鏡観察]

胎土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度組成や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。なお、第5表中において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出であることを示す。

No.1：130 μm ～400 μm が多い（最大粒径1.57mm）。斜長石（双晶・累帯）、火山ガラス（バブル型・軽石型）> 石英・長石類、複合石英類（微細）、斜方輝石、角閃石類、

凝灰岩質（完晶質、斑晶質）、孢子化石、珪藻化石（陸生珪藻 *Hantzschia amphioxys*、不明種）、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、ヨシ属、その他不明）。

No.2：150 μm ～350 μm が多い（最大粒径1.55mm）。斜長石（双晶・累帯）、石英・長石類、火山ガラス（バブル型・軽石型）> 複合石英類（微細）、斜方輝石、角閃石類、複合石英類、凝灰岩質（完晶質）、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、その他不明）。

No.3：130 μm ～600 μm が多い（最大粒径1.08mm）。斜長石（双晶・累帯）> 石英・長石類、複合石英類（微細）、火山ガラス（バブル型・軽石型）> 斜方輝石、角閃石、複合石英類、凝灰岩質（完晶質）、単斜輝石、凝灰岩質、雲母類、孢子化石、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、その他不明）、植物繊維。

No.4：200 μm ～450 μm が多い（最大粒径2.10mm）。斜長石（双晶・累帯）、石英・長石類> 複合石英類（微細）、火山ガラス（バブル型・軽石型）> 斜方輝石、完晶質、角閃石、複合石英類、凝灰岩質、凝灰岩質（斑晶質）、雲母類、孢子化石、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、その他不明）。

No.5：160 μm ～600 μm が多い（最大粒径1.58mm）。複合石英類（微細）> 斜長石（双晶）、石英・長石類> 斜方輝石、火山ガラス（バブル型）、角閃石、凝灰岩質、凝灰岩質（完晶質）、複合石英類、雲母類、ジルコン、骨針化石、孢子化石、植物珪酸体化石（ネザサ節型、その他不明）、植物繊維やや多い。

No.6：100 μm ～300 μm が多い（最大粒径1.10mm）。石英・長石類> 斜長石（双晶）、複合石英類（微細）> 角閃石、複合石英類、火山ガラス（バブル型・軽石型）、斜方輝石、凝灰岩質（完晶質、斑晶質）、凝灰岩質、孢子化石、植物珪酸体化石あり（ネザサ節型、その他不明）、植物繊維。

No.7：140 μm ～400 μm が多い（最大粒径1.67mm）。石英・長石類> 複合石英類（微細）、斜長石（双晶・累帯）> 複合石英類、火山ガラス（バブル型・軽石型）、凝灰岩質（完晶質）、角閃石類、斜方輝石、凝灰岩質、孢子化石、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、ヨシ属、その他不明）。

No.8：160 μm ～400 μm が多い（最大粒径4.60mm）。石英・長石類、複合石英類（微細）、斜長石（双晶・累帯）> 火山ガラス（バブル型・軽石型）、斜方輝石、角閃石類、複合石英類、凝灰岩質（完晶質）、骨針化石、孢子化石、

珪藻化石（陸生珪藻 *Hantzschia amphioxys*）、植物珪酸体化石多い（ネザサ節型、その他不明）。

No.9:70 μm ～350 μm が多い（最大粒径1.95mm）。石英・長石類、斜長石（双晶・累帯）火山ガラス（バブル型・軽石型）、複合石英類（微細）斜方輝石、角閃石類、単斜輝石、複合石英類、凝灰岩質（完晶質、斑晶質）、ジルコン、雲母類、孢子化石、骨針化石、植物珪酸体化石あり（ネザサ節型、その他不明）。

No.10:180 μm ～300 μm が多い（最大粒径1.40mm）。石英・長石類、斜長石（双晶・累帯）、複合石英類（微細）角閃石、斜方輝石、火山ガラス（バブル型・軽石型）、凝灰岩質（完晶質）、複合石英類、砂岩質、ジルコン、孢子化石、植物珪酸体化石あり（ネザサ節型、その他不明）。

4 考察

i) 微化石類による材料粘土の分類

埴輪胎土中には、その薄片全面の観察から、少ないものの珪藻化石あるいは骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100 μm 、骨針化石が10～100 μm 前後である（植物珪酸体化石が10～50 μm 前後）。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μm 以下、シルトが約3.9～62.5 μm 、砂が62.5 μm ～2mmである（地学団体研究会・地学事典編集委員会, 1981）。このことから、植物珪酸体化石を除く微化石類は胎土の粘土材料中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。

なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、埴輪製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した埴輪胎土は、微化石類により、a) 水成粘土を用いた胎土、b) その他粘土を用いた胎土に分類された。以下では、分類された粘土の特徴について述べる。

a) 水成粘土を用いた胎土（4胎土）

これらの胎土中には、海綿動物の骨格の一部である骨針の化石が含まれていた。なお、珪藻化石はジメジメとした陸域を指標する珪藻化石も含まれている可能性があり、種類を同定できなかったため、ここでは水成環境を指標するとは言えない。

b) その他粘土を用いた胎土（6胎土）

これらの胎土中には、水成環境を指標する微化石類は

含まれていなかった。

なお、いずれの埴輪も微化石類に乏しい粘土あるいは含まないその他粘土であるが、偏光顕微鏡の直交ニコルで観察した場合、粘土部分が暗いことから凝灰岩質粘土であることがわかる。このことは、材料粘土に凝灰岩層から採取した粘土を利用していることを裏付けている。

太田市の北部地域の八王子丘陵では、中新世中期に形成された流紋岩ーデイサイトー軽石凝灰岩が分布する。また、八王子丘陵の北側の金山丘陵では、礫岩・安山岩質凝灰岩および砂岩が分布する。

多くの埴輪粘土が凝灰岩質粘土である点、あるいは次に述べる砂粒組成においても凝灰岩の砂粒が特徴的に含まれている点は、こうした地質環境を反映している可能性が高い。

ii) 埴輪胎土中の砂粒組成による分類

ここで設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第5表）。岩石の推定は、ガラス質がテフラ、凝灰岩質が凝灰岩類、複合石英類（微細）や砂岩質が堆積岩類、複合石英類が深成岩類である。推定した起源岩石は、第6表の組み合わせに従って分類した。

分類した結果、凝灰岩類を主体としてテフラなどを伴うEg群（3胎土）、凝灰岩類を主体として堆積岩類を伴うEc群（4胎土）、堆積岩類を主体として凝灰岩類を伴うCe群（3胎土）であった。

iii) 埴輪胎土材料の特徴と分類

薄片の顕微鏡観察では、粘土は、骨針化石を少量含む水成粘土を用いた胎土（4胎土）と水成を指標する微化石類を含まないその他胎土（6胎土）であった。

一方、砂粒組成は、凝灰岩類を主体としてテフラなどを伴うEg群（3胎土）、凝灰岩類を主体として堆積岩類を伴うEc群（4胎土）、堆積岩類を主体として凝灰岩類を伴うCe群（3胎土）であった。

微化石類による材料粘土の分類において述べたように、いずれの埴輪も微化石類に乏しい粘土あるいは含まないその他粘土であるが、偏光顕微鏡の直交ニコルで観

察した場合、粘土部分が暗いことから、材料粘土が凝灰岩層から採取した凝灰岩質粘土を利用していることを裏付けている。

材料分析した埴輪は、いずれもイネ科植物の葉身中に形成される植物珪酸体化石を全体的に多く含む。植物珪酸体化石が密集して塊状に含まれている弥生土器がある。イネ科植物は、焼いた灰中においても植物珪酸体として残ることから、土器に含まれる植物珪酸体化石については、除粘剤として灰質を混入した結果である可能性が考えられている（藤根，1998）。検討した埴輪は、いずれも植物珪酸体が多いことから、今後詳細に検討する価値がある。なお、沼沢湿地のような環境で堆積した粘土層の場合には、イネ科ヨシ属などの珪酸体化石が多く含まれていることがあり、利用した粘土の堆積環境を検討する必要がある。

その他の特徴では、北関東道の大道西遺跡から出土した埴輪No.6とNo.7は、砂粒組成は同様であるが、大型砂粒が少なく、細粒砂が特徴的に多い。一方、同遺跡から出土した埴輪No.8は、大型砂粒が目立つ。

埴輪胎土について、砂粒組成の特徴や砂粒の粒度を考慮して分類した。

その結果、大きくは凝灰岩が特徴的である一群をⅠ群、堆積岩類が特徴的である一群をⅡ群とした。さらに、Ⅰ群は、テフラがやや多い一群をⅠa群、堆積岩類がやや多く砂粒が比較的大きい一群をⅠb群、堆積岩類がやや多く砂粒が細かい一群をⅠc群とした。なお、粘土は水成粘土とその他粘土に分けたが、大きくは変わらないと考えられることから、ここでは考慮していない。

iv) 主な埴輪との比較

太田市成塚町に所在する古墳時代前期の成塚向山古墳群2号墳から出土した埴輪は、微化石類を含まない粘土を用い、砂粒組成は凝灰岩類の砂粒が特徴的であり、堆積岩類やテフラを含む。これらの埴輪材料の特徴は、隣接する八王子丘陵を構成する中新世中期に形成された流紋岩-デイサイト-軽石凝灰岩を反映したものと考えられる。なお、北側丘陵の北金井町に所在する駒形神社埴輪窯は、同様の材料を用いて埴輪を生産した窯跡と考えられる（株式会社パレオ・ラボ，2008）。

また、前橋市と伊勢崎市の境にある多田山古墳群の埴輪は、材料粘土および砂粒組成において6群に分類され、淡水種珪藻化石を特徴的に含む淡水成粘土でテフラ粒子を特徴的に含む胎土（A群やB群）、微化石類に乏しい粘土で堆積岩類を主として凝灰岩類を特徴的に伴う胎土（D群）、骨針化石を含む水成粘土で堆積岩類の他、片岩類を伴う胎土（F群）などの胎土が見出されている（藤根・今村，2004）。

このうち、A群あるいはB群の埴輪胎土の特徴は、波志江中宿遺跡の粘土採掘坑から出土したS字状口縁台付甕の特徴に類似している。S字状口縁台付甕の胎土の特徴は、同時にこの粘土採掘坑の採掘の対象である粘土層の特徴でもある（藤根・今村，2001）。

猿楽遺跡1号墳や北関東道の大道西遺跡あるいは伊勢崎市の大道西遺跡から出土した埴輪は、成塚向山古墳群2号墳から出土した埴輪や多田山古墳群のD群の埴輪に類似している。

第5表 粘土および砂粒組成の特徴

試料No.	遺跡	種類	粘土の特徴										砂粒の特徴						鉱物の特徴				植物珪酸体化石	備考	分類
			種類	放射状化石	珪藻化石	珪藻化石	珪藻化石	不明種	骨針化石	胞子化石	分類	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ	ジルコン	角閃石類	輝石類	雲母類			
1	猿楽遺跡	円筒埴輪	その他				△		△	Eg		△	○		○		◎		○	○		◎	凝灰岩質胎土	I a	
2		円筒埴輪	水成					△	△	Eg		△	○		○		◎		○	○		◎	凝灰岩質胎土	I a	
3		形象埴輪	その他						△	Eg		△	○		○		◎		○	○		○	凝灰岩質胎土	I a	
4		形象埴輪	その他						△	Ec		△	○		○		○		○	○	△	◎	凝灰岩質胎土	I b	
5		形象埴輪	水成					△	△	Ec		△	○		○	△		○	○		○		凝灰岩質胎土	I b	
6	北関東道西遺跡	円筒埴輪	その他					△	Ec		△	○		○	△		○	○		◎	凝灰岩質胎土、細粒砂粒多い	I c			
7		円筒埴輪	その他					△	Ec		△	○		○	△		○	○		◎	凝灰岩質胎土、細粒砂粒多い	I c			
8		円筒埴輪	水成				△	△	△	Ce		△	◎		○	△		○	○		○	凝灰岩質胎土	Ⅱ		
9	大道西遺跡	円筒埴輪	水成					△	△	Ce		△	◎		○	△	△	○	○		◎	凝灰岩質胎土	Ⅱ		
10		円筒埴輪	その他					△	Ce		△	◎		○	△	△	○	○		◎	凝灰岩質胎土、焼成温度やや高い	Ⅱ			

第6表 岩石片の起源と組み合わせ

			第1出現群						
			A	B	C	D	E	F	G
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f	流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g	テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

5 おわりに

埴輪薄片の偏光顕微鏡観察では、材料粘土は、骨針化石を少量含む水成粘土を用いた胎土（4胎土）と水成を指標する微化石類を含まないその他胎土（6胎土）であった。

一方、砂粒組成は、凝灰岩類を主体としてテフラなどを伴うEg群（3胎土）、凝灰岩類を主として堆積岩類を伴うEc群（4胎土）、堆積岩類を主として凝灰岩類を伴うCe群（3胎土）であった。いずれの埴輪も微化石類に乏しい粘土あるいは含まないその他粘土であり、粘土部分が凝灰岩質粘土で、材料粘土には凝灰岩層から採取した粘土を利用していることが分かった。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42（2），73-88.
 地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）増補改訂 地学事典．1612p，平凡社.
 藤根 久（1998）東海地域（伊勢-三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編「土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ」：108-117，東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会.
 藤根 久・今村美智子（2001）第3節 土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「波志江中宿遺跡」：262-277，日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団.

藤根 久・今村美智子（2004）3 埴輪の材料分析．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「多田山古墳群：今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡一古墳時代編一」：580-590，群馬県企業局・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
 株式会社パレオ・ラボ（2008）12成塚向山古墳群出土埴輪・土器の材料分析．群馬県埋蔵文化財調査事業団編「成塚向山古墳群」：431-444，東日本高速道路株式会社・群馬県埋蔵文化財調査事業団.
 小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20.
 車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39)土器胎土の材料-粘土の起源を中心に-．日本考古学協会編「日本考古学協会第62回大会研究発表要旨」：153-156，日本考古学協会.

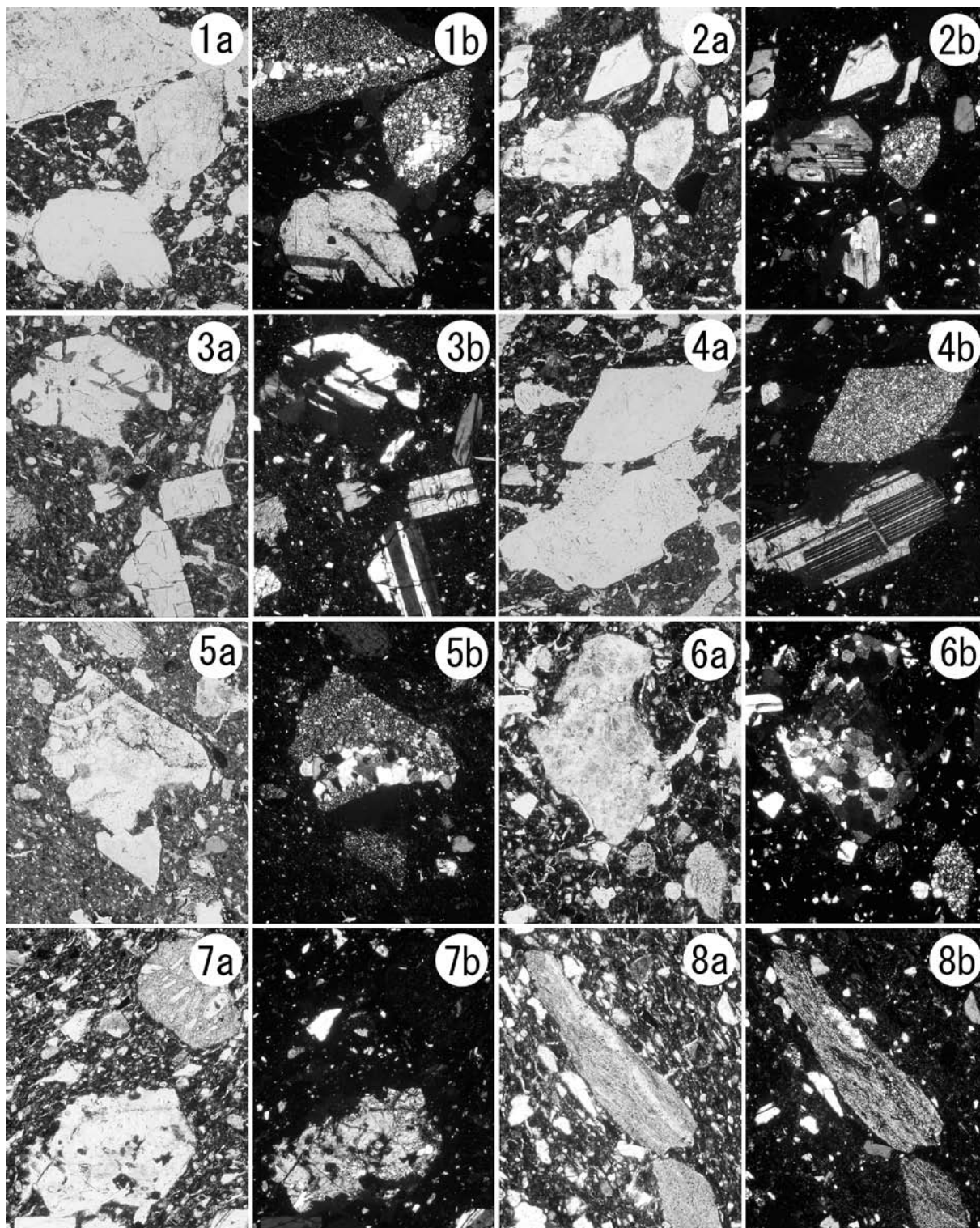


写真3 埴輪胎土の顕微鏡写真(1) (スケール: 500 μ m、a:開放ニコル、b:直交ニコル)

1a・1b. 資料 No.1 2a・2b. 資料 No.2 3a・3b. 資料 No.3 4a・4b. 資料 No.4
5a・5b. 資料 No.5 6a・6b. 資料 No.6 7a・7b. 資料 No.7 8a・8b. 資料 No.8

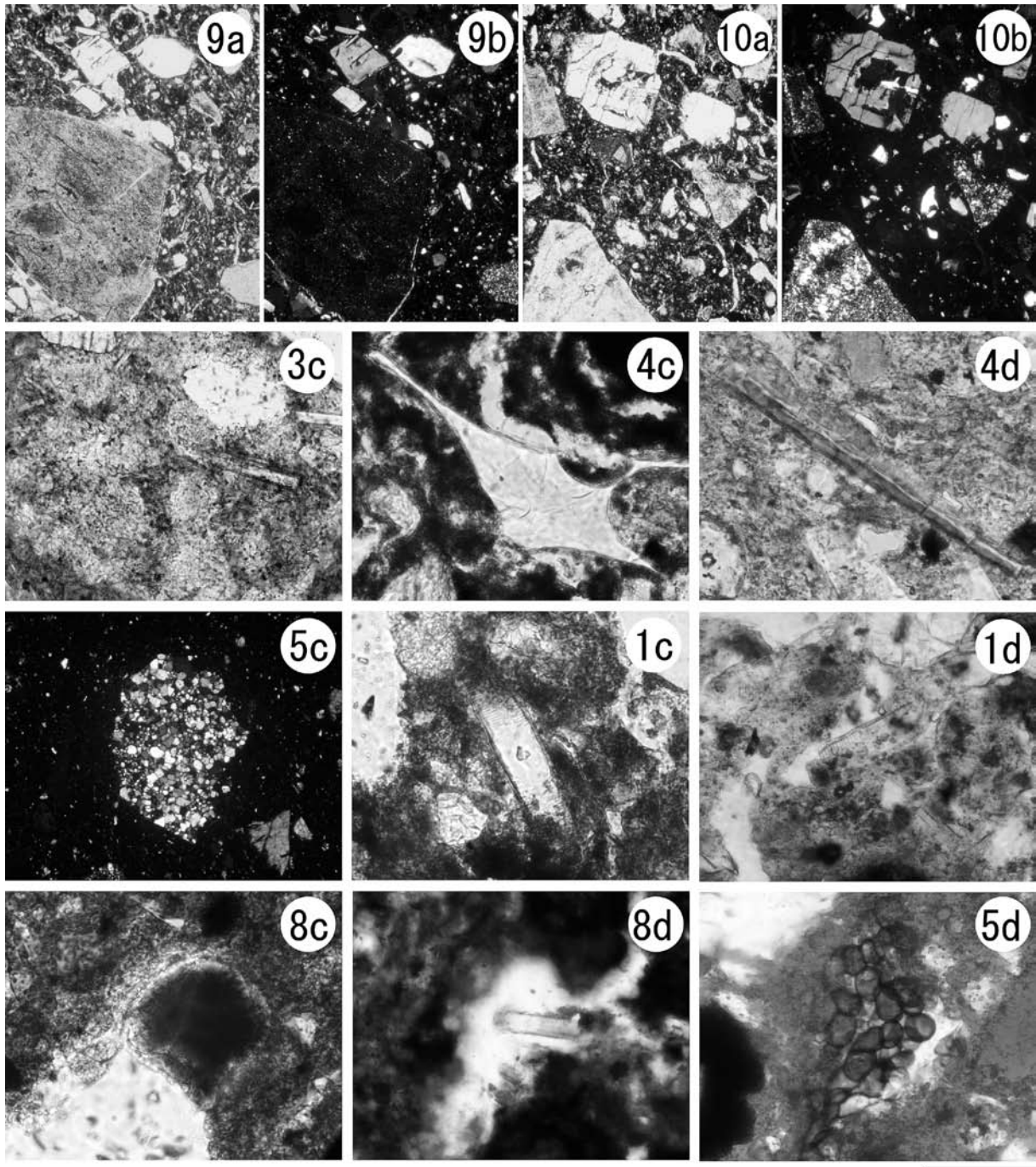


写真4 埴輪胎土の顕微鏡写真(2)(スケール:500 μ m、a:開放ニコル、b:直交ニコル)

9a・9b. 資料No.9 10a・10b. 資料No.10 3c. 凝灰岩質 (No.3, bar:100 μ m)

4c. ガラス質 (No.4, bar:50 μ m) 4d. ガラス質 (No.4, bar:50 μ m)

5c. 複合石英類(微細) (No.5, bar:50 μ m) 1c. 珪藻化石 (*Hantzschia amphioxys*) (No.1, bar:50 μ m)

1d. 珪藻化石(不明) (No.1, bar:50 μ m) 8c. 植物珪酸体化石(ヨシ属) (No.8, bar:50 μ m)

8d. 珪藻化石 (*Hantzschia amphioxys*) (No.8, bar:50 μ m) 5d. 孢子化石 (No.5, bar:50 μ m)

第2節 猿楽遺跡出土人骨

はじめに

猿楽遺跡は、群馬県太田市只上町に所在する。群馬県教育委員会による発掘調査が、1974（昭和49）年6月～同年10月まで実施された。

本遺跡では、主に、古墳時代の古墳8基・掘立柱遺構2棟・竪穴住居4軒等が検出されている。本遺跡の、1号近世墓から主に歯が出土したので、以下に報告する。なお、3号近世墓の平面図にも人骨が記録されているが、残念ながら発掘調査から35年以上が経過しているため所在不明である。

1 人骨の出土状況

人骨は、直径約70cm、残存高約20cmの円形土坑から出土している。なお、出土歯は、深さ約11cm～14cmと記録されている。

2 人骨の出土部位

当時の平面図によると、頭蓋骨・歯・四肢骨が記録されているが、残念ながら、発掘調査から35年以上が経過しているため、出土歯以外は所在不明である。しかしながら、出土状況の写真を見る限り、頭蓋骨及び四肢骨の残存状態は非常に悪い。

なお、出土歯の歯根は破損しており、歯冠のみである。

3 副葬品

副葬品は、磁器碗、皿及び漆器碗が出土している。

4 被葬者の頭位・埋葬状態

平面図によると、頭蓋骨及び歯は、土坑の南部から出土している。写真及び平面図のみでは断定できないが、時代が近世であること及び土坑の平面形が円形であることから、座葬で埋葬された可能性が高い。

5 被葬者の個体数

出土歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

6 被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値は、比較的大きいため、被葬者の性別は男性であると推定される。

7 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、エナメル質が咬耗しているが、象牙質はあまり露出していない。したがって、

被葬者の死亡年齢は、約30歳代であると推定される。

8 被葬者の古病理

出土歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。また、歯石の付着も認められなかった。

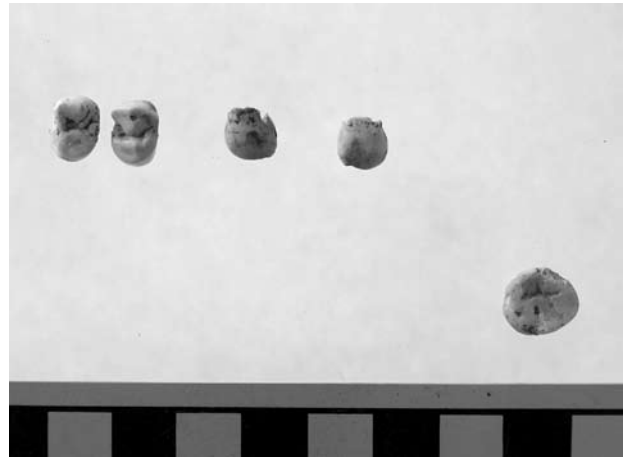


写真5 猿楽遺跡1号近世墓出土歯（咬合面観）

第7表 猿楽遺跡出土人骨永久歯歯冠計測値及び比較表

歯種	計測	1号近世墓坑		中世時代人		江戸時代人		現代人		
		右	左	*		*		**		
				♂	♀	♂	♀	♂	♀	
上顎	I2	MD	7.9	7.6	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	破損	破損	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	P1	MD	破損	—	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	10.0	—	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
	P2	MD	7.2	—	6.87	6.69	7.00	6.82	7.02	6.94
		BL	10.0	—	9.39	8.88	9.55	9.29	9.41	9.23
下顎	M3	MD	—	11.4	—	—	—	—	10.96	10.65
		BL	—	10.3	—	—	—	—	10.28	10.02

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2. 歯種は、I2（第2切歯）・P1（第1小臼歯）・P2（第2小臼歯）・M3（第3大臼歯）を意味する。

註3. 計測項目は、MD（歯冠近遠心径）・BL（歯冠唇頬舌径）を意味する

註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。

註5. 「*」は、MATSUMURA（1995）より引用。なお、MATSUMURA（1995）には、第3大臼歯のデータは無い。

註6. 「**」は、権田（1959）より引用

まとめ

猿楽遺跡1号近世墓から、近世の人骨が出土した。被葬者は、直径約70cmの円形土坑に、座葬で埋葬されたと推定される。また、被葬者は1個体で、約30歳代男性であると推定された。被葬者の出土歯には、特に古病理は認められなかった。

第4章 調査成果と整理のまとめ

第1節 猿楽遺跡の調査成果

今回報告した猿楽遺跡の調査においては調査区の南半部分で周堀を伴う古墳7基と竪穴式小石槨1基の合計8基の古墳が検出された。これらの古墳については既にその概要が周知されていたものであったが、出土埴輪や副葬品の内容を報告することにより、太田市東部の渡良瀬川扇状地上に形成された古墳群の一例についての理解をより一層深めることが可能になったものと考えられる。

検出された古墳は、8号墳を除きいずれも円墳で、その規模は約8から22mと考えられる。3号墳の周辺では3号墳と2号、5号から7号墳の合計5基の周堀が近接した状態で築造されていることからこの古墳群がいわゆる群集墳の状態をなしており、その分布は調査区域外の微高地上に広がっていたものと考えられる。

検出された古墳の変遷を考えると1号墳から円筒埴輪、形象埴輪が出土しているのに対し、他の古墳からは埴輪が出土していない。このことから1号墳を築造順の先頭に位置づけることができる。1号墳の築造時期は円筒埴輪の特徴から6世紀後半から7世紀初頭に位置づけることができると考えられる。ただし、本墳が古墳群全体の形成における端緒であるとするまでには断定できない。毛里田小学校敷地内からは大刀形埴輪の出土が伝えられており、周辺に1号墳と前後する時期の古墳が存在していた可能性が考えられるからである。

1号墳の次に3号墳、これにやや遅れて4号墳が築造されたものと考えられる。4号墳からは須恵器の大甕が出土している。埴輪が検出されないことから、その築造時期は7世紀代と考えられる。3号・4号墳とも石室の両袖部に多段の礫を積み上げている。菅ノ沢遺跡L-95号墳のような玄門を強く意識した門柱石の設置が見られないことから7世紀でも末にまでは下らないものと考えられる。その袖部の石積みも3号墳では多段、4号墳では根石に縦置きした礫が設置されていることを重視すれば4号墳のほうが3号墳より後出的要素を有している。

また、1号・3号・4号の各古墳の石室開口部前に前

庭状の掘り込みが認められること、地山を掘り込んで掘り方が設けられていることも注意される点である。

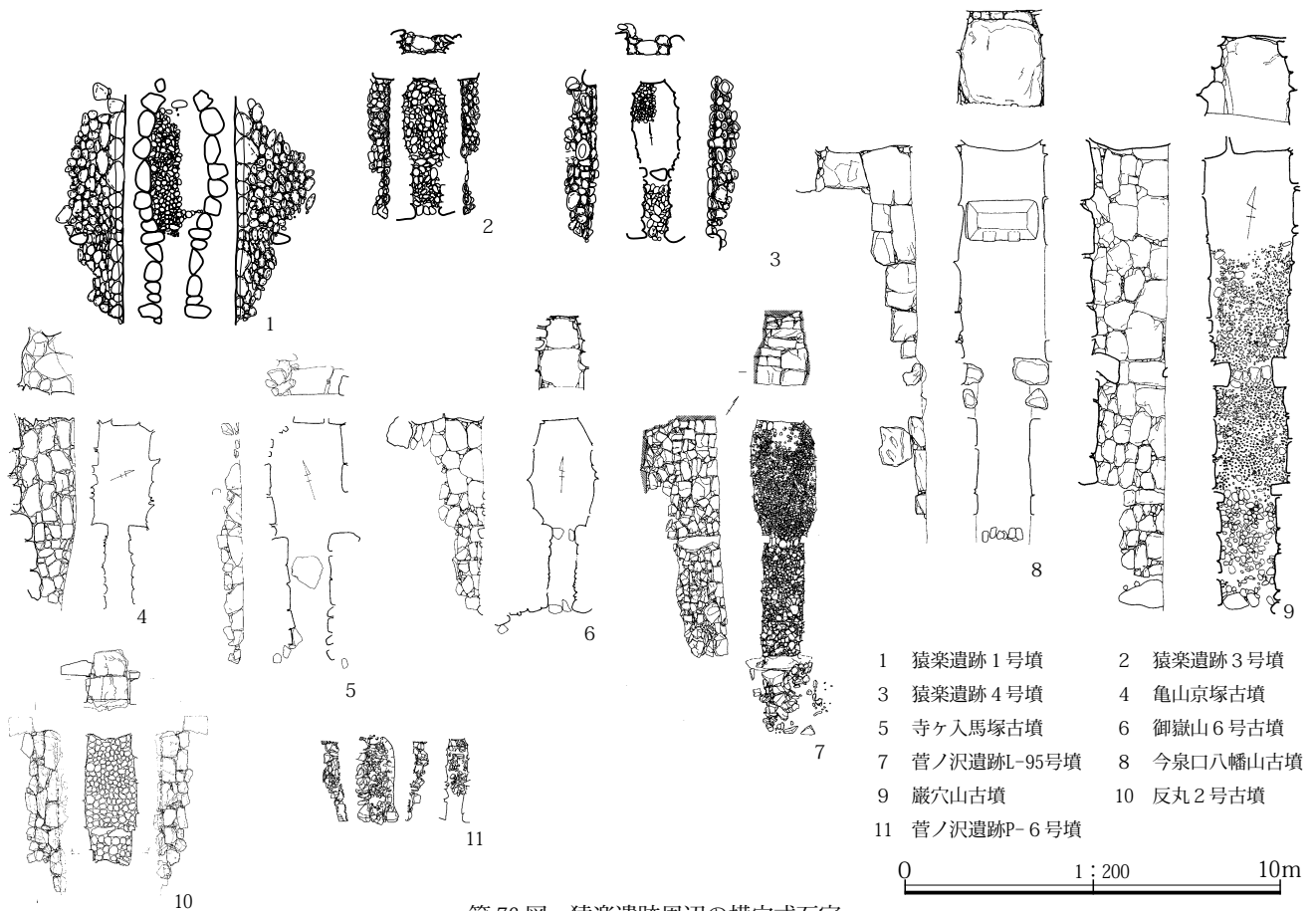
他の古墳については主体部が検出されなかったことからその前後関係を検討することが困難であるが、周堀の掘削状況から3号墳築造以前に2号・5号から7号墳が存在していたものと考えられそうである。

1号墳の主体部は川原石を乱石積みした両袖型横穴式石室で、玄室の平面形状が胴張り形を呈していた。3号・4号墳の玄室も1号墳と同様、胴張り形を呈している。本古墳群の石室築造にあたっては、その規模に相違は有りながらも一連の石室築造・規格技術が継続して採用されていたことがわかる。これらの玄室の胴張りの形状は石室の全長を半径とした円弧とほぼ合致する曲線を規格線としており、その最大幅は玄室中央にあった。

太田地域の横穴式石室の変遷については既にいくつかの研究成果が知られている⁽¹⁾。それらを参考に猿楽遺跡周辺の古墳について見ると、前方後円墳である今泉口八幡山古墳や方墳の巖穴山古墳では玄室の平面形状が長方形を呈するのに対し、小円墳では胴張り形の玄室を採用するものが幾例か認められる。2001(平成13)年の段階で太田地域で15例が集成されており⁽²⁾、その後、大幅な増加は認められない。これらは、胴張りの状況や使用石材を比較すると、古墳ごと、小地域ごとに細かな点で相違が認められ、石室築造技術が一元的に波及したものではないことが考えられる。

反丸2号墳や寺ヶ入馬塚古墳では埴輪樹立が認められることから猿楽遺跡1号墳と前後する時期の築造と考えられる。6世紀後半から7世紀初頭の時期、群馬県内では各地においてほぼ同時に横穴式石室に胴張り形の形状が採用されている。埼玉県北部における小円墳においても同様の傾向が認められる⁽³⁾。菅ノ沢遺跡L-95号墳や御嶽山6号墳をはじめとした御嶽山古墳群の各石室は天井の段構造や玄室の短小化が見られ、7世紀後半の所産と考えられている。

川原石を使用した竪穴式小石槨である8号墳は石槨内外からの出土品がなく、その築造時期を決定することは



第76図 猿楽遺跡周辺の横穴式石室

困難である。太田地域では主体部に横穴式石室が導入・定着する以前は8号墳と同様の竪穴式石槨が広く採用されている。本地域における導入期の横穴式石室の例としては6世紀中葉の築造と考えられる亀山京塚古墳があげられている。このことを考慮すると8号墳の時期は6世紀中葉を前後する時期、あるいはそれ以前と考えることができる。ただその場合、調査古墳内で考えると1号墳他の古墳との間に多少の時間差が生じることになる。

もう一つの考え方としては8号墳を終末期の古墳と理解することである。菅ノ沢遺跡では、P-6号墳やN-7号墳など全長1.5m以下の小規模な横穴式石室が検出されている。終末期の横穴式石室が小規模化し、一部が石槨化することは群馬県内の横穴式石室の変遷のあり方として広く県内に類例が認められるところである。また、西長岡横塚28号墳では竪穴状の礫槨内に刳拔式石棺が埋置されている事例が知られている。8号墳の形状はこれらに類すると考えることもできる。いずれにしても本墳の築造時期についてはその結論を出すことを保留とし、今後の課題の一つとしたい。

次に埴輪について注視される点を上げておきたい。1

号墳から出土した円筒埴輪の全体形状は5条突帯6段構成で、器高58.8cmを測るものであった。他の個体も同形である。このように胴部が寸胴で、口縁部、基底部が短い形状の円筒埴輪は、前方後円墳をはじめとした大型古墳への占有的な樹立が指摘されている。猿楽遺跡周辺では太田市二ツ山1号古墳、西長岡東山第3号墳などで類例を知るところである。このような形状の大型円筒埴輪が、墳丘径22m弱の円墳である1号墳から出土した点について、後述する全身表現の人物埴輪の樹立とともに特記すべき点と考える。なお、本墳出土の埴輪の生産地を特定することは困難であるが、胎土の内容、太田市駒形神社埴輪窯集積場から多数出土している円筒埴輪と類似する形状全体の構成や器肉の厚い点などの特徴から太田市周辺の埴輪窯で生産されたものと考えられる。

1号墳からは5条6段構成の円筒埴輪とともに形象埴輪が多数出土している。残存状態が不良であったことから器種の判明したものは一部に限られたものの、人物埴輪、器財埴輪の韌を確認し、盾・家・馬形埴輪の存在が推定される場所である。人物埴輪は残存した髪、顔面の状況から女子2体を含む4体以上の樹立が確認され

た。人物埴輪(40)に見られる肩・腕の成形の稚拙さ、あるいは省略したあり方は駒形神社埴輪窯出土の人物埴輪の形状と共通する点があり、当該地域の形象埴輪の変遷を理解する上で新たな資料を提供することになるものと考えられる。

また、人物埴輪の中には双脚表現の個体が含まれていた(50・51・54～56)。これらの残存片は下半身、禪表現の部位であることから盛装男子の双脚立像が存在していたものと考えられる。頭部を含む上半身あるいは基台部については残存せず、具体的な所作などは不詳である。

双脚立像については群馬県内では早くは5世紀後半から末築造の高崎市保渡田八幡塚古墳の人物群中に認められる。その後、6世紀後半築造の高崎市綿貫観音山古墳にいたるまで、前方後円墳をはじめとした大型古墳を中心にその樹立例が認められる。群馬県内の人物埴輪の集成においては2006(平成18)年段階で出土不詳も含め21基の古墳からの出土が知られている⁽⁴⁾。

再三になるが猿楽遺跡1号墳の規模は22m弱の円墳である。横穴式石室の規模も全長5.94mと3号・4号墳と比較すれば大型であるが、6世紀後半の時期の石室とすれば特段記すべき規模ではない。まとめの最後に群馬県内で、猿楽遺跡1号墳同様、円墳でありながら双脚全身表現の人物埴輪を出土した古墳の事例について焦点をあて、猿楽遺跡1号墳との比較を行ってみたい。群馬県内で調査された円墳で双脚全身表現の人物埴輪の出土が確認された古墳は5基である。以下その概要を記する。

太田市オクマン山古墳は直径約35mの円墳である⁽⁵⁾。主体部は袖無型の横穴式石室である。円筒埴輪の構成は不明であるが、形象埴輪は人物7(鷹匠、武人2、鍬を担ぐ男子、帽子を被った男子他)、馬7、家1棟、翳1、鞆1、大刀1などが出土している。双脚人物は爪先が前方に突き出した靴と横断面隅丸方形の基台部分が残存していた。近接して古墳が散在するものの小地域内におけるオクマン山古墳の規模は一段突出している。直径36mの規模はより首長層に近い位置にある円墳とすることができよう。この他に、太田市では旧由良字四ツ塚に所在した古墳から盛装男子の立像が出土している。

高崎市倉賀野東古墳群大道南群3号古墳は直径17から18mの円墳で、主体部は両袖型横穴式石室である⁽⁶⁾。埴輪は2条3段構成の円筒埴輪とともに形象埴輪の人物

10、馬4、家2、大刀4、鞆3、盾4、鞆1が出土している。東接する大応寺群には前方後円墳が含まれるが、大道南群は直径10から20mの88基の円墳のみからなる古墳群で、3号墳は中規模に位置付けられる古墳である。

富岡市芝宮古墳群79号墳は直径16.8mの円墳である。主体部は両袖型横穴式石室である⁽⁷⁾。埴輪は2条3段と3条4段構成で底部調整の見られる円筒埴輪とともに複数の人物、力士、馬、家、蓋、翳、帽子、鞆、盾などの形象埴輪の各器種が確認されている。双脚像は2体存在し、盛装男子の一部であると考えられる。芝宮古墳群は6世紀中葉から7世紀末までに築造された100基余の円墳からなる古墳群で、墳丘径17m弱の79号墳は墳丘規模としては群中では中型と大型の中間に位置づけられるものの、石室は調査古墳中の第2位の面積である。

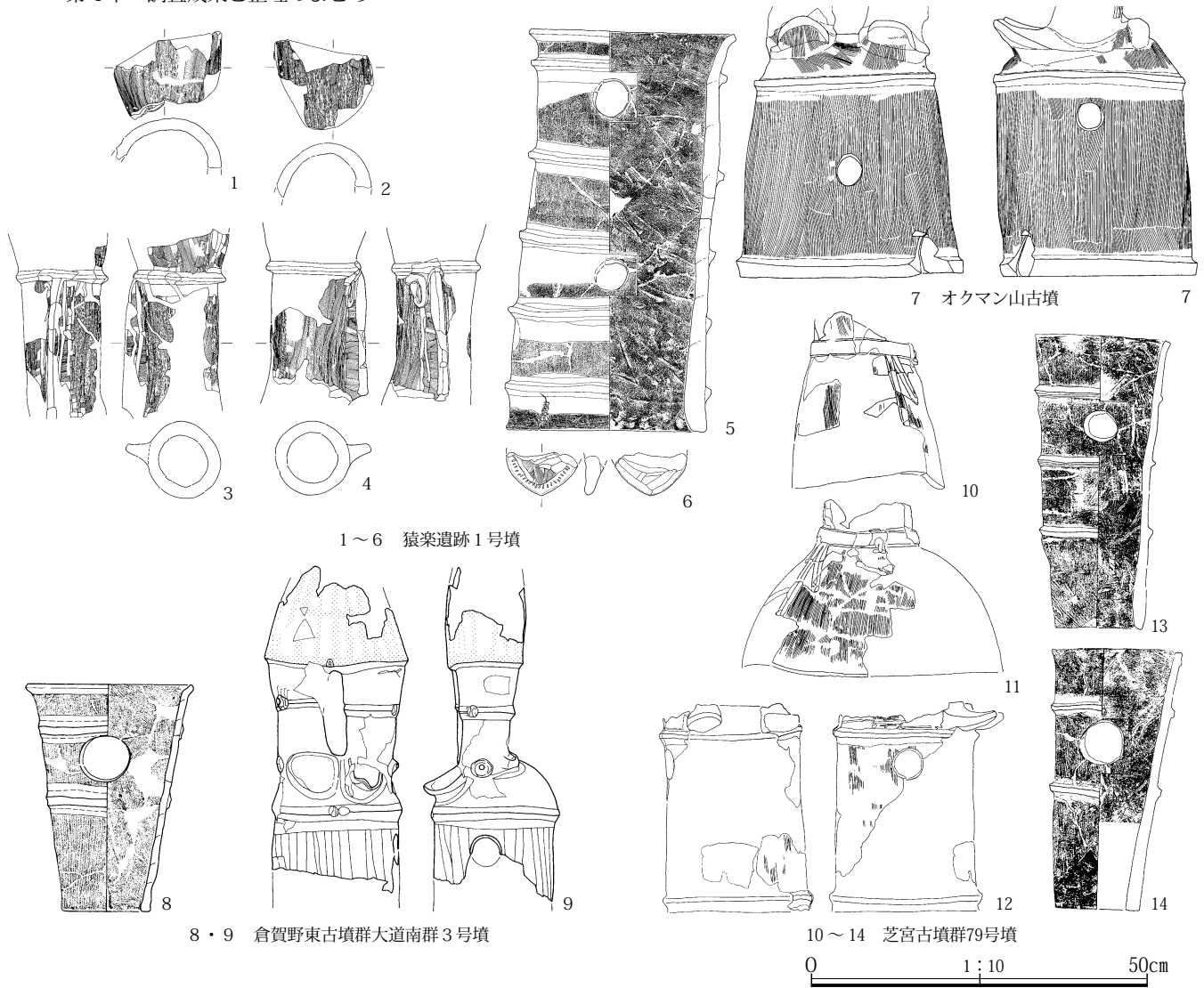
この他に直径24mの円墳、安中市高橋Ⅱ遺跡K-2号墳から双脚人物像の腰部分の大型破片が出土している⁽⁸⁾。

上記の円墳は大道南群3号墳が6世紀前半である他は6世紀後半の築造と推定されるところである。

これらの双脚表現の立像を樹立する円墳は絶対的な墳丘規模で見ると小規模である。これらの円墳が含まれる古墳群中における位置づけを見ると、相対的な規模としては群中の上位に位置づけられ、石室の在り方など他の属性などと考え合わせると群集墳中の中核的な古墳として認識できる点が共通している⁽⁹⁾。

古墳あるいはその被葬者の階層性については墳形、規模、副葬品の内容など種々の属性にその差違が認められることが論及されている。人物埴輪については盛装男子の全身像は倚座像とともに当時の上位層を表現としたものの認識が一般的である。

猿楽遺跡1号墳が築造された6世紀後半から7世紀初頭の時期には帆立貝式古墳の築造がほぼ終息し、首長層と有力者層の間の墳形表現の差は前方後円墳と円墳に限定されるようになる。その一方で、有力者層が築造した円墳の中身は従来以上に墳丘や石室の規模や円筒埴輪の構成、形象埴輪の組成内容による区分、階層が多層化したものと考えられる。今回取り上げたような中核的な円墳(何をもって中核的というのかについては検討を要するが)では双脚表現の盛装男子や鷹匠、力士などの立像を含む充実した組成内容の形象埴輪群は、前方後円墳や帆立貝式古墳といった大型古墳の組成に一步近づいたも



第77図 円墳出土の全身像人物埴輪

のとなっている。これまでの首長層と有力者層の間の階層差を反映するような形象埴輪の組成が崩れてきた段階での築造であることを示している。

ただ、その中でも大型古墳と中核的な円墳との間には厳然とした階層差が存在していたものと考えられる。その差違を示す一端を全身像の器高に相違に見ることができる。墳丘長97mの前方後円墳綿貫観音山古墳の全身像は155.5cmに復元されているのに対し、本1号墳出土の双脚像の高さは108cmと推定される。前述の太田市四ツ塚出土人物も115.8cmとされている。

今回報告する猿楽遺跡の古墳群についてはその造営の契機、あるいはその背景となる経済基盤、金山丘陵裾部に展開する須恵器窯や製鉄関連遺構の操業に係わった集団との関係などについて具体的に言及することはできなかった。これらについては今後の検討課題としたい。

- 1 島田孝雄2001「旧新田・山田郡(2)」『群馬県内の横穴式石室Ⅳ(補遺編)』群馬県古墳時代研究会/山賀和也2008「成塚向山2号墳・横穴式石室の検討」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団/小林孝秀2009「東毛地域における古墳終末への一様相」『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』駒沢大学考古学研究室
- 2 志村哲2004「群馬県の胴張形石室」『群馬県内の横穴式石室(補遺編2)』群馬県古墳時代研究会
- 3 小林孝秀2008「北武蔵における横穴式石室の動向とその系譜」『専修史学』第44号
- 4 古墳時代研究会2006『群馬県内の人物埴輪』
- 5 木暮仁一1981「オクマン山古墳」『群馬県史』資料編 群馬県史編さん委員会/太田市教育委員会1999『太田市指定重要文化財鷹匠埴輪修復報告書』
- 6 南雲芳昭他2002「倉賀野東古墳群大道南群調査報告(下)」『高崎市史研究』高崎市史編さん委員会
- 7 富岡市教育委員会1992『芝宮古墳群』
- 8 安中市教育委員会2004『古屋地区遺跡群』
- 9 右島和夫1992「Ⅳ考察1. 出土埴輪の特徴とその意義」『神保下條遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団/日高慎1994「埴輪祭祀の階層性について」『考古学と信仰』同志社大学考古シリーズ刊行会

参考文献

- 1 太田市1996『太田市史通史編原始古代』
- 2 群馬県史編さん委員会1981『群馬県史資料編3原始古代3』
- 3 太田市教育委員会1996『埋蔵文化財発掘調査年報6』
- 4 群馬県教育委員会1983『渡良瀬川流域遺跡群（反丸遺跡）発掘調査概報』
- 5 群馬県教育委員会1984『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報（吉祥寺遺跡 流作場遺跡 反丸遺跡）』
- 6 太田市教育委員会1986『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報（宮の上遺跡 落内遺跡 矢田堀前田 跡西浦遺跡 磯之宮遺跡）』
- 7 群馬県教育委員会1985『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報（丸山北遺跡 大道西遺跡 二の宮遺跡）』
- 8 群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館址』
- 9 太田市教育委員会2000『市内遺跡XVI 東矢島古墳群（割地山古墳）朝子塚古墳 成塚向山古墳群丸山腰巻遺跡』
- 10 太田市教育委員会1996『今泉口八幡山古墳発掘調査報告書』
- 11 太田市教育委員会1988『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報―楽前遺跡（第Ⅱ次）・東田遺跡』
- 12 太田市教育委員会1989『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 矢部遺跡』
- 13 太田市教育委員会1994『渡良瀬川流域遺跡群・楽前遺跡発掘調査概報―本文編（農政分）』
- 14 群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『楽前遺跡（1）』
- 15 太田市教育委員会1986『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報―二の宮遺跡（第Ⅱ次）』
- 16 群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『古氷条理制水田跡 二の宮遺跡』
- 17 群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『八ヶ入遺跡Ⅱ』
- 18 駒沢大学考古学研究室2009『群馬・金山丘陵窯跡群Ⅱ』
- 19 群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『鹿島浦遺跡』
- 20 群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『東今泉鹿島遺跡』
- 21 群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『大道東遺跡（2）』
- 22 群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『大道西遺跡』
- 23 太田市教育委員会1988『下宿遺跡F地点』
- 24 太田市教育委員会1971『聖天沢遺跡調査報告書』
- 25 群馬県教育委員会『群馬県文化財情報システムWEB版』
- 26 群馬県埋蔵文化財調査事業団1999『東長岡戸井口遺跡』
- 27 群馬県教育委員会1985『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報（駒形遺跡 矢場向遺跡 稲荷宮遺跡）』
- 28 太田市教育委員会1992『埋蔵文化財発掘調査年報2』
- 29 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 向矢部遺跡（第Ⅱ次）・文化庁分』
- 30 太田市教育委員会1996『渡良瀬川流域遺跡群発掘調査概報 向矢部遺跡（第Ⅲ次）・農政分』
- 31 群馬県埋蔵文化財調査事業団2007『向矢部遺跡』
- 32 群馬県埋蔵文化財調査事業団2005『年報24』
- 33 群馬県埋蔵文化財調査事業団2006『年報25』
- 34 太田市1996『太田市史通史編自然』
- 35 群馬県1991『土地分類基本調査深谷』
- 36 群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『大道東遺跡（1）』
- 37 太田市教育委員会1993『埋蔵文化財発掘調査年報3』
- 38 太田市教育委員会1997『市内遺跡XⅢ』
- 39 橋本博文・加部二生1993「上野」『前方後円墳集成』東北・関東編山川出版
- 40 橋本博文1979「上野東部における首長墓の変遷」『考古学研究』第102号考古学研究会
- 41 新田町誌編纂委員会1979『新田町誌』第2巻
- 42 宮田毅1991「太田市駒形神社窯跡埴輪集積場」『月刊考古学ジャーナル』No.331ニューサイエンス社
- 43 太田市教育委員会1991『埋蔵文化財発掘調査年報1』
- 44 待矢場両堰土地改良区1996『待矢場両堰土地改良区史』
- 45 右島和夫1994『東国古墳時代の研究』学生社
- 46 島田孝雄1999「(5)旧新田・山田郡」『群馬県内の横穴式石室』Ⅱ（東毛編）群馬県古墳時代研究会
- 47 横須賀倫達2000「ガラス小玉と装身具類」『弘法山古墳群』福島県教育委員会
- 48 島田孝雄2001「群馬県東部の円筒埴輪について」『埴

参考文献

- 輪研究会誌』5
- 49 島田孝雄2001「旧新田・山田郡(2)」『群馬県内の横穴式石室』Ⅳ(補遺編)群馬県古墳時代研究会
- 50 島田孝雄2003「群馬県における後期古墳の初段階」『第8回東北・関東前方後円墳研究大会【シンポジウム】後期古墳の諸段階発要旨資料表』東北・関東前方後円墳研究会
- 51 志村哲2004「群馬県内の胴張形石室」『群馬県内の横穴式石室』Ⅴ(補遺編2)群馬県古墳時代研究会
- 52 齊藤幸男2004「竪穴式小石槨の基礎的考察」『研究紀要』22群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 53 群馬県埋蔵文化財調査事業団2004『多田山古墳群』
- 54 福島雅儀2006「古墳時代ガラス玉の製作技法とその痕跡」『考古学と自然科学』日本文化財科学会
- 55 島田孝雄2006「太田市域の人物埴輪」『群馬県内の横穴式石室』群馬県古墳時代研究会
- 56 群馬県埋蔵文化財調査事業団2008『成塚向山古墳群』
- 57 山賀和也2008「成塚向山2号墳・横穴式石室の検討」『成塚向山古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 58 群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『楽前遺跡(2)』
- 59 太田市教育委員会2000『市内遺跡ⅩⅥ』
- 60 加部二生2009「太田東矢島古墳群の再検討」『利根川』31利根川同人会
- 61 加部二生2009「群馬県地域における前方後円墳の消滅」『東国における前方後円墳の消滅』東国古墳研究会
- 62 永井久美男編1998『近世の出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会
- 63 新山保和2007「群馬県出土の低位置突帯埴輪」『研究紀要』25群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 64 太田市・『太田市史通史編中世編』

遺物觀察表

凡例

- 1 遺物番号は本文中に掲載した実測図・写真図版中写真に付した番号と一致しており、挿図の順に掲載している。
- 2 円筒埴輪の表については以下のとおりである。
 - a. 法量の項で口径、底径で（ ）の付くものは復元径であることを表す。器高の計測値で〈〉に付くものは残高を表す。
 - b. 段間長の計測値は残存状態にかかわらず下位段から上位段に向かって①②・・・と呼称してそれぞれの段間を表した。〈 〉の付くものは残高を表す。
 - c. 突帯の断面形状については下位の突帯から①②と呼称した。台・M・三は、断面形状がそれぞれ台形、M字形、三角形を呈すること。1・2・3は、1が突帯の上稜が下稜より高く突出しているもの、2は両者がほぼ同じ高さのもの、3は下稜が上稜より高いことを表す。
 - d. 胎土については形象埴輪も含め、砂礫の混入の度合いにより、A（多量）、B（普通）、C（少量）と3分類をした。
 - e. 色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』の土色名に準じて大別した。色相、明度、彩度の記載については省略している。
 - f. 焼成は器面の観察から、A良好、B普通、C不良と1硬質、2普通、3軟質に分類した。
 - g. ハケメの項の数値は2cm幅あたりのハケメの本数である。
 - h. 基部粘土板の重ね合わせの上下は埴輪の底面側から見たときの状態を示している。
- 3 形象埴輪の表については以下のとおりである。
 - a. 法量の項で〈 〉は残存値、()は復元径であることを表す。
 - b. 胎土・色調・焼成の項の記載・分類は円筒埴輪のそれと同様の内容である。
 - c. ハケメの項の数値は2cm幅あたりのハケメの本数である
- 4 土師器の胎土については以下のように分類した。
 - A ガラス類や石英と輝石または角閃石を含む。
 - B 輝石または角閃石を含む。赤色粒を多く含む。
 - C ガラス類や石英と輝石または角閃石を含む。雲母状に薄く剥がれる鉱物？を少量含む。
- 5 須恵器の胎土については以下のように分類した。
 - A 白色鉱物とガラス類や石英、灰色から黒色粒を含む。
 - B 輝石または角閃石を含む。チャートを少量含む。
 - C チャート、雲母？を少量含む。ガラス類や石英を含む。
 - D 夾雑物少なく、白色鉱物を少量含む。
- 6 古銭の法量の項、径1は縦方向、径2は横方向の直径を表す。

1号墳出土円筒埴輪

番号	挿図写真	器形	残存	出土位置	法量 (cm)		突帯断面形状	透孔	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
					①口径 ②底径 ③器高	段間長						
1	22図 PL15	円筒	1/2	墳丘上・羨道前・北・南・北西・覆土	①(29.8) ②29.0 ③58.8	①6.0 ②10.6 ③10.1 ④10.6 ⑤14.7 ⑥6.8	①台2 ②台1 ③台1 ④台2 ⑤台1	①第1段 左-×- 右-×- ②第2段 前4.5×- ③第3段 左5.7×- 右5.5×- ④第4段 前5.8×5.6	①B ②明赤褐 ③A1	10	器形は歪み全体が傾斜している。外面タテハケ。内面底部から胴部第3段まではナナメ方向のハケメ。第4段目と口縁部はナナメヨコ方向のハケメ。第1・第2突帯は貼付後のヨコナデの幅が広い。	製作時に基底部に生じたヒビ割れをへら状の工具により補修した痕跡がある。
2	22図 PL15	円筒	口縁部～胴部2段1/2	北・北北張・西、D-26	①(29.8) ②- ③<25.6>	①(7.4) ②10.0 ③8.2		6.0×5.5	①B ②赤褐 ③A2	13	口縁部は長く、緩やかに外反して立ち上がる。外面タテハケ。内面胴部1段はナデ。胴部2段と口縁部はナナメヨコ方向のハケメ。	
3	22図 PL16	円筒	口縁～胴部1段破片	墳丘上・南・南西	①(26.2) ②- ③<14.7>	①(8.7) ②6.0	台1	-×6.0	①C ②明赤褐 ③C2	14	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	外面摩耗。
4	22図 PL16	円筒	胴部3段2/3	南・東南・東・南西・北東、C-26	①- ②- ③<28.0>	①(8.5) ②11.7 ③(7.8)	①台1 ②台1	①-×6.9 ②-×- ③-×-	①B ②橙 ③A1	10	胴部の直径は25.4cmに還元される。外面タテハケ。内面ナナメ方向のハケメに一部ナデを重ねる。	
5	22図 PL16	円筒	胴部2段1/3	南・東南・覆土	①- ②- ③<14.7>	①(2.3) ②(12.4)	台2		①B ②明赤褐 ③C3	9	外面タテハケ。内面ナデ一部にハケメを残す。	突帯の幅が少し広い。胎土が他と異なるか。器面摩耗。
6	22図 PL16	円筒	胴部2段1/3	墳丘上・覆土	①- ②- ③<14.6>	①(5.2) ②(9.4)	台1	第1段 -×6.1 第2段 -×-	①B ②赤褐 ③A2	14	胴部の直径は26.2cmに還元される。外面下段タテハケ。上段ナナメタテハケ。内面下段ナデ。上段ヨコ方向のハケメ。	段間長が他の円筒と比較して長い。形象基台部か。
7	23図 PL16	円筒	胴部4段	墳頂・北周堀・北周堀外・南・南西・北西	①- ②- ③<21.8>	①(4.3) ②8.5 ③8.4 ④(0.6)	①M1 ②台1 ③台3	②5.6×5.6 ③5.6×5.6	①B ②赤褐 ③A2	9	外面タテハケ。内面ナナメ方向のハケメにタテ方向のナデを重ねる。	突帯の幅は狭い。透孔の切開は粗雑。
8	23図 PL16	円筒	胴部2段1/4	墳丘上・東・南・覆土、基点3	①- ②- ③<18.1>	①(8.5) ②(9.6)	M1	各段に一部残存	①B ②明赤褐 ③A2	14	胴部の直径は25.0cmに還元される。外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメに一部ナデを重ねる。	
9	23図 PL17	円筒	基底部分～胴部第4段	周堀(北側)	①- ②(26.2) ③<48.6>	①6.2 ②12.8 ③11.6 ④11.5 ⑤(6.5)	①台1 ②M2 ③台1 ④台1	第1段 前6.6×6.6 後8.0×7.0 第2段 右6.5×6.3 左6.6×6.2 第3段 前6.0×- 後-×5.8	①B ②橙 ③C1	14	第3突帯部分の胴部径が最も細い。胴部第1段と胴部第3段の透孔は対向する位置がずれている。外面タテハケ。内面基底部分から胴部第1段下半はナデ。それ以上はナナメヨコ方向のハケメ。基部粘土板は二枚を合わせている。	製作時に基底部分に入ったひび割れを工具や指頭により補修している。焼成は還元状態。
10	23図 PL17	朝顔形	基底部分～胴部第4段1/4	北周堀外・北西、C-23～24	①- ②(27.0) ③<38.8>	①5.3 ②11.4 ③9.8 ④9.2 ⑤(3.1)	①台2 ②台2 ③台2 ④台2	第1段 5.5×- 第3段 6.0×-	①B ②橙 ③A2	9	器形は整っている。外面は粗いハケメのタテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメに胴部第1段と第3段以上にナデ。基部粘土板の重ねは左が上。	
11	23図 PL17	円筒	基底部分～胴部第3段1/2	-1墳丘上・南西・覆土 -2南・南西・周堀・Sトレンチ、D-36	①- ②(25.0) ③<32.1>	①6.5 ②10.0 ③10.4 ④(5.2)	①台1 ②台1 ③台1	第1段 左5.6×5.6 右-×- 第2段 中央5.7×5.4	①B ②橙 ③A2	12	器形はやや歪んでいる。外面タテハケ。内面ナデ。胴部第2段以上はヨコ方向のハケメ。基部粘土板の重ねは右が上。	外面摩耗。透孔の切開は粗雑で円形が歪む。一部還元状態。
12	24図 PL18	円筒	口縁部破片	北東、B-23～24	①- ②- ③<4.6>				①C ②赤褐 ③A1	9	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。	朝顔形か。
13	24図 PL18	円筒	口縁部破片	北周堀外	①- ②- ③<5.8>				①C ②橙 ③A2	13	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	朝顔形か。
14	24図 PL18	円筒	口縁～胴部1段破片	東南・南西・覆土、表採	①- ②- ③<10.1>	①(3.3) ②6.8	M1	一部残存	①B ②橙 ③C2	12	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	内面に線刻。外面やや摩耗。器面に炭素吸着。

遺物観察表

番号	挿写真	器形	残存	出土位置	法量 (cm)		突帯断面形状	透孔	①胎土 ②色調 ③焼成	ハケメ	成形・整形の特徴	備考
					①口径 ②底径 ③器高	段間長						
15	24図 PL18	円筒	口縁部破片	覆土、E-20	①- ②- ③<7.8>				①B ②赤褐 ③C1	13	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	外面に線刻。
16	24図 PL18	円筒	口縁部破片	南	① ②- ③<7.0>				①B ②明赤褐 ③A2	9	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	
17	24図 PL18	円筒	胴部2段破片	覆土	①- ②- ③<6.6>	①(2.7) ②(3.9)	台1		①C ②赤褐 ③A2	15	胴部の直径は小径。17.6cmに復元される。外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメにナデを重ねる。	朝顔形か。
18	24図 PL18	円筒	胴部2段破片	覆土、B-23 ~ 24、 C-30-5	①- ②- ③<9.3>	①(5.8) ②(3.5)	台1	-×5.2	①B ②明赤褐 ③C1	12	外面タテハケ。内面ナデ、一部にハケメを残す。	外面に炭素吸着。
19	24図 PL18	円筒	胴部破片	周堀(北側)	①- ②- ③<12.0>		台1		①C ②明赤褐 ③A2	12	外面タテハケ。内面ナナメ方向のハケメに一部ナデを重ねる。	
20	24図 PL18	朝顔形	胴部2段破片	周堀・覆土、 C-23 ~ 24、 C-30、B-23 ~ 24、3墳土	①- ②- ③<8.8>	①(1.2) ②(7.6)	台1	-×6.8	①B ②橙 ③A2	10	外面タテハケ。内面ナデ一部にハケメ。	透孔は歪んでいる。
21	24図 PL18	円筒	胴部2段破片	覆土	①- ②- ③<8.7>	①(3.2) ②(5.5)	M1		①B ②明赤褐 ③A2	14	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。	外面やや磨耗。
22	24図 PL18	円筒	胴部2段破片	南・東南	①- ②- ③<8.5>	①(5.0) ②(3.5)	台1	5.5×-	①B ②明赤褐 ③A2	10	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	
23	24図 PL	円筒	胴部2段破片	墳丘上	①- ②- ③<6.7>	①(3.6) ②(3.1)	M1	一部残存	①B ②橙 ③A2	15	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	内面に線刻。
24	24図 PL18	円筒	胴部破片	墳丘上	①- ②- ③<6.7>		欠損		①B ②にぶい赤褐 ③C3	13	外面タテハケ。内面ナナメヨコ方向のハケメ。	内面に線刻。
25	25図 PL18	円筒	底部部~胴部第1段破片	B-23 ~ 24	①- ②- ③<11.6>	①3.4 ②(8.2)	M1		①B ②明赤褐 ③A2	14	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ一部にナデ。	
26	25図 PL18	円筒	底部部~胴部第1段破片	羨道前・覆土	①- ②- ③<16.7>	①8.4 ②(8.3)	台2		①B ②赤褐 ③A2	14	外面タテハケ。内面ナデ。上位にヨコ方向のハケメ。	突帯は歪んで貼付。
27	25図 PL18	円筒	底部部~胴部第1段破片	覆土	①- ②- ③<11.5>	①5.6 ②(5.9)	台2	一部残存	①B ②明赤褐 ③B2	16	外面タテハケ。内面ナデ。基部粘土板の重ねは右が上。	
28	25図 PL18	円筒	底部部~胴部第1段破片	北東	①- ②- ③<12.7>	①4.0 ②(8.7)	台2	一部残存	①B ②橙 ③B3	12	外面タテハケか。内面ナデ。基部粘土板の重ねは左が上。	器内外面とも磨耗。
29	25図 PL18	円筒	底部部破片	南	①- ②- ③<6.5>				①C ②明赤褐 ③A2	17	外面タテハケ。内面ナデ。	底部部外面にヒビ割れの補修痕有り。
30	25図 PL18	円筒	底部部破片	北西・覆土	①- ②- ③<5.5>				①C ②明赤褐 ③A2	17	外面タテハケ。内面ナデ。	
31	25図 PL19	朝顔形	口縁部~胴部上位2段1/3	墳丘上・2 ビット・南・ 東・西・南 西・スト レンチ・基点 3	①(34.6) ②- ③<42.5>	①(9.6) ②8.8 ③6.9 ④17.2	①台1 ②台1 ③M1	-×6.0	①B ②明赤褐 ③A1	13	先端は外反弱く、斜め上方に向けて立ち上がる。端部は平坦。肩部の張りは弱い。口縁部は、外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。肩部は、外面タテハケ。内面ナデ。胴部は、外面ナナメ方向のハケメ。内面ナナメ方向のハケメ。	口縁部内面磨耗。
32	25図 PL19	朝顔形	口縁部上半破片	南・南西	①(35.0) ②- ③<11.7>				①B ②赤褐 ③A1	13	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。	
33	25図 PL19	朝顔形	口縁部上位破片	南・東南・ 南西、C-26	①(34.0) ②- ③<7.8>				①B ②赤褐 ③A2	13	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。	内面に線刻。
34	25図 PL19	朝顔形	口縁部下位破片	周堀	①- ②- ③<11.1>	①(4.1) ②(7.0)	台1		①B ②明赤褐 ③A1	14	外面タテハケ。内面ヨコ方向のハケメ。	内面磨耗。
35	25図 PL19	朝顔形	頸部破片	周堀	①- ②- ③<6.4>	①(3.4) ②(3.0)	台2		①B ②明赤褐 ③A1	12	外面タテハケ。内面ナデ。	

1号墳出土形象埴輪

番号	挿図 写真	器種 部位	出土位置	法量 cm	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
				①タテ(長) ②ヨコ(幅) ③その他				
36	26図 PL19	人物 顔面 右上 破片	南西	①7.9 ②5.8 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	20	右目周辺の破片である。目はへら状工具により刺突して開ける。粘土を貼り眼窩上突起が表現されている。内面にはナデを施す。	
37	26図 PL19	人物 顔面 鼻下 半破片	北	①8.8 ②9.5 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	16	頭部本体に顔面部分の粘土板を貼り足している。鼻は剥落している。口は工具により外側から刺突して開ける。内面にはハケメを施している。	
38	26図 PL19	人物 顔面 下半 ～頸破片	南、ストレン チ	①9.6 ②9.0 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	16	頭部本体に顔面部分の粘土板を貼り足している。両目・口は工具により外側から刺突して開ける。側頭部には耳の表現の一部が残存するが具体的な様子は不明である。内面にはナデを施している。	
39	26図 PL19	人物 顔面 左上 破片	西	①5.7 ②6.0 ③-	①B ②橙 ③A2	—	左目周辺の破片である。内面にはナデを施す。	
40	26図 PL20	人物 頸～基底 部上位3/4	周堀1・南西	①40.3 ②18.0 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	14	頭部は欠損する。肩部が成形されていないため、頸と胸部の直径に大きな変化はなく、徐々にその径を細めている。右の手のひらは胴部に接している。親指は単独、他の4指は一体に作られ、へらで切って区分されている。胸に結びの紐が付けられた他は着衣の表現はなく、外面にはタテ方向のハケメが施され、一部にナデが重ねられている。基台部とは突帯1条を廻らして区分している。基台部の調整は胴部と一帯で、外面にはハケメ、内面にはナデが施されている。側面に一対、円形の透孔が配されている。	
41	27図 PL19	人物 弁帽	東南	①4.1 ②4.5 ③厚さ3.3	①C ②明赤褐 ③A2	—	中央が低く、窪む。両端は長く延びることはない。下端は頭頂部との接合のためぼぞ状を呈する。器面にはナデを施す。	
42	27図 PL19	人物 胸の破片 か	D-25	①8.9 ②7.5 ③-	①C ②橙 ③A2	—	右前にした上衣の重ねを表現したものか。左右の細い粘土紐は結びの紐を表現したものと考えられる。器面には丁寧なナデが施される。内面にもナデが施される。	
43	27図 PL19	人物 髷の破片 か	D-29-4	①5.9 ②5.5 ③厚さ1.5	①C ②橙 ③A2	18	粘土板の残片である。バチ形をした髷の一部と考えられる。外面にハケメを施す。	前後関係は不明。
44	27図 PL19	人物 髷の破片 か	ストレンチ	①6.5 ②5.9 ③厚さ1.5	①C ②橙 ③A2	14	43と同様、粘土板の残片である。バチ形をした髷の一部と考えられる。外面にハケメを施す。43とは別個体である。	前後関係は不明。
45	27図 PL19	人物 胸の破片	墳丘上	①5.3 ②7.4 ③-	①C ②明赤褐 ③A2	14	彎曲する破片である。小突起は乳房を表現したものと考えられる。外面にはハケメ・ナデを、内面にはナデを施す。	
46	27図 PL19	人物か 胸の破片 か	覆土	①2.2 ②1.9 ③-	①C ②明赤褐 ③A2	—	豆粒状の粘土である。本体から欠落した割れ口が見られる。乳房を表現したものか。あるいは繫に付く釵を表現したものか。	
47	27図 PL19	人物か 胸の破片 か	北西	①2.4 ②2.4 ③厚さ2.4	①C ②明赤褐 ③A2	—	豆粒状の小突起である。本体から欠落した割れ口が見られる。乳房を表現したものか。	
48	27図 PL19	人物 右腕破片	ストレンチ	①5.9 ②5.3 ③厚さ3.5	①C ②明赤褐 ③A2	—	中実の棒状粘土の破片である。二の腕の一部と考えられる。強く彎曲をしている。器面はナデ調整が施される。	
49	27図 PL19	人物 左腕	墳丘上・南	①10.2 ②3.0 ③厚さ2.7	①C ②明赤褐 ③A2	—	太さ2.7cmの中実の棒状粘土である。彎曲している。断面形は長円形である。ナデ調整が施される。	
50	27図 PL21	人物 膝上1/2	墳丘上・南・ 覆土	①13.0 ②15.8 ③-	①C ②赤褐 ③A1	16	双脚全身表現の人物埴輪の一部と考えられる。上方に向かって大きく丸く半球形状に膨らんでいる。外面にはタテハケが、内面には一部にハケメを残すもののナメ方向のナデが施されている。	前後左右は不明。 51・55・56と同一 個体である。
51	27図 PL21	人物 膝上1/2	墳丘上・南・ 西、ストレン チ	①13.3 ②14.6 ③-	①C ②赤褐 ③A1	17	50と同様の形状、調整が認められる	前後左右は不明。 50・55・56と同一 個体である。
52	27図 PL19	人物 右肘～手	南	①5.5 ②3.0 ③厚さ2.5	①C ②明赤褐 ③A2	—	手のひら部分は偏平になる。へら状工具による刻みにより指を区分する。器面にはナデが施される。	
53	27図 PL19	人物 左腕～手	北西	①11.0 ②6.8 ③-	①C ②橙 ③A1	14	太さ2.5cmの棒状の粘土から成り、強く彎曲する。手のひらは胴部に接していた痕跡が認められる。腕の外側にはハケメを、他はナデが施される。	
54	27図 PL19	人物か 爪先か	南西	①6.3 ②10.5 ③-	①C ②赤褐 ③A1	—	靴を表現したものか。板状の破片で、平面形は幅広の木の葉が二分させたような形状である。上面にはハケメ・ナデが施された後、周縁部のナデの上に刺突文が重ねられている。下面はナデている。	

遺物観察表

番号	挿図 写真	器種 部位	出土位置	法量 cm	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
				①タテ(長) ②ヨコ(幅) ③その他				
55	27・ 28図 PL21	人物 左膝～膝 下2/3	墳丘上・北・ 東 南、スト レンテ	①21.3 ②(13.0) ③-	①B ②赤褐 ③A1	16	円筒状の本体の外側にひれ状の粘土板を接合して、禪の裾を表現している。残存上位に突帯と輪になった粘土紐の貼付が認められるが、これは足結とその結びの紐を表現したものと考えられる。円筒部の外面にはタテ方向のハケメを施す。内面は丁寧なナデが施される。ひれ状の部分の前面はヨコ方向にハケメを何度も重ねた後、外縁をナデ消している。背面はハケメ後これをタテ方向にナデ消している。	50・51・56と同一個体。
56	27・ 28図 PL21	人物 右膝～膝 下2/3	北・南・覆 土	①27.9 ②(14.7) ③-	①B ②赤褐 ③A1	16	55と同様の形状、調整が施される。足結いより上位も外面はタテハケ、内面はナデである。	50・51・55と同一個体。
57	29図 PL20	鞆 鎌	西、C-20	①6.4 ②10.0 ③-	①C ②赤褐 ③A2	—	矢筒から飛び出した3本の鎌が粘土板にヘラ描されている。	
58	29図 PL20	鞆 矢筒部破 片	南西	①6.7 ②7.2 ③-	①C ②明赤褐 ③A2	—	袋状を呈する破片である。	
59	29図 PL20	盾か 盾面外区 破片か	南	①10.3 ②9.2 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	10	板状の破片である。図の左端は本体から剥落した痕跡がある。前面にはタテ方向にヘラ描沈線が2条施されている。この面の調整は、ヨコ方向にハケメを施した後、外縁部にナデを重ねてハケメを消している。背面はヨコ方向のハケメを充填している。	
60	29図 PL20	鞆または 盾 破片	南西・墳丘 上	①7.7 ②8.2 ③-	①B ②赤褐 ③A2	9	円筒状を呈する61の側面に60の板状部分が接合していたものである。60の成形・調整は59と同様である。	
61	29図 PL20	鞆または 盾 破片		①11.2 ②9.5 ③本体の直径 (9.4)	①B ②赤褐 ③A2	9	外面はタテ方向のハケメ、内面はナデを施す。	
62	29図 PL20	鞆または 盾 破片	羨道前・覆 土	①22.2 ②8.3 ③-	①B ②明赤褐 ③A1	10	59と同様の成形・調整を施す。前面には接合部分寄りと外縁寄りの2箇所にはほぼ平行する状態でヘラ描き沈線が施されている。	
63	29図 PL20	鞆か 上板破片 か	東南	①10.5 ②8.7 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	10	59と同様の調整が認められる。細片であるので判断が困難であるが、外縁は上位に向かって幅を広げているようにも見える。	
64	29図 PL20	鞆か 下板破片 か	B-23-24	①16.0 ②9.0 ③-	①B ②にぶい赤 褐 ③A2	10	三角形、ひれ状を呈する粘土板である。他例の鞆の矢筒部に付く下板に類似する。一端に接合痕が見られるのは59他と同一である。一面は全面にナデ調整を施す。もう一面はヨコ方向のハケメが施されている。端部の断面はナデ調整側が面取りされている。	前後面不明。
65	29図 PL20	鞆または 盾 円筒部破 片	南・南西	①12.1 ②15.4 ③本体の直径 (10.3)	①B ②赤褐 ③A2	20	横断面は円筒状を呈する。側面にひれ状の粘土板が付いていたようでその一部が残存していた。外面にはハケメが、内面にはナデが施されていた。	前後面不明。
66	29図 PL20	鞆または 盾 円筒部破 片	東南・南西	①17.8 ②12.3 ③本体の直径 (13.0)	①B ②橙 ③A2	9	65と同様の断面形状を呈している。ヨコ方向に突帯が貼付されている。この突帯の上に重なってタテ方向に粘土板が接合されていた痕跡が剥離痕となって認められる。外面はタテハケ、内面もナナメヨコ方向のハケメが施される。	前後面不明。タテ方向の剥離痕の右側にナナメ方向の沈線が1条残る。
67	29図 PL20	不明 円筒部破 片	覆土	①10.0 ②8.8 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	20	側面の間にわずかな隙間を置いて上下2箇所の剥離痕が認められる。	前後面不明。
68	29図 PL21	不明 基台部破 片	覆土	①10.7 ②12.1 ③	①B ②赤褐 ③A2	10	円筒状呈する破片である。突帯が廻る。上段にはナナメ方向のヘラ描沈線が1条見られる。下段には円形の透孔が配されている。外面はタテハケ、内面もナナメヨコ方向のハケメが施される。	
69	30図 PL21	不明 破片	西・覆土	①13.0 ②15.5 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	13	緩やかに弧をなす破片である。幅2.5cmの粘土帯が貼付されている。帯の上面にはヘラ描による矢羽根状の文様が並ぶ。剥離痕が見られることからもう1条粘土帯が貼付されていたか。外面にはハケメ、内面にはナデが施される。馬形埴輪の頸部周辺、胸繫一部とも考えられる。	天地不明。
70	30図 PL21	不明 破片	西・南西	①13.7 ②15.3 ③-	①A ②明赤褐 ③B1	13	強い弧をなす破片である。69に類似する幅2.5cmの粘土帯が貼付されている。内外面の調整も類似する。馬形埴輪の一部とも考えられる。	天地不明。
71	30図 PL21	馬 尻尾	北	①8.8 ②7.7 ③-	①B ②赤褐 ③A2	—	本体から突き出たコップ状突起部分に幅2.3cmの粘土帯が巻き付いていることから馬形埴輪の尻尾とこれを巻く尻繫と判断したが検討の余地が多く残されている。	
72	30図 PL21	不明 破片	覆土	①9.6 ②12.0 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	18	緩やかに弧をなす破片である。幅3.5cmの粘土帯が貼付されている。外面にはハケメ、内面にはナデが施される。馬形埴輪の一部とも考えられる。	天地不明。

番号	挿図 写真	器種 部位	出土位置	法量 cm	①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	成 形 ・ 整 形 の 特 徴	備 考
				①タテ(長) ②ヨコ(幅) ③その他				
73	30図 PL21	不明 破片	西・南	①11.1 ②12.5 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	14 20	緩やかに弧をなす破片である。幅1.7cmの粘土帯が貼付されている。 ・外面にはハケメ、内面にはナデが施される。馬形埴輪の一部とも考えられる。	天地不明。
74	30図 PL21	不明 粘土帯破片	石室内床面	①2.7 ②6.6 ③厚さ0.7	①B ②明赤褐 ③A2	—	幅2.5cmの粘土帯の破片である。付属品で裏面に本体からの剥離痕が認められる。直径2.5cmの円形粘土板が重ねられている。馬形埴輪の繫の可能性が考えられる。器面にはナデが施される。	天地不明。
75	30図 PL21	不明 粘土帯破片	墳丘上	①2.8 ②4.0 ③厚さ0.8	①B ②明赤褐 ③A2	20	幅2.8cmの粘土帯の破片である。付属品で裏面に本体からの剥離痕が認められる。馬形埴輪の繫の可能性が考えられる。	天地不明。
76	30図 PL21	不明 粘土帯破片	東南	①3.1 ②2.9 ③厚さ0.7	①B ②赤褐 ③A2	10	幅2.9cmの粘土帯の破片である。付属品で裏面に本体からの剥離痕が認められる。馬形埴輪の繫の可能性が考えられる。器面にはハケメが施される。	天地不明。
77	30図 PL21	不明 粘土帯破片	西	①3.2 ②3.3 ③厚さ0.8	①B ②赤褐 ③A2	16	幅3.3cmの粘土帯の破片である。付属品で裏面に本体からの剥離痕が認められる。馬形埴輪の繫の可能性が考えられる。	天地不明。
78	30図 PL21	不明 粘土帯破片	覆土	①1.9 ②1.9 ③0.9	①B ②明赤褐 ③A2	—	幅1.7cm以上の粘土帯の破片である。付属品で裏面に本体からの剥離痕が認められる。上面に直径1.2cmの円形粘土粒が重ねられる。馬形埴輪の繫の可能性が考えられる。	天地不明。
79	30図 PL21	不明 円筒状破片	東南・南西・ 周堀、D-25	①17.1 ②直径12.8 ③-	①A ②明赤褐 ③B2	12	直径12.8cmの円筒状を呈する。外面にはタテハケが、内面にはナデが施される。馬の足、大刀の刀身、基台部などの可能性が考えられる。	
80	30図 PL21	家か 上屋根の 破片か	東南、D-26	①10.4 ②5.9 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	—	外方の弱く反り返る破片で、図右端は端部である。外面にヘラ描沈線が見られることから家形埴輪の上屋根の端部と考えた。	天地不明。
81	30図 PL21	家か 壁材ある いは基台 部破片	覆土	①8.3 ②4.4 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	—	縦方向に断面三角形の突帯が貼付された破片である。家の壁体あるいは基台の隅部と考えた。	天地不明。横方向の破片の可能性もあり。
82	30図 PL21	不明 棒状品破片	羨道前	①11.7 ②4.5 ③-	①B ②橙 ③A1	14	太さ3.0cmの中実の棒状品である。図上端は破断しており、弱り屈曲して延びる。図下端はヘラ状工具できれいな面が作られている。人物の腕、人物に付属する大刀などの可能性が考えられるが断定するにいたらなかった。	天地不明。
83	30図 PL21	不明 破片	北西	①5.0 ②7.3 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	—	小径で、上端が閉塞されている。外面に断面三角形の突帯が付く。人物の頭部、あるいは馬形埴輪の雲珠部分の破片とも考えられるが断定できない。	
84	30図 PL22	不明 裾部破片	南・東	①6.4 ②10.7 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	20	下方に向かって外反して延びる破片である。外面はハケメを施し、端部にヨコナデを重ねている。内面にはナデが施されている。	
85	30図 PL22	不明 人物の破 片か	羨道前・覆 土	①9.7 ②7.3 ③-	①B ②明赤褐 ③A3	18	人物の肩に近い背中部分か。図左上に腕を差し込んだような痕跡が見られる。内外面ともハケメ・ナデを施す。	
86	31図 PL22	不明 破片	東南、D-25	①9.2 ②11.3 ③-	①B ②明赤褐 ③A2	14	途中で屈曲する破片である。外面に断面三角形の突帯が付く。突帯の稜を挟んで2列、刺突文が並ぶ。	
87	31図 PL22	不明 破片	東南	①4.0 ②6.5 ③	①B ②明赤褐 ③A2	—	断面三角形を呈する破片である。本体から剥落した痕跡が見られる。86と同様の刺突文が2列認められる。馬形埴輪に付随した馬鐸の形状に類似する。	天地不明。
88	31図 PL22	不明 破片	西	①4.3 ②5.4 ③-	①B ②橙 ③A2	—	断面三角形を呈する破片である。本体から剥落した痕跡が見られる。86と同様の刺突文が2列認められる。	天地不明。
89	31図 PL22	不明 破片	羨道前	①4.6 ②4.6 ③-	①B ②橙 ③A2	—	外面に紐を表現したような粘土紐の貼付が認められる。	
90	31図 PL22	不明 破片	D-26	①6.3 ②3.3 ③高さ2.2	①B ②橙 ③A2	—	落花生状をした付属品である。裏面に本体からの剥落痕が認められる。人物の上美豆良に類似するが断定できない。	天地不明。
91	31図 PL22	不明 破片	D-26	①4.9 ②5.1 ③厚さ2.3	①B ②橙 ③A2	—	外形はしの子を呈し、フックのような形である。断面は偏平で、図左端は割れている。	
92	31図 PL22	不明 破片	覆土	①7.8 ②5.2 ③厚さ3.4	①B ②明赤褐 ③A2	16	外形はフックのような形である。断面は偏平で、図左端には本体からの剥落痕が見られる。	
93	31図 PL22	不明 破片	東 西・西、 D-25	①6.2 ②10.7 ③直径 (5.5)	①B ②橙 ③A2	—	小径の筒状をなす破片である。タテ断面は弱く反り返る。外面に断面三角形の帯が貼付される。人物埴輪の頸の部分か。	

遺物観察表

番号	挿図 写真	器種 部位	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調 ③焼成	ハ ケ メ	成形・整形の特徴	備考
				①タテ(長)	②ヨコ(幅)	③その他				
94	31図 PL22	不明 破片	南西、D-26	①15.2 ②10.8 ③直径(8.5)	①B ②橙 ③A2	14		円筒状を呈する破片である。粘土を貼り足し、ナナメタテ方向に小さな段差を作っている。上衣の合わせを表現したものか。外面は段の周辺にナデを、その他にはハケメを施す。内面はナデを施す。		
95	31図 PL22	不明 破片	南	①13.6 ②12.5 ③直径(8.5)	①B ②橙 ③A2	—		円筒状を呈する。幅3.0cmの粘土帯が2条貼付される。1条はヨコ方向に、もう1条は逆放射線状に貼付され、直径3.7×3.0cmの円形粘土板が重ねられている。内外面ともナデが施されている。靴形埴輪の矢筒部の可能性が考えられるが断定できない。		
96	31図 PL22	不明 破片	覆土、D-26	①7.8 ②12.1 ③—	①B ②明赤褐 ③A2	18		弧を強く描く板状の破片である。本体に貼付していたものである。図左上に端部が一部残存していた。外面にはハケメを施す。	外縁に沿って彩色が施されていたか。	
97	31図 PL22	不明 基台部破片	墳丘上・南 西	①18.4 ②16.7 ③直径(11.3)	①B ②赤褐 ③A2	20		円筒状の破片である。断面M字形の突帯が貼付される。突帯下の残存長が長いことから円筒埴輪ではなく、形象埴輪の基台部と考えられる。外面はタテハケ。内面にはナデが施される。		
98	31図 PL22	不明 基台部破片	南・南西・ 墳丘上、 D-26	①22.6 ②突帯直下の 直径25.0 ③—	①B ②明赤褐 ③A3	17		97と同様、断面台形より下位の残存長が長いことから形象埴輪の基台部と考えられる。突帯の直下に直径5.3cmの円形の透孔が配されている。		
99	31図 PL22	不明 破片	南西、D-25	①15.1 ②突帯直下の 直径16.8 ③—	①B ②橙 ③A1	18		小径の筒状を呈すると考えられるが、上方に向かって直径を細くしている。中位に突帯を貼付している。外面はタテハケ、内面もナナメヨコ方向のハケメが施されている。器財埴輪の大刀の破片などの可能性はないか。		
100	31図 PL22	不明 破片	北西	①10.4 ②突帯直下の 直径17.3 ③—	①B ②橙 ③A2	18		99と同様の形状である。中位に突帯が貼付される。上位段に円形の透孔が配されている。	人物胴部背面の一部か。	

1号墳出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径②底径 ③器高					
101	32図 PL22	須恵器 瓶類	口縁部	羨道前	①(9.2) ②— ③—		①A ②灰黄	口縁部外面凸帯。内外面自然釉。軸轆右回転。		
102	32図 PL22	須恵器 瓶類	体部片	羨道前・南西・ 東南	①— ②— ③—		①A ②黄灰	器壁厚い。外面幅広の搔目。外面の1部に自然釉、反対側は付着物があり若干変形し、前者が上であろう。残存部小口部は円盤で塞ぐ側ではない。提振か横振であろう。		

1号墳出土金属製品

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	法量				形・成調整等	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
103	32図 PL22	刀子	茎部先端	南西区	(31.1)	15.9	3.3	4.53	茎尻寄りに目釘が残存する。	小刀の一部か。鉄製。
104	32図 PL22	鉄鎌	鎌先端・逆 刺部欠損	玄室内	(69.5)	(30.0)	3.0	14.83	無茎三角形鎌。鎌身部長く、中央に円形の穿孔あり。	
105	32図 PL22	鉄鎌	完形	玄室内	57.1	31.0	2.7	6.79	無茎三角形鎌。鎌身部横幅広く、中央に長方形の穿孔あり。	
106	32図 PL22	鉄鎌	逆刺部欠損	玄室内	(72.9)	29.0	4.0	15.27	無茎三角形鎌。逆刺部は有段、鎌身部の中央に円形の穿孔あり。	鎌身部中央に矢柄の着装痕有り。
107	32図 PL22	鉄鎌	逆刺部欠損	2	(50.50)	(26.0)	3.5	7.85	無茎三角形鎌。鎌身部五角形に近い。中央に長方形の穿孔あり。	
108	32図 PL22	鉄鎌	逆刺部・茎 部先端欠損	玄室内床面	98.5	26.3	4.0	13.06	三角形鎌の範疇に入るか。頸部は短く、棘関を経て茎部にいたる。	
109	32図 PL22	鉄鎌	茎部先端欠 損	2	(68.7)	30.2	3.2	11.88	有茎の三角形鎌。茎部に関しては見られない。	
110	32図 PL22	鉄釘	完形	羨道南	86.7	5.9	5.2	8.11	頭部は直角に折り曲げるもの。下端は弧状に曲がっている。材に打ち込んだ後に曲げた痕跡か。	
111	32図 PL22	鉄鎌	茎部一部	2	(44.2)	3.6	3.5	1.57	断面形状方形。端部は欠損している。	
112	32図 PL22	鉄釘	頭部から 1/2	2	(22.2)	5.4	5.4	1.48	木質の残存は釘本体に直交する。	

2号墳出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径②底径 ③器高					
1	33図 PL23	須恵器 甕	口縁部片	排土	①— ②— ③3.6		①A ②灰	器壁薄く、口縁端部外方に折り返す。		

番号	挿図写真	種別器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
2	33図 PL23	須恵器 甕	体部片	周堀・覆土	①-	②-	③-	①A ②灰	断面中央から灰、にぶい橙、灰色。外面叩目。内面当具痕。	
3	33図 PL23	須恵器 甕	体部片	周堀・覆土	①-	②-	③-	①A ②灰	断面中央から灰、にぶい橙、灰色。外面叩目。内面当具痕。	

3号墳出土土器

番号	挿図写真	種別器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	37図 PL23	須恵器 甕	肩部片か	裏込	①-	②-	③-	①A ②灰	内面強い横位撫で。内面上下に当具痕。	
2	37図 PL23	須恵器 甕	体部片	裏込	①-	②-	③-	①A ②灰	断面中央から灰、にぶい橙、灰色。外面叩目。内面当具痕。	

4号墳出土ガラス小玉

番号	挿図写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
1	43図 PL23	8	4.19	4.11	2.95	0.07	完形	紺色	形状は整うが、色違い部分や半溶融状態のガラス粒境を示すと思われる不規則な亀裂が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
2	43図 PL23	9	3.79	3.74	1.99	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、半透明。気泡含み、表面に気泡と思われる窪み残る。	溶融技法か
3	43図 PL23	10	2.51	2.34	2.23	0.02	完形	淡青色半透明	厚さのわりに径が小さい。孔と同方向の気泡列が観察される。孔壁は平滑で磨りガラス状を呈する。	管切技法。
4	43図 PL23	11	4.69	4.35	2.79	0.08	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸や突起が顕著。孔壁もガラス粒による凹凸多い。表面の一部赤錆色を呈する。	溶融技法。
5	43図 PL23	12	4.11	-	2.60	0.03	1/3	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸認められる。	溶融技法。
6	43図 PL23	13	3.78	3.65	1.98	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔部分にガラス粒による小さい凹凸が認められる。内部に赤や赤錆色の不純物と黄緑色ガラス粒を含む。	溶融技法。
7	43図 PL23	14	3.37	3.36	2.77	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状、断面形状共に整い、ガラス粒による凹凸は観察されない。不純物も観察されない。気泡管によると考えられる貫通孔が認められる。	管切技法か
8	43図 PL23	15	3.62	3.60	1.70	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は比較的整うが、孔形状が歪。一部にガラス粒の小突起が認められる。不純物も少ない。	溶融技法。
9	43図 PL23	16	4.10	-	2.54	0.03	1/2	淡紺色半透明	孔周囲に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面の一部に小突起がある。	溶融技法。
10	43図 PL23	17	3.54	3.14	1.50	0.03	完形	淡紺色半透明	平面形状は歪であるが、断面形状は比較的整う。孔壁にガラス粒による凹凸多い。	溶融技法。
11	43図 PL23	17	3.52	3.52	2.24	0.04	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸と小突起顕著。片面の孔付近には段差が認められる。表面にガラスもしくは鉱物の白濁物附着。	溶融技法。
12	43図 PL23	石室内埋土	3.83	-	2.28	0.04	1/4欠損	淡紺色半透明	平面・断面形状整うが、一部ガラス粒による凹凸が認められる。不純物含む。	溶融技法。
13	43図 PL23	石室内埋土	4.04	3.49	1.78	0.04	完形	淡青色半透明	平面形状は楕円形を呈する。不純物や凹凸、突起は認められない。	技法不明。
14	43図 PL23	石室内埋土	4.06	4.01	2.40	0.06	完形	紺色	半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著。不純物含む。	溶融技法。
15	43図 PL23	石室内埋土	4.05	3.80	2.03	0.04	完形	淡紺色半透明	形状はやや整うが、半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。淡青色に近い色調で、細かい不純物含む。	溶融技法。
16	43図 PL23	石室内埋土	3.62	3.51	2.78	0.05	完形	淡紺色半透明	上下面は面取りされたように平坦となるが、片面の窪んだ箇所は丸味を帯びる。気泡多く含むが、不純物は少ない。	溶融技法か。
17	43図 PL23	石室内埋土	3.59	3.56	2.02	0.04	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸が孔付近に認められる。表面、気泡による穴が多い。不純物含む。	溶融技法。
18	43図 PL23	石室内埋土	4.03	3.97	2.03	0.05	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸が孔付近に認められる。表面、気泡による穴が多い。不純物含む。	溶融技法。
19	43図 PL23	石室内埋土	3.78	3.72	2.75	0.05	完形	淡紺色半透明	僅かに膨れた箇所があるが、半溶融状態のガラス粒による凹凸は認められない。不純物含む。気泡が多く、不透明の部分多い。	溶融技法。
20	43図 PL23	石室内埋土	4.11	4.07	2.43	0.05	完形	紺色	半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著。不純物と気泡多く含む。	溶融技法。
21	43図 PL23	石室内埋土	4.01	3.94	2.27	0.05	完形	淡紺色半透明	比較的整形が整うが、顕著な突起が認められる。不純物含み、色むらも認められる。	溶融技法。
22	43図 PL23	石室内埋土	3.80	3.69	2.03	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、透明度高いが、不純物と気泡含む。孔壁と表面の一部に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。	溶融技法。
23	43図 PL23	石室内埋土	4.07	3.93	2.22	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔部分に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。色むらが認められ、不純物も含む。	溶融技法。
24	43図 PL23	石室内埋土	3.94	3.70	1.81	0.04	ほぼ完形	淡青色半透明	平面形は楕円形を呈するが、表面の凹凸は認められない。丸い気泡を少量含む。孔の平面形状も楕円形を呈する。	不明
25	43図 PL23	石室内埋土	3.74	3.55	2.35	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔部分に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。色むらが認められ、不純物も含む。	溶融技法。
26	43図 PL23	石室内埋土	3.92	3.76	2.11	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。

遺物観察表

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
27	43図 PL23	石室内埋土	3.83	3.73	1.89	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。
28	43図 PL23	石室内埋土	4.12	3.64	2.04	0.30	完形	淡紺色透明	淡紺半透明と同質と考えられるが、薄いために透明度が高い。半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著。平面形や孔形状歪む。気泡多く含む。	溶融技法。
29	43図 PL23	石室内埋土	3.84	3.76	2.13	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整い、気泡も比較的少ないが、大きな不純物含む。孔付近に半溶融状態のガラス粒によると考えられる小さい凹凸が僅かに観察される。	溶融技法。
30	43図 PL23	石室内埋土	3.91	3.77	2.10	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、気泡による器表の窪み顕著。気泡と小さい不純物含む。側面に半溶融状態の白色ガラス状物を含む。	溶融技法。
31	43図 PL23	石室内埋土	4.02	3.87	2.05	0.04	完形	淡紺色半透明	孔周辺の断面形は丸味を帯びるが、平面形は歪み、厚みの差も大きい。不純物と気泡含む。	溶融技法。
32	43図 PL23	石室内埋土	3.72	3.70	3.00	0.06	完形	淡紺色半透明	厚みの割りに透明度が高く、形状も整う。表面も平滑だが、突起が1箇所認められる。孔周辺に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸がある。不純物と気泡少量含む。	溶融技法。
33	43図 PL23	石室内埋土	3.68	3.51	1.98	0.04	完形	淡紺色透明	薄いために透明度が高い。全体的に形状が整うが、ガラス粒の詰め込み不足と鋳不足による窪みが1箇所認められる。不純物と気泡少量含む。	溶融技法。
34	43図 PL23	石室内埋土	3.96	3.90	2.34	0.05	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。
35	43図 PL23	石室内埋土	4.20	3.68	2.14	0.04	完形	淡紺色半透明	外形、孔形状共に歪み、半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。	溶融技法。
36	43図 PL23	石室内埋土	4.22	3.91	2.16	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形は歪。35と付着して出土し、その付着痕が残る。付着した箇所が変形部分にあたり、高温時に付着した可能性がある。孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。
37	43図 PL23	石室内埋土	4.16	4.09	2.40	0.06	完形	紺色	形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。淡紺色、紺色、白色とモザイク状をなす。気泡含む。	溶融技法。
38	43図 PL23	石室内埋土	3.55	3.50	2.73	0.05	完形	淡青色半透明	外面に気泡による微細な窪みがあるが、外面と孔壁は平滑。丸い気泡含むが不純物は観察されない。	
39	43図 PL23	石室内埋土	4.06	4.02	2.32	0.05	完形	淡紺色半透明	形状歪で、鋳不足によると思われる窪みと半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著。不純物と気泡含む。	溶融技法。
40	43図 PL23	石室内埋土	3.11	3.00	3.14	0.05	完形	淡青色半透明	外面に気泡による微細な窪みがあるが、外面と孔壁は平滑。丸い気泡含む。微細な不純物僅かに含む。	
41	43図 PL23	石室内埋土	4.03	3.89	2.60	0.05	完形	淡紺色半透明	全体的に形状は整うが、白色部もあり色むら多い。半溶融状態のガラス粒による小突起僅かに認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。
42	43図 PL23	石室内埋土	3.77	3.56	2.47	0.04	完形	淡紺色半透明	色むら少なく透明度も高いが、表面に大きな突出部がある。孔付近に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。大きめの不純物と気泡含む。	溶融技法。
43	43図 PL23	石室内埋土	4.09	3.94	2.49	0.05	完形	淡紺色半透明	色むら多く、透明度は低い。全体形状は整うが、表面と孔付近に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡含む。	溶融技法。
44	43図 PL23	石室内埋土	2.84	2.68	1.89	0.03	完形	紺色半透明	表面、孔壁共に平滑で、円筒形を呈する。縦方向の気泡列が認められる。側面にも縦方向の浅い条線が認められる。不純物観察されず、透明度高い。	管切技法。
45	43図 PL23	石室内埋土	3.65	3.49	1.88	0.04	完形	淡紺色半透明	薄いために透明度が高い。全体形状は整うが、孔形状は歪。表面に半溶融状態のガラス粒間の隙間と思われる筋状の窪み多い。大きめの不純物含む。内部に黄緑色を呈する箇所があり、黄色みを帯びたガラス粒を含むと考えられる。	溶融技法。
46	43図 PL23	石室内埋土	3.93	3.92	2.16	0.04	完形	紺色半透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。気泡含む。	溶融技法。
47	43図 PL23	石室内埋土	4.35	3.21	2.39	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は非常に歪。半溶融状態のガラス粒による凹凸認められる。	溶融技法。
48	43図 PL23	石室内埋土	3.34	3.24	1.98	0.03	完形	淡紺色半透明	直径に比して孔径大きい。半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。片面に白色部分が認められ、反対側からは薄黄緑がかって見える。不純物と気泡含む。	溶融技法。
49	43図 PL23	石室内埋土	3.55	3.48	1.77	0.03	完形	淡紺色半透明	直径に比して孔径大きい。半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。色むらが認められる。不純物と気泡少量含む。	溶融技法。
50	43図 PL23	石室内埋土	4.04	3.53	2.38	0.04	完形	淡紺色半透明	かなり歪な形状を呈する。孔壁には縦位の皺が認められる。1箇所紺色部分が認められる。	溶融技法。
51	43図 PL23	石室内埋土	3.61	3.59	3.31	0.06	完形	淡紺色半透明	直径に比して厚みがあり、円筒形状を呈する。孔径は大きく、表面や孔壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。気泡含む。	溶融技法。
52	43図 PL23	石室内埋土	4.47	4.12	2.12	0.05	完形	淡紺色半透明	孔付近は丸味を帯びるが、表面に突出部が認められる。気泡含む。孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。	溶融技法。
53	43図 PL23	石室内埋土	4.15	4.08	2.43	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。気泡含む。	溶融技法。
54	43図 PL23	石室内埋土	4.57	4.54	2.75	0.07	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。気泡多く含む。	溶融技法。
55	43図 PL23	石室内埋土	4.15	4.13	2.49	0.06	完形	淡青色半透明	透明度高く、表面や孔壁も平滑。縦方向の気泡列が認められる。	管切技法か。
56	43図 PL23	石室内埋土	3.70	3.68	1.91	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、表面と孔周辺に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。色むらやガラス粒間の隙間状溝が表面に認められる。	溶融技法。
57	43図 PL23	石室内埋土	3.85	3.60	2.06	0.04	完形	淡青色半透明	形状やや歪であるが、表面と孔壁平滑。ガラスを巻き付けたような際の接合部のような太さの異なる箇所がある。不純物僅かに含む。縦方向の気泡列が確認される。	不明
58	43図 PL23	石室内埋土	4.20	3.91	1.98	0.04	完形	淡紺色半透明	形状はかなり歪。表面と孔付近半溶融状態のガラス粒による凹凸多い。気泡含む。気泡による表面の窪みも多い。	溶融技法。

遺物観察表

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
59	43図 PL23	石室内埋土	3.18	2.97	1.85	0.02	完形	淡紺色半透明	形状やや歪で、大きさの割に孔径大きい。孔壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸多い。表面にはガラス粒を示すような微細な凹凸が認められる。	溶融技法。 微細凹凸
60	43図 PL23	石室内埋土	3.68	3.68	2.09	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
61	43図 PL23	石室内埋土	4.10	4.05	2.44	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整い、孔壁も平滑だが、表面に溶融不足によると考えられる窪みが認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
62	43図 PL23	石室内埋土	3.48	3.39	2.20	0.03	完形	淡紺色半透明	薄いために透明度は高い。平面形状は整い、孔壁も平滑である。孔周辺には、半溶融状態のガラス粒によると考えられる凹凸が僅かに認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
63	43図 PL23	石室内埋土	4.12	4.01	3.00	0.08	完形	淡紺色半透明	径に比して厚みがあり、側面形は円筒状を呈する。表面と孔壁は平滑であるが、側面には縦方向の微細な条線状の筋が認められる。また、内部には縦方向の筋状不純物と気泡列が観察される。	管切技法か。
64	43図 PL23	石室内埋土	3.96	3.72	2.25	0.05	完形	淡紺色半透明	形状はやや整うが、半溶融状態のガラス粒による凹凸や突起が認められる。孔はやや歪み、壁の凹凸も多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
65	43図 PL23	石室内埋土	3.78	3.73	2.14	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、孔壁も平滑であるが、孔周囲には小さい凹凸が残る。不純物と気泡玉含む。1箇所白色の不純物が付着する。	溶融技法。
66	43図 PL23	石室内埋土	3.57	3.55	2.41	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、小口面も曲面で構成される。片面の孔径は小さく整うが、他方の孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面は平滑であるが、溶融不足によると考えられる窪みが1箇所存在する。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
67	43図 PL23	石室内埋土	3.75	3.48	2.85	0.05	完形	淡紺色半透明	片面小口形状は比較的整うが、他方は半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著である。凹凸が顕著な側に溶融不足によると考えられる隙間が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
68	43図 PL23	石室内埋土	3.37	3.25	1.52	0.03	完形	淡紺色半透明	非常に薄いが、内部に白濁部が多く透明度が低い。表面と孔壁に半溶融状態のガラス玉による凹凸多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
69	43図 PL23	石室内埋土	4.03	3.90	1.96	0.04	完形	淡紺色半透明	比較的形が整うが、孔壁には細かい凹凸が多い。孔径は片面小口側が大きく、他方が小さい。内部に不定形の黄緑色部分が観察される。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
70	43図 PL23	石室内埋土	3.75	3.70	2.20	0.04	完形	淡紺色半透明	高低差が大きく、側面形は楔状を呈する。表面は比較的平滑であるが、半溶融状態のガラス粒による低い凹凸僅かに認められる。薄いために透明度高いが、色むらがある。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
71	43図 PL23	石室内埋土	3.80	3.74	2.67	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不規則な亀裂少量入る。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
72	43図 PL23	石室内埋土	3.72	3.70	2.87	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔壁に半溶融状態のガラス粒による低い凹凸が認められる。孔径は一方が小さく、他方が大きい。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
73	43図 PL23	石室内埋土	3.84	3.83	2.74	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。表面にガラス粒の詰め不足か溶融不足による窪みが2箇所ある。	溶融技法。
74	43図 PL23	石室内埋土	4.25	4.03	2.13	0.04	完形	淡紺色半透明	外形はやや歪む程度であるが、孔壁と孔周辺の半溶融状態のガラス粒による凹凸は著しい。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
75	43図 PL23	石室内埋土	3.83	3.68	2.00	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、半溶融状態のガラス粒による表面の凹凸も認められない。孔径は一方の小口側が大きく、他方が小さい。径が大きい側の孔形状はやや歪で、周囲には小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
76	43図 PL23	石室内埋土	3.78	3.59	1.93	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、孔径は一方がやや大きく、壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸がある。表面には1箇所突起が認められる。不純物と気泡玉含む、色むらもある。	溶融技法。
77	43図 PL23	石室内埋土	4.09	3.71	2.93	0.05	完形	淡紺色半透明	平面・側面形状歪む。片方の小口表面は何か押しつけられたような微細な凹凸を有する滑らかな曲面であるが、他方は半溶融状態のガラス粒が明瞭に観察され、大きな凹凸がある。孔壁にも凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
78	43図 PL23	石室内埋土	3.75	3.73	1.73	0.03	完形	淡紺色半透明	扁平であるが、平面形状は整う。孔径は一方の小口面が大きく、他方が小さい。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著である。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
79	43図 PL23	石室内埋土	4.03	3.66	2.18	0.04	ほぼ完形	淡紺色半透明	平面・側面形状ともに歪む。側面は何か接したような窪みが複数認められる。孔形状は角丸方形を呈する。表面に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
80	43図 PL23	石室内埋土	3.50	3.41	1.83	0.03	完形	淡紺色半透明	全体形状としては整うが、半溶融状態のガラス粒による突起が2箇所認められる。不純物はほとんど含まないが、気泡玉は含む。不定型な亀裂が少量認められる。	溶融技法。
81	43図 PL23	石室内埋土	4.10	3.70	2.04	0.04	完形	淡紺色半透明	厚みがないために透明感がある。平面形はさほど歪ではないが、一方の小口面にはかなりの凹凸がある。孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
82	43図 PL23	石室内埋土	3.95	3.95	2.68	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。大きい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
83	43図 PL23	石室内埋土	4.01	3.96	2.37	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、気泡による表面の窪みも少ない。孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
84	43図 PL23	石室内埋土	4.06	3.83	2.35	0.05	完形	淡紺色半透明	厚みがないが紺色味が強い。孔径小さく、全体形状は歪みが著しい。不純物はほとんど含まないが、気泡玉含む。	溶融技法。
85	43図 PL23	石室内埋土	3.45	3.44	2.08	0.03	完形	淡紺色半透明	厚みがなく、透明度が高い。全体形状は整い、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が僅かに認められる。大きい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。

遺物観察表

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
86	43図 PL23	石室内埋土	3.65	3.63	1.81	0.04	完形	淡紺色半透明	厚みがなく透明度がやや高い。全体形状は整うが、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
87	43図 PL23	石室内埋土	3.82	3.78	2.04	0.04	完形	淡紺色半透明	比較的形は整うが、表面に溶融不全のガラス粒が付着する。また、半溶融状態のガラス粒も観察される。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
88	43図 PL23	石室内埋土	3.63	3.55	2.00	0.03	完形	淡紺色半透明	厚みがないが紺色味が強い。全体形状は整い、表面も平滑である。孔壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。細かい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
89	43図 PL23	石室内埋土	4.11	3.46	2.28	0.04	完形	淡紺色半透明	非常に歪な形状を呈する。小口面の凹凸が目立つが、一方はガラス粒が明瞭であるが、他方はなだらかな凹凸の状態である。不純物僅かに含む。気泡玉含む。	溶融技法。
90	43図 PL23	石室内埋土	4.08	4.08	2.42	0.06	完形	淡紺色半透明	厚みがないが、紺色味が強い。全体形状は整うが、表面に1箇所半溶融状態のガラス粒が付着し、孔壁と周囲には小さい凹凸が認められる。孔径は、周囲の凹凸が目立つ側が大きい。細かい不純物と気泡玉含む。白色のガラス粒状物質が1箇所突起状に付着する。	溶融技法。
91	43図 PL23	石室内埋土	4.40	4.20	2.38	0.06	完形	淡紺色半透明	外形は整うが、孔壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が明瞭。細かい不純物と気泡列含む。	溶融技法。
92	43図 PL23	石室内埋土	4.05	3.89	2.55	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状としては整うが、一方の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著で、1箇所茶色半透明物質が付着する。また、この付着物上には淡紺色半透明ガラス粒が付着している。他方の小口面は凹凸が少ない。不純物と気泡玉含む。不規則な亀裂により透明度低い。	溶融技法。
93	43図 PL23	石室内埋土	4.13	3.69	1.92	0.04	完形	淡青色半透明	平面形状は比較的整うが、側面形状では厚みの差が明瞭である。透明度が高く表面や孔壁に凹凸は認められない。細かい不純物を少量含む。孔方向の気泡列が観察される。	管切技法。
94	43図 PL23	石室内埋土	3.29	3.19	1.73	0.02	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。表面にはガラス粒状の突起が1箇所存在する。表面にはガラス粒を反映する可能性がある微細な凹凸が全面に認められる。大小の不純物と気泡玉を含む。	溶融技法。
95	43図 PL23	石室内埋土	3.70	3.49	2.31	0.04	完形	淡紺色半透明	形状はやや歪である。表面は平滑であるが、不定型な窪みや半溶融状態のガラス粒による突起が1箇所認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
96	43図 PL23	石室内埋土	3.47	3.09	1.69	0.02	完形	淡青色半透明	平面形は楕円形状を呈する。細かい不純物と気泡含む。大きい気泡は2箇所まで表面に出て深い穴状となる。細かい不純物と気泡が縦方向に列をなす箇所がある。また、気泡が縦方向に柱状をなす箇所も存在する。表面は平滑であるが、縦方向の微細な条線状の微細な線が認められる。細かい不純物と気泡少量含む。	管切技法。
97	43図 PL23	石室内埋土	4.08	4.01	2.83	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面に1箇所茶色半透明のガラス粒状の物質が付着する。また、表面付近に半溶融状態のガラス粒を反映するような色違い部分が多数認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
98	43図 PL23	石室内埋土	4.26	4.01	2.13	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状はやや乱れ、一方の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が著しい。他方は比較的平滑である。穴は凹凸の激しい側が大きい。不純物は少ないが大型気泡が表と繋がった内部が赤味を帯びる。気泡玉含む。	溶融技法。
99	43図 PL23	石室内埋土	4.21	4.00	2.46	0.05	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凸部が著しい。内部に不定型な亀裂が存在するようで、透明度が低い。表面に色の薄い半溶融状態のガラス粒が見える。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
100	43図 PL23	石室内埋土	4.07	3.91	2.44	0.05	完形	淡紺色半透明	半溶融状態のガラス粒による凸部が著しい。内部に不定型な亀裂が存在するようで、透明度が低い。表面に白色の半溶融状態のガラス粒や白色物質の粒が見える。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
101	43図 PL23	石室内埋土	3.91	3.66	2.85	0.05	完形	淡紺色半透明	孔径が大きい側の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著であるが、小さい側の表面は比較的平滑で形状も整う。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
102	43図 PL23	石室内埋土	4.42	4.41	2.31	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面も比較的平滑である。穴周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。内面に複数の黄緑色のガラス粒を含む。	溶融技法。
103	43図 PL23	石室内埋土	3.59	3.51	1.93	0.03	完形	淡紺色半透明	径が小さく薄いが紺色味が強い。全体形状は比較的整うが、孔は多角形状を呈し、周囲は半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面はガラス粒を反映すると考えられる微細な凹凸が認められる。細かい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
104	43図 PL23	石室内埋土	3.78	-	2.07	0.02	1/2	淡紺色半透明	透明度が高く、形状も整うと推定される。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸がある。表面に白色物質粒がひとつ付着する。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
105	43図 PL23	石室内埋土	-	-	-	-	1/3	淡紺色半透明	実測時に細かく割れ、観察不可能である。色調や細片から溶融技法と推定される。	溶融技法。
106	43図 PL23	石室内埋土	-	-	2.12	0.02	1/3	淡青色半透明	孔壁や表面は平滑である。細かい不純物と気泡玉含む。表面に縦方向の微細な条線状の線が観察される。	管切技法か。
107	43図 PL23	石室内埋土	-	-	2.07	0.02	1/3	淡紺色半透明	紺色味が強い。孔壁や表面、破面にまで半溶融状態のガラス粒による凹凸が観察される。不純物と気泡含む。	溶融技法。
108	43図 PL23	石室内埋土	-	-	-	0.01	1/3	淡紺色半透明	孔壁や表面、破面にまで半溶融状態のガラス粒による凹凸が観察される。不純物と気泡含む。	溶融技法。
109	43図 PL23	石室内埋土	3.38	-	1.55	0.02	一部欠	淡青色半透明	孔壁や表面は平滑である。細かい不純物と気泡含む。縦方向に気泡と不純物が列をなす箇所がある。	管切技法。
110	43図 PL23	石室内埋土	4.00	3.93	2.15	0.04	ほぼ完形	淡紺色半透明	形状が歪で、孔壁や表面の半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
111	43図 PL23	石室内埋土	3.82	3.81	2.74	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、含まれる気泡が大きく、表面に出た気泡による穴が多い。孔の周囲や壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が残る。不純物含む。	溶融技法。
112	43図 PL23	石室内埋土	3.93	3.88	2.22	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面もかなり平滑である。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が僅かに認められる。細かい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
113	43図 PL23	石室内埋土	3.93	3.90	2.26	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、表面に半溶融状態のガラス粒による凸部が2箇所認められる。1箇所は黄緑色を帯びた半溶融状態のガラス粒である。孔は中心から偏している。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
114	43図 PL23	石室内埋土	3.91	3.91	2.17	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔径が大きい側の小口面には半溶融状態のガラス粒による凹凸が観察される。不純物と気泡玉含む。内部に白濁部多く透明感が少ない。	溶融技法。
115	43図 PL23	石室内埋土	3.83	3.77	2.40	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面も平滑で透明度も高い。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が残る。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
116	43図 PL23	石室内埋土	3.59	3.54	2.10	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面も平滑で透明度も高い。孔の周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と僅かな白濁部、気泡玉を含む。	溶融技法。
117	43図 PL23	石室内埋土	3.43	3.33	2.06	0.03	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面や孔の周囲も平滑である。孔の周囲には平坦面が認められる。不純物や白濁部は観察されないが、紺色が強く、透明度低い。縦方向の気泡列複数認められる。	管切技法。
118	43図 PL23	石室内埋土	3.90	3.70	2.33	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、小口面には半溶融状態のガラス粒による凹凸や突起が顕著である。特に一方の小口面がより著しい。一部に黄緑色味を帯びた箇所や、ガラス粒の隙間と考えられる穴が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
119	43図 PL23	石室内埋土	3.44	3.43	2.18	0.03	完形	淡紺色半透明	全体形状はやや歪で、孔壁や表面に半溶融状態のガラス粒による凹凸や突起が著しい。一部に黄緑色味を帯びた箇所が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
120	43図 PL23	石室内埋土	3.52	3.35	2.38	0.03	完形	淡紺色半透明	平面形状は比較的整うが、孔径が大きい側の小口面に半溶融状態のガラス粒による凹凸が著しい。表面に1箇所紺色味が強い箇所があり、色が異なる半溶融状態のガラス粒によると考えられる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
121	43図 PL24	石室内埋土	4.24	3.55	1.60	0.03	ほぼ完形	淡紺色半透明	厚みがなく透明度が高い。側面の一部が欠損し、表面は平滑である。しかし、表面に3箇所半溶融状態のガラス粒によると考えられる突起が存在し、孔壁にも凹凸が多く認められる。細かい不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
122	43図 PL24	石室内埋土	4.07	3.90	2.96	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状は整い、表面も比較的平滑であるが、孔径が大きい側の小口面には半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著である。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
123	43図 PL24	石室内埋土	3.96	3.94	2.06	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面も平滑である。孔径がやや大きい側の小口面に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。孔壁にも凹凸が多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
124	43図 PL24	石室内埋土	3.74	3.73	2.26	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、気泡による表面の穴や内部の白濁部多い。一方の穴周囲は半溶融状態のガラス粒による凹凸が多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
125	43図 PL24	石室内埋土	3.18	3.02	2.30	0.03	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面や孔の周囲も平滑である。孔の周囲には平坦面が認められる。不純物や白濁部は観察されず、透明度高い。縦方向の気泡列が複数認められる。	管切技法。
126	43図 PL24	石室内埋土	3.68	3.67	2.07	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、径が大きい側の孔周囲に半溶融状態のガラス粒による凹凸顕著。孔壁にも凹凸が認められる。孔形状は歪む。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
127	43図 PL24	石室内埋土	3.87	3.84	2.05	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、表面に半溶融状態のガラス粒を反映すると考えられる微細な溝状の筋が認められる。孔壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡を含む。色は薄い、気泡が多いためか透明度が低い。	溶融技法。
128	43図 PL24	石室内埋土	3.73	3.44	2.14	0.03	完形	淡紺色半透明	平面形状は楕円形を呈するが、表面は気泡による穴を除いて平滑である。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が少量認められる。内部に淡青色半透明の半溶融状態のガラス粒2個含む。大きい不純物と孔から放射状に広がる気泡列が観察される。	溶融技法。
129	43図 PL24	石室内埋土	3.55	3.52	1.90	0.03	完形	淡紺色半透明	平面形状は円形であるが、側面は楔状を呈する。孔径が大きい側の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が観察されるが、小さい側は平滑である。直径に比して孔径は大きい。少量の不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
130	43図 PL24	石室内埋土	3.30	3.28	1.71	0.03	完形	淡青色半透明	平面形状は円形を呈するが、側面は楔状を呈する。表面と孔壁は平滑である。両小口面の孔周囲には平坦面を有する。縦方向に気泡柱と考えられる細い貫通孔が3箇所認められる。気泡少量含む。	管切技法。
131	43図 PL24	石室内埋土	3.38	3.30	2.01	0.03	完形	淡紺色半透明	平面形状は整い、半溶融状態のガラス粒による表面の凹凸は認められない。孔壁には凹凸が認められ、一方の小口側の孔が大きい。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
132	43図 PL24	石室内埋土	3.22	-	2.37	0.03	一部欠	淡紺色半透明	全体形状は比較的整い、孔径が小さい側の小口面は丸味を帯びて表面は平滑である。径が大きい側と側面には半溶融状態のガラス粒による凸部が認められる。表面には気泡による小さい穴、内面には白濁部があり透明度が低い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
133	43図 PL24	石室内埋土	3.88	3.74	2.01	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は歪み、孔形状も歪みが著しい。半溶融状態のガラス粒による凹凸は小さいが、何かで押されたような平坦面や棒状物で押されたような溝状の凹みが認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
134	43図 PL24	石室内埋土	3.16	2.89	2.19	0.03	完形	淡紺色半透明	紺色味が強い。全体形状は整い、表面や孔壁は平滑である。両小口面には平坦面が認められる。不純物は観察されず、縦方向の気泡列が複数認められる。	管切技法。

遺物観察表

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
135	43図 PL24	石室内埋土	2.55	2.52	1.73	0.01	片側 小口	淡青色半 透明	不純物含まず気泡も少なく、透明度高い。全体形状は整い、表面と孔壁は平滑である。縦方向の気泡列が認められる。	管切技法。
136	43図 PL24	石室内埋土	3.79	3.73	1.88	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面も平滑である。孔径がやや大きい側の小口面に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。孔壁にも凹凸が認められる。色は薄い、不純物と気泡玉が多く、透明度が低い。	溶融技法。
137	43図 PL24	石室内埋土	3.93	3.48	2.25	0.04	完形	淡紺色半 透明	形状は歪で表面に半溶融状態のガラス粒による小突起が認められる。不純物と気泡玉含み、表面の不純物は赤褐色を呈する。	溶融技法。
138	43図 PL24	石室内埋土	3.82	3.68	2.24	0.04	完形	淡紺色半 透明	形状はやや歪で、孔径が小さい側の小口面が平滑なのに対し、孔径が大きい側の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が多い。また、側面形状は、孔径が小さい側が丸味を帯びたドーム状を呈する。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
139	43図 PL24	石室内埋土	3.57	3.51	2.17	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面も平滑である。径が大きい側の孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。内部と表面付近に紺色味が強い半溶融状態のガラス粒が複数認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
140	43図 PL24	石室内埋土	3.92	3.91	2.11	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面も平滑部が多いが、表面の孔径が大きい小口側に小さい半溶融状態のガラス粒による突起が認められる。径が大きい側の孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が目立つ。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
141	43図 PL24	石室内埋土	3.55	3.40	2.18	0.03	完形	淡紺色半 透明	平面形状は比較的整い、表面も平滑な部分が多いが、表面の孔径が大きい側寄りに半溶融状態のガラス粒による凹凸が集まる箇所がある。側面形状は、孔径が大きい側の小口面が丸味を帯びたドーム状を呈する。紺色味が強く、不純物は少ない。気泡玉含む。	溶融技法。
142	43図 PL24	石室内埋土	3.67	3.67	2.13	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、両小口の孔径もほとんど同じである。表面には気泡による凹凸が認められるが、全体的に平滑である。孔周囲に僅かに半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。内部に黄緑色味を帯びた半溶融状態のガラス粒を複数含む。	溶融技法。
143	43図 PL24	石室内埋土	3.84	3.83	2.50	0.05	完形	淡紺色半 透明	平面と側面は整うが、孔は楕円形を呈する。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。透明度は低い。	溶融技法。
144	43図 PL24	石室内埋土	4.44	4.42	2.85	0.08	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、孔径は小さい。孔周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面は気泡による穴が認められるが、全体的に平滑である。不純物と気泡玉含む。色が薄い、透明度は低い。	溶融技法。
145	43図 PL24	石室内埋土	3.91	3.91	2.44	0.05	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面に半溶融状態のガラス粒による凹凸は認められない。孔の周囲には小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。透明度は低い。	溶融技法。
146	43図 PL24	石室内埋土	3.75	3.73	2.41	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面も平滑であるが、一部に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸と気泡による穴が多く認められる。穴壁にも半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。透明度低い。	溶融技法。
147	43図 PL24	石室内埋土	3.74	3.67	2.48	0.05	完形	淡紺色半 透明	形状は比較的整うが、表面の孔径が小さい側の小口寄りに半溶融状態のガラス粒による突起が2箇所認められる。径が大きい側の孔周囲と壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。内部に黄緑色の半溶融状態のガラス粒が認められる。不純物と気泡玉含む。不純物にはかなり大きい物が含まれる。	溶融技法。
148	43図 PL24	石室内埋土	3.82	3.82	2.54	0.05	完形	淡紺色半 透明	平面形状に歪みは少ないが、孔径が小さい側の小口面寄りに半溶融状態のガラス粒による小突起が認められる。径が大きい側の孔周囲と壁は半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著で、側面形も乱れる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
149	43図 PL24	石室内埋土	3.81	3.79	2.18	0.04	完形	淡青色半 透明	全体形状は整い、表面は平滑である。細かい不純物と気泡少量含み、透明度高い。縦方向の気泡管1条と気泡列を複数含む。	管切技法。
150	43図 PL24	石室内埋土	3.58	3.52	2.52	0.04	完形	淡紺色半 透明	平面形状に歪みは少ないが、一方の小口面に半溶融状態のガラス粒による大きな突起が認められる。孔周囲と壁には小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。中心孔から放射状に広がる気泡群列や脈理状の筋が観察される。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
151	43図 PL24	石室内埋土	3.75	3.72	1.91	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面も平滑であるが、一部に窪みが認められる。両小口で孔径に差がある。内部に2箇所黄緑色味を帯びた部分があるが、ガラス粒の溶融が進んでいるため境界は不明瞭である。孔周囲と壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物少量含む。中心孔から放射状に延びる気泡群列が認められる。透明度高い。	溶融技法。
152	43図 PL24	石室内埋土	3.45	3.43	1.67	0.03	完形	淡紺色半 透明	全体形状は整い、表面の突起は認められないが、気泡による小孔が著しい。直径に比して孔径が大きく、孔径が大きい側の周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が少量認められる。孔壁にも凹凸がある。細かい不純物と気泡玉含む。透明度低い。	溶融技法。
153	43図 PL24	石室内埋土	3.66	3.60	2.02	0.04	完形	淡紺色半 透明	紺色味が強い。全体形状は整い、表面に突起は認められないが、孔周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。孔径には差違が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
154	43図 PL24	石室内埋土	4.15	3.26	2.02	0.04	ほぼ 完形	淡紺色半 透明	周囲に何かに当たったような平坦面や窪みがあり、これによって変形が生じている。孔周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
155	43図 PL24	石室内埋土	3.58	3.57	2.18	0.04	完形	淡紺色半 透明	全体形状は比較的整うが、孔径が大きい側の小口面と側面に半溶融状態のガラス粒による突起がある。少量の不純物と気泡玉含む。透明度高い。	溶融技法。
156	43図 PL24	石室内埋土	4.11	3.50	1.91	0.03	ほぼ 完形	淡紺色半 透明	周囲に何かに当たったような平坦面や窪みがあり、これによって変形が生じている。孔周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
157	43図 PL24	石室内埋土	3.76	3.69	2.23	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面に半溶融状態のガラス粒による凹凸は認められない。孔壁には小さい凹凸が認められる。表面には気泡による小穴が著しい。不純物と気泡玉含み、透明度低い。	溶融技法。
158	43図 PL24	石室内埋土	4.14	4.06	2.50	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒による突起が1箇所あり、気泡やガラス粒の隙間によると考えられる穴が著しい。孔壁に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
159	43図 PL24	石室内埋土	3.57	3.52	2.13	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面も平滑で透明度が高い。孔径には差違が認められ、周囲と壁に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。孔径が小さい側の小口面に半溶融状態のガラス粒1個が付着する。付着部周囲の表面が平滑であり、完成後に付着した可能性がある。少量の不純物と気泡玉含む。表面下に白濁部沿う気泡玉群が認められる。	溶融技法。
160	43図 PL24	石室内埋土	3.47	3.44	2.88	0.05	完形	淡紺色半透明	全体形状は比較的整うが、孔径が大きい側の小口面形状はやや乱れる。孔周囲と壁は半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面は気泡による小穴が著しい。不純物と気泡玉含み透明度低い。	溶融技法。
161	43図 PL24	石室内埋土	4.69	3.54	2.57	0.04	ほぼ完形	淡紺色半透明	形状は非常に歪で、気泡による穴も大きい。半溶融状態のガラス粒による突起や白色物突起も認められる。不純物と気泡玉含む。紺色味は薄い。	溶融技法。
162	43図 PL24	石室内埋土	4.06	3.72	2.04	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面にはガラス粒の隙間や気泡による窪みが少量認められるが、全体に平滑である。赤茶色の不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
163	43図 PL24	石室内埋土	3.93	3.82	2.42	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面には気泡による穴が認められる程度である。孔径が大きい側の周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
164	43図 PL24	石室内埋土	4.13	3.01	2.15	0.04	3/4	淡紺色半透明	形状は歪であるが、表面は平滑で透明度やや高い。孔周囲には、半溶融状態のガラス粒による凹凸が僅かに認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
165	43図 PL24	石室内埋土	4.02	3.97	2.57	0.06	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、表面と孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小突起や凹凸が認められる。内部に白濁部があり透明度低い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
166	43図 PL24	石室内埋土	3.78	3.62	2.41	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形は整うが、側面形は楔状を呈する。表面は平滑であるが、孔径が大きい側の小口面に半溶融状態のガラス粒による小突起が1箇所ある。内部に色違いのガラス粒によると推定される茶色味を帯びた部分が2箇所認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
167	43図 PL24	石室内埋土	3.65	3.61	2.15	0.04	完形	淡紺色半透明	形状はやや歪で、表面には気泡による穴が多い。半溶融状態のガラス粒による凹凸は少ない。半溶融状態のガラス粒によると推定される茶色味を帯びた部分が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
168	43図 PL24	石室内埋土	3.92	3.87	2.80	0.06	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も平滑であるが、部分的に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
169	43図 PL24	石室内埋土	4.10	3.95	2.17	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、孔径が大きい。孔径が大きい側の孔周囲から小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が著しい。透明度はやや高い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
170	44図 PL24	石室内埋土	3.86	3.85	2.45	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も平滑であるが、孔径が大きい側の孔から小口面にかけて茶色のガラス粒が鉱物が突き出ている。内部にも茶色の粒が含まれる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
171	44図 PL24	石室内埋土	4.07	3.95	2.28	0.04	完形	淡紺色半透明	形状はやや整い、表面も平滑であるが、側面に1箇所窪みが認められる。孔径が大きく、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。紺色味は薄い、透明度低い。	溶融技法。
172	44図 PL24	石室内埋土	4.02	4.00	2.54	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面は平滑である。孔径は片側が大きく、大きい側は漏斗状を呈する。大きい側の孔周囲は半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。細かい不純物を多量に含む。気泡玉含む。	溶融技法。
173	44図 PL24	石室内埋土	4.25	3.63	2.24	0.04	ほぼ完形	淡紺色半透明	形状は非常に歪であるが、孔形状は円形である。孔壁や周囲は半溶融状態のガラス粒による凹凸が多い。赤色不純物が表面に見える。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
174	44図 PL24	石室内埋土	4.08	3.65	2.08	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は非常に歪で、孔径が大きい側の小口は他と付着した部分を剥がしたような形状をなす。孔壁と孔周囲は半溶融状態のガラス粒による凹凸が著しい。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
175	44図 PL24	石室内埋土	4.58	4.47	2.70	0.07	完形	淡紺色半透明	形状は整い、孔径差も少ない。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が僅かに認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
176	44図 PL24	石室内埋土	3.96	3.52	2.44	0.05	完形	淡紺色半透明	一方の側面から押されたように変形し、孔壁も同様に変形している。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
177	44図 PL24	石室内埋土	3.60	3.54	2.24	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面にも半溶融状態のガラス粒による凹凸は認められない。表面には気泡による穴が認められる。孔径が大きい側の孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
178	44図 PL24	石室内埋土	3.79	3.65	1.97	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も平滑であるが、孔径は大きい。より孔径が大きい側の孔周囲は半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。また、同じ面には茶色半透明の色違い部分が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
179	44図 PL24	石室内埋土	4.00	3.84	2.14	0.04	完形	淡紺色不透明	全体形状は整うが、全体が半溶融状態のガラス粒の集合体といった状態で、表面全体に凹凸が著しい。また、色違い部分も明瞭でモザイク状をなす。不透明に近く、不純物は見えるが、気泡玉は見えない。	溶融技法。
180	44図 PL24	石室内埋土	4.17	4.10	2.99	0.06	完形	淡紺色半透明	全体形状は整うが、孔径が大きい側の小口面には半溶融状態のガラス粒による凹凸が観察される。孔径が小さい側の表面は気泡による穴が多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
181	44図 PL24	石室内埋土	4.18	4.14	2.60	0.06	完形	淡紺色不透明	全体形状は整うが、半溶融状態のガラス粒の集合体といった状態に近く、表面全体に凹凸が著しい。特に、孔径が大きい側が顕著である。色違い部分も明瞭でモザイク状をなす。不透明に近く、不純物は見えるが、気泡玉は見えない。	溶融技法。

遺物観察表

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
182	44図 PL24	石室内埋土	3.37	3.33	1.76	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も気泡による小穴が少量認められるのみで平滑である。孔径が大きい側の孔周囲に半溶融状態のガラス粒による凹凸が僅かに認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
183	44図 PL24	石室内埋土	3.79	3.70	2.38	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は歪だが表面の凹凸は少ない。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が少量認められる。表面付近に黄緑色がかった箇所が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
184	44図 PL24	石室内埋土	4.00	3.97	2.42	0.05	完形	淡紺色半透明	形状は整い、孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
185	44図 PL24	石室内埋土	4.52	3.99	2.47	0.05	ほぼ完形	淡紺色半透明	平面形状は非常に歪であり、側面形状も片側が扁平となる。半溶融状態のガラス粒による凹凸や小突起が認められる。気泡による穴も多い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
186	44図 PL24	石室内埋土	3.88	3.87	2.51	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、側面形状は孔径が小さい側が扁平となる。孔径の大きい側は半溶融状態のガラス粒による凹凸がより目立つ。不純物含むが、気泡は観察困難。	溶融技法。
187	44図 PL24	石室内埋土	3.77	3.67	2.10	0.04	完形	淡紺色半透明	透明度高く、表面に半溶融状態のガラス粒による凹凸や突起は認められない。孔周囲には僅かに凹凸が認められる。内部の2箇所が黄緑色がかった部分が認められる。非常に大きな不純物を1点含む。気泡玉含む。	溶融技法。
188	44図 PL24	石室内埋土	3.90	3.85	2.45	0.05	完形	淡紺色半透明	透明度低い。形状は整い、表面には気泡による小穴が認められる程度である。径が大きい側の孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が僅かに認められる。径が小さい側の小口面はやや平坦となる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
189	44図 PL24	石室内埋土	3.66	3.54	2.68	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状はやや整うが、孔径が大きい側の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が著しい。これに対し、孔径が小さい側の小口面の表面はやや平滑で小突起が僅かに認められる程度である。不純物と気泡玉含む。透明度低い。	溶融技法。
190	44図 PL24	石室内埋土	3.99	3.79	1.78	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状はやや整い、表面も比較的平滑である。孔周囲と孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。透明度高い。	溶融技法。
191	44図 PL24	石室内埋土	3.96	3.92	2.26	0.04	完形	淡紺色半透明	全体形状は整い、表面や孔周囲にガラス粒による凹凸は認められない。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。不規則な亀裂入る。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
192	44図 PL24	石室内埋土	4.15	3.95	2.40	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状はやや整うが、孔径が大きい側の小口面に半溶融状態のガラス粒による大きめの凹凸が認められる。孔径が小さい側の小口面はやや平坦となる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
193	44図 PL24	石室内埋土	3.77	3.70	2.05	0.04	完形	淡紺色半透明	透明度高い。平面・側面形状は整うが、孔形状が歪である。孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。内部に紺色と黄緑色がかった部分が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
194	44図 PL24	石室内埋土	4.01	4.01	2.82	0.06	完形	淡紺色半透明	全体に形状は整うが、孔径の大きい側の孔周囲に半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。孔径が小さい側の小口面はやや平坦である。内部に黄緑色を帯びた箇所がある。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
195	44図 PL24	石室内埋土	3.92	3.75	1.73	0.03	完形	淡紺色半透明	透明度高い。全体形状は整うが孔径が大きく、孔壁の半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著である。少量の不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
196	44図 PL24	石室内埋土	4.25	3.67	1.88	0.03	ほぼ完形	淡紺色半透明	非常に歪な形状を呈する。孔壁に小突起が多く認められ、孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸がある。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
197	44図 PL24	石室内埋土	3.89	3.63	2.10	0.04	完形	淡紺色半透明	平面形状はやや整い、表面の凹凸も少ないが、側面形状は楔状を呈する。孔径が大きく、径が大きい側の小口面の半溶融状態のガラス粒による凹凸が目立つ。表面付近に茶色味を帯びた箇所がある。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
198	44図 PL24	石室内埋土	4.17	4.15	2.32	0.05	完形	淡紺色半透明	全体的に形状は整い、孔径も小さいが、不規則な亀裂と半溶融状態のガラス粒による凹凸が多い。とくに、孔径の大きい側が顕著である。不純物含む。不透明で気泡は観察できない。	溶融技法。
199	44図 PL24	石室内埋土	3.36	3.31	1.86	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は整い、孔壁も平滑である。不純物は確認されず、気泡は孔壁と平行する気泡列となる。また、気泡管両端が表面に出て、孔状を呈する箇所もある。	管切技法。
200	44図 PL24	石室内埋土	3.93	3.92	2.21	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔形状が歪である。孔壁には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。表面付近に半溶融状態黄緑色と紺色ガラス粒が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
201	44図 PL24	石室内埋土	3.68	3.68	1.80	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔径が大きく、孔壁に小さい凹凸が認められる。径が大きい側の孔周囲には半溶融状態のガラス粒による凹凸が認められる。細かい不純物を多く含む。気泡玉含む。	溶融技法。
202	44図 PL24	石室内埋土	3.48	3.45	2.48	0.04	完形	淡紺色半透明	全体的に形状は整うが、表面に半溶融状態のガラス粒による突起や凹凸が少量認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
203	44図 PL24	石室内埋土	3.24	3.02	2.09	0.03	完形	淡青色半透明	形状は整い、孔壁も僅かに磨りガラス状を呈し平滑である。透明度が低く、気泡の観察できない。表面には孔と平行方向の微細な筋が観察される。	管切技法か。
204	44図 PL24	石室内埋土	3.28	3.20	1.63	0.02	完形	淡紺色半透明	平面形状は整うが、側面形状は楔状を呈し、孔形状はやや歪である。表面や孔周囲に半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
205	44図 PL24	石室内埋土	3.86	3.45	2.03	0.03	完形	淡紺色半透明	平面、側面、孔形状共に歪である。内部に紺色の濃い部分が認められる。表面には凹凸が認められる。大きな気泡が孔と同方向に列をなすが、気泡自体は延びていない。不純物と気泡玉含む。	製作技法不詳
206	44図 PL24	石室内埋土	4.11	3.95	2.35	0.05	完形	淡紺色半透明	平面形状は比較的整うが、表面に半溶融状態のガラス粒による小突起や凹凸が多い。孔径は小さい。不規則な亀裂があり透明度は低い。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。

番号	挿図 写真	出土位置	法量 (mm)			重さ (g)	残存	色調	形・成調整等	備考
			長径	短径	厚さ					
207	44図 PL24	石室内埋土	3.65	3.58	2.19	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、表面に小突起や半溶融状態のガラス粒によると考えられるドーナツ状の小溝が部分的に認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
208	44図 PL24	石室内埋土	3.69	3.69	2.15	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は整うが、孔径が大きい。孔壁には細かい凹凸が認められる。孔周囲には半溶融状態のガラス粒形状が確認できる箇所がある。細かい不純物多く含み、透明度低い。気泡玉含む。	溶融技法。
209	44図 PL24	石室内埋土	3.62	3.58	2.12	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も平滑であるが、半溶融状態のガラス粒が表面に1箇所存在する。孔周囲には小さい凹凸が確認される。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
210	44図 PL24	石室内埋土	3.84	3.57	2.45	0.04	完形	淡紺色半透明	1箇所大きく突き出した箇所があり、先端が欠損している。反対側の小口面は半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著である。内具に黄緑色部分が複数認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
211	44図 PL24	石室内埋土	4.15	4.08	2.40	0.04	完形	淡紺色不透明	不規則な亀裂と半溶融状態のガラス粒による凹凸が顕著である。不純物含む。透明度が低く、気泡玉観察できない。	溶融技法。
212	44図 PL24	石室内埋土	2.92	2.90	1.57	0.01	完形	淡青色不透明	形状は整い、孔壁も僅かに磨りガラス状を呈し平滑である。透明度が低く、気泡の観察できない。表面には孔と平行方向の微細な筋が観察される。	管切技法か。203と特徴が一致。
213	44図 PL24	石室内埋土	3.78	3.60	2.34	0.03	完形	淡紺色半透明	形状はやや歪で、側面形状も楔状を呈する。孔径の差は大きく、大きい側の小口面には半溶融状態のガラス粒による凹凸が目立つ。反対側小口面にはガラス粒が抜け落ちたような窪みが箇所認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
214	44図 PL24	石室内埋土	3.45	3.43	2.09	0.03	完形	淡紺色半透明	透明度低い。形状は整い、孔径差もほとんど認められない。孔周囲に小さい凹凸や半溶融状態のガラス粒を反映すると推定される浅いドーナツ状窪みが認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
215	44図 PL24	石室内埋土	3.85	3.68	2.28	0.04	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面もやや平滑であるが、表面に大きな窪みがあり、その箇所を覆うようにガラスが突き出した箇所がある。半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸や突起も認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
216	44図 PL24	石室内埋土	3.60	3.58	2.06	0.03	完形	淡紺色半透明	形状は整い、表面も平滑である。径が大きい側の孔は漏斗状をなし、壁と周囲には半溶融状態のガラス粒による小さい凹凸が認められる。不純物と気泡玉含む。	溶融技法。
217	44図 PL24	石室内埋土	-	-	-	0.01	1/3	淡紺色半透明	表面には小突起が、割れ面には半溶融状態のガラス粒が観察される。赤味を帯びたガラス粒と黄緑色を帯びたガラス粒が認められる。	溶融技法。

4号墳出土金属製品

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	法量				形・成調整等	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
218	44図 PL24	刀	茎部欠損	1	321.0	22.0	5.0	216.0	刀身の中頃から先端の残存か。切先の棟側は欠損する。	鉄製。錆膨れ顕著。
219	44図 PL24	刀鏃	完形	玄室内	12.0	-	3.0	20.88	平面形状は倒卵形。長径46mm、短径32mm。柄寄りの径は鞘寄りより減ずる。	鉄製。1に装着か。
220	44図 PL24	耳環?	ほぼ完形	玄室内	18.2	19.0	-	3.55	環の横断面形状は長円形。幅4mm、厚さ6.5mm。	鉄製。錆膨れ顕著。器面は全て剥離している。
221	44図 PL24	刀装具	残片	玄室内	(19.1)	3.0	1.7	0.24	刀子の貴金具の一部か。	金銅装。
222	44図 PL24	刀装具	残片	玄室内	(19.4)	1.7	3.40	1.12	切羽の一部か。	
223	44図 PL24	鉄鏃	鏃身部残存	玄室内	(34.2)	6.5	2.9	1.30	片刃鏃。長頸か。	
224	44図 PL24	鉄鏃	頭部残存	4	(65.7)	5.0	3.5	4.43	茎部に本体と平行する縦方向の木質が見られる。	
225	44図 PL24	鉄釘	ほぼ完形	玄室内	58.2	4.8	3.7	2.68	下半に釘本体と平行する縦方向の木質が見られる。	
226	44図 PL24	鉄釘	完形	玄室内	56.2	5.2	4.5	2.09	頭部から1.5cmほどに釘本体と直交する横方向の木質が見られる。	
227	44図 PL24	鉄釘	完形	玄室内	49.1	4.4	3.5	2.10	全面に釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
228	44図	鉄釘	頭部周辺	玄室内	32.5	5.5	4.0	1.80	釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
229	44図 PL24	鉄釘	端部欠損	玄室内	(44.2)	6.2	5.0	3.09	頭部から1.5cmほどに釘本体と直交する横方向の木質が見られる。	錆膨れ顕著。
230	44図 PL24	鉄釘	ほぼ完形	玄室内	34.0	5.50	5.00	2.10	断面形状方形。頭部の一部が欠損。頭部は平折皆折か。先端部はほぼ直角に折れており、材に打ち込んだ後に曲げた痕跡か。	
231	44図 PL24	鉄釘	頭部から2/3	玄室内	(38.7)	4.6	3.5	2.59	頭部の折り曲げは弱いる釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
232	44図 PL24	鉄釘	頭部から1/2	玄室内	(28.2)	5.6	3.5	1.22	釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
233	44図 PL24	鉄釘	頭部から1/2	3	(25.2)	4.8	4.9	1.27	釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	

遺物観察表

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	法量				形・成調整等	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
234	44図 PL24	鉄釘	頭部から 1/2	玄室内	(29.8)	5.90	4.50	2.04	釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
235	44図 PL24	鉄釘	頭部欠損	玄室内	(54.5)	5.50	0.35	3.62	釘本体に直交する横方向の木目が見られる。	
236	44図 PL24	鉄釘	頭部欠損	玄室内	(47.9)	4.3	3.5	1.26	断面形状は長方形。	鉄鍬の茎部か。
237	44図 PL24	鉄釘	下半部の 1/2	玄室内	(35.2)	4.8	4.6	1.32	釘本体に平行する横方向の木目が見られる。	

4号墳出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
238	45図 PL25	須恵器 甕	口縁部片	4墳覆土、D-30 -1西壁セク	①(51.4) ②- ③(10.2)		①A ②灰	口縁部端部外方に折り返す。口縁部外面横線間に刷毛目状工具により施文。	239と同一個体か	
239	45図 PL25	須恵器 甕	頸～胴部下 位	4墳周堀内(29- 6)・覆土下部・ 覆土、C-29・30	①- ②- ③(51.6)		①A ②灰	最大径58.4cm。肩部は張り、体部はゆるく内湾して径を減じる。外面叩目。内面当具痕残る。	238と同一個体か	

5号墳出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	46図 PL25	須恵器 甕	口縁部片	覆土	①- ②- ③-		①B ②灰	断面灰色、器表にぶい黄色。口縁端部上方につまみ上げる。外面波状文。		
2	46図 PL25	須恵器 甕	体部片	表土	①- ②- ③-		①A ②灰	外面叩目。内面当具痕。		

6号墳出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	47図 PL25	須恵器 甕	体部片	周堀・南	①- ②- ③-		①A ②灰	断面中央から灰、にぶい橙、灰色。外面叩目。内面当具痕。		

6号墳金属製品

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	法量				形・成調整等	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
2	47図 PL25	鉄鍬	鍬身部・茎部 の一部欠損	覆土	(85.5)	(40.4)	5.5	18.02	雁股鍬。内側線にのみ刃部あり。関は袴状を呈する。	

Dトレンチ1号住居出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	51図 PL25	土師器 坏	1/4	トレンチ壁際	①(12.0) ②- ③-		①A ②黒褐	断面黒褐色、外面器表黒色、内面器表付近鈍い橙色。外面口縁部下に凹線巡る。口縁部横撫で。底部外面篋削り。		
2	51図 PL25	土師器 坏	1/8	埋没土	①(11.3) ②- ③-		①A ②黒褐	断面黒褐色、器表黒色に仕上げる。外面口縁部下凹線巡る。口縁部横撫で。底部外面篋削り。	1と同一個体か。	
3	51図 PL25	土師器 坏	1/4	埋没土	①(10.0) ②- ③-		①B ②灰黄褐	器表黒色物塗布仕上げ。口縁部内側に小さく曲がる。外面口縁部下小さい段差。口縁部外面接合痕残る。		
4	51図 PL25	須恵器 坏	1/4	トレンチ壁際	①(11.6) ② (8.6) ③3.7		①A ②灰	体部下端回転篋削り。底部静止糸切無調整か。口縁端部摩擦減。	静止糸切り離し。	
5	51図 PL25	土師器 甕	口縁部片	埋没土	①- ②- ③-		①A ②にぶい橙	口縁部横撫で。口縁端部内面凹線状に窪む。体部外面縦位篋削りか。		
6	51図 PL25	須恵器 瓶類	口縁部片	埋没土	①- ②- ③-		①A ②にぶい赤 褐	断面にぶい赤褐色、器表付近灰色。内面自然釉。口縁端部外面横線1条巡る。		
7	51図 PL25	須恵器 不詳	底部片	埋没土	①- ②- ③-		①A	断面赤灰から灰色、器表灰色。器壁厚く、底部撫でに近い篋削り。内面轆轤目顕著。		
8	51図 PL25	須恵器 蓋	1/4	埋没土	①(8.6) ②- ③-		①A ②灰	天井部篋削り。外反して開く。天井部内面轆轤目顕著。		

1号住居出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	52図 PL26	須恵器 坏	完形	埋没土	①12.4 ~ 13.8 ②6.8 ~ 7.0 ③4.0 ~ 4.7		①A ②灰	歪み著しく、底部外面にヒビが入り、一部内面に貫通する。内外面轆轤目顕著。底部右回転糸切無調整。		
2	52図 PL26	須恵器 坏	1/4	床下土坑	①- ②(6.0) ③-		①A ②にぶい橙	断面から器表にかけてにぶい橙色。底部右回転糸切無調整。		
3	52図 PL26	須恵器 碗か	口縁部片	竈焚口部北	①(13.6) ②- ③-		①C ②赤褐	断面中央から器表にかけて赤褐色。外面は轆轤目顕著だが、内面は平滑。		
4	52図 PL26	須恵器 碗か	底部	竈焚口部前	①- ②7.4 ③-		①B ②橙	轆轤右回転。酸化炎焼成で、内面を黒色に仕上げる。内面細かい磨き。貼付高台。高台脇磨削り。	内黒・ヘラ磨き。	
5	52図 PL26	土師器 甕	口縁～体部 上位	竈焚口部から 焚口部前・北	①(20.0) ②- ③-		①A ②明赤褐	口縁部「コ」の字状。外面屈曲部は強い横撫で。頸部外面の横撫で弱く、組作り痕明瞭に残る。口縁部内面には横撫で撫で上げがあるが、内面には観察されない。肩部外面横位磨削り。		
6	52図 PL26	土師器 小型甕	1/4	竈焚口部	①(10.6) ②- ③-		①A ②明赤褐	口縁部「く」の字状。口縁部横撫で。肩部外面横位磨削り。肩部内面横位撫で。		
7	52図 PL26	土師器 か二次加工 品か	完形	竈焚口部前	①2.8 ②2.8 ③1.0		①A ②にぶい黄 褐	破片の割れ口を調整剥離した後、粗く研磨して円盤状に仕上げか可能性がある。器表に摩滅が認められ、研磨していない可能性もある。		

Bトレンチ1号住居出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	53図 PL26	土師器 坏	1/4	埋没土	①(10.6) ②- ③-		①A ②橙	器表やや摩滅。外面口縁部下磨削り。		
2	53図 PL26	土師器 坏	1/4	埋没土	①(10.4) ②- ③-		①A ②橙	口縁部下で内湾し、口縁部内傾。外面口縁部下磨削り。内面口縁部下器表剥離し小さい凹凸顕著。		
3	53図 PL26	土師器 坏	1/6	埋没土	①(12.0) ②- ③-		①A ②橙	器表やや摩滅。口縁部内傾。口縁部内面の一部粘土が屈曲部を埋める。外面口縁部下磨削り。		
4	53図 PL26	土師器 坏	1/4	埋没土	①(10.1) ②- ③-		①B ②橙	底部から口縁部ほぼ均一に内湾。口縁部外面横撫で。外面口縁部下磨削り。内面横位磨削り。	内面一方向の磨削り。	
5	53図 PL26	土師器 坏	1/2	埋没土	①(10.2) ②- ③-		①A ②橙	口縁部直立。内面底部周縁から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。外面口縁部下に型肌残る。		
6	54図 PL26	土師器 坏	底部	埋没土	①- ②5.7 ③-		①B ②橙	器表やや摩滅。外面磨削り、一部指頭圧痕残る。底部外面葉脈痕残る。内面放射状磨削り。		
7	54図 PL26	土師器 坏	一部欠	埋没土	①10.6 ②- ③3.4		①A ②橙	口縁部ほぼ直立か僅かに内傾。底部内面周縁から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。内面には横撫での撫で上げ痕があるが、外面には観察されない。		
8	54図 PL26	土師器 坏	2/3	埋没土	①10.6 ②- ③3.2		①A ②明赤褐	口縁部僅かに内傾。内面底部周縁から口縁部外面横撫で。底部外面磨削り。		
9	54図 PL26	土師器 甕	1/4	埋没土	①(21.0) ②- ③-		①B ②にぶい赤 褐	口縁部「く」の字状に外反。口縁部横撫で。外面上部は強い横撫でにより緩い段差を生じる。肩部外面横位磨削り。肩部内面横位撫で。		
10	54図 PL26	須恵器 甕か瓶類	口縁部片	埋没土	①- ②- ③-		①A? ②灰	断面灰赤色、器表付近黒灰色。口縁部内面自然釉。口縁部外面下に横線1条。		

Bトレンチ2号住居出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	56図 PL26	土師器 坏	1/10	埋没土	①(9.8) ②- ③-		①A ②橙	口縁部内湾。口縁部横撫で後、内面磨削り。底部外面磨削り。破片が小さく推定径の信頼度は低い。		
2	56図 PL26	須恵器 盤か	底部破片	一括	①- ②(10.2) ③-		①A ②明黄褐	やや焼成不良で焼き締まり弱い。脚部貼付。体部下端は水平に近く広がり、盤の可能性ある。		
3	56図 PL26	土師器 甕か甔	1/6	一括	①(20.6) ②- ③-		①C ②灰黄褐	口縁部「く」の字状に外反。口縁部横撫で。口縁部外面横線1条巡る。外面口縁部以下縦位磨削り。体部内面斜位撫で。		
4	56図 PL26	土師器 甕	1/6	埋没土	①(22.6) ②- ③-		①C ②にぶい橙	口縁部水平に近く開く。口縁部横撫で。口縁部から体部上位に組作り痕残る。体部外面縦位磨削り。頸部内面横位磨削り。体部内面撫で。		

1号近世墓出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			色調	形・成調整等	備考
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)			
1	59図 PL26	肥前磁器 碗	完形	南西	8.3	3.3	4.7	灰白	口縁部外面雨降文。高台脇2条の圈線。	18世紀前半

遺物観察表

2号近世墓出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			色調	形・成調整等	備考
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)			
1	60図 PL26	在地系土器 皿	完形	南	8.8	6.4	1.6	浅黄橙	口縁部外面凹線状に窪む。口縁部付近強い回転横撫で。底部左回転糸切無調整。	江戸時代
2	60図 PL26	在地系土器 皿	完形	南	8.7	5.2	1.7	浅黄橙	体部直線的に開く。口縁部肥厚。底部左回転糸切無調整。	江戸時代

2号近世墓出土古銭

番号	挿図	写真	銭種	出土位置	残存	法量				備考
						径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
3	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.46	25.56	1.32～1.44	4.42	新寛永。背「文」。
4	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.59	25.57	0.98～1.10	3.35	古寛永。
5	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	24.72	24.59	1.49～1.50	4.48	古寛永。
6	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.60	25.56	1.08～1.23	3.72	新寛永。背「文」。
7	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.67	25.63	1.09～1.18	3.77	古寛永。
8	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.53	25.44	1.10～1.17	3.54	古寛永。
9	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	25.31	25.33	0.95～1.07	3.15	古寛永。
10	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	24.47	24.31	1.25～1.27	3.52	古寛永。
11	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	23.84	23.90	0.85～0.97	2.50	古寛永。
12	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	24.06	24.09	1.13～1.17	3.36	古寛永。
13	61図	PL27	寛永通寶	南	完形	23.86	23.93	1.31～1.38	3.62	古寛永。
14	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	25.21	25.28	1.37～1.44	4.27	古寛永。
15	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	24.36	24.29	1.03～1.06	3.17	古寛永。
16	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	23.78	23.94	1.19～1.31	3.58	古寛永。
17	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	25.65	25.42	1.14～1.23	3.64	新寛永。背「文」。
18	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	24.87	24.78	0.97～1.07	3.06	古寛永。
19	61図	PL27	寛永通寶	北東	完形	25.24	25.13	1.33～1.38	4.20	古寛永。

3号近世墓出土古銭

番号	挿図	写真	銭種	出土位置	残存	法量				備考
						径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
1	62図	PL27	寛永通寶	中央南	完形	23.92	23.73	1.08～1.23	2.70	新寛永。
2	62図	PL27	寛永通寶	中央北	完形	22.23	22.55	1.09～1.24	2.36	新寛永。
3	62図	PL27	寛永通寶	中央北	完形	22.23	22.51	1.37～1.50	2.59	新寛永。
4	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.11	23.07	1.06～1.41	3.09	新寛永。
5	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.72	23.68	1.04～1.17	2.51	新寛永。
6	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	24.06	23.72	0.93～1.08	2.72	新寛永。
7	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	24.34	24.03	1.02～1.08	2.66	新寛永。
8	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.94	23.79	0.95～1.02	2.21	新寛永。
9	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	25.07	25.14	1.20～1.25	3.26	新寛永。
10	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.88	24.03	1.07～1.15	2.38	新寛永。
11	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	22.11	22.09	1.10～1.24	1.83	新寛永。
12	62図	PL27	文久永寶	中央南	完形	26.85	26.75	0.90～1.04	2.83	11波。4文。
13	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.55	23.12	0.96～1.30	2.48	新寛永。
14	62図	PL27	寛永通寶	北	完形	23.11	23.01	1.43～1.79	3.33	新寛永。
15	62図	PL27	寛永通寶	中央南	完形	23.56	23.46	1.02～1.40	2.70	新寛永。
16	62図	PL27	寛永通寶か	中央北	完形	28.09	28.71	4.82～6.07	5.95	鉄銭2枚付着。

III区3号土坑出土土器

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
1	68図 PL27	須恵器 蓋	1/2	2号掘立柱No.7	①(12.4)	②-	③4.1	①B ②灰白	天井部外面右回転篋削り。天井部と口縁部境2条の凹線。	

遺構外出土の遺物—縄文土器

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	備考
1	71図 PL28	深鉢	口縁部破片	F14・15大グリッド	粗砂、白色粒、石英	橙	良好	波状口縁。沈線により楕円状モチーフを施し、RLを充填施文する。	加曾利E3式
2	71図 PL28	深鉢	胴部破片	C32・20-25	粗砂	橙	ふつつ	沈線を垂下させ、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
3	71図 PL28	深鉢	胴部破片	F14・15大グリッド	粗砂、石英	橙	ふつつ	沈線を垂下させ、RLを縦位充填施文する。	加曾利E3式
4	71図 PL28	深鉢	胴部破片	F14・15	粗砂	橙	良好	RLを縦位充填施文し、沈線による懸垂文を施す。	加曾利E3式
5	71図 PL28	深鉢	底部破片	D30・2・7・12	粗砂	橙	ふつつ	沈線による懸垂文を施す。	加曾利E3式
6	71図 PL28	深鉢	胴部破片	D1・2・3	粗砂	橙	ふつつ	沈線により楕円状モチーフを施し、LRを充填施文する。	加曾利E4式
7	71図 PL28	深鉢	胴部破片	表採	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつつ	帯状沈線を斜位に施し、LRを充填施文する。	称名寺I式

番号	挿図写真	器形	残存	出土位置	胎土	色調	焼成	成形・整形の特徴	備考
8	71図 PL28	深鉢	口縁部破片	F13・1・2・3・4	粗砂、黒色粒、石英	にぶい赤褐	ふつつ	波頂部の把手。残存部は無文。	称名寺式
9	71図 PL28	深鉢	口縁部破片	D1・2・3トレンチ	粗砂	にぶい黄橙	ふつつ	口縁が短く内折。沈線を横位にめぐらす。	称名寺Ⅱ式
10	71図 PL28	深鉢	胴部破片	D1・2・3トレンチ	粗砂多	にぶい黄橙	ふつつ	無文。	後期前葉
11	71図 PL28	深鉢	口縁部～底部破片	F11-21	粗砂、白色粒、石英	明赤褐	ふつつ	胴上位が膨らみ、頸部でくびれて口縁が開く器形。口縁を肥厚させ、肥厚部に円形刺突をめぐらす。肥厚部下から帯状沈線により幾何学モチーフを描き、LRを充填施文する。沈線は閉じずに開放、胴下位は無文となる。	堀之内1式

遺構外出土の遺物—縄文時代の石器

番号	挿図写真	器種	形態素材	出土位置(N0)	石材	法量			製作・使用状況	備考
						長さcm	幅cm	重量g		
12	72図 PL28	打製石斧	撥形	1号古墳北	ホルンフェルス	10.7	5.2	68.5	完成状態。刃部未加工、風化して刃部摩耗等は不明。	
13	72図 PL28	打製石斧	短冊形	C-6	変玄武岩	(9.1)	5.8	218.5	完成状態。刃部再生後の使用は明らか。磨製石斧と等質の石材を用いる点で異質。	
14	72図 PL28	磨製石斧	定角式	C9-6G	変玄武岩	10.6	6.5	417.7	破損後、上下両端を敲打具として再利用。機能部は擦る機能が優り、直線的な稜を形成。	
15	72図 PL28	打製石斧	短冊形	C-6	黒色頁岩	8.3	4.7	91.4	完成状態。刃部摩耗が著しい。頭部調整が最終剥離と見られ、上半部欠損、再生を試みたということだろう。	
16	72図 PL28	打製石斧	短冊形か	C-6	珪質頁岩	(7.0)	(5.6)	120.3	未成品か。頭部側に摩耗痕があり、再生品の可能性も否定できないが、他の剥離面は新鮮。器体の破損は再生過程で生じたとすることができよう。	
17	72図 PL28	磨製石斧	乳房状か	F-1、2、3、4	砂岩	(5.8)	5.7	93.6	完成状態。刃部右辺には表裏面とも打痕があり、破損後、敲石として再利用している可能性がある。	
18	72図 PL28	加工痕ある剥片	幅広剥片	C28トレンチ	ホルンフェルス	13.3	8.6	299.9	剥片周縁を浅く加工。	
19	72図 PL28	石核	板状剥片	F14、15	ホルンフェルス	11.8	8.8	456.6	小形幅広剥片を求心的に剥離。裏面側は礫面。	
20	72図 PL28	石核	板状剥片	2号掘立No1	ホルンフェルス	13.0	7.3	352.9	上下両端で幅広剥片を剥離。裏面側に比べ、背面側の剥離角は厚く、石斧未成品の可能性も否定できない。	

遺構外出土の遺物—古墳時代から奈良・平安の土器

番号	挿図写真	種別器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
21	73図 PL29	土師器 坏	1/4	B-2～5拡張部	①(14.2)	②-	③-	①B ②橙	外面口縁部下小さく稜をなす。底部内面から口縁部外面刷毛目状工具による横撫で。外面口縁部下強い横撫でにより横線状に窪む。内面放射状磨き。底部外面やや摩滅。	
22	73図 PL29	土師器 高坏	1/4	F-16	①-	②(14.4)	③-	①A ②橙	裾部水平に近く外反。裾部横撫で。脚部外面磨削り。内面撫で、部分的に接合痕残る。	
23	73図 PL29	土師器 坏	3/4	Dトレンチ1	①(12.1)	②-	③3.8	①B ②にぶい赤褐	断面にぶい赤褐色、器表黒色。底部外面と内面器表剥離。口縁部横撫で。底部外面葉脈痕残り、周囲を磨削り。体部外面に型肌残る。	
24	73図 PL29	土師器 坏	1/5	F-14-1	①(12.0)	②-	③-	①A ②橙	口縁部やや内湾して開く。底部内面周縁から口縁部横撫で。底部外面磨削り。外面口縁部下位で窪み、下部の磨削りによる稜線により凹線状をなす。	
25	73図 PL29	須恵器 坏	1/2	F-14・15大グリッド	①12.8	②6.8	③3.5	①A	体部直線的に開き、口縁部僅かに外反。体部から口縁部内面の轆轤目顕著。底部右回転糸切無調整。	
26	73図 PL29	須恵器 坏	1/2	Dトレンチ2	①(10.8)	②-	③(4.7) ④4.1	①A ②灰	平底。底部周縁磨削り。底部内面轆轤目顕著。口縁端部のみ摩滅。やや焼成不良で焼き締まり弱い。	
27	73図 PL29	須恵器 坏	1/4	F-14・15大グリッド	①(14.0)	②-	③-	①A ②灰白	口縁部直線的に開く。底部外面右回転磨削り。	
28	73図 PL29	須恵器 不詳	破片	D17～21	①-	②-	③-	①A ②灰黄	右回転轆轤目成形。内面轆轤目顕著。	
29	73図 PL29	須恵器 瓶	底部片	1号墳	①-	②(10.6)	③-	①A ②灰	外面体部下位回転磨削り。貼付高台。	
30	73図 PL29	須恵器 鉢か	1/3	1層B-3	①-	②-	③-	①A ②灰	轆轤右回転成形。内外面共に轆轤目立たない。体部内面下位に接合痕残る。体部中位に2条の横線。底部内面の摩滅は認められない。	
31	73図 PL29	須恵器 甕	口縁部片	表採、E-23-6	①-	②-	③-	①A ②灰	頸部から外反し、口縁部は上方に立ち上げる。端部は外方に折り返し、断面三角形状。	
32	73図 PL29	須恵器 瓶類	口縁部片	D-21～23	①-	②-	③-	①A ②灰	口縁部外反し、端部外方に折り返す。	
33	73図 PL29	須恵器 甕	口縁部片	E-21	①-	②-	③-	①A ②灰	断面の一部赤褐色。頸部から外反し、口縁部は外方に折り返す。	

遺物観察表

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			①胎土 ②色調	形・成調整等	備考
					①口径	②底径	③器高			
34	73図 PL29	須恵器 甕	頸部～体部 下位	E-20	①- ②- ③(10.0)			①A ②灰	断面中央から灰色、にぶい橙色、灰色のサンドイッチ状。外面回転横撫でを行うが、下半は雑で叩目多く残る。内面も同様に上半の当具痕は消えかかるが、下位は明瞭に残り、底部付近は撫で消す。肩部内面指頭圧痕。	35と同一個体の可能性高い。
35	73図 PL29	須恵器 甕	頸部～体部 下位	D-18	①- ②- ③(15.0)			①A ②灰	断面中央から灰色、にぶい橙色、灰色のサンドイッチ状。外面回転横撫でを行うが、下半は雑で叩目多く残る。内面も同様に上半の当具痕は消えかかるが、下位は明瞭に残り、底部付近は撫で消す。肩部内面指頭圧痕。	34と同一個体の可能性高い。

遺構外出土の遺物—中・近世の土器・土製品

番号	挿図 写真	種別 器形	残存	出土位置	法量 cm			色調	形・成調整等	備考
					口径(長)	底径(幅)	器高(厚)			
36	74図 PL29	常滑陶器 甕	体部片	—	—	—	—	灰	内面紐作痕。外面自然釉。外面帯状に叩目。	中世
37	74図 PL29	常滑陶器 甕	頸部片	—	—	—	—	灰黄	外面自然釉。頸部横撫で。	中世
38	74図 PL29	常滑陶器 甕	体部片	—	—	—	—	暗灰黄	内面篋状工具による撫で。外面撫で。	中世
39	74図 PL29	常滑陶器 甕	肩部片	D-25	—	—	—	灰	外面格子目状叩き。内面紐作痕明瞭。	中世
40	74図 PL29	製作地不詳 陶器灯明受皿	1/4	D-17・21	(10.0)	(3.0)	1.8	灰	内面から口縁部外面灰釉。外面口縁部以下回転篋削り。	19世紀か
41	74図 PL30	瀬戸・美濃 陶器 灯明受皿	1/4	E-13・9～10	(11.0)	(4.8)	2.4	灰	受部挾込1部欠損。全面錆釉施釉後、外面口縁部以下拭う。	18世紀後半
42	74図 PL30	瀬戸・美濃 陶器 小碗	底部	C-7	—	3.8	—	灰白	内面柿釉。内面目痕3箇所。	江戸時代
43	74図 PL30	瀬戸・美濃 陶器 小碗	2/3	不詳	6.2	2	4.1	灰	内面から高台脇灰釉。	18世紀後半
44	74図 PL30	瀬戸・美濃 陶器 筒型香炉	完形	不詳	11	7.6	6.5	浅黄	口縁端部やや内傾。外面口縁部下横線1条。外面表裏に丸鑿で松文。口縁部から外面体部下端錆色の銚釉。脚3箇所に貼付。	18世紀中頃
45	74図 PL30	軟質陶器 袴腰型香炉	口縁部片	—	(10.8)	—	—	にぶい橙	頸部外面押印文。	中世か
46	74図 PL30	在地系土器 香炉か	1/4	—	(14.8)	(12.4)	6.3	にぶい褐	外面篋磨き。内面下半器表剥離。貼付脚1箇所残存。脚は3箇所か。	江戸時代以降か
47	74図 PL30	在地系土器 皿	1/4	B-17・18～19	(7.4)	(4.6)	2.1	にぶい橙	内面轆轤目顕著。口縁端部灯芯痕1箇所。轆轤左回転成形。底部回転糸切無調整。	時期不詳
48	74図 PL30	在地系土器 皿	1/5	E-23-6	(9.6)	(6.0)	2	橙	体部内湾し、口縁部外反。口縁端部肥厚。底部内面と体部外面轆轤目顕著。底部左回転糸切無調整。胎土やや緻密で焼き上がりやや硬質。	江戸時代以降か
49	74図 PL30	在地系土器 皿	1/4	E-23-6	(8.8)	(6.0)	2.1	橙	体部から口縁部内湾。底部内面と体部外面轆轤目顕著。底部左回転糸切無調整。底部に小孔1箇所。底部外面小孔周囲の器表周囲に器表の剥がれがあり、焼成後に内側から穿孔した可能性高い。胎土やや緻密で焼き上がりやや硬質。	江戸時代以降か
50	74図 PL30	在地系土器 皿	1/4	E-20	(10.0)	(9.6)	—	橙	外面口縁部下端凹線状に窪む。底部外面撫で。	時期不詳
51	74図 PL30	中国製青白 磁合子(身)	1/4	B-3D層?	(4.8)	(4.0)	2	白	外型による成形。外面体部中位と内面体部中位以下施釉。	12～13世紀
52	74図 PL30	中国製青白 磁合子(身)	1/4	B-3D層?	(4.8)	(4.0)	2.1	白	外型による成形。外面体部中位と内面体部中位以下施釉。	12～13世紀
53	74図 PL30	龍泉窯系青 磁碗	体部片	E-20	—	—	—	灰	外面鑄蓮弁文。	13世紀中～14世紀前半
54	74図 PL30	在地系土器 不詳	不明	E-23・8～9 周濠上部	—	4.2	2	橙	表面工具による撫で。側面と裏面型作り痕。表面「○極上」、「市泉」押印。	江戸時代以降か
55	74図 PL30	軟質陶器 円形土板か	完形	不明	2.6	2.6	0.4	にぶい橙	焙烙か内耳鍋底部の割れ口を研磨して円盤状に成形。	江戸時代以降か
56	74図 PL30	在地系土器 円盤	完形	D-21～23	2.5	2.6	0.5	灰、器表黒	器表黒色仕上げの土器片周囲に調整剥離を加えて円盤状に成形。	江戸時代以降か

遺構外出土の遺物—古墳時代から中・近世の石製品

番号	挿図 写真	器種	形態・ 素材	出土位置 (NO)	石材	法量			製作・使用状況	備考
						長さcm	幅cm	重量g		
57	75図 PL30	砥石	手持ち	1号古墳	流紋岩	(8.1)	3.4	53.1	背面側の凹凸は被熱剥離。被熱剥離後も継続使用、斜め方向の刃ならし傷が付く。上面を除く各面を使用。左辺に整形前の分割面を部分的に残す。	
58	75図 PL30	砥石	手持ち	3号古墳裏 込	変質デイス イト	(5.9)	3.9	59.3	小口部にノミ状のU字状整形痕を残す。この小口部を除いた各面を使用。上端側は表裏とも片べりしており、破損後の使用は明らか。	
59	75図 PL30	砥石	手持ち	E-21 16～、 21～	変質デイス イト	(7.4)	3.4	54.7	背面・左右両辺を使用面が残る。上半を欠損する。裏面側の剥落は上半部欠損より新しく、被熱剥離が原因か。	
60	75図 PL30	砥石	手持ち	1号古墳北 東	珪質粘板岩	(2.8)	(2.7)	5.2	表面は被熱、剥落して荒れる。左辺は深く切り込まれるが、詳細は不明。側面にノコギリ痕あり。	
61	75図 PL30	砥石	手持ち	D28-4G	流紋岩	(2.8)	2.3	6.4	端部に深いU字状の引け傷。砥石としては薄く、副次的に素材を利用したものか。側面は左右とも斜め方向の粗い切断痕。	
62	75図 PL30	有孔不定 形剥片		B-29-30	珪質粘板岩	(2.9)	3.3	6.3	背面側に斜位研磨痕、背面側上端・裏面側左辺に面取り整形痕。背面側から径2mm前後の孔を片側穿孔。孔が貫通する直前で素材を折断。	

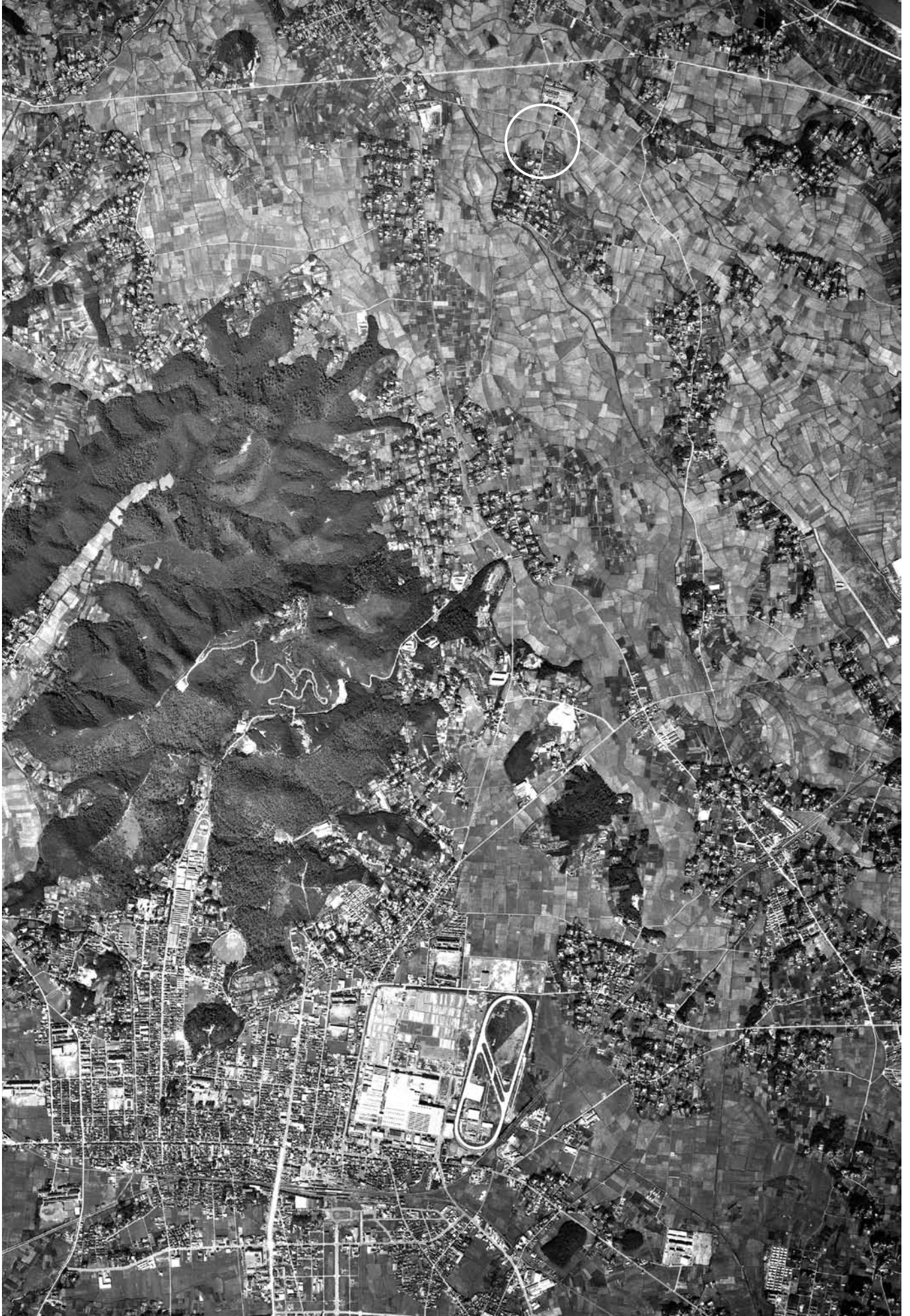
遺構外出土の遺物—古銭

番号	挿図 写真	銭種	出土位置	残存	法量				備考
					径1(mm)	径2(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	
63	75図 PL30	寛永通寶	C-27・28G	完形	23.77	24.43	0.99～1.11	2.06	新寛永。
64	75図 PL30	寛永通寶	C-29G	完形	23.31	23.41	0.88～1.03	1.95	新寛永。
65	75図 PL30	寛永通寶	排土	完形	23.29	23.19	1.11～1.28	2.38	新寛永。

遺構外出土の遺物—時期不明の金属製品

番号	挿図 写真	器形	残存	出土位置	法量				形・成調整等	備考
					長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
66	75図 PL30	椀型鍛冶 滓(極小)	完形	D-11-6	内径4.9	外径4.6	厚さ1.9	54.4	上面平坦、下面椀状。滓質密。磁着度4。メタル度H(0)。下面に長軸4mm、幅3mm程の木炭痕あり。	
67	75図 PL30	滓化物(不 明)	炉壁の一部	D-12G 表土	8.4	6.5	2.9	84.5	表面は紫紅色に滓化。内面は発泡し、黒色に吸炭。表裏ともに表面が滓化しており、炉壁材とは異なる特徴である。	
68	75図 PL30	滓化物(不 明)	炉壁の一部	A-25・26G 表土	6.3	5.4	2.2	39.0	表面は紫紅色に滓化し、垂が生じている。表裏・欠け口に粘土質溶解物起源の滓化した垂が覆っており、炉壁材とは異なる特徴である。	
69	75図 PL30	環状銅製 品	一部欠損 2片	不詳	内径1.05	外径1.15	厚さ0.15	0.2	芯材は銅。表面は金。ほぼ全体が緑青に覆われているが、欠損左端には表面の金色の地が確認できる。断面形状はほぼ円形。	古墳出土であるが詳細不詳。

写真図版



1 猿楽遺跡の位置(○)と周辺の地形(1966年当時)



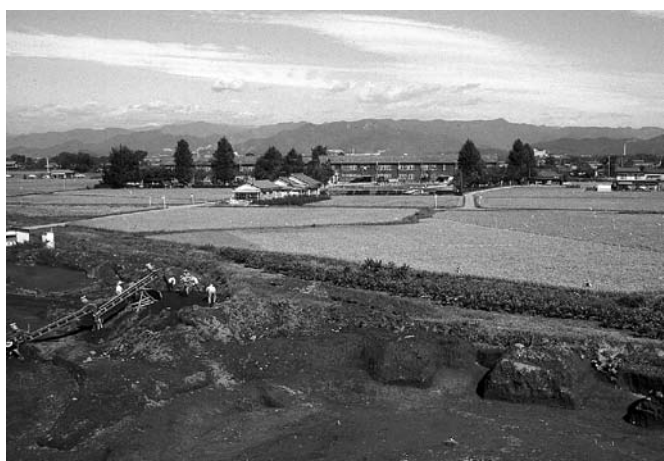
1 猿楽遺跡遠景（上空南側より）



2 1号墳から北方を望む



3 猿楽遺跡から金山丘陵を望む



4 猿楽遺跡から毛里田小学校を望む



5 遺跡地の現況（南から）



1 1号墳全景（南西から）



2 1号墳調査前墳丘残存状況（東から）



3 1号墳墳丘全景（南西から）



4 1号墳墳輸出土状況



5 1号墳墳輸出土状況

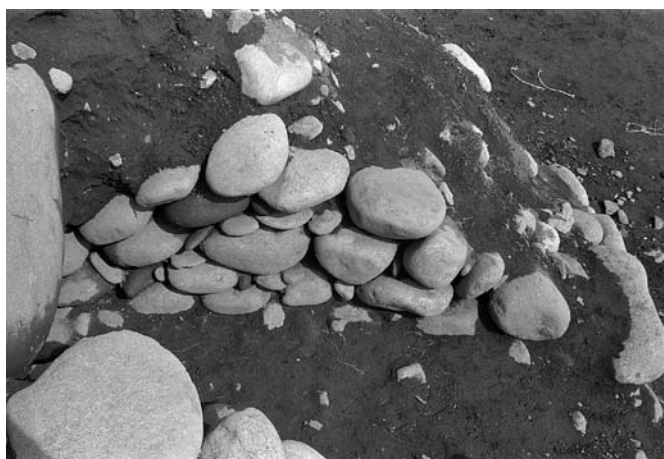
PL.4



1 1号墳羨道部（南西から）



2 1号墳羨道部左側壁（南から）



3 1号墳羨道部右側壁（北西から）



4 1号墳玄室部右側壁（北西から）



5 1号墳玄室部左側壁（南東から）



6 1号墳墳丘断ち割り状況（南西から）



7 1号墳羨道部左裏側土層断面（南西から）



8 1号墳羨道部右裏側土層断面（南西から）



1 1号墳玄門部分石積検出状況（南西から）



2 1号墳羨道部右側壁裏込検出状況（南東から）



3 1号墳玄室部右側壁裏込検出状況（南東から）



4 1号墳羨道部左側壁裏込検出状況（北西から）



5 1号墳石室根石検出状況（南西から）



6 1号墳石室掘り方検出状況（南西から）



7 2号墳全景（北東から）



8 5号墳全景（南西から）

PL.6



1 IV区南半部遠景（北西から）



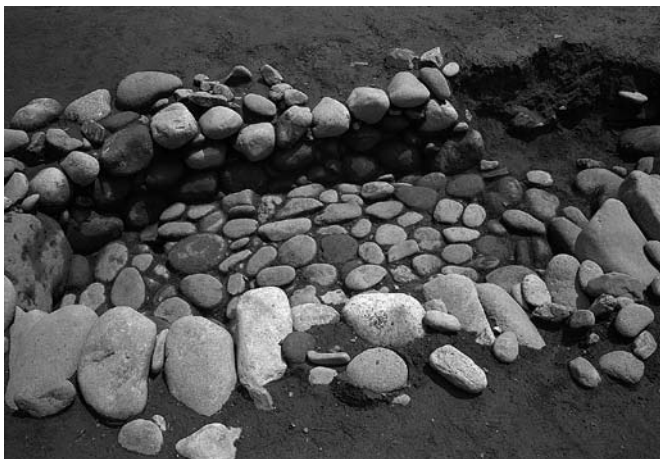
2 3号墳全景（南から）



3 3号墳石室全景（南から）



4 3号墳石室左側壁（南東から）



5 3号墳石室床面検出状況（西から）



6 3号墳石室根石検出状況（南から）



7 3号墳掘り方検出状況（南から）



1 4号墳全景（南から）



2 4号墳南側周堀土層断面（西から）



3 4号墳石室全景（南から）



4 4号墳石室右側壁（西から）



5 4号墳石室左側壁（東から）



1 4号墳羨道部閉塞状況（南から）



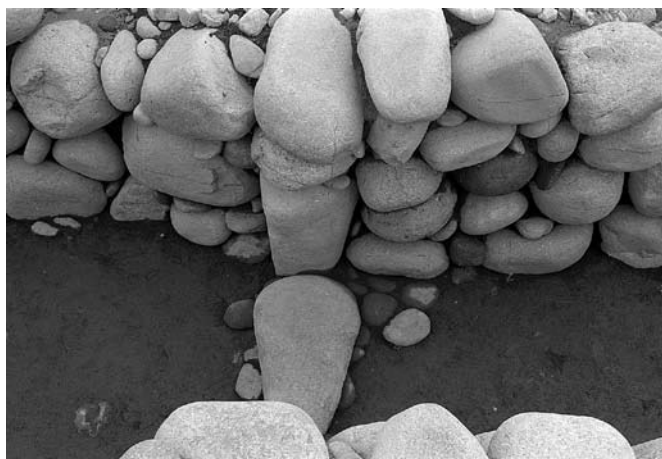
2 4号墳玄室部床面検出状況（北から）



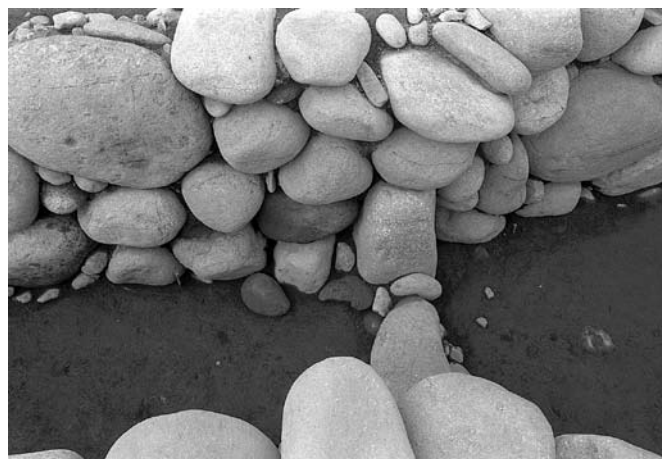
3 4号墳玄室内遺物出土状況（北東から）



4 4号墳玄室部検出状況（北から）



5 4号墳玄門部右側壁（西から）



6 4号墳玄門部左側壁（東から）



7 4号墳石室根石検出状況（東から）



8 4号墳掘り方検出状況（南から）



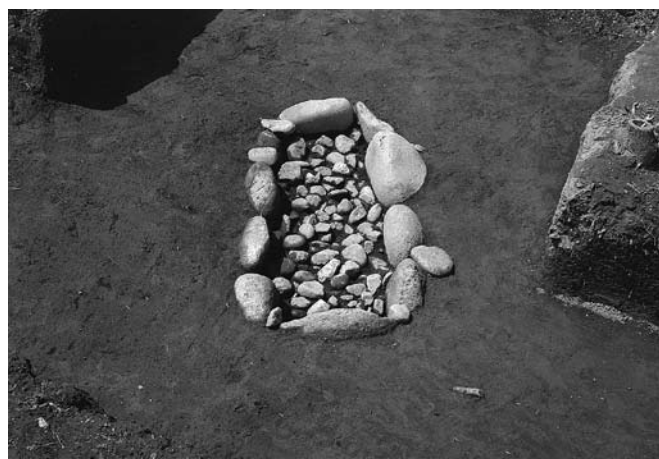
1 6号墳全景（南東から）



2 6号墳西側周堀検出状況（東から）



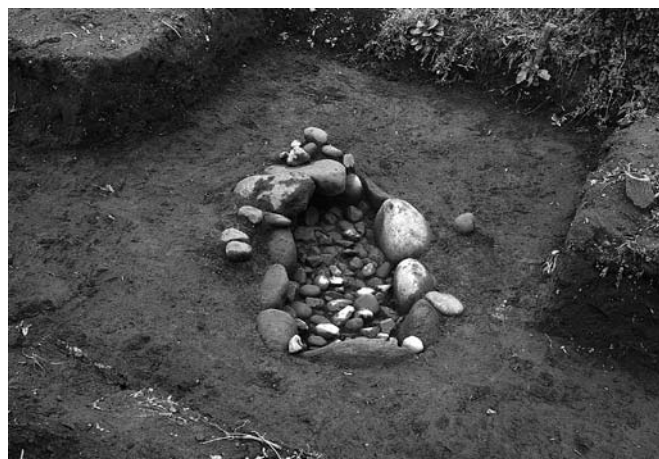
3 7号墳全景（北東から）



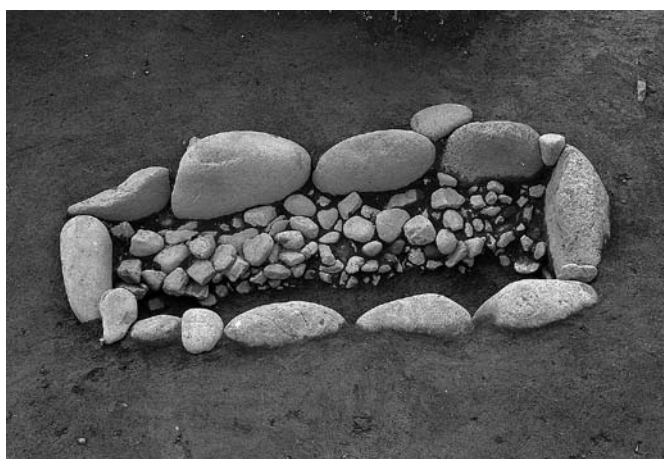
4 8号墳全景（北東から）



5 8号墳全景（南東から）



6 8号墳石積検出状況（北東から）



7 8号墳床面断ち割り状況（南東から）



8 8号墳掘り方検出状況（南東から）



1 1号住居全景（西から）



2 1号住居竈全景（西から）



3 Bトレンチ1号住居（西から）



4 Bトレンチ1号住居竈全景（南から）



5 Bトレンチ2号住居全景（南から）



6 Dトレンチ1号住居全景（南東から）



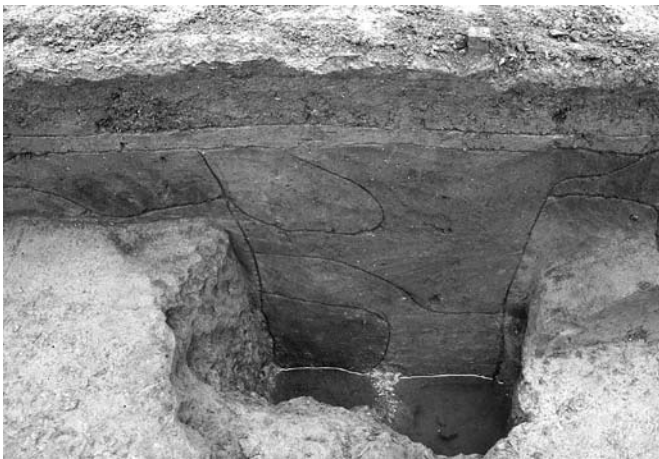
7 Dトレンチ1号住居全景（西から）



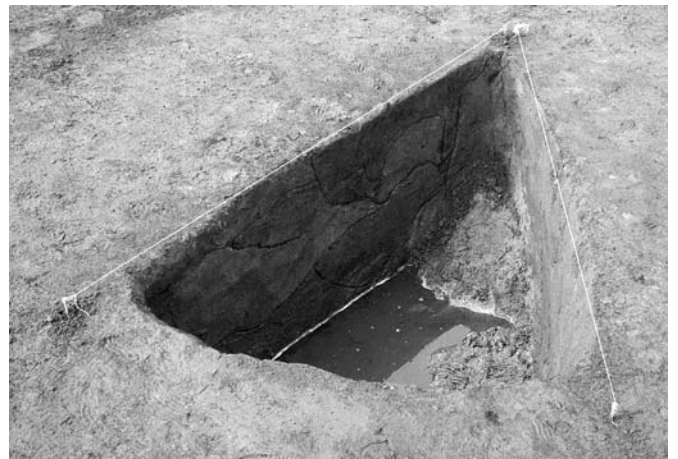
1 1号掘立柱建物全景（南から）



3 2号掘立柱建物全景（南から）



2 1号掘立柱建物柱穴土層断面（南から）



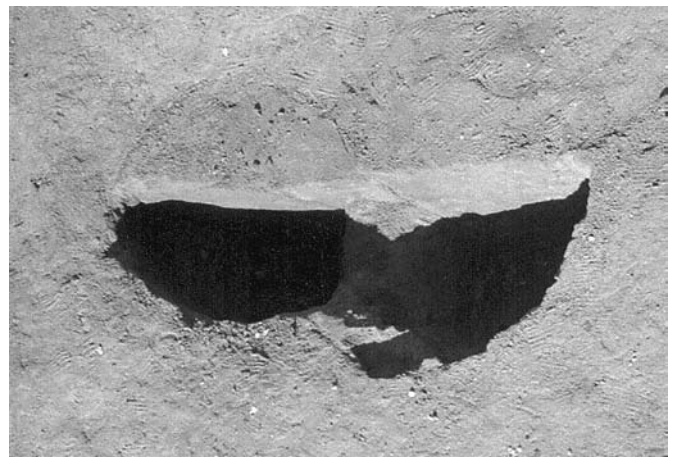
4 2号掘立柱建物柱穴土層断面（南から）



5 Dトレンチピット検出状況（南から）



6 Dトレンチピット検出状況（南から）



7 Dトレンチピット土層断面（南から）



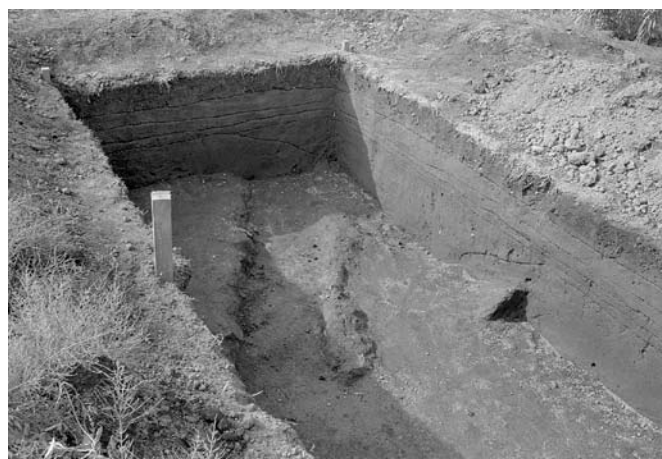
1 II区1～3号溝検出状況（南東から）



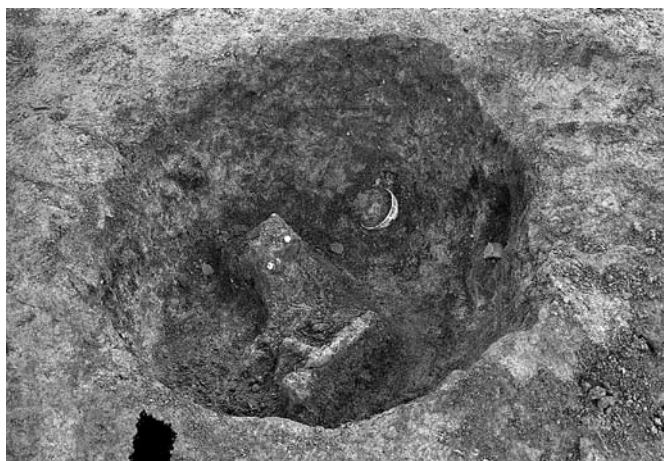
2 II区1～3号溝検出状況（南東から）



3 II区4号溝検出状況（南東から）



4 II区5号・6号溝検出状況（南西から）



5 1号近世墓全景（南から）



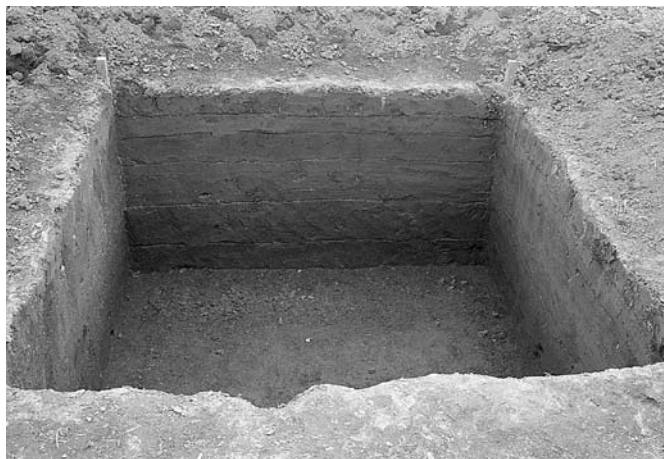
6 3号近世墓全景（南から）



7 2号近世墓遺物全景（南から）



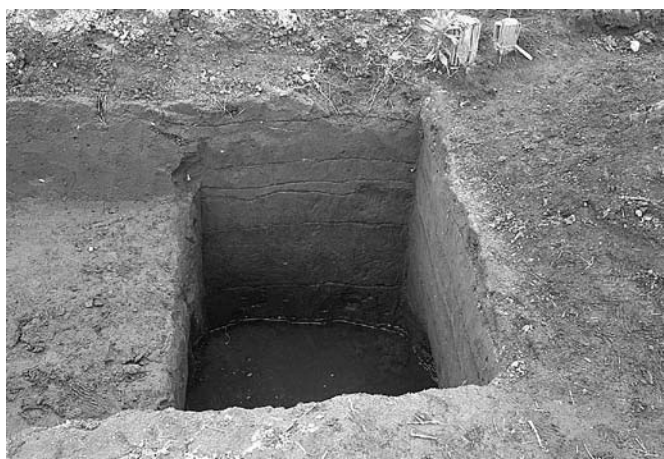
8 2号近世墓遺物出土状況（北から）



1 A-3-21 グリッド調査状況 (北東から)



2 A-11-21 グリッド調査状況 (北東から)



3 C-1-21 グリッド調査状況 (北東から)



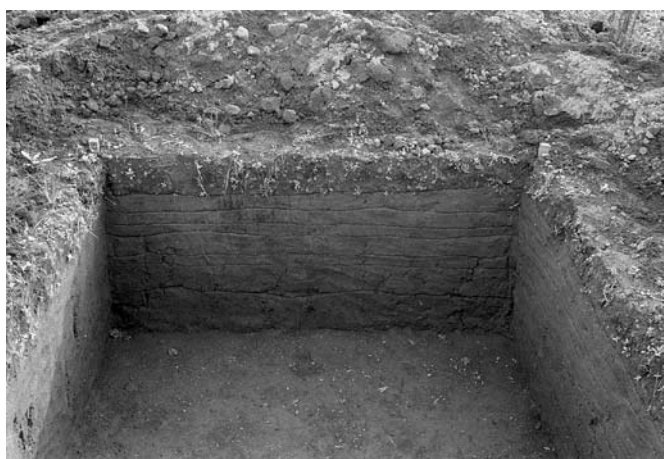
4 C-4-21 グリッド調査状況 (北東から)



5 C-8-21 グリッド調査状況 (北東から)



6 C-12-21 グリッド調査状況 (北東から)



7 E-8-25 グリッド調査状況 (北東から)



8 F-1-21 グリッド調査状況 (北東から)



1 調査区のⅠ区からⅡ区を望む（北西から）



2 Aトレンチ調査状況（南東から）



3 Ⅳ区トレンチ調査状況（北から）



4 Ⅳ区礫出土状況（南西から）



5 調査風景



6 調査風景



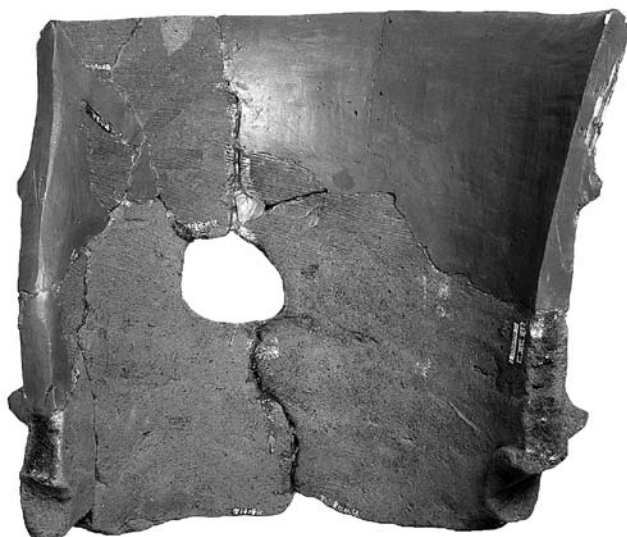
7 現地説明会開催状況



8 現地説明会開催状況



1 墳 1

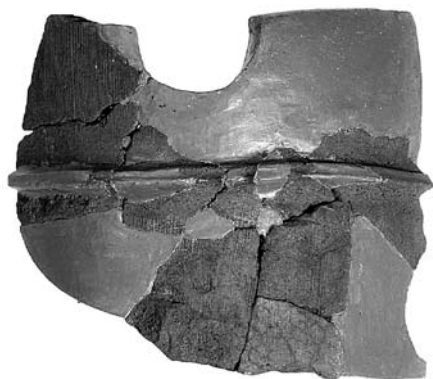


1 墳 2

1号墳出土円筒埴輪(1)



1 墳3



1 墳8



1 墳4



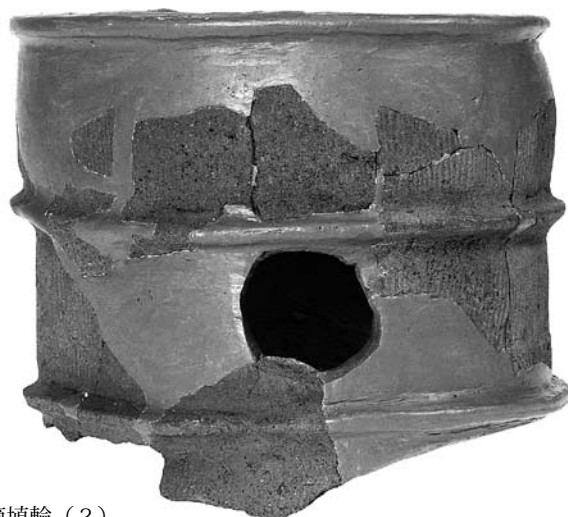
1 墳5



1 墳6



1 墳7



1号墳出土円筒埴輪(2)



1填9



1填10



1填11



1 墳 12



1 墳 13



1 墳 14



1 墳 15



1 墳 16



1 墳 17



1 墳 18



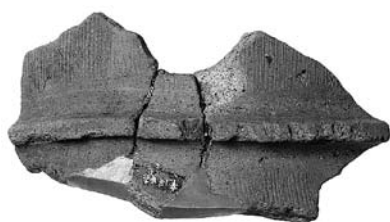
1 墳 19



1 墳 20



1 墳 21



1 墳 22



1 墳 23



1 墳 24



1 墳 25



1 墳 26



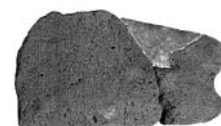
1 墳 27



1 墳 28



1 墳 29



1 墳 30



1 墳 31



1 墳 32



1 墳 33



1 墳 34



1 墳 35

1 号墳出土朝顔形埴輪



1 墳 36



1 墳 37



1 墳 38



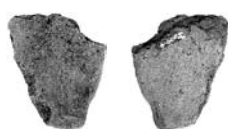
1 墳 39



1 墳 41



1 墳 42



1 墳 43



1 墳 44



1 墳 45



1 墳 46



1 墳 48



1 墳 49



1 墳 52



1 墳 53

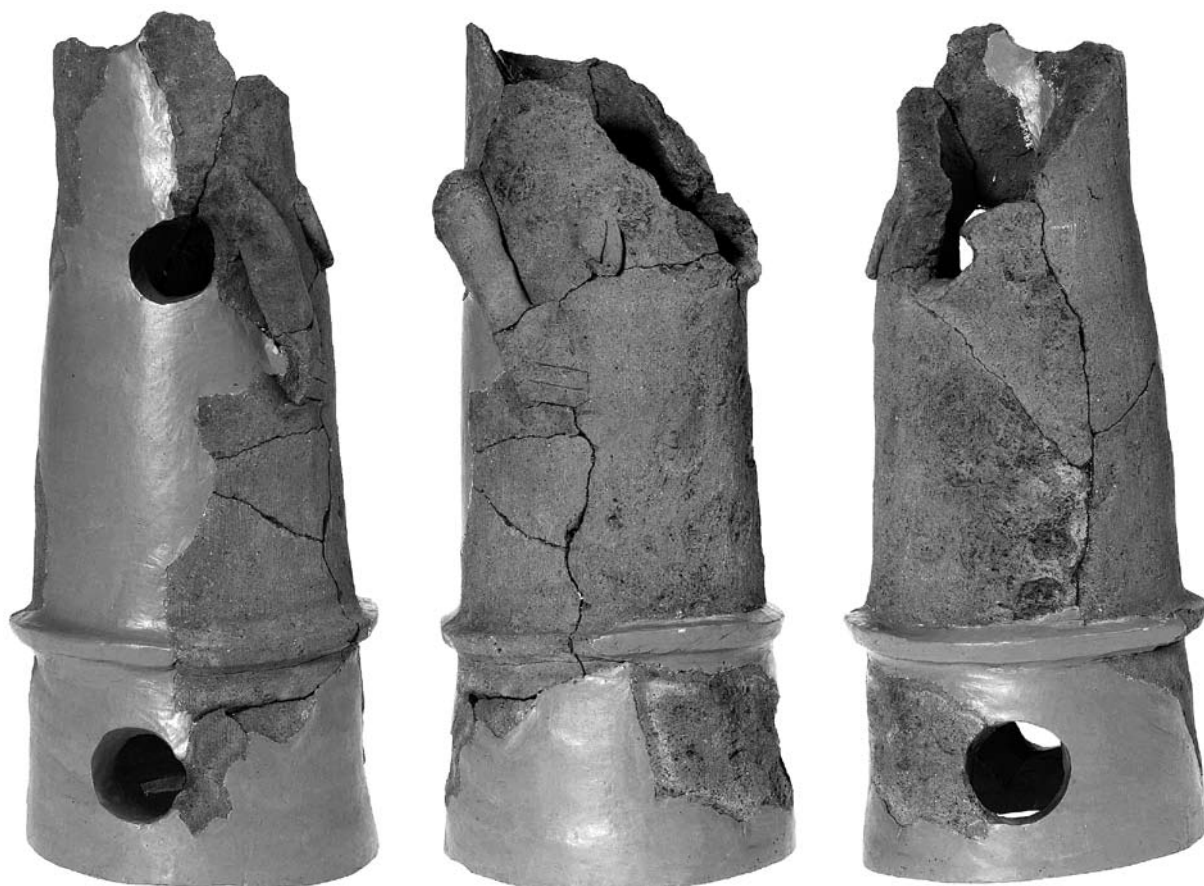


1 墳 47



1 墳 54

1 号墳出土形象埴輪 (1)



1 墳 40



1 墳 57

1 墳 58

1 墳 59

1 墳 60



1 墳 61



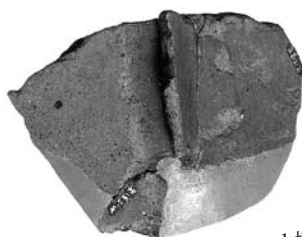
1 墳 62



1 墳 63



1 墳 64



1 墳 65



1 墳 66



1 墳 67



1 墳 55



1 墳 50



1 墳 51



1 墳 56



1 墳 68



1 墳 69



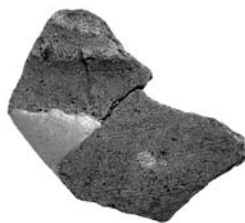
1 墳 70



1 墳 71



1 墳 72



1 墳 73



1 墳 74



1 墳 75



1 墳 76



1 墳 77



1 墳 78



1 墳 79



1 墳 80



1 墳 81



1 墳 82



1 墳 83



1 墳 84



1 墳 85



1 墳 86



1 墳 87



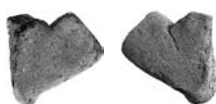
1 墳 88



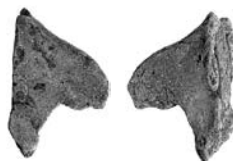
1 墳 89



1 墳 90



1 墳 91



1 墳 92



1 墳 93



1 墳 94



1 墳 95



1 墳 96



1 墳 97



1 墳 98



1 墳 99



1 墳 100



1 墳 101



1 墳 102



1 墳 103



1 墳 105



1 墳 106



1 墳 108



1 墳 109



1 墳 110



1 墳 111



1 墳 104



1 墳 107



1 墳 112



2 墳 1



2 墳 2



2 墳 3



3 墳 1



3 墳 2

2号・3号墳出土遺物



4 墳 1



4 墳 2



4 墳 3



4 墳 4



4 墳 5



4 墳 6



4 墳 7



4 墳 8



4 墳 9



4 墳 10



4 墳 11



4 墳 12



4 墳 13



4 墳 14



4 墳 15



4 墳 16



4 墳 17



4 墳 18



4 墳 19



4 墳 20



4 墳 21



4 墳 22



4 墳 23



4 墳 24



4 墳 25



4 墳 26



4 墳 27



4 墳 28



4 墳 29



4 墳 30



4 墳 31



4 墳 32



4 墳 33



4 墳 34



4 墳 35



4 墳 36



4 墳 37



4 墳 38



4 墳 39



4 墳 40



4 墳 41



4 墳 42



4 墳 43



4 墳 44



4 墳 45



4 墳 46



4 墳 47



4 墳 48



4 墳 49



4 墳 50



4 墳 51



4 墳 52



4 墳 53



4 墳 54



4 墳 55



4 墳 56



4 墳 57



4 墳 58



4 墳 59



4 墳 60



4 墳 61



4 墳 62



4 墳 63



4 墳 64



4 墳 65



4 墳 66



4 墳 67



4 墳 68



4 墳 69



4 墳 70



4 墳 71



4 墳 72



4 墳 73



4 墳 74



4 墳 75



4 墳 76



4 墳 77



4 墳 78



4 墳 79



4 墳 80



4 墳 81



4 墳 82



4 墳 83



4 墳 84



4 墳 85



4 墳 86



4 墳 87



4 墳 88



4 墳 89



4 墳 90



4 墳 91



4 墳 92



4 墳 93



4 墳 94



4 墳 95



4 墳 96



4 墳 97



4 墳 98



4 墳 99



4 墳 100



4 墳 101



4 墳 102



4 墳 103



4 墳 104



4 墳 105



4 墳 106



4 墳 107



4 墳 108



4 墳 109



4 墳 110



4 墳 111



4 墳 112



4 墳 113



4 墳 114



4 墳 115



4 墳 116



4 墳 117



4 墳 118



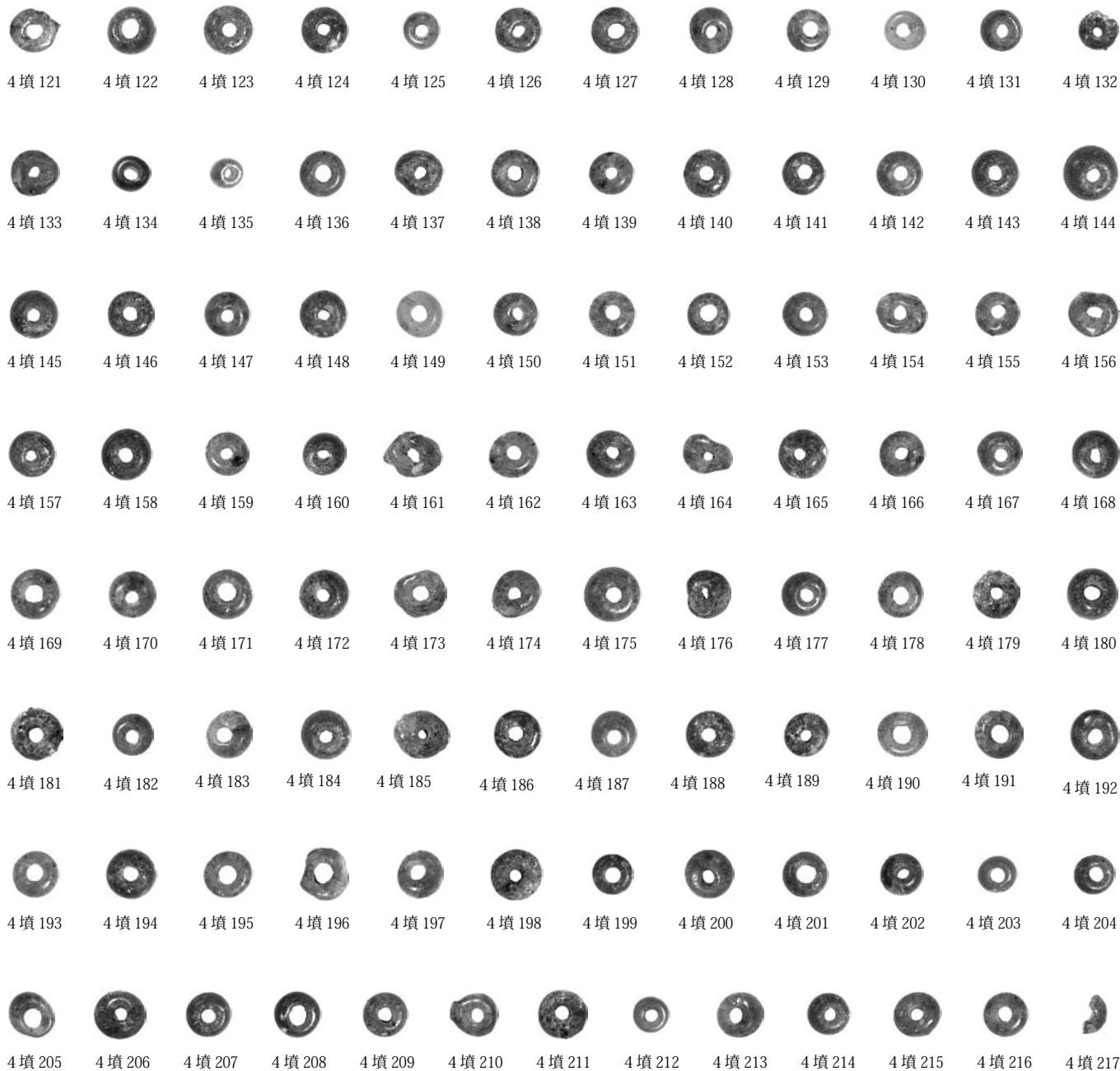
4 墳 119



4 墳 120

4号墳出土遺物

PL.24



4 号墳出土遺物



4墳238



4墳239



5墳1



5墳2



6墳1



6墳2



Dトレ1住1



Dトレ1住2



Dトレ1住3



Dトレ1住4



Dトレ1住5



Dトレ1住6



Dトレ1住7



Dトレ1住8

4号～6号墳とDトレンチ1号住居出土遺物



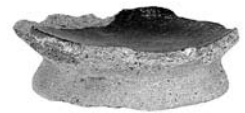
1住1



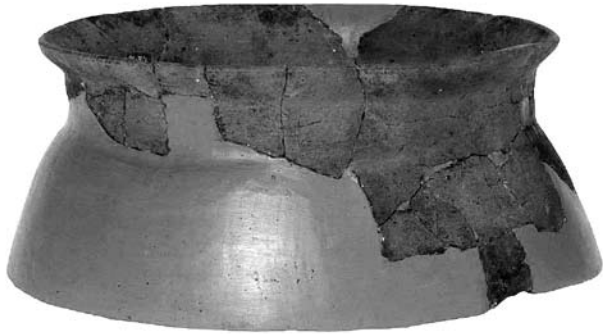
1住2



1住3



1住4



1住5



1住6



1住7



Bトレ1住1



Bトレ1住2



Bトレ1住3



Bトレ1住4



Bトレ1住5



Bトレ1住6



Bトレ1住7



Bトレ1住8



Bトレ1住9



Bトレ1住10



Bトレ2住2



Bトレ2住3



1墓1



Bトレ2住4



2墓1



2墓2



2墓3



2墓4



2墓5



2墓6



2墓7



2墓8



2墓9



2墓10



2墓11



2墓12



2墓13



2墓14



2墓15



2墓16



2墓17



2墓18



2墓19



3墓1



3墓2



3墓3



3墓4



3墓5



3墓6



3墓7



3墓8



3墓9



3墓10



3墓11



3墓12



3墓13



3墓14



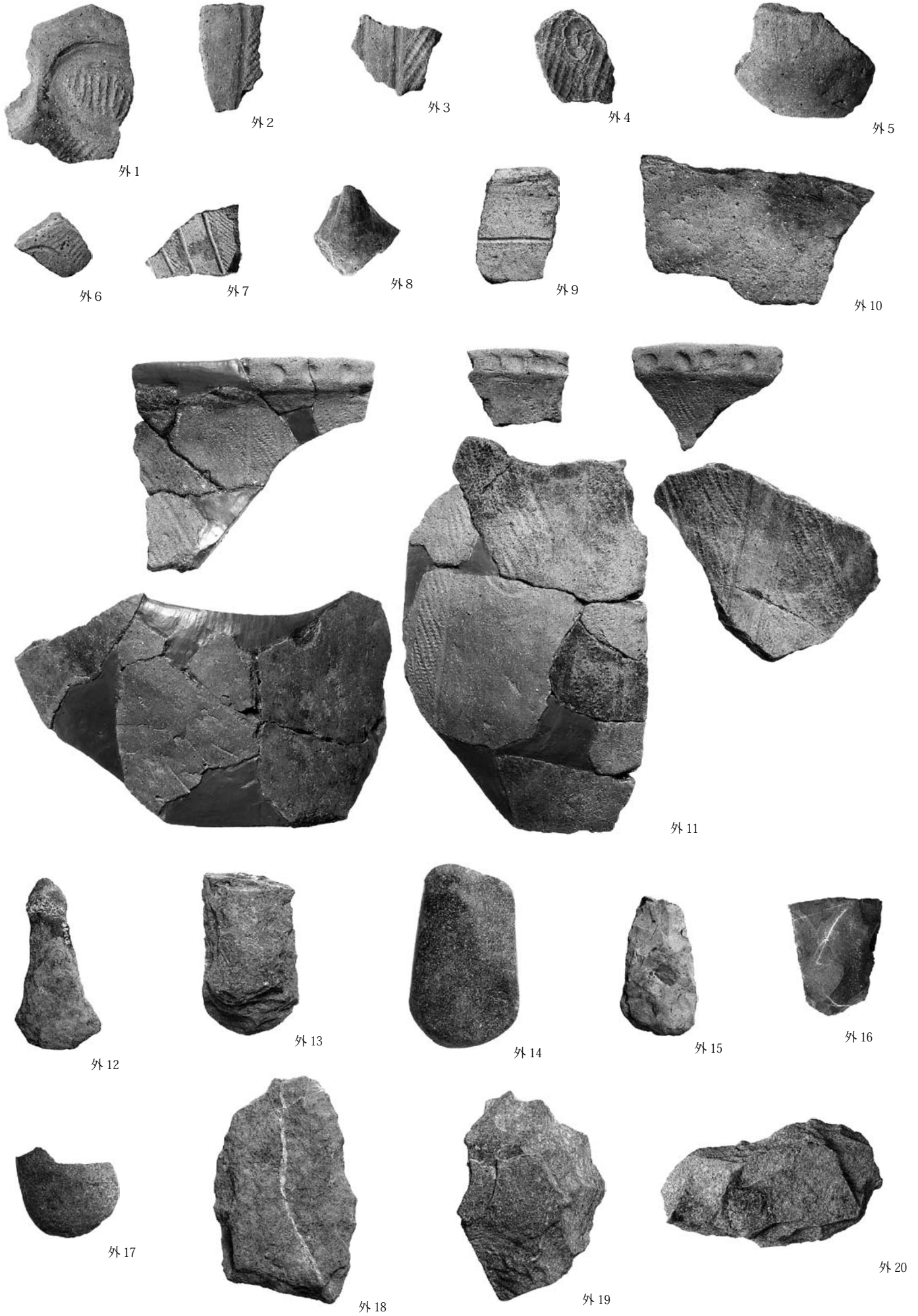
3墓15



3墓16



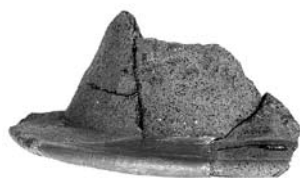
Ⅲ区3坑1



遺構外出土の遺物（1）



外 21



外 22



外 23



外 24



外 25



外 26



外 27



外 28



外 29



外 30



外 31



外 32



外 33



外 34



外 35



外 36



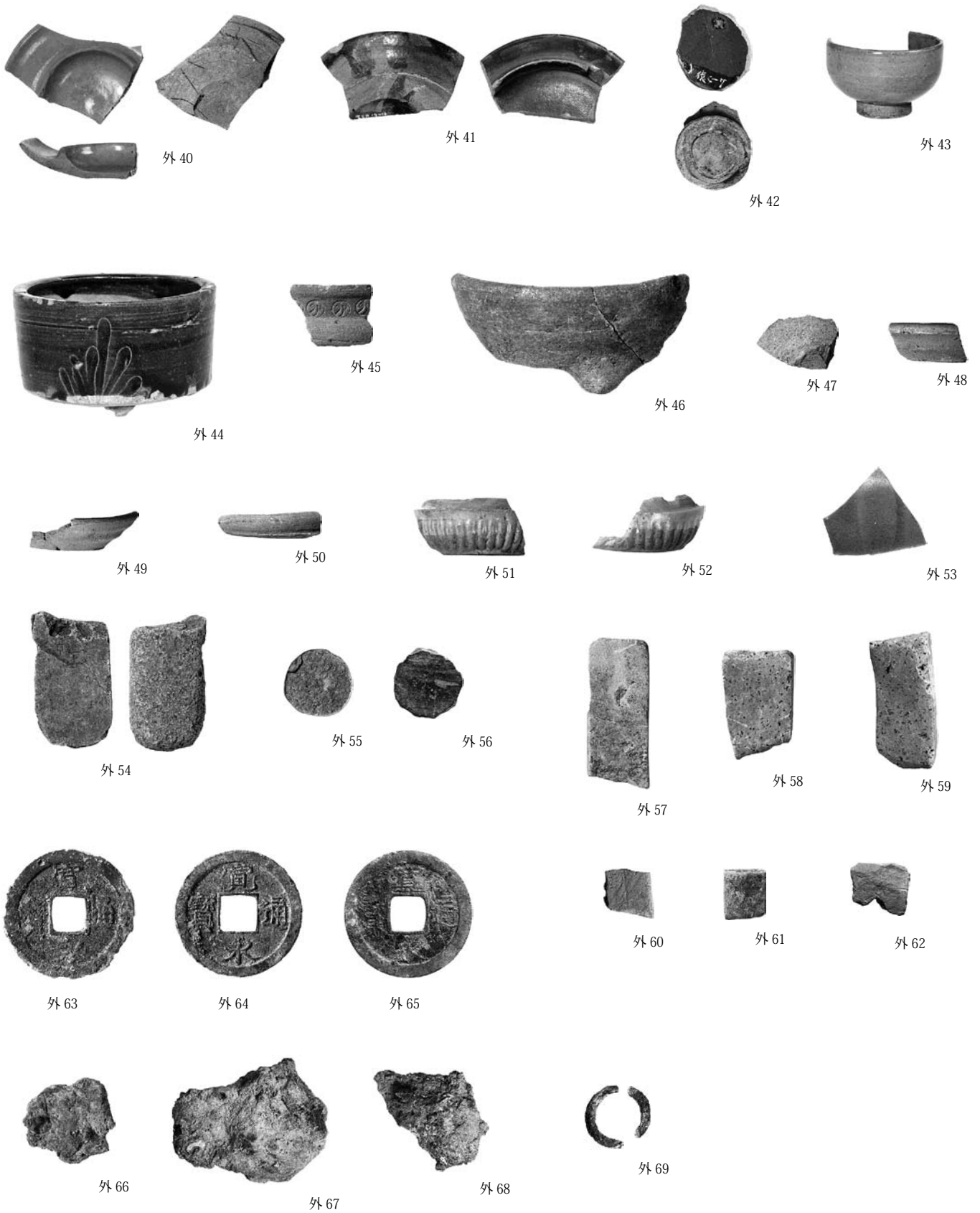
外 37



外 38



外 39



遺構外出土の遺物（3）

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 518 集

猿 楽 遺 跡

平成 22 年度緊急雇用創出基金事業に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書

平成 23(2011) 年 3 月 11 日 印刷

平成 23(2011) 年 3 月 18 日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2

電話 (0279) 52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社
